

奇譚クラブ

1958年 1月号

お伊勢参り「女賊変化」
映画女優緊縛に関する一考察
河村 操



新年号

奇譚クラブ

昭和三十三年新年号

昭和三十三年十二月三十一日印刷 (第十二号 新年号) (毎月一回一日発行)
昭和三十三年一月一日発行 (第一号 通刊第百二号) (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十二月三十一日印刷 (第十二号 新年号) (毎月一回一日発行)
昭和三十三年一月一日発行 (第一号 通刊第百二号) (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十三年
〇三月号(復刊第十三号)

【定価二四〇円】(一八円)

口絵 新着フォト紹介(アメリカ)
スクリーンで輝いた女優たち
幽霊の悲劇(続・濃霧の前後)
花の物語(三)
花の物語(二)
花の物語(一)
花の物語(四)
花の物語(五)
花の物語(六)
花の物語(七)
花の物語(八)
花の物語(九)
花の物語(十)
花の物語(十一)
花の物語(十二)
花の物語(十三)
花の物語(十四)
花の物語(十五)
花の物語(十六)
花の物語(十七)
花の物語(十八)
花の物語(十九)
花の物語(二十)

〇四月号(復刊第十四号)

【定価二四〇円】(一八円)

口絵 新着フォト紹介(アメリカ)
スクリーンで輝いた女優たち
幽霊の悲劇(続・濃霧の前後)
花の物語(三)
花の物語(二)
花の物語(一)
花の物語(四)
花の物語(五)
花の物語(六)
花の物語(七)
花の物語(八)
花の物語(九)
花の物語(十)
花の物語(十一)
花の物語(十二)
花の物語(十三)
花の物語(十四)
花の物語(十五)
花の物語(十六)
花の物語(十七)
花の物語(十八)
花の物語(十九)
花の物語(二十)

〇五月号(復刊第十五号)

【定価二四〇円】(一八円)

口絵 新着フォト紹介(アメリカ)
スクリーンで輝いた女優たち
幽霊の悲劇(続・濃霧の前後)
花の物語(三)
花の物語(二)
花の物語(一)
花の物語(四)
花の物語(五)
花の物語(六)
花の物語(七)
花の物語(八)
花の物語(九)
花の物語(十)
花の物語(十一)
花の物語(十二)
花の物語(十三)
花の物語(十四)
花の物語(十五)
花の物語(十六)
花の物語(十七)
花の物語(十八)
花の物語(十九)
花の物語(二十)

〇六月号(復刊第十六号)

【定価二四〇円】(一八円)

口絵 新着フォト紹介(アメリカ)
スクリーンで輝いた女優たち
幽霊の悲劇(続・濃霧の前後)
花の物語(三)
花の物語(二)
花の物語(一)
花の物語(四)
花の物語(五)
花の物語(六)
花の物語(七)
花の物語(八)
花の物語(九)
花の物語(十)
花の物語(十一)
花の物語(十二)
花の物語(十三)
花の物語(十四)
花の物語(十五)
花の物語(十六)
花の物語(十七)
花の物語(十八)
花の物語(十九)
花の物語(二十)

〇七月号(復刊第十七号)

【定価二四〇円】(一八円)

口絵 新着フォト紹介(アメリカ)
スクリーンで輝いた女優たち
幽霊の悲劇(続・濃霧の前後)
花の物語(三)
花の物語(二)
花の物語(一)
花の物語(四)
花の物語(五)
花の物語(六)
花の物語(七)
花の物語(八)
花の物語(九)
花の物語(十)
花の物語(十一)
花の物語(十二)
花の物語(十三)
花の物語(十四)
花の物語(十五)
花の物語(十六)
花の物語(十七)
花の物語(十八)
花の物語(十九)
花の物語(二十)

読者原稿募集(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発見、小説文等、平易にして本誌の読者に興味を持たせようとするもの、十枚迄、採用には本誌三分分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用には本誌三分分以上を贈呈いたします。

【体験告白手記】

皆さまの偉大な真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度、掲載には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々には一篇位は書くべきものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文庫や用紙など一切ありません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下され。採用には本誌三分分を贈呈いたします。

【映画、雑誌、通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出題は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二分分乃至三分分を贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ流暢、切腹等御自由です。優秀な作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることにします。本誌三分分を贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

奇譚クラブ編集部

〇本誌月極購読料

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共六)六百円
半年分六冊(送料共十二)一千二百円
一年分十二冊(送料共二十四)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分御申込みの方は景品としてヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十二号 毎月一回一日発行
定価二百円 (送料八円)

昭和三十三年一月一日発行

印刷兼発行人 箕田 京二
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号

発行所 天 星 社
最寄口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は、お込みの御替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。御送金で早くて大変便利です。御替用紙御入用の方は、お申込み送金お送りいたします。(但し御注文文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います)

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

甲斐仁参・案：四馬孝提供
縛られた女優たち……楓月太郎・画

花坂道子嬢艶姿集
切支丹迫害史の内（石抱き算盤責め）

緊縛映画名場面集……北原純子・画
「愛は惜しみなく」……藤木仙治提供

私の本箱から（大衆小説の縛り場面）……星 光一

異説八百屋お七「幻想炎の娘」（前篇）……星 光一

少年矯正院体験記「重屏禁」……獄 収一

私のアイデア「ロソク責め」……甲斐仁参
ママになりたいたババ……館地佐渡提供

ある女性から編集長への手紙
「恥しい夢」……泉 かよ子

麻生保の生活と意見（一）……麻生 保
創作「L・T商会」……佐川 増夫

ある夢想家の手帖から……月岡 映子
股のそぎの責め図「姫妃のお百」……南川 和子

告白「防衛服と私」……飯田 靖子
落日婦士道……青山 芳樹

水責に関するノート……甲斐 仁参
「女装通信」……近藤 芳章

創作マツトに生きる夢……日下 絹子
ある女給の体験（四）……法谷 紅次郎

続・切腹曼陀羅図……白谷 正守
和装教室（花嫁衣裳の巻）……河合 正守

映画速報
「奇談倶楽部」の会合（責めの研究会）……岸本 青柳

告「時報」……麻生 保
家畜人ヤブー（第七回）……沼田 曜子

南支那海の鬼……本田 由郎
空想のネタ……土路 草一

ワイセツか哲学か（バリー法廷で裁かれ
たサディズム）……白鳥怨之介提供

現代マゾヒズム芸術時評……伊藤 晴雨
女血たるま……

アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐 重八

輝とブリーフ……池田ふみ子
一揮筆雑記……内田 武男

私のアイデア集大成……佐々木ツトム
「通信」……土路 草一

黒いベチコート（マリアンヌの手記）……鴉 吐夫・訳

女斗美編路……土俵四股平
那津子の洗腸日記……山田那津子

仏、米の婦人ふんどしに就いて……山本 節夫
私のネタ・セクシユリアス……近藤 芳章

六月号の批評と感想……千葉 栄一
緊縛映画速報欄……藤木 仙治

口絵解説……藤木 仙治
読者通信……

〇八月号（復刊第十七号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵
美への冒険……四馬孝・画

加賀利江子嬢艶姿集……加賀利江子・画
花魁「美吉野」の折檻……滝 月太郎

映画写真「夕立勘五郎」……月岡 映子
映画題名、女優名当惑賞……月岡 映子

洋面スチール二題
「聖衣」「岩窟の野獣」……

旅廻り劇団の責め面から……星 光一
陰花植物（或る洗腸マニアの告白）……島 直樹

告白「時報」……麻生 保
ある女給の体験……日下 絹子

高井好晴氏のアイデアに答えて……沼田 曜子
一揮筆雑記……内田 武男

青い洗腸器……久利須 雄
魔女裁判に関するノート……甲斐 仁参

おんな白虎隊（女腹切悲話）……青山 芳樹
家畜人ヤブー（第八回）……沼田 曜子

切支丹迫害物語「マリア観音」……本田 由郎

切腹随想「乗馬スボン」への憧れ……藤山 秀緒

残酷な女性……森本愛造・訳
創作「L・T商会」……佐川 増夫

「腰巻のアンケート」（或る奇人夫婦を
訪ねて）……牧 高志

大衆雑誌の挿絵から……丘一明 提供
私の本箱から（探偵小説の縛り場面）……星 光一

灰色のノート（ある洗腸マニアの日記）……矢崎 竜一

おむつカウアーと私……原 由貴子
諺のもつイメージ……吉野 祐

雪の夜の怪事件「小屋に二人の惨死体」……高崎 勉

ある夢想家の手帖から……沼田 曜子
和装教室（紅燈お座敷着の巻）……白谷 正守

花魁「美吉野」の折檻……本田 由郎
緊縛映画速報欄……千葉 栄一

アイデア「フアンタジア」……田 華雄
告白「虹のかけ橋」……皆川 芳子

アブ・モード・オール・スクラップ……皆川 芳子
告白「虹のかけ橋」……皆川 芳子

続・遺囑の前夜……矢桐 重八
婦女子襲撃事件の顛末……岸本 青柳

七月号の批評と感想……竹村 新一
フェチシズム詩集より……並原 新一

読者通信……

九月号（復刊第十八号）

【定価二百円】（〒8円）

女性屈伸制定額……四馬孝・画
いけにえの町娘……滝 月太郎

新緑の陽を浴びて……須川 令子
「括られちやつたり」……秋 千恵子

緊縛映画名場面集……月岡 映子
縛られた女優たち……千葉 栄一

洋面スチール二題……編集部選定
「征服者」「魂術師の応」……柳沢 吉保

告白「鞭の線に描かれて」……皆川 芳子

異説八百屋お七「幻想炎の娘」（後篇）……星 光一

壮烈大和撫子……沼田 曜子
ある夢想家の手帖から……高崎 勉

探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎 勉
美女を十字架にクギつけ（生にえのまわ
りて肉体の狂宴）……東 一郎

相撲取草……土俵四股平
ワイド映画の縛りシーン……嵯峨美也子

和装教室（長襦袢濡れ場の巻）……白谷 正守

魔女裁判に関するノート（続）（縛への憧
れ）……甲斐仁参

「苦しみ求めて」……沼田 曜子
「苦しみ求めて」……沼田 曜子

家畜人ヤブー（第九回）……沼田 曜子
「短信」……山下 真一

赤い煉瓦の家……津々 武平
体験談「水兵生活と輝」……内田 武男

ビーチボールの魅力……森本愛造・訳
残酷な女性……古井 幸一

医学幻想……千葉 栄一
映画速報欄……

告白「女性志願者の夢」（前篇）……真崎 伸一
麻生保の生活と意見（二）……麻生 保

切腹随想……兵頭 庫一
私の本箱から（単行本、雑誌の責め場
面）……星 光一

美少年処刑の図「笑い」……山口 幸一
菊花会「例会報告」……筑紫美弥子

現代マゾヒズム芸術時評……高木 栄二
フェチ通信「赤い下穿き」……高木 栄二

痛められし桃の実（第一回）（マリアン
ヌの手記より）……鴉 吐夫・訳

続・遺囑の前夜（完結篇）……土路 草一
読者通信……

十月号（復刊第十九号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵
賣画「鼻いじめ」……四馬孝・画



奇譚クラブ

復刊第二十二号
新 年 号

目次

責 画 木馬責の構想

四馬 孝・画

繪 淹れい子画集

〔淹れい子画〕

口 縛 繪

「女学生」 「三十娘」

頭 寫 真

柱後手しぼり

杉原 虹児・画
辻村 隆構成

卷

ニューガールの緊縛模様

洋画スチール アルゼンチン映画「女囚一三三」より

新年の責めのアイデア

久留木 栄 18

カメラと映画雑誌

黒河 徹也 23

カラーシヤの教典

西小路公彦 26

マゾヒズムのいざない

黒田 史朗 39

「ボクの責め方続編」マニア通信

宝塚二三夫 42

お灸通信 灸折檻と妻

伊吹寅太郎 45

映画女優緊縛に関する一考察

河村 操 46

ある夢想家の手帖より

沼 正三 56

女性ホルモン服用の実験報告

古井 真哉 58

ブレさんの洗腸記 ナースの浣腸日記

岩村美智子 61

責物美人伝 腰元お菊

伊藤 晴雨 62

美 容 病 院

久留木 栄 68

告白 哀情のあり方

注 弥生 80

九雅節夫氏に寄す 「三浦右衛門の最後」

佐々木ソム 82

姫 鏡

桂 牧次郎 84

我が娘を鎖で監禁の 記事に寄せて

近藤 一 94

創作 鞭とナイフ

青葉 慎一 98

お伊勢参り 「女賊変化」

海野 繁朗 106

〔手記〕私のいたづら

南 時夫 118

（時評）麻生保氏の生活と意見

麻生 保 121

マゾヒストの告白 犬の生態

杉本 真三 121

女体切腹秘話 愁風連

青山 芳樹 132

〔通信〕奇々十二月号雑感

楓月 太郎 130

夜 光 る

辻村 隆 141

生 首 礼 讃

南方 純 148

未来幻想 家畜人ヤプー

沼 正三 150

雑誌と雑感

沼 正三 150

緊縛映画速報欄

阿部 秀 162

読者通信

164

縛られた女優たち(場面集)……………阿部秀・楓月太郎・提供
緊縛写真「ケラマー・ガールのニュー
スタイル」……………北原純子・画
賣画「地下倉庫」「いでゆ」……………
洋画スチール二題……………
「古城の剣豪」「指紋なき男」……………
絵物語「お加代源三郎旅日記」……………
告白「女性志願者の夢」(後篇)……………
女性の悲鳴について……………真崎伸一
「苦しみ求めて」(2)……………南川和子
「持つ女性の手記より」……………近藤一
良二断想……………高木良二
終戦奴隷(或る勤労動員女学生の手記よ
り)……………雪俊 洋
私の好きな女靴……………波路 洋
「吊し責め」の実験(奇談俱樂部集)……………
女性化願望と男性思想……………岸本 青柳
家畜人ヤプー(第十回)……………古井 正三
東京の人よ何を穿く(腰巻とパンティと
ふんどし)……………松原三三
「艶美なる捕物帖」……………牧高志文・画
ある夢想家の手帖から……………沼田 正三
大陸暴行列車(内股烙印38号の女の手
記)……………本田 由郎
可憐なサド、可憐なマゾ……………木口 秀
製糸工女……………木口 秀
緊縛映画雑誌「再映画化作品について」……………
告白「恋する夫人への手紙」(二)……………
アブ・モード・オール・スクラップ……………
痛められし桃の実(第二回)……………矢桐 重八
(マリアンヌの手記より)鴨嘯吐夫・訳
「美女達のお尻が風船をつぶすアイスシ

ヨー」……………清水 惠二
マゾヒズムへのいさな……………天野 哲夫
女性切腹随想……………田谷 敬生
和装教室(古典模倣矢野御供の巻)……………
雑誌と雑誌……………白金 紅次
洗腸機通信「アブ・マニア雑誌」……………
捕縛入門……………赤井 茂
戦争未亡人の告白「ヒップ受難」……………
美容病院(第一回)……………花田 育子
モデル志願の女性より……………久留木 栄
架空小説「残虐芸術展覧会」伊藤 晴雨
雑誌通信「捕縛を中心として」丘 一明
フランソワの手記……………山梨 参次
読者通信……………
〇十一月号(復刊第二十号)
【定価二百円】(〒8円)
口絵……………
責絵「拘束服」……………四馬孝・画
滝のい子面集……………滝のい子・画
舞妓(まいこ)……………予後(よご)
緊縛写真「猿くつわと細目」……………
縛られた女優たち(場面集)……………
東映「朝焼け富士」三浦 光子
宝塚「題不詳」……………尾上さくら
サシスチックな洋面スチール二題……………
伊映画「カルタゴの女奴隷」……………
米映画「異教徒の魔印」……………
口責めと幾何学図形……………久留木 栄
悲しきはマゾヒストの告白……………三根 耕二
性倒錯の男と女……………山下 真一
美容病院……………久留木 栄
体験記「つばきの沼」……………白金 紅次
「秘蔵の黒髪」……………

ある夢想家の手帖から……………沼田 正三
「苦しみ求めて」(完結)……………近藤 一
私の好きな女靴……………波路 洋
女性ホルモン服用の実験報告……………古井 正三
再映画化作品について(2)……………阿部 秀
私の本箱から……………星 光一
ダイアナ夫人……………乗杉貴代子
妙齡美人の吊責め……………岸本 青柳
ジェームス・ディーンのこと……………伊藤 晴雨
残虐芸術展覧会……………山本 節夫
私のキタ・セクシユアリス……………南方 道夫
創作「東京自殺クラブ」……………保月 定吉
「醜い動物園」……………保月 定吉
告白「アヌス自虐体験記」……………泉 かよ子
あらびやの奴隷市……………本田 由郎
不良グループの私刑……………本田 由郎
アブ・モード・オール・スクラップ……………
女はらきりの夢……………矢桐 重八
女はらきりの夢……………矢桐 重八
雑誌と雑誌……………沼田 正三
終戦奴隷(後篇)……………雪俊 洋
マゾヒズムへのいさな……………天野 哲夫
下着通信……………山田 正三
特異な角度から(3)……………九雅 真一
「演出」……………沼田 正三
家畜人ヤプー(第十一回)……………沼田 正三
通信「最近号の感想と批評」……………近藤 一
読者通信……………
〇十二月号(復刊第二十一号)
【定価二百円】(〒8円)
口絵……………
責絵「裸」(ハリツケ)……………四馬孝・画
滝のい子面集……………滝のい子・画
「夜の脱衣場」「マダム」……………
縛絵「ローソク責」……………杉原虹児・画
映画紹介「縛られた女優たち」……………
新東宝「修羅八荒」……………遠山 幸子
大映「女狐屋敷」……………近藤 美恵子

写真「縛つた女体」……………本誌写真部撮影
(さきり)(ボリウム)(癡癡)(光沢)
洋面スチール二題……………
米映画「キング・コング」……………
米映画「壮烈カイパー銃隊」……………
「カラシヤの教典」……………西小路八彦
マゾヒズムへのいさな(第三回)……………
創作「ゆうべのお客様」……………天野 哲夫
時評「麻生保氏の生活と意見」……………
「靴への愛慕と踏まれる喜び」……………
黒いベチコート……………波路 洋
黒いベチコート……………波路 洋
「家畜人ヤプー(前篇)」……………沼田 正三
「家畜人ヤプー(第十二回)」……………沼田 正三
ワイド映画の縛りシーンから……………
「逆比例」……………牧高志文・画
ダイアナ夫人……………岸本 青柳
危難に遭つた美貌の女……………久留木 栄
「非きもの読本」……………白金 紅次
大衆小説の中から拾つた縛りシーン……………
残虐芸術展覧会……………山下 真一
ある夢想家の手帖から……………沼田 正三
ある女給の体験(6)……………沼田 正三
一揮毫記……………内田 正三
白人の娘のこと……………須藤 武夫
探つた秘密……………須藤 武夫
看護人……………須藤 武夫
帝国海軍の私刑……………須藤 武夫
「真実は誰も知らない」……………章 隆
ナースと洗腸(ブレさんの洗腸記)……………
ケンちゃんのこと……………皆川 美智子
男奴隷のこと……………皆川 美智子
本誌紹介「緊縛映画一覽」……………編集部編
読者通信……………

木馬責の構想

どうですか？ この奇抜なアイデアは？ この木馬の下についたスプリングが電気仕掛で活動するといつたら、あつとその着想の妙に驚かない人はいないでしょう。

四馬孝・画



女 学 生

「小使のおじさんが廻ってくる頃だワ」物言えぬ口の中で、
こうしたつぶやきが洩れる。





三十娘

「前だけは合せてヨ、ねエてば！」
オールド・ミスの艶なる目なざし。

＜滝 れ い 子 ・ 案 並 に 画＞

柱後手しぼり

もがきにもがいて、肩先も乳房もあらわ。しかし、柱に括めれた麻の縄目はゆるむどころか、益々肌に喰い込んでくる。そればかりか着物の帯がほどけて、乱れた膝頭さえ、かくすすべもないのだ。

杉原虹児・画



腰元折檻



モデル 村井知可子
辻村 隆 構成

本誌写真部 撮影



ニュー・ガールの緊縛模様

モデル 田中芳代



本誌写真部撮影

洋画 スチール

アルゼンチン映画「女囚 113 号」より



すさまじい女囚同志の争い



哀れな囚獄の女囚たち

新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 新年号

(第十二巻 第一号 通刊第百二号)



新年の責めのアイデア

久留米 栄

新年おめでとう。今年は犬どしでしたね。

みどりは犬年うまれ。二十四才の若奥様ぶりが見たいわ。今ごろはきつと旦那様に甘えてハネムーンの蜂蜜をたっぷり頂戴していることでしょうね。私、ほんとに嫉けますわよ。そうそう、とても愉快なお話があるんです。今日は新年のお喜びにかえて、それをお伝えしましょう。

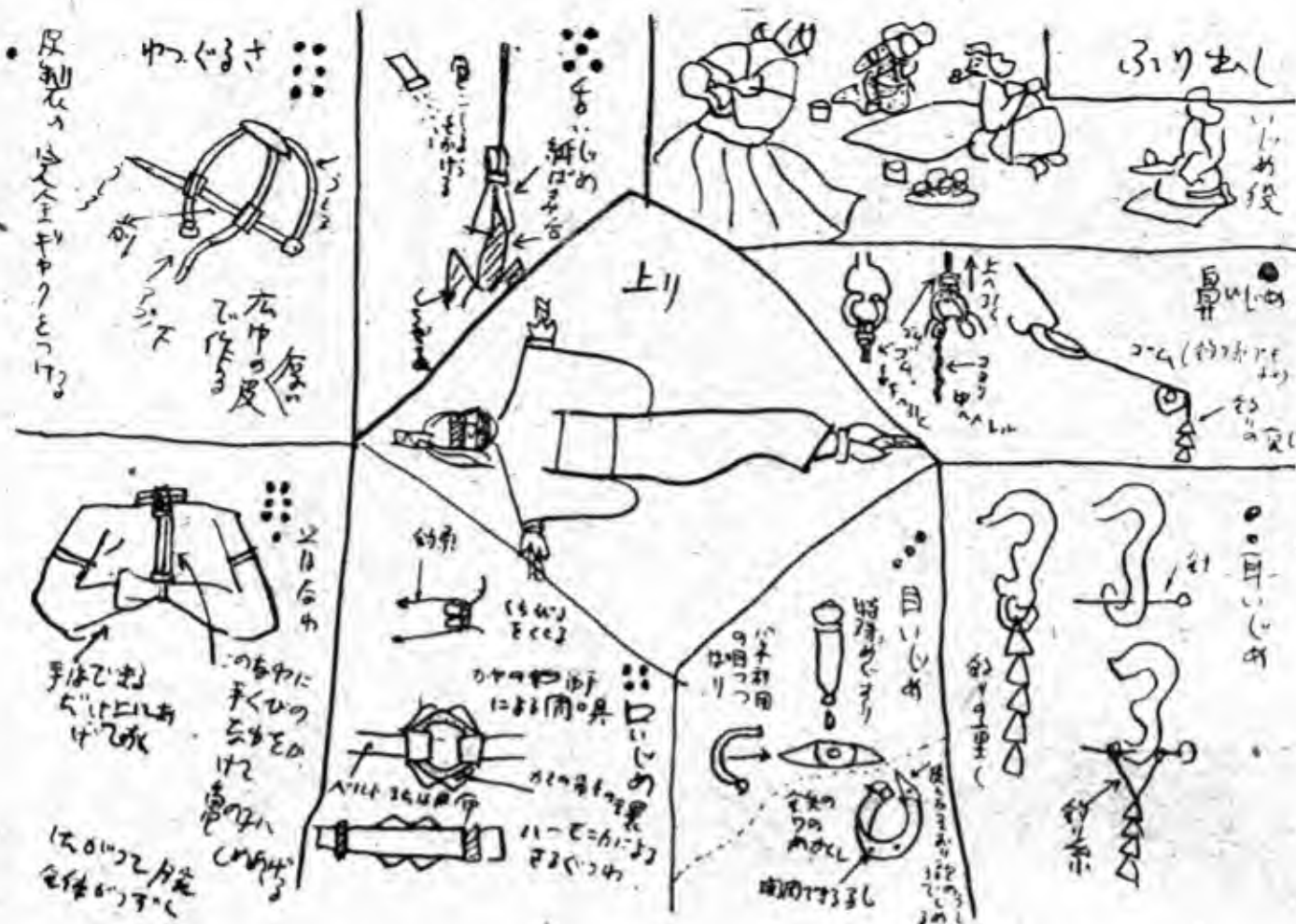
昨年のクリスマス過ぎでした。例の「若草会」という、洋裁学校の同級生会があったのよ。もちろん同級生会といっても、まともな会じゃないの。その時の話。

会員に一人、随分年な方がいるの。ほら、ミモザ洋品店を経営してらっしゃる未亡人で

三十五、六才の方。皆、二十台の中の唯一人の経験者よ。何の経験者って、意地悪。もうすっかり御存じの癖に、あらいや、そんなこといったら、おこりますわ……。ね、みどり、その方と二人、会が終わってから密談したの。もちろんいいプランの密談なの。もうすぐ正月というので、皆、浮々して、とても会はずんじやった。その会の席上、正月の遊戯にすごいプランを作れて皆にせがまれちゃった。そのプランを作るための密談よ。わかるでしょう。私、専らM過剰。だからいつも男役よ。小母さんもそうなの。だから正月の二日、この小母さんの家で開かれる「若草会」のカルタ会や双六、書き初め、などに、

巧みにサジズムの演出を入れる、そのプランなの。わかって、ミドリ。それで私が小母さんに最初、双六で負けた人から、いじめたらどう、って提案したの。そうしたら小母さんは不公平だって。仕方がないので悦唐双六を作ることにしちゃった。

下絵はもちろん私よ。だって、私みどりをモデルに沢山絵を描かしてもらったでしょ。だから断然、引き受けたの。で、悦唐双六は振出しから、上りまで全部で九コマからなっているの。振出しの絵は沢山の女たちが後手に括られ、一枚の双六をはさんでいる絵で、絵自身がルールの説明になっているのよ。双六をする人は後手に括られてするわけなの。



で麻雀用の小さなサイコロが
あって、これを口にくわえた
プラスチックのサジに入れて
ふるわけ。器用な人は背中の
手でふってもよいの。それも
できない人は、私か、小母さ
んがふってやるわけよ。ゲー
ムに出ないのは立案者の私と
小母さんだけで、あとは皆、
参加するしくみ。なぜなら私
と小母さんは、いわゆるこの
ゲーム独得のいじめ役で、い
わばゲームの進行係になるの
ですもの。で、ゲームに出た
人たちは、振ったサイコロと
同じ目の場所に自分の駒を進
めるの。もちろん進んだらそ
の場所に描いてある絵のよう
な方法で、いじめられるわけ
で場所は、一から七まで番号が
つけてあって、一の場所が鼻
いじめ、二が耳いじめ、三が
目いじめ、四が口いじめ、五が
舌いじめ、六がサルグツワ、
七が高手小手に首なわ。あが
りははりつけとなつてゐるの
で、あがりに行くには、六に
行って、その上で再び六がで

なければ七に行かれず、七に行つて再び六が
でないとおがれないのです。最初の後ろ手は
痛くないようにしごきな。七に行くと、こ
れが麻縄に代るといふ寸法なの。ゲームは誰
かが上るまでは止めず、一人上ったとき、数
の多い場所にいる人が上位の成績となるの。
下位のものはあとで上位のものをいじめると
き参加する労役が課せられるの。で、六以外
の場所で、いる場所と同じ目の数が出たとき
は一回休み、そのほかは全部、数と同じ場所
にうつるといふ仕組み。したがって運が良い
と、きつい、いじめ方ばかり回り、ひどい目
にあわされる。それで一回休みみたいと思うと
これまた大変、一回休みの人は、休んだ罰と
していじめ役から顔に墨を塗られるのよ。目
いじめは目ぐすりの良くしみるのを眼科の井
上先生に調査してもらった。耳いじめは耳た
ぶの一番やわらかいところに耳輪をつけ、魚
釣り用の重しを涙が出るまでさげる。鼻いじ
めは鼻輪によるいじめ方もあるけど、コヨリ
をつつこむのもいいわ。舌いじめは舌にト
ガラシなどの薬味をぬるとか、洗濯ばさみで
はさむとかするの。七についた人が上れず他
に回されるときは心惜しみないようにといじ
め役が総出でくすぐることになっているの。
・どう、みどりさん、この案、素晴らしいでし
よ。本当なら、みどりさんも招待したいけど
そんなことをしたら、背の君から叱られちゃ

う。またあの紅子の変態野郎だって……おこわ。だから、今度だけ誘うのはかんべんするわ。そういつても関東と関西に、こうも遠く、離れ離れになっちゃ、滅多に行けるものじやないけどね。……私、みどりを断然舌いじめにあわしたかったのよ。みどりならいくら泣いても、あとでくすぐってやればすぐ喜んだものね。……あらこんなことを書いてはだめね。この手紙、ハズに見せないでね。じや、また。いい便りを下さいね。

三十三年元旦

明 石 紅 子

マイ・ターリング・みどり様

私の紅子、笑ってる。泣いてる。それとも怒ってる。お手紙、ほんとにうれしかった。まず最初におわびよ。紅子の切なるお願い破って夫にみせちゃった。そうしたらハズ、素晴らしいな、だって。紅子をぜひ一度家にお呼びしたいだって。もちろん紅子とハズとが



私を責めてくれるのよ……でしよう。ハズと一緒に責めてもらってもいいのよ。……でも、でもというところ。とにかく紅子あの手紙がきっかけになったのよ。ハズが私に実は僕サジストだったんだって、深刻な顔をして告白したわ。だから、貴女がいらいしやるのなら、おわびに徹底して、いじめられるんだけど、そりやまだハズはやさしいのよ。紅子より、いじめ方がまだうんと下手なの。だってハズ、サジストだといくら威張ったって、みどりのような淑女を裸にしていじめるなんて全くはじめてのこった……なんていうのよ。

で、紅子、貴女の「若草会」正月は盛会だった？。私のところでは貴女のお便りがヒントになって「悦虐カルタ会」というのをハズが考案したのよ。ハズの友達にシスター・ボイの美しいさんというのがあるの。その美しいさんが来たときに、この悦虐カルタ会をやらせられたの。このカルタも、ちよっと変っているわよ。まず、ハズによって私と美しいさん

が高手小手に首なわをかけて嚴重に括られちゃった。そして口に丸い竹のつつをくわえろと、その根本を紐で巻いて頭にまきつけると適当にサルグツワをかけたようになるの。だから、一見してサルグツワをかけたようになる。だから、一見してサルグツワの中から竹の筒が出ているみたいよ。その竹の筒の先が孫の手になっていて、これでカルタをとるという方法なの。カルタのやり方は、対々で、古今和歌集ならぬ悦虐和歌集の文句にあわせ下の句のカルタを探す方法よ。歌の二、三をお知らせすると、

いつまでも わすられぬ夜の 幸は しやわせ
手首にかたき 愛のいましめ

ローソクの 光も淡くゆらぎけり

縄目の 躰 からだ ゆらぐその間に

といった具合よ。

美しいさんとの勝負は、最初、面白半分で、私がうんと リードしたんだけど、ハズが私の縄目の方をぎゆう／＼しめ上げていたものだから、あとでとうとう逆転されちゃった。十枚目ごろから、目さきはちみつくし、腕がうずいてたまらなくなつたので、思わずひざをくずしてとつていたところ、ハズがいきなり、タイムをかけ「反則」として、正座させられ、膝がくずれないように足首と太もも膝頭の三点をきっちりといわえられちゃった。それで、もうとるのはそっちのけ、ふうふう

いつている間に負けてしまったのよ。ところがハズったら、こんな弱い奴、お前の妹でちようどいいだろうって高校生の美いさんの妹富美子さんを連れてきたの。そして、富美子さんとやらされたの。ところがハズも美いさんも富美子はまだ学生だから縛らないっていうのよ。ただでさえ弱っているのに、どうして私が勝てるものですか、……おかげで、たっぷり二時間半、完全にグロッキーになるまで、三人からなぶられちゃった。

紅子が来ていたら、私に応援してくれるのに……誰もしてくれないと思うと思わず寂し涙が出た。あとでハズにそれをいったら、ハズは暴君ね。みどりはまた精神修養がたらんといつて、こんどはトソ責めよ。トソを無理に大盃三杯ものまされたの。そして、とうとう朝まで括られどうしだった。でもほんとはうれしかったのよ。

同封の絵は夫がそのときスケッチしてくれたの、下手くそなので顔形は似てないけど、雰囲気は出てるでしょ。それから写真の方は美いさんがとってくれた、富美子さんちよつときれいでしよう。美いさんったらこんご富美子を存分に仕込んでくれたって。どちらが仕込まれるか知れたことじゃないわ。でも私なんだか富美子さんがすきになっちゃった。

……あら、ごめんなさい、紅子に悪いわ。じやまたね。紅子の嬉しい発展を待ってい

ます。

ね、紅子、これ、うちのパパには内緒の言葉よ。ね。よくって、紅子、結婚する前に思い切って遊んでおくのよ。ムードラブでも、どしどしやって、わが青春に悔なしって具合に、じやさようなら。

一月五日

貴女のいとしい奴隷 葵 みどり
ボーイシスターの女王 紅子様

みどり、お元気いかが。早いものね。もう正月も中日を過ぎちゃった。

若草会、の例会もあれから二度あった。みどりに面白いプランを披露した手前、楽しかった正月の例会や、次のNEW・MODE講習会などの様子をお知らせしなくっちゃ、と思ったけど、このごろちよつと風邪気味。床にいつちやった。きつとみどりの幸福な姿にあてられたのよ。それで手紙おくれちゃった。ほんとうにすまない。いくら私が強心臓でも、病には勝てないわ。やはり養生は大切と思う。おかげで私の現在の心境は

イル・ブルール・ダン・ラ・ビエ

カム・イスト・ダンソン・クレーエ

といったところよ。ほんとうにウエットなの。みどりの手紙を繰返し／＼読んでいるうちに思わず泣けちゃった。もう遠い人ね。そんな感じがした。私もいい人が欲しい。Mと

Mじやどうにもならないから、みどりの家に入り込んでいる美いさんとかいう人に紹介してもらおうかしら……

こんな弱気じやだめね。いつもの紅子らしくないでしょ。

ところで例会の様子報告なんだけど……例の正月の悦唐双六会。この時の楽しさは筆絶なんといつたらよいか、書けないのよ。やり方は充分、アイデアをお伝えしたときお伝えしたので、その日だったアブノマル書初め会のエピソードをお伝えして、お茶を濁すことにするわ。

あの日、私はそそくさと家を出たの。小母さんの家の前にさしかかった時、偶然知人にあつたのよ。私の家の近くにある習字の先生のお嬢さんで森川恵子という、満十六才の少女よ、ちようどみどりを面長にしたくらい。みどりに似てたせいとか、ついていたずらが起つてふらふらつと誘っちゃった。もちろん、恵子さんはその日の遊戯なんか知る筈はないわ。そのことが私の魅力だったの。それで、悦唐双六の時は私同様いじめ役になってもらった。さすがに恵子さんはびっくりされて、まあ、まあ、という嘆声の連発だった。けど、書初めになるともうすっかり落付いて卒業、筆をお揮いになった。さすがは、習字の先生の子ね。見事な字で皆な啞然としちゃった。そこで私がうんとほめたあとで、ここ

じや、「そんな手で書く字じやダメよ」ってけしかけたら、恵子さん平気で「ええわかってます」だって。そして、自分の着物のシゴキをとると「これで、明石さん、ちよっと縛ってくれない」と両手を後ろに回すのよ。紅子が縛ったら「ありがとう、じや次は筆を口にくわえさして」だって。それから墨をふくませて画仙紙の上に一気に書いたのよ。その字の素晴らしさ、手で画いたのよりうまいくらい。みんなみとれちやった。しかも書いた字がふるってるの。恋は奴隷なり。って。さあそれで一度に大さわぎがもちあがつちやった彼女、途端に人気者になつたけど、私達にはわからない心理ね。ドライってんでしようか。皆でいびつたもんだから彼女泣きながら、喜んでいたわ。でも彼女のお父さんが非常に厳格な人で、小さな時から、しよっちゆう縛られていたんですって。小学五年のころ蚊がくって良く字がかけなかったら、塙保己一は足を縛って我慢したんだと叱られた。癪にさわったので、手も足を縛ってもらい、口で字を書いたというのよ。それがうまくなった原因だって。大変なマゾなの。全く変わった人よ……それでいて純情可憐なんですもの。私は、みどりちゃんの後釜ができたと思って大いに可愛いがることに決めたの。断然私のオダリスクに仕立てるわ……。

それから、みどり、この前の絵と写真有難

う。かわりに、別便でドレスを送りました。ドレスといっても型紙だけ。作ってからハズに着せてもらうのよ。

今年の冬のニュー・ルックはクリスチヤン・ディオールのシャトル・ラインとか、カルダンのカケナワラインとか、デッセの鳥のラインとかだそうです。シャトルラインというのは紡垂線、ちようど二つのカッコを組合せた型(〇)なのよ。だから一種のミノ虫型。カルダンのカケナワ・ラインは、西部劇に出る投げなわから案出したというから、いかにもサジズム的で、ビビッドな感じ。衿から、背にかけてのゆるやかなドレープを膝の上でうまく締めくくったのが特色。で私はこのシャトル・ラインをもっと強く出すため、両腕のないうドレスを考案してみたの。これがお送りした型紙よ。このドレスを着せるにはスリッパをつけた上から乳の下あたりと、腰の部分に両手の上から縄をかけ、両手首を尻の上で固定しておく必要があるわ。さもないと服の下で、もじもじしてみつともないでしょ。だから、できあがりにはエレガントな囚衣というわけよ。いかにも紅子好みのものですよ。みどりにいわせたらキク・ラインと呼ぶかもしれない。カリブソ娘、シスタ・ボーイなどが流行の世の中だから、このドレスを専ら、シスタ・ボーイ専用につけて、一流デパートに陳列したら、大流行間違いなしと信ずるのだけ

ど。私も一つ作って貴女のところを訪問して美しいさんとかに着せてみようかしら。みどり。もし作ったら、写真、おくって、ね。じやまた。

バイバイ、背の君に宜敷く

一月二十一日

明 石 紅 子

私のマスコット

葵 みどり様

老いたる思春期

一関市内の七十才になるお爺さん、老年のせいもあり一晩に十二、三回小便に起きる。そこで何とかならないものかと、病院に足を運び、ビタミン、ペニシリン、男性ホルモンと近代医学の粋を施してもらったが、効めがうすく最後に注射してもらった女性ホルモンだけが体にあつて効果があり、起きる回数も半分へった。それから、三日おきに約十本うってもらったが、やがて胸がふくらみ出し乳房も隆起、乳首までが痛み出した。そのうえ髪も生え女性的な若返えし現象を呈するに至った。これには弱って注射するのを止めたところ乳房がひっこんだので、またまじめると、とたんにふくらみ出すといった具合、お爺さんはいい療法はないものかと、ままたらぬ身をかこっている。△「週刊新潮」一九五七年三月十一日号V

映画の緊縛場面を撮影するには望遠レンズがよろしい。何故なら、五十糎の標準レンズでスクリーンを確実にキヤッチしようとする、少なくとも客席の前半部の席に居なければ、ファインダー一杯に場面を捉えることが出来ません。そうした場合は、周囲の観客を意識しては詰らない神経を使わねばならないし、シャッターを切る場面が場面なので、一寸、照れ臭くもあり、その上、前半部の席の

場合は否応なくスクリーンを仰ぐカメラ・アングルとなつて、そのまま撮り焼付けると印画がゆがみます。結局、映画館の一番うしろから立って壁にもたれ、スクリーンに真正面に向い合い容易にシャッターの切れる、望遠レンズが最も撮影し易い訳です。

大劇場を除いて普通の映画館の場合、場内の一番後方に立って一〇五糎望遠のファインダーを覗くと、丁度ファインダー一杯にスク



「カメラと映画」

雑記

黒河徹也

リールが納まり、都合がよろしい。勿論、五十糎レンズで場内の後方から撮影してもよい訳ですが、一〇五糎の半分の大きさにしか撮れず、従って引伸して両方を比較すると、一〇五糎の方が仕上りのいい事は明瞭です。

データーは私の場合、トライX・SSSはF4で1/50・SSはF4で1/25・現像時にASA四百から八百程度増感します。

映画の中で、最も好ましい刺激を与えて呉れるのは、私の場合、女が縛られている場面であり、そのカットをいつ迄も記憶に残したいと思ひ、そのために高価なカメラを購入した馬鹿さ加減は、全く自分のことながら哀れに思われる位ですが、そうした撮影を通して今日まで、色々な愉快なこと厭なこと楽しいことがあり、やはりこの趣味は捨て切れないと思います。

最良の場面、つまり云う処の決定的瞬間をとらえるために、一本の愚劣な映画を幾回も料金を払って観る根気も大変なものです。

新東宝「海女の戦慄」は、無人島の底に沈む財宝をめぐる活劇もので、内容の単調さ、ストーリーの展開のつまらなさは、全く馬鹿馬鹿しいの一言に尽きるのですが、この映画の後半で、怪紳士の一味に監禁されている可愛らしい容顔の新スター、桂京子の後手

縛り猿ぐつわで恐怖におびえるアップと、その数シーン後の肩をこずかれながら引き立てられてくる短いワンカットを撮ろうとした時は、運が悪く丁度カメラを構えた前に人が立ったり、満員でシャッターが切れなかったりして、とうとう四回も映画館通いをしてしまいました。

「ボウニー分岐点」の時は、場内に観客が数える程しか入っていなかったで、美しいエヴァ・ガードナーが後手に縛られ猿ぐつわをされるまでの様々なニュアンスを、一回で十五枚撮影することが出来ました。十五枚という随分の数のようですが、時間になると僅か数秒のカットが五、六回映写される間で、またたく間に済んでしまう枚数です。

今まで最少の撮影枚数で済んだものは、のり平の三等亭主で、細君の中田康子が強盗に襲われたと三等亭主の三木のり平が幻想する場面、この時の中田康子の背後から見せる後手は、正に高手小手の文字通りの縛り方でした。この時が五枚。『地獄花』の京マチ子が四枚。メモを見ると平均一本の映画で、十枚見当撮影しています。

不思議なもので、女優が縛られている場面が映写されると、今まで口をモグモグ動かし、何か食べている連中もアクビをしている連中も、途端に身を固くしてスクリーンを見つ

める。その時、私もためらわずシャッターを切る。場数をふめば、シャッターの音など気にするのは、全く徒勞ということに気付くものです。一米も離れていない傍の人でも、シャッターの音など全然気付きません。スクリーン上の緊縛女優があらゆる観客の全神経を奪っていますから――。

日本映画は緊縛場面を除けば、私にとって大部分が魅力に乏しい。大体一時間半のうち二、三分、否、一分の縛り場面の存在だけで、私は日本映画に満足するしかない。では愚劣ですが、縛り場面のある未封切映画で紹介されていい映画を二、三本お知らせします。

一、新映作品『蜘蛛男』江戸川乱歩の原作で日活の河上敬子が監禁され、八島恵子が後手に縛られハンカチで猿ぐつわをされる。この作品は独立プロの映画のため、何時配給ルートにのって公開されるのか今の処判然としません。製作本数の少ない新東宝系で配給の線が濃厚です。

二、大映『冥土の顔役』川上康子が悪漢に捕えられ監禁される。

三、日活『肉体の悪魔』グラマー・スター筑波久子が肌も透き通るシユミーズ一枚で後手に縛られ、裾をまくられたりするエロチックな場面があります。

こんな映画の場合、私は内容は問題なくカ

メラ片手に映画館に出掛けます。次に素晴らしい映画を観る感動に浸りながら、更にその上、緊縛場面があればという欲の深い方のために二、三の映画を紹介します。

一、松竹『黒い河』松竹切つての写実派、壁あつき部屋、小林正樹が演出するこの映画の中で、有馬稲子が暴行される場面があります。彼女は街の不良、人切りジョーに暴行されて始めて性を知り、そのままずるずる愛欲の泥沼にはまり込んでゆき、暗い宿命に命をかけて反抗するという、強烈な愛と肉にもたえる女の役を演じます。

彼女が人切りジョー一味に誘惑されるシーン――。ハシナリオVより

シーン50 畑の中の道、一味の四人が待ち構えている「来たぞ」

シーン51 駅の見える道、一味の一人が向うの四人にタバコの火を明滅させて合図するその前をサラリーマン風の男が通りかかり、その後から静子（有馬稲子）が帰って来る。

シーン52 畑の中の道、息をひそめる四人の前をサラリーマン風の男が通り、少し遅れて静子が通る。四人のうちの一人が「静ちゃん」と呼んで駆け寄る。静子がそのまま行き過ぎようとする、再び甘い声でふざけるように「しづちゃん」と声をかけ、いきなり横手の道へ押し込む。「あっ」という声に、サ

テリーマン風の男が立ち降り振り返る。どつと明るく笑い声が起る。「助けてっ」と必死に叫ぶ声を消すように、「タスケテ」「イヤヨ」「ヨセヨヒトガヘンニオモウヨ」「ヤダナ」「ホラ、アノヒト、タチドマッタヨ」と如何にも友人同志がふざけ合うような男の声、サラリーマン風の男はそのまま去って行く。暴れる静子の口へハンカチを押し込み、押し倒して手足を雁字搦めに縛る。懸命に抵抗し咽喉で唸る静子を男達は担ぎ上げる。

シーン53 林の道、静子を担いだ男達が突っ走る。

シーン54 貯水池、堤の下まで走って来て静子を放り出す。男の一人がいきなり静子の上に蔽いかぶさる。縛られたままの静子は激しく抵抗する。その時、口からハンカチがとれる。「助けてっ」と絶叫する静子の声が、静かな湖面に反響する。男は再び静子の口にハンカチを押し込んだ。

(映画芸術九月号より)

題名が示すように、小林監督は演技者にどぎつい迫力のある芝居を要求し監督自身、鮮烈な訴えを意図しているから、素晴らしい画面が展開すると思われれます。これで、柳生武芸帳で緊縛された久我美子と共に、にんじんクラブの会員(現在は二人)は皆緊縛される訳で、仲々たのしみです。

二、東映「純愛物語」どっこい生きている。ここに泉あり。米に至るまで、日本映画の良心を守り通して来た私の一番好きな今井正が、原爆症の不良少女と不良少年の清純な恋を通して、戦争の傷痕を生々しく描き出す大型天然色映画。最初の方で上野を根城にするスリ仲間の一人ミツ子(中原ひとみ)が足を洗うと云い出すので、仲間達からリンチに遭う場面があります。

シーン16 連れ込み宿の二階、電車の轟音——。縛られたミツ子は固く身を伏せている

「よう、素直にしるよっ、なあ」と仲間の一人がジャックナイフでミツ子の裾を切り、ピツとスリットを引き裂く。一同の笑い。「おい……」と一人がミツ子に寄り添って首を掴みジワッと締め上げる。ミツ子は歯を喰いしばって声もたてない。

といった壮絶な場面があり、期待されます。

三、東宝「隠し砦の三悪人」。どん底に続く黒沢明の作品です。日本映画界に於ける黒沢明の地位は最早明瞭で一言も申しませんが、彼の次の作品、これは題名が変更されるようですが、脚本発表当時は「隠し砦の三悪人」と記されています。戦火に焼け落ちた城跡から隠されていた金貨が発見され、この金

貨を巡って善人悪人が入り乱れるというスケールの大きい時代活劇です。先頃、東宝ではこのお姫様役になる女性を募集していましたから、近く撮影に入る事と思います。黒沢監督は非常に重厚なねばっこい演出をする人ですから、例えば、この映画の脚本シーン95を見ますと、細引で容赦なく縛られた姫と娘、というような場面は、実際にきっちり縛られた女優がスクリーンに描かれるものと期待されます。姫は勿論ニューフェイスで、姫を守る娘のキヤストは今の処わかりません。

この映画では、相当長いシーンの縛り場面があり、更に縛られたまま馬に乗せられ引き出される。という興味深いシーンもあり、その完成が待たれます。

今回の「カメラと映画」雑誌は、映画の緊縛映画の撮影と、二、三の緊縛映画の紹介に終りましたが、次回からは更に撮影の苦心談や映画観覧についての心境といったものを実際の資料によって逐次申し述べたいと思います。緊縛映画の大きなファンとして、今後共本誌の口絵頁に映画場面の資料の発表を望むと共に、楓氏、阿部氏、升岡氏その他ベテランをはじめとして広く読者の方からの映画についての投稿を期待します。

(未完)

『カラーシヤの教典』

(二)

西 小 路 公 彦

一 私には本来の話から少し離れ過ぎた。

カラーシヤ教団については、僅かながらも情報が集められ、徐々に究明の準備が進められていった。

しかし、其の内容が判明してくるにつれ、益々、奇怪で、薄気味悪い妖気を、嫌でも感じさせられるようになった。

先ず信者達は、シヤバ島ばかりか、遠くストトラ、ボルネオ、マレー半島等にも蟠居していて、その予想外に広く拡がっているのに驚かされたが、意外に、その絶対数は決して多くないのだ。けれども、その信者の大部分は、金持か、特殊の地位に居る人達で、即ちあの崇高なキリスト教が、弱者の宗教とすれば、これは強者の宗教といってもよかった。

若しも、これら信者達の力を総合して、何事かを画策するとすれば如何なことが出来るか、考えただけで空怖ろしいものを感じるが

それを実際にやっている形跡が見られ、而もその完全な正体が掴めない処に、非常な不気味さがあった。

けれど疑いもなく、ケラア山麓を中心に、国境のない暗黒の王国が、厳然と建てられ、君臨していることに間違いはない。

教義と信仰の対象は何んだらう。一種の神秘的なベールに包まれて回教とも、仏教とも、キリスト教とも関連性が認められないが、伝わる処では、ギリシヤ神話にあるような、一つの女神を中心に、密教とも思われる不思議な宗教とのことである。

教祖カラーシヤは今年七十歳と云われ、一切の指令は、その下にいる数人の長老達から出されると、情報は伝えていく。

偶然にも、私は或る王族の仲立ちで、シヤカルタ市に出てきた、ポロシユアジョ長老が足に困っているのを知って、司令部の車を融通することに成功した。

それは、どちらが水心で、魚心かわからないが、これが縁となっ

て、私は長老と夕食を共にする機会を得た。

ウマが会うというのか、話ははずみ、私が受けた密令は別としても、長老との間に、厚意以上の親密さが生れ、是非一度、本院を訪ねてくれという、約束まで取り交す事が出来た。これは私としては大成功で、N長官は、しきりに、

『焦せるな。最初は何にも要求をせずに、ただ、その中に溶け込むように努めよ』

と指令されたほどである。

九月末の日曜日。私は、司令部の車を一日借りて、ドライブ旅行に出掛けた。これは、前から宝蘭のねだりで約束してあったことでもあったが、私としては、ケラア山附近一帯の地形偵察を、秘かに目論んでいたのである。

最初私が運転をし、後の座席に宝蘭とルキーが珍らしいほど澄まして、時々何にかを囁やいては、上品に笑っていた。暫らくすると『今度は私に運転させて』

と宝蘭が甘ったるい声だが、でも、強引に身体をのり出して私の首筋にしがみつくので、仕方がなく、

『少しの間だけだよ』

と交代させられてしまった。

彼女のドライバーとしての腕は確かだった。が、ハンドルを握ぎるや否や、猛烈にスピードを上げて、後方に高々と砂塵を巻き上げ道端に遊んでいる鶏を車輪に引っ掛けては、その度に、高い笑声を立てていた。

これは、私にとって一つの倖わせでもあった。というのは、私がバックシートに身を移つすと、待ってましたとばかりに、ルキーがいつもの無鉄砲な仕草で身体を寄りかからせて来たからである。

狭い座席で、私の腋の上を擦るうとし、接吻をせがみ、足をばたつかせ、果ては、手を振り上げて撲ぐりにかかり、咬みつき、蹴

り上げ、思う存分に暴れ廻る。

私は、悪戦苦闘の末、やっと蹴込みの処で、この狂った牝犬の両手を捻じ上げ、足を踏ん張って、荒々しく、肩を波立たせた。

けれども、若し車がスピードを出して、他人の眼を遮えきらなかったら、私は如何に言って、弁解すればよかったのだろうか。

車は、何時の間にか山間のくねった車道を縫い、冷気が、しと／＼と車内に染み込んで来た。宝蘭は、山の陵線を大きく曲った処から、アクセルを緩め、徐々に、スピードを落し始める。

気がつくやうに、行手に真白な塀が、樹林を通して横に延び、中央に寺院の高い尖塔が、緑の上で天に指をさしている。

宝蘭が、警笛を長く鳴らすと、入口から紺青のガウンを纏った人影が一つ現われた。車が近づくにつれ、人は段々と大きくなり、意外にも、にこやかに笑っている。宗慶の顔が眼の中に飛びこんで来た。

その瞬間、私は、車中に於けるルキーの狂態も含めて、二人から或る種の計略に乗せられていたのを、鞭打たれる痛さで自覚した。

計った私が、計られていたのだ。何んの為か判らないけれど、彼女達の背後に彼女達を操る底の知れない暗黒の穴が見える。私は、

今更ながら、自分の迂闊さと準備の整っていない自らの心に、激しい焦りを感じたが、今は如何に跳がいても、運命に身を委ねる他に道はないようである。そーっと、誰にも知られないようにして私は自分の魂に鎧をかぶせ、出来るだけ冷静を粧って車から降りた。

寺院の入口には詰所があつて、守衛が出迎え一人の僧侶が案内に立った。宝蘭とルキーは、自動車の仕末をするのか、後方でエンジンをつかす音が響いてきたけれど、私は、彼女達を待つ心の余裕が

無くなっていた。

十数万坪もあるだろう。広い境内は、山の裾合いを巧みに利用して、樹木や花壇が自然に配置され、純白の建物が、ところどころに

眠そうな姿で散在していた。

私は導かれるがままに、三番目の美しい建物に入り、簡素だが、何処となく、ゆったりとした一室に通された。

『さぞ、お驚きになられたでしょう。先日、長老が、ジャカルタで御目に掛かれたそうで、今日は、礼拝もあるから、お呼び申し上げてくれ、とのこと、娘に命じて御案内いたしました。何卒、御気を悪くありませんよう。』

宗氏の物腰は鄭重そのものである。先程の僧侶が宗氏の着ているのと同じガウンと、眼だけが出るとんがった頭布を持って入って来た。

『さあ、これから礼拝が始まります。どうぞ、それを御召しになつて下さい。』

私は、宝蘭やルキーのことを一言訊ねたかったが、何故だか、喋るのに口が重かった。私が、青一色に塗りつぶされると、再び僧侶の案内で、静寂、幽幻な世界を、拝殿に向つて足を運んでいった。

緩い傾斜の中に点在する樹木は、私の眼を楽しませてくれたが、人影は余り見掛けない。と思いがけない草叢に、若い男が、きりりと緊った真黒い服を纏って立ち、それが、鬱蒼とした繁げみに反影して、一層、現実の社会から隔絶していることを感じさせる。

拝殿は、小高い丘の上に傲然と聳え立っていた。ゴシック式に似た尖塔のある門を潜り、厚い、重い扉を押して、トンネルのような一部屋を抜け、厚い垂幕を払って、礼拝堂に入った時、中は非常に暗く、あたかも、黄泉の国へでも導かれたのではないか、という錯覚に捉われ、一種の戦慄が身内を走った。

それは、南国の強烈な太陽の光を、一杯に浴びて来た私が急に深奥の部屋に入った為なのだろう。只一つ、その暗さに怯びえた眼の中に流れる、一線の青白い光が、尖塔の小窓から中央に設けられた礼壇に、サン／＼と注ぎかけている。その白さに、ほのぼのとした

温たかさを、心が受けとめていた。

馴れるに従って、四辺は天井も、壁も、床一杯に広げられた厚い絨氈も、全部紺青一色に塗られているのが眼に浮かんできた。

中央十坪ほどは、一段と高くなっている、磨かれた琥珀色の大理石が敷かれ、その上に設けられた祭壇には、純白の乙女神像が、両手で金色の尊玉を高く捧げて、青白い光を一杯に浴びていた。

銀糸の縫いとりで彩られた白色の僧服が十二、祭壇の前に膝まづき、像の真下にいる長老が、高く両手を挙げて祈っている。青い絨氈には、私達と同じ服装をした信徒が四十人ばかり、僧侶にならって膝で立ち、首を下に垂れている。

静粛、そして荘嚴。何者も動かない中で、金の尊玉から一筋の紫煙が、光の中を静かに登って行く。

隅から低い楽の音が流れてきた。それは、絃と木管類の合奏だったが、威圧されるように重々しく響き、私の魂を、深淵な幽境の地へと導びいて行った。

読経がこれに和す。何処の国の言葉か判らないけれど、韻が美しく踏まれて、怪しい妖魔の嘆息を聴くようだ。私は宗氏にならって厚い、柔らかな紺青の絨氈に膝まづいたが、何時の間にか、膝の知覚を忘れてしまった。

私は、厳肅な宗教の祭典が、これ程までに魂の琴線を揺り動かし清められ、一切の社会から心を解放してくれるものとは、思っていなかった。

何んの為に来たのか。何処に居るのか。どのくらい時間が経ったのか。総べてが、忘却の湖に沈められ、ただ恍惚と、この世ならぬ世界に身を委ねるばかりだった。

私の魂は、純白な乙女像の眼なごしに吸いつけられて、離れることが出来ない。清やかさ、といってこれほどの清純さが、他にあらうか。

しかし、その眼は悲しそうで、会ったことこそないが、絵画で見
た。愛と悲しみに満ちた、あのイエス・キリストの眼にそっくりだっ
た。

世界にある悲哀という悲哀を、全部背負って御神に捧げまつる其



が、妙に淋しさと不安を懐かしめる。

ふと、右手に青白い小館が密生した緑の葉蔭から顔を覗かした。

「あれが、カラージャ様の居らっしゃる御館です。教祖は、御年令
を召された為めでしょうか、終日、あそこで御祈りをしてられるそ

の眼は、敢えて地下に伏せず、
じつと揺らぐ紫煙の行手を見守
り、何事かを祈りに祈っている
礼拝は、私の感情が、白像と語
りあっているのを、そのままに
して、崇厳に進んでいった。

ふと、宗氏の指が私の肘をこ
づいた。我に返えんと、何時の
間にか儀式は終り、信徒達は立
ち去り始めていた。私も立ち上
がろうとしたが、膝関節が痺れ
ている。宗氏も同じ状態だった
のだろう、ゆっくりと立って、
二・三度、足を踏ん張り、無言
で私を誘って歩き始めた。

二

再び二人は、先程の僧侶に導
かれて、拝殿を後に、寺院の奥
へと登って行った。

傾斜はひどくなり、前方に断
崖の頂が見える。樹々は重なり
其処此処の草叢から、見えない
眼の光りが感ぜられ、それでい
て、人影の眼にうつらないこと

うで、私も御目に掛かからなくなつてから既に、三年になります。宗氏は、こう言つて右手を掲げた。

そうか。彼処が一切の指令を発している処なのか。一見、何んの變哲もない此の辺りが、物々しい警戒網で張り廻らされているのを軍務に携さわっている敏感さで、ひしひしと感じさせられていた、その原因が突きとめられた。私達は、更に森の中の枝下を潜つて、奥へと歩を運んでいった。

それは、殆んど寺院の果てで、行止りの断崖が、私達にのし掛かるように迫つて来た処、突然、眼に緑の色が染み、広い芝生が足元を洗いだした。その中に一本の小路がうねり、断崖の中央に向けられている。小路の行き着く処、そこには崖の中に嵌め込まれた恰好で、四階建の建物が、憂鬱そうに眠っていた。それは茶褐色に塗られ、ちよつと見た処では崖の一部にしか見えない。

入口に、彫刻かと思われる門衛が傲然と突っ立っている。しかしあらかじめ、知らされていたのだらう。私達は、門衛の慇懃な中に鋭い吟味を受けて、建物の中へ招じ入れられ、案内に立った僧侶は其処から戻つていった。

中の様子はまったく想像とは違つていた。曲線と直線が美しく交錯して、壁と天井を区切り、赤い絨氈が廊下の端まで延び、彫刻と絵画が処々に配置されて、素晴らしく近代的なニューアンスに満ち満ちていた。螢光灯のような光は明るい匂を放つて、眼を柔らかくほごしてくれる。

十四・五才の可愛らしい少女が二人、薄いベールを被つて私達の前に立ち、うやうやしく御辞儀をする。その微笑は、私が秘かに懐いている不安と警戒心を、少しづつ溶して行く、無邪気な魅力を備えていた。

案内された部屋も近代的で明るかった。坐りの深い椅子が置かれサラサ織りの壁掛が、品良く眼を慰さめてくれる。

少女達は、香りの高いお茶を捧げ、そのまま私達の前に坐つて、投げ出された膝を揉み始めた。それは極く自然で、疲れ切った心の底まで揉みほごするように、気持ちの良い感情を流し込む。

暫らくすると、眼のさめるように美しい少女を先導にして、ポロジュアジョ長老が、銀系の縫取りをした僧服を纏い、だぶついた裾を、足先で踏みつけるようにして姿を現わした。

「ミスター西小路。よく御出になりました。お疲れになったでしょう。今日は、ジャカルタの御礼といつては何んですが、お約束をした手前もあり、一つお寛ろぎになつて食事でもしながら、お話し御覧になつて戴きたいものも有るというので、お招きをいたしました。何卒、ゆつくりと私の款待に与かつて下さい」

再び不安が襲いかかり、私は、グツと下腹を引緊めた。めつたに人と会わないと聞いている長老は、ジャカルタで親密な仲になつたと云つても、一介の青年将校に、こんな術策を弄して款待するとはその底に、何にを求めているのだろうか。話とは、見せるものとは一体、何んだらう。

或は、私の受けた密令が洩れ、反対に軍の中樞に参画している私を抱き込むか。それが出来ないなら、闇から闇へと消される、何等かの手段が用意されているのか。背筋に冷たい糸が垂れ、眼頭に暗い運命の姿が掠め通つた。

しかし、長老はそんな私の感情に無関心で、悪戯っぽい色を眼一杯に湛たえ、他意のない会話の中に、不思議な魅力を以つて、私の不安を一つ一つ拭い取つて行くようだった。

食堂は廊下の突き当りで、淡紅色に統一されていた。天井は低くアーチ型にくりられ、壁に裸婦の油画が一枚かかつて、寺院の一角とは夢にも考えられない。部屋の中には、奇妙な形をした大きい肘掛け椅子が四脚、向いあつて置かれていたが、不思議なことにテーブルが無かつた。

請ぜられるがままに、椅子へ深く掛けると、弾力のある反動が、椅子の中から腰に伝わって、背中で太い吐息が洩れる。

『オヤ』

思わず腰を浮かしかけ時、宗氏が、ゆっくりした声でさえぎった。

『公彦様。うちの宝蘭やルイーから何にもかも聞いて居りますよ。』

さあ、遠慮をなさらずに、お氣を楽にして下さい』

氣が付くと、真向いの空いた椅子が、細かに慄えている。

『これ宝蘭。そう、むずかるのじやない。よしよし。俺が坐ってやろう』

長老は太った身体を真向いの椅子に移した。椅子が、ぎゅっと潰れ、痛々しさと或る妬ましさを感じる。

四人の美女が脚のないテーブルを運んできた。アンナン娘がよく上に着ている透いた絹の薄物だけを纏い、中央でテーブルを捧げると、そのまま四隅の角に坐った、その隅には、大きな穴が一つと、小穴が二つ割られている。

その後、膝を揉んでくれた少女達と、長老について来た美少女が、踊るようにして続き、テーブルの端に向うと、大きな穴から出ている首を、金糸の刺繍がある幅広い帯皮で、テーブルに固定し、小穴から出ている両手首を尾錠で止めて廻った。

悪戯好きな少女は一人の美女をテーブルの脚にしてしまうと、鼻を摘まんだり、唇を抓ったり、耳を引っ張ったりして、置物を正しい場所に直すように弄った。

美女達は生きていなかった。ちよつと一人が、鼻の穴に可愛い小指を突っ込まれて、ニコツと仕掛けたが慌てて澄した顔に戻る。テーブルの脚が固定されると、美少女は、長老の前に膝まづいて祈り、終ると、僧服の裾をめぐって足の中へ姿を消し、私達について来た少女の一人は私に、今一人は宗氏の股倉に割り込んで蹲くま

料理が運ばれる。軽い飲物と前菜から始った。この素晴らしい料理は、私の胃を非常に満足させたが、何という料理だったか、今は少しも思い出せない。それほど、私はこの部屋の妖美で、怪奇な状況に圧倒されてしまったのだ。勿論、先程の不安などは影さえも消えていた。

長老も健啖家であるが、恐ろしく不器用でよく指先を汚しては、その度に、テーブルの端に置かれた柔らかい髪の毛を、ナフキンの代りにしていた。

足元の少女は、時々私を揺さぶって、口に運ぼうとする食物をねだり、或は舌で肌を擦ぐったり、湯こぼしや灰皿の代りになつてくれたが、それでいて少しも迷惑にならない。

長老の服も、何にをしているのか、よく揺さぶられ、私も動いた。少女が悪戯する度に椅子は、カナリヤのように囁き、中から私のよく知っている暖い香りが馥郁と立ち登ってくる。

食事の間、私達は、非常に甘い酒を口にしながら、実によく語りあった。

静かな口調で語る、宗氏の豊かな知識に、私は驚きもしたけれど長老の話術には、一種の魔法があつて、知らず知らずの中に引きづり込まれ、合槌を打つことさえも忘れていた。

日本の伝説、チベットの秘教、インドの風習、世界の珍談。信仰や宗教の問題、芸術、哲学、科学。或る時は堅苦しく、或る時は愉快な話がはずんだ。

殊に、尊玉を高く捧げた、白蠟の女神像の象徴について、意味の深い言葉が、長老の口から重々しく語られ、この教団の奥義を示される心持だった。

が、言葉は何んでも良かった、私の視覚、触覚、臭覚は、この部屋一杯に満ち満ちている、強烈な刺戟と悦楽が心に咬みつき、絶えず官能を揺さぶっている。



短いような、また長いような食事も、終りに近ずいて、南国の珍果ドリアンが持ち出される頃、ふと長老は私に話しかけた。
『このドリアンは、ネシヤ人が、よく女房を売ってでも喰べたいと言ってますが、精神問題で、それよりも美味しい、魂への果物とで

も申しますか、人生最高最大の芸術を、ミスター西小路も、つとに味わってられると聞きました。一つ今日は、その果実が如何にして熟くするか。その芸術が創作される姿を、お目に掛けましょう。しかし、これは滅多な人には、決して見せて居りません。どうか、これで私の貴方に対する信頼と誠意を、お汲み取りになって下さい』

私は、満腹感に張り切ったお腹を持ち上げながら、チャラッと椅子に眼を走らせて、色のない躊躇を顔の端に横切らせた。

『そうだ。貴方の娘達も一緒に連れて行きましょうね』

逸早く私の考えを悟った長老は、今まで坐っていた椅子の縁に手を掛けて、チャックを背にそって、ぐるっと引張った。

それは何んと精巧に出来ているのだろう。

すっぽりとカバーがはずされると、椅子の中に、今一つの柔らかな椅子があつて、そこに全裸の宝蘭が蔵まわっていた。

口元は、幅の広い護謄帯が廻わされて、中の椅子の背に固定され、ビロードを張った腕木が、彼女の胸、胴、腕、膝を、きっちりとは横から挟んでいる。外側の椅子と宝蘭の間には、ふかふかとしたカボックが埋められて、外の椅子全体に凹凸のない、柔らかなふくらみが保てるようになっている。

私も長老の合図によって、今まで掛けていた椅子の中から、ルイーをほじくり出した。二人は、自由の身となるや、赤くほてった身

体を私の胸にすり寄せて、甘い飲物をせがむのだった。

少女達も、一緒に行かしてくれと、長老の前に膝まづいて懇願をしていたが、ティブルの脚を片付けることと、残った椅子の仕末を命ぜられ、同行は許されなかった。

こうして、二人の裸女を連れた遍歴の旅が、特殊の階段を昇ることによって始められたのである。

三

私は、この魔境遍歴を語る言葉を知らない。文字は、徒らに空虚な形骸を晒らしてしまおうし、妖艶で、甘美な雰囲気は、その香りをすら伝えることが出来ない。

或る部屋は、あくまで暗く、冷たく、湿っていたし、或る部屋は豪華絢爛そのものであった。

其処に住んでいる人達の多くは、美しい女だったけれど、可愛い子供もいたし、極く少数だったが、見とれるように素晴らしい均整のとれた青年も交っていた。

その反面、醜いグルーブも戯れ遊んでいた。兎口の女、両腕のない人、胴体だけの男、足萎、盲人、侏儒、僂僂。しかし、一番興味をひいたのは、「骨なしさん」と呼ばれる若い娘である。人の形をした水母。彼女は、自分の足で歩けない代りに、身体を自由に折り畳むことが出来た。

いや、語れないまでも出来るだけの努力で禿筆を馳せて順を追って行こう。最初に入った処は、ホテルのサロン等で見掛ける、変哲もない一室であった。一隅に書棚があつて、腰の低い椅子が、電気スタンドと一緒に配置よく散らばり、他の隅で、三人の美しい女達が、一人の女の子に着物を着せている。

書籍を見て驚いた。多くの本は知らなかったが、サド、マゾツホの本は勿論、中世のキリスト教徒迫害史、南北戦争、ブラック・ミスのサディステック・ストーリー、ア・マルシヨンの蚤の浮かれ

話から、支那の迷楼記、ロマノフ王朝裏面史もある。更に雨月物語怪妖記、泉鏡花、谷崎潤一郎等、日本の図書もマレー語に翻訳されたソートと一緒に、並べられていた。

何んと、三人の美女の前には、シュトックの「被虐の家」が拡げられ、クリスチーナの着た作業服を真似して、小さな袋に美女を押し込んでいるのだ。

この部屋を出ると、長い廊下が続き、左右に幾つかの部屋が、アパートといった様子を示している。

一番手前の部屋だけは、広い倉庫のようになって、様々の器具が人を待っていた。

先ず眼についたのは、いろんな種類の檻である。その一つは、鉄格子が嵌められて、坐るにも、寝るにも困まる寸法で造られて、格子の下端に、短い鎖が取り付けられ、先に犬の首輪が結ばれていた円球があり、ビヤ樽型があり、細長い葉巻型も、人待顔に欠伸をしていたし、木製の手と足だけが出る機械人形か、運動会で使う達磨さんに似た檻もあった。

最も変っていたのは、細長い棒状の網が両端で絞られて、二つのアングルに結び付けられているのもあった。それらの檻の台には車輪がついていて、運搬が容易に出来るようになっていた。

「一つ実験をしてみようか」

長老はそう言って、円球の蓋を開くと、ルイーが嬉しそうに飛び込んだ。球の格子は二重のパイプ管で出来ていて、螺旋を廻すと多少の伸縮が出来る。

そのため足を折り曲げた彼女は、円球一杯に拡がり、文字通り真円になってしまった。これを羅針盤と同じ設計に出来ている台に取り付けると、球は如何な方向にも、また速くも遅くも、回転することが出来た。

宝蘭は、何処からか筆とインキを持ってきて、回転する球の中に

突っ込んだ。静止さして見ると、右頬に、タツプりとした青い線が画かれている。彼女は、鼻の頭を狙うんだと言つて、また廻わし始めた。

その宝蘭を長老は呼び止め、網に巻いて、二つのアングルに取り付けた。そのアングルにはハンドルがあつて動かすと、丁度、鉛屋が鉛を捏ねるように回転し、また手拭を絞ほるのように捻ねることも出来た。それは、到底想像も出来ない、美の彫刻、空中の舞踊で、私は完全に眼の瞬たきを忘れ、心が何処に居るかをしらなかった。

幾つかの戸棚が並んでいた。その一つを開けると、鉄、皮革、木製等で作られた仮面や、猿轡の類が整列していた。中にただ一つ顔全体をくるむ陶器製の仮面が、面白く出来ていて、頭の頂点に、水を流しこむ如露口がついていた。

仔細に見ると、中世紀に欧州の宗教裁判で魔女を調べるために用いたと聞いている、蓋をする唇が縫い合わされたり、口の中に針の球が拡がるような、残酷なものは、全然見当たらなかったが、閉じると、舌だけが、如何しても飛び出す仕掛けになっているものもあった。

次の戸棚には、数十種類の鞭と、刷毛と、球と、インジエクターの類が、威儀を正して並んでいた。

このように記しては切りがない。小さいものは、針、ピンセットの類から、拘束具、首枷、手足枷、縄、紐、袋、梯子、鉄管、医療器具等、兎に角ここには多くの道具類が、或る物は汚れ、或る物はピカピカに磨がかれて、私達の手に触れられることを、待ちかまえていたのである。

私も早く使いたかった。而も、直ぐ後に廻った幾くつかの部屋は、妖美、絢爛、無情、冷酷、そのもので、若しも、此処であの悩ましい道具を自由に使えたら、と想像するだけで、私の脳細胞は、極度に攪乱されてしまったのである。

長老の手によって開かれた次の部屋は、支那風の色調で彩どられ中央に、華麗な天蓋付の寝台が聳えている。

聳えていると言いたいほど、それは堂々としており、枕を置く処には、美女を寝かして、その手と足を、結びつける絹紐が垂れ下っている。

人間の嵌め込みが出来る紫檀の机、食堂で坐った彫刻のある椅子、阿片吸飲台、不思議な形をした戸棚等が、部屋一杯に並び、床は黒く磨がかれていた。

眼を細めると、柳麗な美姫が、宦官や女婢に侍づかれながら、眠むたげに阿片を燻ゆらし、その前の床に、罪を犯かした美女が縛られている。側の机にも、天井から下っている絹紐にも、頂垂れた青白い顔が、嵌められ結ばれている。

私は、自分の画いた幻想に、ブルツと慄えた時、長老の手が肘を突いて、次の部屋へと促していた。

第三の部屋は、病院の手術室から考案をしたのか、床や壁はタイル張りで、中央に起伏のある手術台がデンと置かれ、隅に医療器具の入った戸棚と、ゴム製の手術衣が壁にかかり、他の隅には手洗いの流しが備えられ、水道の蛇口は長い護膜の管を喰わえて、澄まし込んでいた。

第四の部屋は、或るサルタン一族の方が使用しているとかで、見ることが出来なかったが、扉の前を横切るとき、気の故か、咽ぶような女の声が、幽かに響いているように思われた。

第五は、夢の国、ハレム王宮の密房で、至る処に寝椅子があつてクッションが山と積まれている。左手は、大理石で造られた階段式の浴槽が、青い液体を湛え、ほのかに湯煙りを上げていた。

第六は、何んと、数奇屋造りの日本式座敷であつた、枝折戸があり、少しばかりの底があつて離れの四畳半という仕持である。庭には本物の木が植えられて、石燈籠もあり、隅には車井戸が竹

の屋根を被って坐っていた、濡縁に囲まれた座敷は茶室風で、中央に囲炉裏が仕切られて、天井から自在鉤が垂れ、部屋の隅には衣桁があり、真赤な敷布団が積まれている。

それは、私から見ると、やはり外国人の手で創られた日本座敷という感じだが、それでも、青い畳がぐつと胸に迫って、淡い感傷に身が溶けて行くようだった。

祖父のように慈愛の満ちた眼で、じつと様子を眺めていた長老はそーっと私の手を取り、次の部屋へと案内して行った。

第七は、牢獄、拷問部屋であった。鉄輪の打ち込められたコンクリート壁に囲こまれた、暗い、陰惨な部屋の中には、使徒ペテロが上ったという逆十字架、回転する水車に似た礫台が置かれ、中央に鉄輪がついている鉄の筒が立っていた。この中は空洞で、希望ならば、人間も水も入れることが可能であった。

第八の部屋は、あとで私が最も好んだ部屋の一つだが、天井も、壁も、床も、真紅のビロードが張られ、あたかも、赤い護謨マリの中に入れられた感じで、床に大小の起伏があり、踏むと、スポンジの柔らかい弾力が、或る種の連想を呼びしめた。

そして其の後、私はこの部屋で鬼の面を被って、宝蘭とルキを追い廻わした追憶は、永久に忘れ云ることが出来ない。

第九室は八角形の鏡の間で、隅の一角は鏡が回転するようになっており、宗氏が、ルキの入った球状檻を引張って来た時には、感歎の余り声も出せなかった。

第十は機械工場の模型で、鉄管が縦横に走り、プーリーやフライス盤に似た機械が如何な加工を人間に施すのか、黙然と眠りについていた。

十一番目の部屋は浴室で、半月型の浴槽と、シャワーと、タイル張りの寝台が、明るい光の下で濡れた艶を輝やかし、一隅に三面鏡が嵌められている。

十二番目は、ピカソか、未来派の画家が、狂った頭で考えたアトリエであり、十三番目は、特殊の設計による手洗所であった。

四

これらの部屋を廻りながら、何故だか知らないけれど、私は或る淋しさに、身体がジーンと痺れる思いだった。

何にか足りないのだ。普通の人間社会の常識では、到底判断の出来得ない此の社会と知りながら、なお此の心寒むいものが忍び込んで来るとするのは、一体何んだらう。

そうだ。人が居ない。生きてるものが見えないのだ。私達と図書室の美女達を除いて、人影のまったくくない、「人外境」を、私達は異様な亢奮にかられながら、彷徨っていたのだ。

そのため、更に階段を登って、第一の部屋の扉を長老が開けた時ムツとする人息が顔を撫でて、若い人達が、散らばっている椅子に思い思いの姿で腰掛け、一人の僧侶の話に聞き入っているのを見た瞬間、私は正直の処、人心持がついた思いだった。

僧侶の居る処は、一段と高くステージになっていて、簡単な演技や実験が出来、芸術や愛の講義、そして、此処で必要な心の訓練が施されるようになっていた。僧侶の声は高く澄んでいた。

『仏語の涅槃とは、釈迦の入滅を言い現わしていますが、梵語でセックスを行う寝台を指します。これを言い代えますと、征服する者と、される者の、完全に一致した喜びこそ、極楽の床であるという訳です。』

皆様には、征服者と被征服者という、本当の意味が良くお判りでしょう。

ヨハネが聖書の中に書いた言葉にも、「愛する者よ、我等、互に相愛すべし、愛は神より出ず」とあり、その神は本当に愛していたからこそ、我が子イエスを、予言の実現を遂行する為めに、捕えて紫の衣を着せ茨の冠を冠らせて嘲弄され、唾せられ、葦で叩たか

れ当時、最大の恥辱としていた十字架につけたと書いております。

その愛は更に多くの使徒達へ、冷酷無惨といわれる、迫害の饗宴に、ヘロデ王やネロ皇帝達の手によって招待され、しかも使徒達は喜んで其の苦杯を干しています。ここに私達が日頃から求めている最高の心理が隠されているのです。

私達が毎日行っている、緊縛や美の苦痛は、それから生れる快樂のみを追っているのでは有りません。

…この苦痛を通して、涅槃ねはんや使徒達の讃歌を、身を以って体得しているのです。いや、愛する我が子を十字架につけた神の御心を、選ばれた者として、切実に、知るよすがとして、切実に、知るのであるのです。

集まる者は恍惚と聞きはれていた。ふと、長老の口が私の耳元で囁やいた。

『本当に、この人達は選ばれた者ばかりです。ほら一番前の左隅にいる女の子を御覧なさい。彼女は半年程前、或る陰惨な事件に巻き込まれて、二週間、荒らくれた人達に誘拐されていました。』

その間、如何なる目に会ったのか。やっと救い出された時には身体中に生々しい傷が



画がかれていて、いや、最も深い傷を心の中に刻まれていました。

その上、世間の心ない噂さは、彼女の弱々しい魂を更に痛めつけて、最早、狂人になるか死を選らぶかの、土壇場に追いやられ、遂に一度は死んだ人なのです。今は此処で、あの様に元気で生々と生活をしているのです。

また此の人達の中には、信者の中でも特別の方に参加することが

許されています。宝蘭やルキーも、此処の卒業生なのです。ほら緊縛の苦痛も、その肉体の苦難を通して心が浄化され、その前途にある素晴らしい光明を、此処で学んでいるのです。でも、時には、落第する者もいますからね」

私は、その落第者が如何になったか、聞き訊す前に長老は歩き出していった。

次の部屋は天井こそ高くなかったが立派な体育館で、マットや体操器具が備わり、天井からロープや吊環が垂れて、十数人の人々が裸体、又はパンツ一枚で嬉々として練習をしていた。

一団は、若い男達がマットを敷き、一人の女の子を円く縛って、空中に放り投げては受け止めているし、他の女子グループは、アクロバット式に身体を逆に反らして輪を作り、ゴロンゴゴンと三組に別れて競走をやっていた。

吊環の下には、片輪の者ばかりが集まって、環に髪の毛を縛りつけ、クルクルと身体をくねらして、一分間に何回廻られるかと、時間を計っている。

本当に此処は見ても気持ちが良く、暗い影なんか微塵もない。そして、自由に身体を曲げ、伸ばす訓練が続けられ、その努力を通して、心の歓喜が歌われているのだ。

私は、宝蘭やルキーを、檻の中に閉じ込めて来たのが悔やまれた若し、彼女達も此処に居たら、如何なプレーを見せただろう。

長老は嬉れしそうに眼を細めて、彼及び彼女達を眺めてから、ゆっくりと体育館を横切っていた。

紫紺の部屋に奇怪な寝台が並んでいる。くの字型に腰の部分が高くなっている其の寝台には、紫色の敷布がとりつけられ、その上に一団の女達が、真白な、或は焦茶色の肌を長々と延ばし、俯伏せになって寝ている。勿論、手、足、胴を紫色の絹紐でしっかりと寝台に連結させ、更に口と眼に同じ色の布が喰い込んでいた。

一隅からレコードが流れてきた。意外にも、ベルリオーズの「幻想交響曲、第五楽章」であった。各寝台の前に立った他の女達は、右手に持った鞭で、電蓄から響く、悪魔の会議に合わせてコンタクトを振り、眼を閉じると、その純い音が力強いバスとなって、音楽の調子を更に高めている。

「これは、必ずやる日課の一つで、身体を、より強く、より艶を出すためにやっています。しかも、これで毎日やっていると、十人が十人、この時間を待ち遠しがりません。でも、音楽に雑音が入っては折角の芸術を毀しますので口に詰物をし、また打つ者が判ると、兎角、煩さい種子が出来易いので、眼を塞ぐことにしています。如何ですか。一つやって見ませんか」

こう長老は言って、黄色い髪の毛をした脇の少女から鞭を取り上げて、私に差し出した。

私は、鞭の先端がドラムに当たり、ブルンと細く震動する快感が再び、鞭から手の中に戻ってくるのを感じた。

釣の醍醐味。私は、つい弱く、或は強く叩き、赤い線で書かれる文字の中に、ベルリオーズの画がいた。下品で、野卑で、グロテスクな、恋人の舞踊詩に喜ぶ悪魔の躁宴が見える気がした。

長老は先を促す。次は砂場だった。幼稚園の片隅にあるのと、そっくりで、ブランコ・鉄棒、ジャンゲルと呼ばれる、鉄のパイプで組まれた積木があった。これらで鍛えられる訓練は如何なるものだろう。想像は出来るけれど人影がなかった。

ただ、どういうためか判らないけれど、十数本の碍子管が、砂にブスッと突き刺まっている。長老は無言で砂場を横切り、幻想にうつとりとしていた私も、慌わてて其の後に続いた。

不意に、私は息が詰まり足が竦くんでしまった。足の下が柔らかい。蛸が居る。私は蛸を踏んづけたのだ。長老が、クスクスと笑っている。

『最初は袋に入れ、口にガラス管を当てて埋めるんです。段々馴れると剥き出しにして、時間も長くします。時々踏んでやると、とても喜びますよ』

この時、私は理屈なしに、ガタガタと身体が慄えて止まらなくなってきた。

『おお。ミスター西小路。寒くなられたのですか。では、一と風呂浴びましょう』

美しい、エジプトの宮殿を思わすような脱衣場には、六人の輝やかしい女達が戯れまわっている。

私達が入ると、彼女達は喚声を挙げて殺到し、口々に何にかを喋べるが、私には、何にを言っているのか意味が取れない。

大体、マレー語には、上流社会と普通社会で言葉が違っていたが彼女達の言葉は、上流でも最も古い時代に属する言葉なのだろう。

長老は、笑いながらも叱りつけ、二人づつ三組に分けた。私の掛りは、美しかったが非常に活潑で、命命を受けるや、喜び勇んで私のまわりに集ってきた。

二人はジャンケンをしなが、勝った方が私の服を一つ一つ脱してゆく。それは、私自身が其の渦中に居りながら、実に、楽しい遊技を見ているように微突ましい。しかし、笑ってばかりは居られなかった。と云うのは、今までの異常な経験は、亢奮の余り、つい最後の下着に汚点を印していたからだ。

私は、急いでそれを脱ごうとしたが、彼女達が手を押さえて離さない。真赤になった私の顔を取り巻いて、高い低い、笑声の渦が起きる。

その中で、最後のジャンケンが始められた。一度、二度、三度。そして、勝った方が敬々しく脱がしてくれる。

敗けた方は此処をせんと、声を高めて口惜しが。と矢庭に、勝った女の子は、敗けた子に躍り掛けて、今、手にしたばかりの下

布を口の中に押し込んだ。

『アッ』と言う間もなかった。他の者もそれを見た時、ワツと寄つて来て、可愛想に手は手、口は口と縛り上げ、浮々とはしやいでいる。

勝者は、おもむろに、敗者の後に廻って腰に手をやり、騎馬戦のような姿勢になって私に乘れと言う。

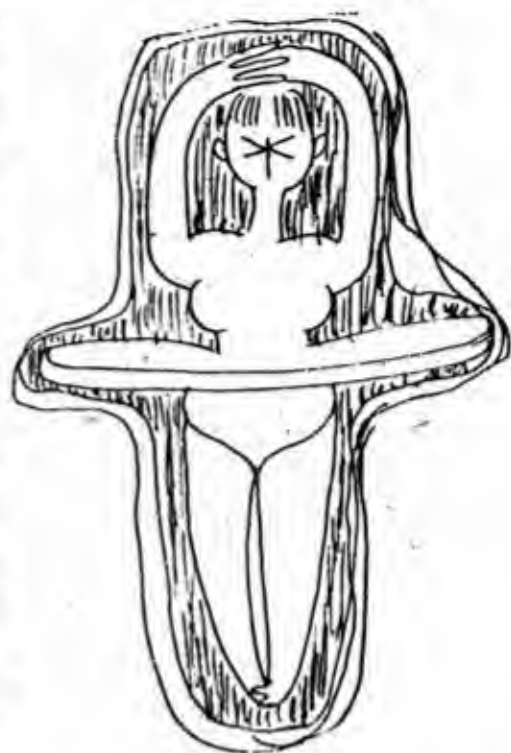
こうして、私は、ピチピチと跳ねかえる裸馬に打ち乗り、意気揚々と、湯気の立っている湖へ突進したのである。

長老は、湯舟の中で私にこう言った。

『これが、私達カラーシヤ教団に、優秀な信者が集る教典です。きつと。ミスター西小路も、教典の信奉者になりますよ』と。

私はこれから自分の経験した事柄をもっと詳細に報告する義務があるように思う。それに、この稀少な体験記を自分一人の胸の中に貯っておくのを勿体ないようにも思う。只、私が過去の経験を楽しく追憶するの余り、筆を走らせすぎると、これを読まれる読者の方々から出鱈目の空想談かと疑われるのを恐れる。以上書いただけでも、自分としては大分筆を押さえて書いたつもりである。ルキーや宝蘭とのことを書けば、もっともっと日本では絶対に考えられないような現地民特有の風習からくる面白い話もあるのだが、何んだか惚気ているように思われそうで、そういった個所は極力省いてきたつもりである。

それから「カラーシヤ教」のことについても、色々書きたい事柄が多く、先月号と本月号の二回に書いた分だけでは、本当は、その序の口といった程度のところであり、且つ、日本の敗戦によって日本軍組織の壊滅、現地民の独立運動、和蘭軍の進駐、といった混乱状態に於ける日本軍情報将校としての私の運命と、潜行、奇遇、といったスリルに富んだ物語もあるのだが、それらは又、次の機会に筆を新にして投稿したいと思っている。



マゾヒズムへのいざない

(第四回)

黒田史朗

「源氏物語」のような大作品は、世界中何処にだって、そうざらにあるものではない。その興味のおもむくところ、光源氏の女から女への平安朝特有な、あの如何にもなまめいた漁色の風情を絵巻物に見る如く次から次へと追っていくといったようなのも一つの読み方かもしれないが……しかし私の場合、いささかおもむきを異にする。私は映画の場合にだってそうだが、常にあとあとまで尾をひくように内部にのこるもの、それははなやかに脚光を浴せられた主役についてではなく、又主人公についてでもない。ちよつとした通りすがりの人であったり、恋にありつけず直ぐにすっこんじまう第三流の傍役の人達である。安易な同情など微塵も持ち合わせていないつもりである。しかし、確かにこうした傍流の人達の果す役割は大きいのである。「源氏物語」の場合にだってそのことは、はっきりと

言い得る。主役たる源氏そのものには何等の光彩も魅力も感じ得ない私にとって、目まぐるしいほどの多彩な登場人物の中に、ほんの片隅に忘れられていく埋れた人達の中に、むしろ生々とした本物の血が通った人物と、そしてそれにまつわるエピソードを感じとることが出来るのである。陸常宮の息女、末摘花の君もその一人である。彼女は赤鼻で美しくはない。父宮が存世中は華であった。源氏からはほんのささいな情けをかけられた頃はまだ幸であった。しかしきりぎりように自信のない彼女はすべてにわたって引込思案であり、その消極性と、父君の死去による家運の没落とがやがて彼女の不幸を招く。家は荒れ果て召使も一人去り二人去る。その時叔母が彼女を引きとろうと相談を持ちかけてくる。問題は、このときの叔母の心境である。叔母の境遇はまあまず二流役人の妻といったところで、

その為は今迄ずい分馬鹿にされたというひがみが彼女の心に根強く残っている。それが家運は没落、源氏からは見はなされ、こうした末摘花の悲境に接するや、時節到来とばかり今度は彼女を笑ひ者にしようとはかる。叔母には二人の娘がいて、叔母は末摘花の君をこの娘達の召使にと思ふのである。言葉こそやさしくはあったが、叔母はしつこく末摘花につきまとう。落ちぶれてしまった赤鼻奴、折角娘の召使にして食わしてやろうというのに、どうしてこんなに言うことをきかないのか。叔母は口には出さぬが腹の中、という場面である。私はいたくマゾヒスティックな気持ちを刺戟されて本を伏せた。

このときの叔母の気持の動きは私にとって実に有難いことに思われたのである。相手に対しての復讐心を満足させるのに、昔もそうだし現在もそうだが世の多くの人達はずい分智

慧がないように思われる。直ぐに殺すか、又は流刑とか牢獄につなぐとか相場は大抵このようにきまつたものである。現在ではそれならず、相手より高い地位や財力を築くことに専心するか、又はどんなに近い血筋にあたる親類縁者であつたとしても、ぴったりとその交りを絶つことによつてすべて事足りりとする。ところがである。末摘花の叔母は彼女を自分の娘達の召使にと望むのである。事平凡にみえて、これは又実に見事な考えだと思ふのである。娘達が、若しそのような場合、この年長の従姉妹にあたる召使にどのような反応を示しただろうか、思うだに妖しいときめきを覚ゆるのである。マゾヒズムとはまさしくこのときの、このようなときめきをこそ言うのではないだろうか。エロティシズムとストリップなどの露出主義とは相似て実は全く相容れないものであるように、鞭打などによるマゾヒスティクな体裁をつくるつたプレイ主義とマゾヒズムそのものとは相似型異質のものであると私は言いたい。末摘花とその叔母との一件は、源氏物語全五十四帖の中の十五帖目「蓬生」の中のほんの些細なエピソードにしかすぎない。しかしそれでも十二分に私のマゾヒズムは刺戟され得たのである。このことについてはもう一言敷衍して述べてみよう。世の正常なる男達と同様に、その欲情のはけ口を最も安易に果そうと赤線

を訪れるマゾヒストの数は少くない。彼等は極端にえり好みをする。次から次へとたんねんに見まわつた末、一人の女の前に立ち止つたとする。交渉成立、女は割合に素直に男の望み通りのことをしてやつたとする。足の裏をなめさせてもらつたり、顔の上に跨つてももらつたり、思う存分の平手打を浴せてもらつたり、もう無我夢中であるに違いないその男の、その無我夢中な状態を仔細に眺めてみよう。確かに夢中の状態にあるには違いないとしても、それは決して本人の本当に望むところの恍惚の状態ではあるまい。それどころかその夢中さの大部分を占めるものは、払つたものに対しての報酬を望む男の、つまり、損しないようにあれもこれもとあせりを見せるいわゆる普通の男達の買春意識と相等しい。一つの生理的ヴィジネスであり、単なるプレイである。これでマゾヒストは満足出来るか決して満足は得られないだろう。マゾヒズムとはそのように異性のつばきをなめたり、顔をふんづけてもらつたり、といった行為そのものを云うのではないからだ。時間が過ぎ帰り仕度をし始めたとき、女が何気なしに、それ取つてよ、とあごをしやくって脱ぎ捨ててあるスカートを指し示すとする。その瞬間、始めて男は異様な興奮を覚える。プレイ中に感じた夢中さとは異質のこのような興奮こそまさしく真のマゾヒストのものであらねばな

らぬ。マゾヒズムはこのように観念上の産物なのだ。プレイをやろう、ということとで成立するものでは決してない。観念の限界をふみこえ、現象面に滲み出てきてそこに一つの形あるポーズを生み出すとき、マゾヒズムははじめて姿をあらわすのである。それをただ現象面のポーズだけにマゾヒズムを見出し、それを求めようとするのは大きな認識不足ではなからうか。末摘花の君が、叔母の意志通りその娘達の召使になり、ほんの些細なことにもとがめをこうむり、庭の立木かなにかに縛りつけられて折檻され、美しい女主人達の草履の裏を舐めさせられるような毎日が続くようになつたとしたら、源氏物語の魅力はおしまいである。そのような源氏物語に私はマゾを刺戟され得ない。たんなる張り子細工のこしらえ物の物語の中では観念としてのマゾはもう消滅するしかない。しかし、そうかといつて今迄言つてきたことがらは決して私を空想の中でだけそれを楽しむ引込思案なマゾヒスト（つまりは平凡なロマンチストと変りなし）には了らせない。私はドシドシ巷に進出するのである。私は最も実践的なマゾヒストを以て自任する。ある特定の人達が、特定の時間特定の場所ですれしきプレイを行うとして、その是非を言うのでは決してないが、そういう形の上での了解によるプレイでは果せない。そのようなものの中にマゾは存在す

るということを言わないのである。お座敷遊戯とマゾは無縁なものである。言葉による了解が成り立つところのプレイは、お座敷の中を重い女の全体重を支えながら、四ツんばいになってハイ、ドウ、ハイ、ドウ、と幾えにまわったところで、そこで感ずるものは、極言すれば女は重い、ということと、マゾヒストである己についての悲哀を味う、この二つだけではなからうか。せめて愉快そうにでもしたり、言ったりしなければやりばがないので、意識してそのようにつとめているだけではなからうか。このような場合、おほむね女

は男の立場を、頭の中だけでの大ざっぱな掴み方をする丈で、皮膚に対応するが如き理解はしないものである。男は一人芝居でごまかしているに過ぎない。私にはこのような光景はおおよそナンセンスか、グロにしか受取れない。谷崎潤一郎の「闇間」という小説に出てくるマゾヒストは立派に一つの典型である。お座敷の中で芸者達からサンザからかわれおもちやにされるが、それはプレイとは違う。プレイにおける女性からのどんな激しい鞭打よりもなんと心地よきものか。試しに破れシャツ、バサバサ髪、はだしで扱帯という

いでたちで外を歩いてみよう。行きかうレディ達に対してのくすぐったいような面映ゆいような妙な劣等意識を完全に抑えきけることは出来まい。こうした大きな可能性を待望する意識こそマゾヒストのものであり、こうした意識の裏付けの中から芽生え生れでるものこそ、まさにマゾヒズムそのものではなからうか。(未完)

△註▽ 筆者からのお申出により本名、天野哲夫を改めて本月号より筆名、黒田史朗と致しました。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十二号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (31年4月号) 二百円 (送16)

復刊第4号 (31年5月号) 二百円 (送8)
復刊第5号 (31年6月号) 二百円 (送8)
復刊第6号 (31年7月号) △売切▽
復刊第7号 (31年8月号) △売切▽
復刊第8号 (31年9月号) 二百円 (送8)
復刊第9号 (31年10月号) 二百円 (送8)
復刊第10号 (31年12月号) 二百円 (送8)
復刊第11号 (32年1月号) 二百円 (送8)
復刊第12号 (32年2月号) 二百円 (送8)
復刊第13号 (32年3月号) 二百円 (送8)
復刊第14号 (32年4月号) 二百円 (送8)
復刊第15号 (32年6月号) 二百円 (送8)
復刊第16号 (32年7月号) 二百円 (送8)
復刊第17号 (32年8月号) 二百円 (送8)
復刊第18号 (32年9月号) 二百円 (送8)
復刊第19号 (32年10月号) 二百円 (送8)

復刊第20号 (32年11月号) 二百円 (送8)
復刊第21号 (32年12月号) 二百円 (送8)

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は三冊以上まとめてお申込の方には送料は当方にて負担いたします。六冊以上一揃にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は殆ど売切れてしまいましたが、只今、昭和30年3月特大号より同年5月特大号まで、少し宛残っておりますからお申込下さい。各冊一部百四十円 (送料十六円) です。この分は三冊以上も必ず送料を御加算願います。

「ボクの責め方」続稿

マニア通信

宝塚二三夫

第一報

昭和卅二年十月八日、ソ連人工衛星のニュースを片耳にしながら午後八時、車を南に走らしてフト新東宝封切館の前まで来て久しぶりで、お上りさん気分で見上げ板を見上げる、と、何と、今時珍しい吊責め（らしい）が描いてあるのに、ハットする。

本日封切『天下の鬼夜叉姫』とある。

先ずはマニアの面目上、飛び込もうとしたが、時計を見ると既に九時すぎであるので、とにかく明日のことにして、帰る道すがら思う――。

ボクがはからざる一寸した病気になるってか

ら、暫くはマニア極道からいささか離れてい
る間に、OTVのテレビの洋映画時間に「人
を縛れるのは愛情だけヨ」

というセリフを見聞いたのがキツカケで、
近頃、17、21の二台のテレビを動員して
みると、案外「縛り」が沢山見られる事を知
ったので、又々モクモクとマニア道楽と極道
が頭をもち上げてきた。そこへもってきてこ
こ一年来育成した劇団も漸く軌道に乗る。軌
道に乗ると云う事は、劇そのものではなく最
も安全且つ常軌を逸しない程度なマニア用
という範囲の軌道（下手ながらフオート一枚
同封する）に乗ってきたのと相兼ねて、病上
りで乱筆ではあるが、再びペンを持つ気にな

ったのである。

ボクの事であるから例によりマニアという
名にかくれたテレカクシ論説や狂人小説や、
疑似実話、告白は何よりキライである。近頃
東京からマニア向らしい雑誌が出ていたとい
うので、もののついでに三、四の本屋で調査
（ボクは生来何んでも調査好きらしい）をし
たところ、全く問題でなく、僅かに変態らし
いオッサンが生意気盛りの丁稚さん位がチヨ
クチヨク盗み読みする程度とわかって、全く
ナンセンスである。そこで、やはりマニア向
はKK誌であると、断ず！

さてKK誌も相変らずマコトシヤカなホン
トウらしいウソの記事で一杯であるのは、ボ
クにはとても耐らぬ。尤もそれでよい、それ
で結構、マニア・マスターベーションが出来
る――というのなら何をか云わんやである。

然し、マニアというなれば、これからボクの
ベンが、いつまで続くかボク自身わからぬが
先は読んでマニア四十年のボクの打明け話か
ケイケン談を読み聞いて、お互いに因業なマ
ニア病を楽しもうではないか。

余りムツカシイ理屈は抜いて、大学の先生
であろうと何であろうと、マニアはマニアで
ある。マニアである限り公園や公会堂で責や
縛りの礼讃演説は出来ぬのが、この浮世であ
るから、そんな仁は次の人工衛星にでも乗せ
て貰うことである。



さて、昨夜の心残りである映画、十月九日南の劇場へ——

新東宝「天下の鬼夜叉姫」期待した以上の吊責であった。宇治みさ子でなくて若杉嘉津子の吊りである。先般の大映のカラーピスタ一の長谷川の捕物、これの縛り、巫女姿での縛り、予告スチールには後手もハッキリしたのがあったのは後日、京の京極で小雨の中で見て残念——と思ったものである。

さて近頃、新東宝には中々よきマニア向のものもある。昔の極東、大都映画を思わす楽しさである。来る廿二日から、何かそれらしい妖鬼城の何とかを封切るらしい。「スーパージヤイアント」にも縛りと吊り、昨夜の最終篇にも吊りがあるが、女は女でも子供で

は一寸お色気がないのと奇想天外のものでは、それでも、昨夜の若杉嘉津子の吊りの長さで動き——には、やはり一夜中、一種のマニア興奮状態にあった事を白状しておく。

正直なところ、ボクのマニア道楽も、ここ二、三年来、いささか食傷気味であった。敗戦、自由、なるほど、マニアには天国来でもあった。然し、一時あきあきする程のマニア天国も近頃漸くキュークツになって来た。ボクに云わすれば将にシーズン到来である。リミットされた中で四肢の伸長こそホントの愉快なのである。そうと解ったら、サア皆さん、もっとマニア道を拓きましよう。実際、何十年間、ヒマとコンとカネで何事でもマニアに喰いついてものを考え行動して来たボク——極言すればマニア満足のために常識生活と人格を傷けぬ範囲で自由自在に振舞ってきただボクであるから、もうボツボツ引退してもよからうと思うのであるが、この哀れむべきマニアと云える異常性格は中々、そんな事で引込む事は出来ませんでした。

ゴテゴテ理屈を並べ立てて、何とかマニアと雖も人格者である、とか立派な社会人もあるとか、いう浅ましい根性は自分ながらイヤになって来たのは実際問題であって、そんな気はもう今となつては無である。

では、そうしたマニアが、そうした年になつた場合、どういうものである——か？ と

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるブランクは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

いう事と、再来したボクのペンの走り——若い？ マニア、未完成マニアの方に識ってもらえたら、この一文も、目的達成であるらしい。

第二報

ボクが再びマニアペンを持つようになった原因は？

一、マスコミの隆昌でテレビにまで縛りが出るようになってきた事

二、責、縛り、マニア向のものが一般に流行とまではゆかなくとも、ボク流に云わすと安定してきた事、事実二三年前は面白い——とはいえ一寸ひどかった。永い目で見てボクなどはハラハラして見ていた。何にしる相手が

常人ではないのであるから。

三、グラマーとか何とかで若い女のヌードが普遍化してきた事

四、ボクの好みであるショート・パラシユー・スカートが一般化して来て、一寸道へ出ても好みの脚が随所に見られるようになった有難さ。といって後説でも書くが、大して美味そうな脚は少いが——。いずれ見料は無料なのだから結構結構。

昨夜(十月十日)九時十分、再び若杉嘉津子の長い長いスバラシイ吊りと表情を見てきての帰途、カブキ座横で十七か八か、スゴク肉付よくノビノビと横張りのした娘さんの腓脛にはついつい坂町までついて歩いたものである。脚は至るところニヨキニヨキ出して歩いてはいるが、美しく中々の良きものは、やはり少ない。

五、秋のタイト・シーズンは一層にボクにベンを走らす一因でもある。

現在手にしている。但し現在といっても、文子はステに二年目だし、かよ子だけが、この秋口九月一日入手の新品であるが、この娘味そのものよりもアベックで仲秋名月の下のそぞろ歩きの中でのマニア対談がスゴク面白いので手離せぬわけ、しかし喫茶店や食堂の中で、給仕女の前でも大きな声で

「何かすると、すぐ括られるから——」と平気な口調で口に出すのでボクの方がヒ

ヤヒヤするわけ、近頃ではボクの方でも、それに慣れたので上手に操作して楽しんでいるわけである。

第三報

最近の映画の責について

十月九日(初日の翌日)夜、新東宝「天下の鬼夜叉姫」瀬戸口寅雄原作、毛利樹監督、明智十三郎、宇治みさ子共演。スパイ女の若杉嘉津子の晴雨好みの吊りの長いシーン(全く十分満足させた)。近來稀な良きものであった。久しぶりで楽しんだ上、これは私の一座の二三の娘に、どうしてもささねばならんと思つた程のものである。

その点につき思う事は、先般の大映のシネスコ・ピスタ・テクニカラーの「女狐屋敷」であるが、色付大型縛り——なるほど条件は揃っているのである。緋の袴といい、素足といい、ところが見てみると、緋の色はイヤに野暮くさく、女優の手はイヤに白々しく、白粉をコッテリと塗りたくった素足の裏は、肌色の色彩も下手でウス赤く見えるし、これはこれは、昨夜の白黒映画の方がうんと色気があつてマニアにはズイキのものであつた。

そして同じ白黒、同じ新東宝のこの夏の妖怪もの「何とか峠の何とやら」で嵐寛氏の逆吊りといい、女優氏(失名)の立縛りで素足の足首までのギリギリ巻で蛇のようにくねく

ねするあたり、全く大型テクニカラーよりも余程美しく美しく悩ましかった。

第四報

映画の縛り場面速報

先便、新東宝「天下の鬼夜叉姫」で若杉嘉津子の吊りと責場の長いのが楽しいと書いたが、絵看板に描く限りどうもスチールにあるとにらんだ。昨日(十月十二日)の土曜、第三回目を見にゆく。やはりあつたあつた見事な吊りのスチールである。

それも映画では写らない素足の爪先までチヤント出ている。

そして日活の「肉体の悪夢」これも東京の新聞で問題になった筑波久子のシュミーズ一枚での縛り——その見事なスチール、腕への麻縄の喰い込み具合といいKKの口絵フオートにしても少しも恥しくないものである。水島道太郎との共演である。(未封切)

久しぶりで温泉劇場へ清水田鶴子の復帰ぶりを見にゆく。三四年前、道頓堀劇場でシキリト裸で縛られ遂には逆さ吊りまでさしていた朝日市郎君は今どこでどうしているか?と尋ねようかと思つたが、ボクが現在そうした劇団を持っている場合を考えてイササカ照れ気味でアッサリ引上げた。

(十月十三日、日曜日午後)

【お灸通信】

灸折檻と妻

伊吹寅太郎

私は東京の岩瀬祥一氏と同じくお灸マニアの一人です。私が現在のようなお灸愛好の氣持になった初めは、少年の頃、ある秋の日、私の家の裏にあたる長屋へ母の使いで風呂敷包を届けに行った時のことです。その家の前まで来ると、七ツになるヨシ子という少女が大声で泣いているのです。なんだろう、と思つて戸口で部屋の中を見ると、ズロース一枚にされたヨシ子が小母さんから馬乗りになられて、お灸をすえられているところでした。

「ア、チチチ、お母さん、勘忍して……」

と泣きながら詫びているヨシ子の姿に、私は思わず身内の熱くなるのを覚えました。

其の後、母や姉が病氣の治療にお灸をすえているのを時々見ました。殊に姉は身体が弱くて、胃腸の灸をいつも双肌になった背中へ母にすえて貰っていました。その時、熱さに唇を噛む姉の姿は、今でも忘れることが出来ません。今では若い女性の背中にある古い灸痕を見ても、たまらない氣持に襲われます。

私達夫婦はどこにでも例のある極く平凡な

生活で結婚して早くも二年近くになります。

妻の静子は、女にしては少し大柄ですが目鼻立ちや口元は小さく、丸顔で下膨れした容貌で美人というほどではありませんが十人並の器量です。年は二十五才になります。私は余り大きくないある製茶会社の一サラリーマンです。或る日曜日の朝、早くから妻の静子は実家へ出かけました。夕食前になって、やつと帰ってきた妻は、

「貴方、実は妾はこの頃少し胃腸をこわしているの、今日、里の母に背中へお灸を据えて貰つて来たのよ、熱かつたけれど据えたあとは舐が締つて良い氣持でしたわ。」

私はお灸と聞いて、むらむらと湧く嗜虐心を顔には出しませんが、舐の中で炎と燃え上らせました。知らぬ素振り、「静子、一寸背中を見せてみ」というと、「貴方、妾恥しいワ」という。実は私は二ケ年も夫婦生活をして、一度も妻の裸を見たことがないので、心の中では、今夜こそ自分の悪趣味を果してやろうと、奥の部屋へ逃げて行く静子の後から部屋へ這入って、「おい静子」と帯に手をかけると、八の字にした眉の下から上眼使いに眺め乍ら

「貴方やめてよ、厭よ。」

「今夜は僕がお灸療治をしてやる、早く着物を脱ぐんだ。」

静子は起き上り、又横目で見るが、これが

静子のくせだ。しぶしぶ紙袋の中から艾を出して線香に火をつけ、私の前に後向きになり双肌ぬいで座る。私は始めて妻の素肌を見るが、白いぼつとりとした背肌二ケ所、灸の痕跡がある。思わず喜悅感に震えながら、艾を大豆程に丸めつつ灸跡に載せ、線香の火を艾につける。灰色の煙が立ち艾が燃えてくると、静子は膝まづき背中をくの字に曲げて熱さに耐える姿は実に絶景、口ではいいあらわせない。アチ……アツツと身悶え、背中の熱さに波打ちながら「貴方一寸待って」と手拭を口に噛んで坐り直す。艾を少し大きくして二ケ所に一度に艾をのせて火をつけると、アチ……アチ……と悶え苦しむ。

「もう止めてよ、まるでお仕置されてるみたい」泣声で呼ぶが

「だめだめ、もう少し据えてやるよ。」

線香を持つ私の指はかすかに震え乍ら、更に続けて据える。余りの灸責めに少しは可哀そうになつてきたが、背肌が火照つて赤い線を引き、全く絶頂の悦である、静子は全身から脂汗を流し荒い呼吸をしながら

「貴方はひどい方よ。」

「静子、熱かつた。お前が我儘をするとお仕置にこれから時々据えるよ。」

目に涙を浮かべながら着物を着る静子を煙草を喫いながら愉快な氣持で眺めたのでした。

映画女優緊縛に関する一考察

— 誰がまだか？ —

河村 操

第一章

戦後十二年を中心に、戦争中からこちらスクリーンに登場して、大なり小なり観客の注目を引いたと思われる映画女優名を、老若、人氣に関らず一応挙げたつもりである。

(一) 全女優を今日只今の水準（私の多少の主観にもとづく）によりA、B、Cの三クラスに分けた。大体の基準は次の通りだが、厳密ではない。

Aクラスは、今日並に明日への女優群

Bクラスは、傍系もしくはAに続く女優群、

Cクラスは、大体古い人、又は止めている人。

(二) 各クラスの内訳は

Aクラス 百十二人

Bクラス 五十二人

Cクラス 三十八人

(三) 以上の内、縄、手錠等で縛られたものを数えてみると

A 百十二人の内、八十三人、七十五%
B 五十二人の内、三十四人、六十五%
C 三十八人の内、三十二人、八十%
計 二百二人の内、百四十九人、七十三%
となる。

(四) 一応の結論（静態分析）

女優たるものは、十人のうち七人までは縛られるものである。

(五) 更に分析すると（動態分析）

Cクラスのスター達は、かつてのトップスターであり、女優としての息の長い人達である。そのクラスの縛られる率は八十%

Aクラスの今日から明日にかけての女優達、即ちまだ女優生活の短い人々の率は七十%、Bクラスの傍系を含めた総計は七十%

以上から考えられることは、女優たる彼女達がトップスターであればあるほど、また女優生活の息が長ければ長いほど縛られる率は高くなる。——女優であるかぎり、殆んど全部縛られるんだといっ

てよいだろう。これが第二の結論

(イ) 誰がまだ縛られていないか——即ちAクラス、二十九人、Bクラス、十八人、Cクラス、六人がそうである。

第二章

私は次の二つのことをやってみようと思う。

(一) 縛られた女優の整理

ロ、未だ縛られていない女優の縛られることに対する考察

(二) 先ず①から整理するための項目をあげる。

a、衣裳——何を着て縛られていたか、着物といっても色々ある

町娘、お姫様、町家内儀、武家妻、遊女、官女、巫女の服装。囚衣男装若衆、やくざ男装等々をあげられるのだが、衣裳で特に注目するのは帯である。着物の帯は背中に山のように盛り上っているから後手に縛るには厄介至極なものである。と云うことは、こんな姿の時には後手と云っても、たいがい形だけの形式縛りのことが多いと云うことになる。反面、帯をしめ乍ら、その太鼓の上に小手を吊り上げるように縛るならば、その緊縛感は素晴らしいと云うことになる。——よき例は「追撃三十騎」の喜多川千鶴（帯の上、高手小手。）帯のない場合は、以上の様な制約を離れて緊縛感が一入激しい。よき例は「黄金の伏魔殿」の長谷川裕見子（囚衣、後手）

洋装——これは前記の帯のない場合に属する。更には二つの腕が直接に触れるという可能性を持っている支那服もこれに属する。又なんにも衣裳がないというのもある。（前田通子のような場合）

b、縛られ道具——縄は麻縄、荒縄、しごき、下緒等がある。そして太さは太目、中、細目等がある。「私は麻縄の味は知っているが、荒縄はまだ知らない」等と、嵯峨三智子が深夜つぶやいているかも知れないから、分類するのである。手錠は現代のものが殆んどで、洋画の時代ものに出るような手錠は日本には余りないようだ。あの冷い金属的感覚は絶望的であるし縄にまさる拘束力がある。

c、縛られ方——縛の場合は本縄、後手、手首だけ後手、前手、手足等。手錠の場合は両手、前手錠。両手、後手錠。片手錠等。

d、縛られた時の状態——○吊り○座して後手○歩く後手○柱抗椅子縛りつけ○就縛（縄、手錠をかけられる）○囚人連行（囚人護送）○引きまわし（馬上）○さらし○火あぶり○はりつけ、

この決定的な局面における、みた目の印象から問題になるのは、緊縛度の強弱ということであろう。どんなつまらぬ女優でも、どんな衣裳どんな縄を使っても、ヒシヒシと見る方の胸に響く程の縄のかけ方があったり、凄じい凌辱、或は責めがあったら満足だ。反対に囚衣の上に本縄をかけても、生ぬるい緊縛度では気がぬける。これは間違いない処。そこでこの緊縛度について主観的判定でA・B・Cをきめる必要がある。処でもう一つ、純粹に私の好みがある。それは緊縛度がC級でもよいが、それを見れば満足するという状況である。それは囚人連行、又は護送という場面である。例えば「酔いどれ八万騎」の藤間紫、「遊侠一代」の野上千鶴子、「緋鹿子異変」の山根寿子、或は「兄とその妹」の筑紫あけみ（手錠）、「裁かれる十代」の川上康子（同）。映画ではないが、コマ劇場の「風雪島原戦記」の幕あきシーン、大勢の若い娘がギリシタンとして縄をかけられ、役人に追い立てられる処、等々である。この場合、囚人として縄をかけられた彼女たちは、自らその姿を肯定し、締めてその境遇を甘受した時、おのずからその姿は首をうなだれ、無抵抗に縛られた役人に奴隷的従属をしている。ここに心理的な満足がある。この場合、彼女たちは歩いていなければいけない。自分の足で命ぜられる処まで歩いて行くという姿が欲しい。たいがい捕えられた時は歩かされるようである。この歩くことの必要性は、例えば「肌色の月」で淡路恵子が殺人犯として、二の腕もあらわな両手に手錠をはめられた。処が彼女は一歩も動き出すことなくF・Oにはってしまった。これでは、この場面の効果は半減以下である。他人

の命ずる処へ行くことによって、捕えられた人間の服従を示し得るのである。更に善人、悪人という分類も考えられよう。女優の縛られる場合をこの基準で分けてみると、殆んど善人として縛られ悪人に悩まされる。そしてたいてい助かるというのが圧倒的であろう。悪人として懲罰される縛られ方は、脇役的女優に多いだろうし、この場合は、その最後の姿を余りくわしく写さないのが普通である。私が先に云った囚人連行と云う場面の見られるのは、この分類から云うと、根は善人であるが止むなき事情で悪人の立場にたたされ、遂に就縛に終ると云う悲劇的人物ということになる。処で、こう云う芝居のあり方は近頃は少い。たいがい何かこじつけて、こういう悲劇的人物は救われてしまうことになっている。例えば、新東宝の「天下の鬼夜叉姫」では、惨々悪いことをした豊臣の残党の首領宇治みさ子のお姫様が、事破れて最後に部下全部が殺されたが、自分だけ助かるという馬鹿げたことになっている。昔の映画は、この点が大変よかった。かつての日活の「神変麝香猫」と云う映画では、同じく豊臣残党の首領、市川春代は事破れ就縛し秘かに募る幕府方夢想の小天狗の見送る中を縄目の姿で引き立てられて行った。或は「涙の捕縄」と云う同じく日活の映画で、大倉千代子の娘が、放火の罪で父親である目明し、月形竜之介に因果をさとされ、遂に涙ながらにヒシヒシと捕縄をかけられ、自宅から引き立てられて行く。これなど、娘を奉行所に突き出すにした処で自首の形にしてかかるとか、付添って一緒に行つてやるとかすればよいものを、高手小手に家の中で縄をかけて、夜中とはいえ他人の目に縄つきの姿をさらさすのであるから、いささか別の意味で不合理とでもいうのか。ともあれ、近代的な我々にとっては、すべて芝居はこうあって欲しいものである。

縛られた女は、それによって自分の感情に一つのクッションを入れなければならない。自分は縛られているという屈辱を一呼吸ごと

に繰り返し、絶えず感情をそこへ反射すると云うこと、これがないと我々は満足しない。縛られても手錠をはめられても、なんだこんなものと極めて意欲的にそれを持ち越え、意に介しないような態度で反抗したり、あばれたりされると全くやりきれない。例えば女囚の久我美子のようにである（勿論、映画全体からみて彼女の演技がこうあるべきだということとは別問題）或は悟りきった面をされるのも困る。善人役のヒロインが縛られている時はたいていは助かると云うことの外に、上記のような心理的な面での物足りなさが多い。その点「天下の鬼夜叉姫」での若杉嘉津子の吊りは、この姿自体、彼女も苦しかったのかも知れぬが、縛られたり吊されているということへの自覚が横溢していて、近來にない好演技であった。更に囚人連行に似た馬上引廻しがある。この場合、ヒロインがこんな目に会うと、たいがい悪人に苦しめられて刑場に送られるのだが、大体、刑がはじまる頃に救いがくることになっている。だから如何に囚衣、本縄であっても、当人は案外平気な顔をしているのが多いので興が醒める。これ又、救いと同時にヒロインの心理的不徹底が原因である。「素浪人忠弥」の三浦光子は、この点よくなければならぬのだが、副次的人物なので当人に熱がない。

e、手首の緊縛——映画にはこれがある。胸にだけ縄を巻いているが手首は縛らず、縄を握っているというのが多い。事実、芝居の約束ごとで縛られた時の縄の握り方はこうだと、ある女の人に教えて貰ったこともある。映画女優緊縛にウツツをぬかす私のような者の馬鹿馬鹿しさは、正にこの一点にある。スクリーンの中に飛び込んで、縛つてない手首を縛り合わせていく訳にはいかない。何よりもスクリーンで見るのは幻で、その実態は即ち撮影は、一ヶ月位も前に過ぎ去っているのである。

だがしかし、その女優にとって、即ち山本富士子にとって、両手を後に廻したと、胸の上に縄をかけられたこと、縛られた姿を演

ずるのだと観念したことは間違いない。心理的には、そして演技に表わしてまでも山本富士子は縛られたのである。——と、これが我々のせめてのなぐさめである。

ともあれ、こんな気休めをいふ乍らも、しかし実際にはスクリーンの緊縛場面が出ると手首が縛ってあるのかと、目を皿のようにして見るのが実態だ。そこで手首の緊縛をハッキリ見受けられた女優と、そうでない人を分類して見たという次第である。この点、手錠はハッキリしている。勿論、両手錠である。後両手錠にされた女優というのは、残念ながらまだ御目にかからない。これは恐らく駄目だろう。しかし或は……（イヤ、ヤハリダメデショウネ）

f、猿轡——○かけてある○かけてない○かける仕草を写した○かけてあったが解けた等の状況について、緊度、主観によりA、B C、と分類する。

g、ロケーション。——この一項目をつけ加えたい。女優の心理的考察をするならば、セットの中で、勿論スタッフ、見学人が居るとはいえ（入浴シーンは関係者以外は立入れないというが、緊縛シーンに特別規定があるということをかきかかない）いわば内輪で縛られるのと、ロケーションで青空の下、多くの野次馬の前で縛られるのと差異がないとは申せまい。岡田茉莉子が比較的長い女優体験で一度もなかった縛りを、はじめて刃傷未遂で京都御所ロケーションを以て後手に縛られたのはよくよく印象深かったのではなからうか。以上、長々と分類項目について申述べましたが、これにもとづいての実際分類は別表に挙げます。

（三）次は、未だ縛られていない女優ですが、映画は次々と製作されておき、未だ縛られていない女優といっても、又、いつ縛られるかわかりませんが、取あえず今日現在で縛られていない女優ということになります。

a、女優としての資質——縛られた姿にその女優のもつ色気がし

みじみ出ていてこそ我々の心をかきたてる。この意味からいっても、すぐれた女優は縛られる”という事が出来る。すぐれた女優即ちトップスターは、女優としての仕事の正道を歩んでいる人であるから、当然この程度の色気は出し得るのです。しかし反対に、縛られる女優はすべてすぐれた女優かというと、これはそうとは限らないようだ。

b、年令——これは女優の資質の問題であるが、彼女達はやはり色気に関することになると、年令的にどうも出来ない制約がある。即ち老年になり過ぎててもいけないし、若すぎてもいけない。望月優子や沢村貞子は女優としては立派だが、緊縛の対象からは遠いし中村メイコや桑野みゆきは若すぎる。夏川静江を縛って拷問した映画があったが、高手小手、手首縛りの完全なシーンで緊縛度Aであったが、いささか老令にすぎる感があり、縛る女優の対象の選択を誤った監督の資質を疑う。

c、環境——時代劇女優が現代女優より縛られる可能性の強いことは間違いない。また東映、新東宝、大映等の女優が松竹、東宝、日活の女優より縛られる可能性の強いこともありそうなことだ。かつて戦前、戦中を通じて我々が女王の如く感じていた高峰三枝子、彼女が縛られる等ということは、後手錠の女優を望むより至難なことのように考えていた。彼女は常に富豪の令嬢であり、当代第一のベスト・ドレッサーであり、貴族の如く歩み神の如く雲上で微笑んでいた。だが……時は過ぎてゆくのである。今日の現代劇女優、青春スター必ず明日のそれではあり得ない。

第三章

次に、まだ縛られていない女優の具体的人名を挙げる。但し、グループの分類は例により私の主観にすぎない。

（一）まだ縛られていない女優のトップスター

有馬稲子、北原三枝、杉田弘子、司葉子、若尾文子。

A

北川 町子	喜多川 千鶴	北沢 典子	北原 三枝	岸 恵子	京 マチ子	荻田 とよみ	川上 康子	桂木 洋子	香川 京子	丘 さとみ	岡田 茉莉子	乙羽 信子	扇 千景	大川 恵子	小野 道子	浦路 洋子	浦里 はるみ	魚住 純子	宇治みさ子
和	和	和		和	和	和	和	和	和	和	和	和	和			和	和	和	和
装	装	装		装	装	装	装	装	装	装	装	装	装			装	装	装	装
麻	麻	麻		麻	麻	手	手	麻	荒	麻	下	手	し			麻	麻	麻	麻
縄	縄	縄		縄	縄	両	両	縄	本	縄	緒	錠	き			縄	縄	縄	縄
後	後	後		後	前	手	手	後	本	後	後	片	後			後	後	後	後
手	手	手		手	手	錠	錠	手	手	手	手	手	手			手	手	手	手
責	責	座		座	馬	囚	囚	立	馬	吊	座	囚	座			手	囚	囚	手
め	め	内		手	上	人	人	後	上	り	り	人	後			歩	人	人	後
C	A	C		B	C	B	C	C	C	B	B	B				C	C	B	C
	○			○	○	○	○	○	○	○		○					○	○	
	○						○	○		○						○			○
○	○			○	○	○		○	○	○	○	○				○	○		

根岸 明美	野添ひとみ	長谷川裕見子	花柳 小菊	原 節子	春風すみれ	浜 世津子	日高 澄子	日比野雲子	左 幸子	瞳 麗子	福田 公子	藤木ノ 実和	藤田 佳子	藤間 紫和	円山 菊子	前田 通子	三浦 光子	三笠 博子	三田登喜子	三ツ矢歌子
		和	和		和	和	和	和	洋			和	洋	和			和	和	和	
		装	装		装	装	装	装	装			装	装	装			装	装	装	
		麻	麻		麻	麻	麻	麻	麻			麻	麻	麻			手	手	手	
		縄	縄		縄	縄	縄	縄	縄			縄	縄	縄			錠	錠	錠	
		後	後		後	後	後	後	後			後	後	後			手	手	手	
		高	晒		手	手	手	手	手			手	手	手			馬	吊	手	
		手	し		座	座	座	座	座			座	座	座			上	手	座	
		小	座		白	白	白	白	白			白	白	白			法	後	後	
		手	洲		調	調	調	調	調			調	調	調			連	手	手	
		手	べ		み	み	み	み	み			み	み	み			行	み	み	
		A	C		C	C	C	C	C			C	C	C			C	C	C	
		○			○	○	○	○				○	○	○			○		○	
		○	○		○	○	○	○				○	○	○			○	○	○	
		○			○	○	○	○				○	○	○			○	○	○	

[illegible]

女優名	衣裳	戒具	方法	状況	度緊縛	手首	猿轡	ロケ
阿井三千子 和	装		後	手座り	C	○		
阿部寿美子	装		後	手座り	C	○		
天路圭子 和	装		後	手座り後手	C	○		
朝丘雪路	装		後	手	C			
井川邦子 和	装		後	手	C			
泉京子								
幾野道子								
江利チエミ								
江島みどり 和	装	しごき	後	手出し	C	○		
小田切みき			後	手連縛座り	C		○	
紙京子 和	装	荒しごき	後	手座り後手	C			
桂典子 和	装	麻縄	後	手囚人連行	C	○		
高友子								
葉野みゆき								
越路吹雪								
小泉澄子 洋	装	手錠	前手	手囚人実地	B	○		○

B、

雪村いづみ 和	装	麻(太)縄	後	手座り後手	C			
若尾文子								
若杉嘉津子 和	装	麻縄	後	手吊囚人連行	A	○	面夜叉	
渡辺美佐子								

三条美紀 和	装	麻縄	後	手高小手	B	○		
南西条鮎子 和	装	麻縄	本	縄引廻し	B	○		
新倉美子 和	装	麻縄	両手	手前	C	○		
瀬戸麗子 和	装	麻縄	後	手立ち後手	C			
相馬千恵子 和	装	麻縄	後	手座り後手	C			
千秋みつる 和	装	麻縄	後	手座り後手	C	○		
月丘千秋 和	装	麻縄	後	手座り後手	C	○		
筑波久子	装	麻縄	後	手座り後手	C	○		
遠山幸子 和	装	麻縄	後	手駕籠運び	C	○		
中北千枝子 洋	装	手錠	片手	手囚人連行	C			
中原早苗								
中村メイコ								
二条雅子 和	装	麻縄	後	手座り後手	C	○		
野上千鶴子 和	装	麻縄	後	手囚人連行	A	○		
万里昌代								
浜田百合子 和	装	麻縄	全身縛	手立木座り	C	○		
日野明子								
広岡三枝子 和	装	麻縄	後	手白洲調べ	C			
東谷暎子								

伏見 和子	星 美智子	堀 恭子	三重 明子	水谷 良重	南 悠子	南風 洋子	宮城まり子	三原 葉子	毛利 啓子	毛利 育子	木匠マユリ	八潮 悠子	山本 利子	由美あづさ	若杉 曜子	若水 美子	若山セツ子
和	和		和	和	和	和		和		裸	洋 (寝衣)			和	和	和	和
装麻	装麻		装麻	装鎖	装麻	装麻		装麻			装麻			装麻	装麻	装麻	装麻
縄後	縄後		縄後	縄前	縄後	縄前		縄後			縄片			縄後	縄後	縄後	縄後
手吊り	手囚人連行		手囚人連行	手鎖つなぎ	手囚人連行	手囚人連行		手杭縛身		手臥せ後手	手臥せ後手			手柱つなぎ	手誘動車	手臥せ縛り	手歩み
C	C		C	C	C	C		C		C	C			B	C	C	C

女優名	衣裳	戒具	方法	状況	度緊縛	手首猿轡	ロケ
荒川さつき	洋	装麻	縄全身雁字	吊り	C		
朝雲 照代	洋和	装麻	縄全身巻き	椅子縛り	C		
市川 春代	和	装麻	縄後	手歩み	C		
入江たか子	和	装麻	縄後	手歩み	C		
浦辺 条子		装鎖	錠後	手囚人連行	C		
大倉千代子	和	装麻	縄後	手歩み	A		
折原 啓子	洋 (支那服)	装麻	縄後	手座り後手	C		
大美 輝子	和	装麻	縄後	手柱縛り	C		
川崎 弘子	和	装麻	縄後	手柱縛り	C		
勝浦 千浪	和	装麻	縄後	手柱縛り	C		
木村三津子		装麻	縄後	手柱縛り	C		
北見 礼子	和	装麻	縄後	手歩み	C		
沢村契恵子		装麻	縄後	手歩み	C		
沢村美智子	和	装麻	縄後	手歩み	C		
杉村 春子		装麻	縄後	手歩み	C		
関 千恵子	和	装麻	縄後	手歩み	C		
千石 規子	洋和	装麻	縄後	手歩み	C		

村田知栄子	夏川 静江	沢村 貞子	清川 虹子	小町瑠美子	池内 淳子	宮城千賀子	三益 愛子	三宅 邦子	真山くみ子	花井 蘭子	浪花千枝子	並木 路子	東郷 晴子	轟 夕起子	橋 公子	滝花 久子	丹下キヨ子	高山 裕子	田中 絹代
和	和		和	和	和	和	和		和(男)	和	和	和	和	和(戦国女人)	和			和	和
装荒	装荒	装麻	装麻	装麻	装麻	装麻	装麻		装麻	装麻	装麻	装太	装太	装麻	装麻			装麻	装麻
縄後	縄後	縄本	縄本	縄後	縄後	縄後	縄後		縄後	縄後	縄後	縄後	縄後	縄後	縄後			縄後	縄後
手責め	手責め	縄歩み	縄歩み	手座柱	手座柱	手座柱	手座柱		手座柱	手座柱	手座柱	手座柱	手座柱	手座柱	手座柱			手座柱	手座柱
C	C	C	C	C	C	C	C		C	C	C	C	C	B	C			C	C
○	○		○						○	○				○					
○									○	○					○				
									○	○									

山口 淑子	神楽坂はん子	多摩 桂子	園 ゆき子
和(戦国女人)	和	装	装
装下	装	装	装
緒後	後	後	後
手歩み	手	手	手
C			

(註) 数多く縛られた女優は最も印象的なものを取りあげた。福田公子(前名)尾上さくら、奇巧に緊縛とあったは誤り、あれは翼ひかるという宝塚女優。田山栄子、三ツ矢歌子等、縛られていそうだが、小生寡聞にして知らずお教えを乞う。又、こゝにあげた女優以外に尚、多くの女優がいるが、お気付きの向はお教えを乞う。

麻生保氏の生活と意見 (四) 補遺

「月光のドミナ」遠藤周作

△別冊文芸春秋第六十号▽

マゾヒズムに正面から取組んだものとして珍重すべきのである。然し、ややつつ込みが足りず、竜頭蛇尾の観があるのは何とも残念である。この作家は、「白い人」以来、サディズムや、マゾヒズムの主題を多く扱っているが、まだまだ描ききれない処が多く、これ等の材料を完全にこなして、昇華させるのは、遠藤氏の今後の課題であり、筆者が期待し、興味を持つところである。

「月光のドミナ」の主人公、画家千曲が、自分の性癖がいやでいやでたまらず、悶えながら、何とも抗し難く、ズルズルと、その異常な悪態の中にはまり込んでいくあたりは、非常によく書けていると思う。

最後に千曲は悟る。「ドミナは、こっちが一步進めば一步退く。追いかければその分だけ遠くなってしまう。」その焦慮に満ちた寂寥たる狐独。同病相憐むなどという、いささかコミックであるが、筆者は、全くここで暗然とさせられた。

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第二百二十四 奴隷は人間なの？

古くから手帖を続いて読んで下さった方は第五項（昭和二十八年六月号及び七月号六七頁補遺）で、私がユベナリスの詩の二行を紹介したことを憶えておられるだろう。この二行を踏えた文が、シドロウイツの本の前項引用部に続いているが、高山訳は右ラテン原文への無理解や接続法の無視から誤訳に陥っているので、正訳を試みると、――

鞭撻欲を実行に移すことが女主人の側からはいかに無頓着なものであったか、については、ユベナリスはもともとと極端な事例を報告している。即ち、他の個所で彼が類型的に描き出したローマ貴婦人は、全くの気まぐれから奴隷を磔にして鞭たせ、気の毒がる夫をこう云って叱りつける「奴隷は人間じゃないわ。懲罰する理由がないって？ 妾がそう望んでいるという文で充分よ」新しい読者の為、この二行をもう一度記しておく。よく引用されるものだ。（第六篇二二三行以下）

o demens, ita servus homo est? nil fecerit, esto;
hoc volo, sic iudeo, sit pro ratione voluntas.

前には奴隷に対する言葉として読んだのでその様に訳したが、文脈からは、夫に対するものと見た方が良い様だ。そのつもりで改めて訳して見る――（あの奴隷は何も悪いことはしてないのに、という非難への返事である）――

痴けたことを、じゃ、奴隷は人間なの？ 奴が何もしてなかったって、命令は実行させるわ。

妾はそう望むから、そう命令してるの。理由なんか要らない、妾の意志がその代りをするわ。

最後の一句は「reasonに代ってwillをあらしめよ」というので、奴隷に対する職業的女主人の手紙などで引用される時には「命令に盲従せよ。道理に照してなどと批判するな。お前の理性の代りに妾の意志を置け」といった風に用いられることが多いので、前にはそう訳したが、この原文では、処罰の理由と解する方が良いだろう。

右の言葉に先立って、女は奴隷を磔にし、と命じている。私は従来、磔刑にして殺してしまう意味に読んで来たが、シドロウイツは、磔にして鞭つことを命じたものと解している。

それで考え直して見ると、ここはやはりシドロウイツの方が正

しいようである。ユベナリスの「諷刺詩」の第六篇は、結婚する友人への忠告という形式で、ローマの女性風俗を描き出したもので、極端な女性憎悪観の下に各様の女性類型を並べ立てる。決闘士狂いをする女、淫らなギリシヤ語を公然を使う女、不義する女、発見されると「妾だつて人間です」と愛の自由を説く女、奢侈な女、夫を白痴にしたり狂気にしたりする女……「男は結婚の輪の中へ愚かにも首を差し入れる。」前項本項二個所の引用は、どちらもこの系列の中の二例なのである。そしてユベナリスが責めているのは、ローマのドミナ達の平然たる鞭撻欲なのであって、別に殺人狂的なものを描くつもりはないのだから、原文の磔の意味を鞭撻の為と読むことができれば、その方が妥当だろう。

ところが、ローマの奴隷懲罰には西班牙鞭撻、というのがあって、これは奴隷の四肢を材や木に張りつけたのである。鞭刑については前項で引いたコルヴィンが権威者とされているから、それを引用しよう。鞭の名称を述べたところもついでに訳しておく。鞭の各種については、第三十項「外国語のむち」及び補遺を参照せられたい。鞭はローマにおいては、公生活でも私生活でも大きな役割を演じた。

……………

答ばかりではなく、色々の鞭撻用具が存在した。一本の平たい革紐でできた、鞭は *ferulae* と呼ばれ、一番軽い刑罰に用いられた。その上の刑罰となると、数条の革紐を撚り合せた *scuticae* によった。最上の刑は牡牛革から作った鞭、即ち *flagellum* (しばしば *terribile flagellum* と呼ばれた) によって執行された。然し、もっと恐るべきものに、いわゆる「西班牙鞭」があつて、

これは、(公の裁判の刑では用いられず) 唯、きつい主人連が自分の奴隷達に対して使用する丈だった。

鞭は国家的支配の象徴だったばかりでなく、ローマ人においては、それはまた、奴隷制度の具体的表現でもあった。

……………

鞭と奴隷とは、ローマでは、最も正確な対応関係にあった。主人は奴隷を好きな時に鞭って良く、理由なく殺しても構わなかった。

……………

奴隷の境遇は惨めなもので、しばしば、現代における犬よりも粗末な取扱を受けた。多くの主人達は一度ならず恐ろしい西班牙鞭の使用に打ち興じた。そして鞭を編む革紐に釘を植えたり、結節を作ったり。時にはもっとひどくいくつか鉛玉をぶら下げたりした。これで鞭たれる奴隷は、裸にされて杉や木に両手を縛りつけられ、その足には一〇〇ポンドの目方のおもりを結びつけて、鞭撻する者を足で蹴ることができぬ様にした。……それで死んでも、家畜がくたばった以上の騒ぎにはならなかった。

つまり、「磔にしろ」とは「西班牙鞭撻をしろ」ということと同義だったわけだ。シドロウィッツの読み方が正しいと考え、先の第五項を改めておく所以である。

とあれ、二千年前「奴隷は人間なの？」と本気で云い得た時代は懐かしい。それを懐かしむ余り私は逆に二千年後に「ヤブーは人間なの？」といえる時代を空想したわけなのだが……。

女性ホルモン服用の

実験報告

古井眞哉



みなさま、あたしが女性ホルモン（ネオ・メンス）を使い出し
てから、もう二年余りになりますが、飲み始める前に比べて、す
っかり男の特徴がなくなってきました。ずっと色が白くなり肉が
柔くなって体中に、ぼつてりと肉がついてきました。そして女性
ホルモンの特徴でしょうか、いつも皮膚が濡れたように艶々と光
っていて、お乳のふくらみが何かの拍子に緊張したときなど銀色
に光ってみえてその神秘的な力に驚きました。一番変化したのは、
お乳と腰で最初八十・五糎だったバストが八十七糎とふえ、ヒッ
プも八十四糎から九十一・五糎にまで肉がつきました。手で押え
てみると、固くきりりと締っていたのが、幾分ぐにやりとした感
じになり、軽くなったとぶるんぶるんと震えます。ウエストはニ
ッバーを使って、太くならないように気をつかっていますので、
始めの六十一糎から五・五三糎にまで、かえって細くなりました。
た。体重は五疋余りもふえています。

先ず、お乳の有様からお話しましょう。最初べちやんこであつ
た胸のふくらみは、女性ホルモンを使ってから一年半余りになら
なければ、ふくれ始めませんでした。何故このように女性ホルモ
ンの効き方が遅かったかと色々調べてみますと、どうやら女性ホ
ルモンの使いすぎということがわかりました。始め頃は、一日に
平均一万単位ぐらいを、飲んだり注射したりしていたのですが、
その頃は、とても気分が悪く、一時中止したことがあります。そ
の頃より胸がふくらみ始めてきたように思います。

今は、もう人前では恥しくて着物を脱ぐことすら自由になりま
せん。最初の頃は、早く女の人の体のように大きいお乳を持ちた
いと思いましたが、ネオ・メンスの外にオバホルモンの注射液
を買ってきて、今まで太股や上膊部に注射していたのを、乳房の
あたりにまで針をたてたのです。始めは軀に注射するのは、とて
も心配でしたが、乳房は皮下注射の適当なところであるし、消毒

さえ完全ならと極くわずかしがついていない皮膚を伸して、オバホルモンを注入していたのです。けれどもホルモン関係の文献を調べている中に、多量の卵抱ホルモンを投入すると、かえって女性ホルモン本来の機能を果さなくなるということが判ってきたのです。けれども、その頃は気がつきませんでしたから、量さえ多ければというので随分無茶をやりました。あの胸に針をズブリと立てる時のスリル——、ゆっくり射し込むと、とても痛いのですが、その痛さを我慢して力を入れると、針の先で皮膚がズブリと抜かれて、その後は丁度、尿道へカテーテルを射し込むように何の痛みもなくズブズブと入って行きます。そして強い抵抗を排してポンプを押すと、針先がカッと熱くなって鈍い痛みと共に、薬液が拡って行くのがわかります。

こうして左が済めば右と一回分の注射液を二度にわけて、一回に右と左の両乳房に針を突き立てたこともあります。そして針を抜いてしばらくじっと息を吐いて、微かに胸腺を刺戟する鈍い痛みを、ガクガクしながら覚えていたあの頃の思い出——、若い女の人に強制をされて、男から女に無理に作り変えられるイメージは、その夜の夢にまで現れました。けれども、あたしの性急な夢は実現しませんでした。注射の後の胸のしこりが黒ずんで、絹のように艶やかに光っていますが、乳

房は元のままだったのです。しかし、胸の後の肩甲骨の下あたりにキリキリと痛みました。又、胸の上部も突き刺すような鋭い痛みがあり、その痛みが下腹の方まで抜けてあたしを動転させました。電車の中で、不意にカッと頭に血が昇り顔を真赤にほてらせて、額から汗をダラダラと流したり、不意にガタガタ震えたり腋の下が汗びっしょりになったりすることがありました。或る時など、スーッと体中の血が引いたような気がしたかと思うと猛烈な吐気が胸にこみ上げてきて、体中の力が一べんに抜けてしまつて、その場にぐたぐたとくずれ倒れました。そして人々が驚いて集つてきても、どうすることも出来ませんでした。

二ヶ月目位の時だったでしょうか、余り毎日のように胸が痛み気分がすぐれないので、心配になって医者の方へ行きました。そしてレントゲン写真を撮り診断の結果「植物神経の亢奮である」といわれましたが、あたしはふっと安心したのでした。こうして来る日も来る日も女性へのあこがれを胸に燃し、女になることに夢中になり、小さな桃色の糖衣錠を飲むのでした。その後は唇がカサカサに乾いたり、指の先が痙攣して止まらなかつたり、不意に目まいがして吐気がしたり、頬がひきつって目が霞んだり、色々な症状が現われました。しかし一向に女性化する様子がないの

で、あたしは一時、投げやりの気分になりました。

そして、しばらく女性ホルモンの服用を止めました。それがよかったのです。あたしは、まだ女の人の身体を知りませんから、本当に欲ばった考えですが、あたしの男性を全く役に立たなくしたくはなかったのです。むしろ、「ダス・フエンフック」に描かれているように、男性と女性をこの同じ一つの身体に持ちたかったのです。男性と女性を同じ一つの身体で味わえる——なんて素晴らしいことでしょう。でも贅沢なあつかましい考えなのでした。一年余りで女性ホルモンの服用を止めると、その途端にお乳がふくれ上ってきました。一日見ないと驚く程の大きさになっていました。メジャーでは、そう目にたちませんが、目に見た処では毎日々々が驚異でした。手で触って見ると、乳房は熱を持ち硬くなつて突出しています。十日に一纏、二十日に二纏と、やはり日を置くとメジャーは正直にあたしの喜びを実証してくれます。背中を手をやりますと、肩甲骨の下にずしりと肉がついているではありませんか。押さえるとぐっとへこみます。あのキリキリ痛んだ辺りが最も肉がついていました。二ヶ月位で両方の乳房がぐつつくようになり、手で握ると乳房特有の弾力が感ぜられます。ああ思いがけなく女になる前ぶれがやってきたのです。

シユトラフの乳首がふくらんで乳房がふくれるというあの典型的な過程は通りませんでした(むしろ乳房の方が先で、乳首が後でした)ブラジャーがしっかりと乳房に喰い込みます。パットを入れるとキンキンに盛り上って肩の体の肉にぐっと喰いこんで、呼吸のたびにぐっと締ります。又、もう一つ顕著に変化したのは腿です。太腿の内側に注射していいましたのです。その部分の肉のつき方は異常な位で、太腿は無理をしなくてもびったりとくっつきます。お尻の肉も、もりもりと盛り

り上って、たたけばよい音がします。このように女性のような身体になりましたが、現在でも三日おき位に、二百單位の女性ホルモンを一粒づつ服用しています。あたしはこれに身体のアランデーシヨンが出来たので、いよいよ女の着物をつけて外へ出るときが来たと考えていますが、皆様はどうお考えでしょう。今後はどう身体が変化していくか、その経過は又の機会にお知らせ致します。参考までに私のメジャーをお知らせ致します。括弧内は服用前のものです。

身長 一一六五・五糧(一一六五・五糧)
 体重 五四瓩(五〇瓩)
 バスト 八十六・五糧(八〇糧)
 ウエスト 五十二・五糧(六十一糧)
 ヒップ 九十一・五糧(八十四糧)
 腿周り 四十六糧(四十三糧)
 下肢長 八十三糧(八十四糧)
 骨盤幅 二十七・五糧(二十六・糧)
 乳頭間隔 二〇糧(二〇・五糧)
 脛周 三十四糧(三十三・五糧)

×月×日

Nさんにいつものように浣腸してあげる。この若い奥様は普段から便秘がちなのに、産後のこととて浣腸しなくては全然お通じがないので一日おきに浣腸してあげている。今日も浣腸後あの美しい顔をゆがめられて一生懸命いきんでおられるのを見てなんだかお可哀いような気がした。

×月×日

今日はお休みなので薬局へ行ってイチジク浣腸小を二つ貰ってくる。この小さな浣腸、私は好きだ。挿込めば坐薬の如く直腸の中へ入り込むし、手に取っても一つまみ何だか可愛らしい。

×月×日

今日はKさんに浣腸してあげる。シスター

ボーイと云われるKさんは私が室へ入っていった「お浣腸しますから」と云うと、その端麗な顔を真赤に染めて小さくうなづいた。青いズロースを下すと真白なおしり、その豊かな肉づきに私は女の人を見ているのではないかしらと不思議な錯覚に襲われた。浣腸を終えておかわを差込む私の顔を見ている彼の目を見てドキリとした。夢見るような空ろな瞳、あんな美しい眼で見られたら誰だって胸が高鳴るのではないだろうか。近頃流行のよるめき夫人がシスターボーイを愛すると云うのもわかるような気がする。

×月×日

今日は当直、近所のMさんのお坊ちゃん来

院、暴れ盛りの元気なお子さんだが何か食べたものが当ってお腹をこわしたらしいと言うので浣腸してあげる。

×月×日

仲良しナースAさんと近所の富士屋ヘアスクリーム食べに行くと、この間私が浣腸してやった坊やが店の前で元気に遊んでいた。そして家の者から教えられていたのではどうか私を見て云うには「お姉さん、アイスクリームなんか食べるとボンボンこわして坊やに浣腸されるぞ。」まあ、なんと憎らしい坊やなこと。でもあの坊やに私が浣腸されたら。……

×月×日

中年のでっぷりと太ったおばさん。私が

「お浣腸いたしましょう。」
と云うと無操作に着物を捲
ると大きなおしりを出す。
あまり平気におしりをつき
出されたのではがっかり。

やはり清小納言ではないが
「世になまめかしきものは
眉目美しき乙女の恥しそ
うに着物を捲りあげて玉のお
しりをあらはしているさま
なり。そして若き薬師の手
により浣腸をされて顔を紅
に染めたるぞ甚だし。」とで
も云いたくなる。しかもそ
のおばさんは体の割にだら
しなく五分も堪えることが出来なくグリセ
リン溶液をそのまま泄らしてしまふ。

×月×日

この間から四日ばかりお通じ全然なし。
一つ残っていたイチジク浣腸しようかと思
ったが、どうせグリセリン溶液10cc程度で
は効きっこないと思って止めた。

×月×日

この間からの便秘、これで一週間。思い
切って当直のT先生のところへ行く。ああ
今日はなんと恵まれた日だろう。あれほど
願っていたことが今日は実現するかもしれ
ないのだ。それはT先生に浣腸をされるこ

プレさんの浣腸記

ナースの浣腸日記

岩村 美智子

と。私は胸が躍ってしかたがなかった。先生
はどのように言われるだろうか？ 先生がこ
う言われたらこう答えようか、一生懸命胸の
中で云ってきかせた。

室へ入って行くと看護婦のOさんも丁度留
守、T先生は唯一人煙草をくゆうしていた。

「先生、私一週間ばかりお通じがなくて弱っ
ているんですが」「うん、なんか下剤あげよ
うか。」「いやだわ、前に下剤飲んでお通じと
一緒に体中の力まで抜けてしまったこともあ
るのですもの。」「どう、ミッチちゃん、いっそ
Lavement するか？」との間に予期していた
とは云えドキッとして顔を赤らめた。「いや

だわ、恥しいもの、浣腸な
んて子供の時以来されたこ
とないもの。」と云った。先
生は「まあいいからそこに
寝てごらん。」と云われて浣
腸器にグリセリンを吸上げ
られるのだった。私は「い
や、いや」と云いつつもベ
ット上に横になるののでし
た。

「さあ、これでなるべく我
慢しなきゃいけないよ。」と
言われた。想像に反して便
器がおしめで便を始末して
下さることまではやってく
れなかった。先生はそれまで実に手際よく
やられてほんとうにあつと云う間のことだ
った。「我慢しなきゃいけないよ。」と云わ
れる先生の言葉に我に返ると私はもうただ
いたたまれずあたふたとトイレに飛んで行
った。T先生に浣腸された嬉しさと恥しさ
の錯綜した複雑な気持ちだった。

(補)

Lavement と云う言葉は奇クの皆様は使
われない様ですが勿論浣腸と云う意味でフ
ランス医学では専らこの言葉が使われている
ようです。英語にもありますが Lava Tory
(便所) と同語原です。

責物美人伝

腰元お菊

「鎧武者出たは元和の五月限り」という川柳がある。元和元年五月大阪夏の陣で天下が泰平になって鎧武者が必要は無くなったという徳川政治を謳歌した川柳で「高枕これも日光細工なり」日光に作られた東照大権現のお蔭で江戸の市民は枕を高くして寝られるという川柳で勿論これは「お江戸の恵みぞ有難き」と結んだ長唄の鏡獅子や石橋の文句と同様に徳川の天下を矢鱈と有難がらせたもので所謂依らしむ可し知らしむ可らず主義の弾圧政治である。大阪方に味方をして城を枕に討死しなかった武士は浪人となって諸国に放浪をしたので慶安時代には大阪市内に於ては浪人の宿泊を三日以内に限ったのを見ても如何に当時の大阪城代が浪人者を警戒したかという事が判る。

家康が江戸城へ入国したのは、天正十八年八月朔日それから茫々

伊藤晴雨

たる江戸の海は埋められ市街は開かれて泰平三百年の基礎工事漸く成らんとした頃、江戸の街に怪盗が現われて出没自在、其名を高坂甚内という。火附盗賊改めの青山主膳が部下に命じて之を捕縛しようとしたが反って捕手を傷付けられ、逃げ去った此高坂甚内という盗賊は、日本三甚内の一人で、当時三甚内と称されたのは鳶沢甚内庄司甚内、及此高坂甚内の三人で此三人が大阪落城の後、兄弟の義を結んで関東に下り三人各盗賊を偽いて居たが庄司甚内と鳶沢甚内は家康に説得されて正業に就き鳶沢甚内は古着商の頭となって名を富沢と改め古着市場を開いた処が日本橋富沢町である。庄司甚内は遊女屋を願って許可されて江戸で始めて遊廓を作って遊女屋の元締めとなり、遊客の身許を調べて怪しいと見れば役人に密告するといふ今でいえばスパイ政策の手先となって居た。戦前迄東京の妓楼の女は全部警察の用を勉めて居た。芸妓も亦其通りで大正末期から昭和十年頃にはよし町辺の待合で一夜十円以上消費する客は内々で其待合から久松川警察へ届けたという、現代の物価から見れば嘘の様

な實際の話がある。女と犯罪は昔から附き物である高坂甚内は宮本武蔵の弟子で幼名を甚太郎といつて十一才の頃武蔵に従つて江戸に下ったが長ずるに及んで其頃流行った湯女と遊ぶ費用に差支て辻切りをする様になったので武蔵は甚太郎を破門してしまったのが盗



賊となる始めて蕨沢、庄司の二人が改心して正業に就いた後も高坂は依然として盗賊となつて青山主膳の為に虚疾（おこり）で寝て居る所を捕手に踏込まれて捕われた。甚内歯嚙みをして「我れ虚疾を病まずんば縄目の恥を受けなかつたらう。我れ死して後虚を病む人我れに祈らば必ず平癒させん」といつて磔殺された。當時の刑場は本町（中野区）と浅草鳥越にあつたので甚内は浅草の刑場で殺された。其刑場に架けられた橋が甚内橋といつて其側に甚内を祀つて永護霊神と呼んで今でも其社は残っている。今では暗渠になつてしまつたが蔵前通りに須賀橋という橋がある。昔蔵前通りが奥洲街道であつた頃は此橋から獄門首が眺められたといふので又の名を獄門橋といつたという。須賀橋一名天王橋というのは蔵前に天王様のお宮があつて江戸時代には笹の葉につけた団子を供えるのが江戸年中行事六月の部になつて居る一つの橋で天王橋須賀橋、獄門橋と三つ名のあ

るのは類例として本所の撞木橋と大阪の四ツ橋以外には無いだらうと思われる。獄門橋

という名は其名の忌わしい故為もあるうが知る人が少ない。只故老の口碑にのみ伝えられて居る。熊田葦城氏著江戸懷古録には永護靈神と記されて居るが、土地の人は三霊様と呼んで居る。其社の側の橋を三霊橋と云って福井町から其内橋の下を潜って三味線堀に通ずる堀割に架った橋である。三霊の意味は或は三其内を併せ祀ったものであるうかと私考するのは刑死した人の墓は公然とは建てられなかつた旧幕政時代にあつては三其内合祀という名目で寺社奉行に届け出したものかとも考えられる。此社には特別に官司という程のものはないので委しい事は判らない。

高坂其内に一人の娘があつて年は十八、其名を菊といった。慶長当時の官規として盜賊の余類であるとして其女を奴として青山主膳に下げ渡された。当時の習慣として女は物品である奴というのは後世の奴隸制度で一生無給の婢である。盜賊の娘に似合わず容姿端麗氣立ての到つて温和な娘で其内の生前から船瀬三平という良夫があつた。其内刑死の後連累を恐れて三平は武士を捨てて町人となり向嶋辺の植木屋の弟子となつて居た。而して時々青山主膳の番町の屋敷の窓下に来て女房お菊と顔を見合せて言葉さえ交す事を許されないう身の不幸を歎くのであつた。

青山主膳に附いては従来各種各様の伝説と口碑を異にして居るのて私は之れを實在の人物であるか或は架空の人物かとも考える。藤沢衛彦氏著皿屋敷伝説考という袖珍本によれば皿屋敷は播磨国にあつたとも云い又群馬県にあつた事とも云い日本諸国到處にそうした類似の伝説があり上総国にもあつたと云われる。古今著聞集に依れば播州皿屋敷の伝説の出所は九州であつて諸国修行の僧が偶々播州の姫路に来て九州の或る地方で聞いた咄をした所が姫路の町の人達が姫路の町の名所(?)を作る為これを播州の事として播州皿屋敷と名づけたとも云つて居る。又南部の盛岡には原敬を埋めた大慈寺の隣の某寺(今寺名を遺忘す追て補正すべし)にはお菊の皿

というのを所蔵して居る。これが一枚である処が眉唾物である。九枚残つて居るのなら合理的だが一枚というのだから不思議である。一枚缺けたという伝説だから若し真ん物だとすれば九枚残つて居るべき筈であるのにお菊の皿と称するものが日本の各地に一枚宛所蔵されて居るのがどうも不思議な咄である。こう突きつめて来ると段々皿屋敷伝説が怪しくなつてくるのである。姫路に産する蛸の一種にお菊虫というものがある。サナギに類してお菊が後手に縛られて居る形の虫である。これを昔の「やし」と称する(チキヤの一種)が皿屋敷の由来の絵看板などを業々しく飾り立てて此虫一匹を見世物にして居たのを幼年の頃各所の祭礼や縁日などで見てお菊を實在のものと信じて居たが、お菊と類似の伝説は播州皿屋敷と番町皿屋敷と越後の或る所と盛岡と上州前橋等により更に南信方面の伊那郡を流るる天竜川の沿岸にもあつて女の名前はお菊と云い、伝えられて居るのは縁日の飴屋の「当所常店」と同様、何れが本家か何れが支店かハッキリしない所が怪談に縁があるのかも知れない。其中で上州前橋の方は名前がお虎という名で殿様の名前はハリマになつて居るがお虎という名では色氣と哀れ氣が薄い様だ(前橋の旧城の一部で裁判所の前の壕をお虎ガ淵と呼んで土地の人は恐れて居る)併しこうした類似の事実を口碑伝説の便宜上お菊という名にしてしまふ所に皿屋敷伝説が如何に嗜虐性の人々の間に愛好されて居るかという事が首肯されるのではあるまいか。

岡本綺堂氏の番町皿屋敷の青山播摩は美男であるが旧劇の皿屋敷の青山鉄山は色男では無い、大敵(オオガタキ)の物語である播州皿屋敷の方になると青山播摩は姫路の城主で主家を横領せんが為に毒藥を盛つて主人を殺さうとするのをお菊に妨げられてお菊を毒殺すという筋になつて居て大阪の講談師の張り扇子拍子木から叩き出された噓ッパチに尾端がついたものらしいが播州の方は誤解であるから何の事はない本朝廿四孝の十種香の場へ出てくる上杉謙信とい

った形ちであるが義太夫の播州皿屋敷の様に重みがない。何れにしても此青山播摩にしろ鉄山にしろお菊を口説いて振られるという点では一致して居るのである。

閑話休題として、本線に立返り番町皿屋敷を實在のものとして筆を進める事にする。

青山播摩は英雄に非ずして好色漢である。此頃流行り出した嶋田髪にかもめづとの美しい腰元のお菊を朝な夕なに口説くが貞操を以て女の生命とするお菊はウンと云わない。振られれば振られる程熱くなるのは当然で況んや上司から一生奴として下げ渡された女一人が主人の命に背くとあつては男武士のメンツにも拘わるとあつて盛んに口説く播摩の用人に岩淵忠太夫という奴があつて、此奴醜男の癖に好色の方にかけては主人の播摩に劣らぬ奴で此奴が又お菊を口説く播摩と忠太夫兩人が振られた処へ播摩の奥方というのが頗る嫉妬深く些細な事に迄目に角を立ててお菊を苛める。忠太夫が口説く播摩が口説くの見附けて奥方がお菊を折檻する事が度々あつて、お菊の命は全く風前の燈同様になつて居る。どうかして此邸を逃げ出したいと出入の商人に頼んで所人の舟瀬三平の所に手紙を出したのを朋輩の女中に見られてしまった。此朋輩はお菊の美貌を嫉んでお菊が男と文通をしたと奥方と播摩に告げた。奥方の嫉妬と播摩の失恋と加え忠太夫が恋の叶わぬ意趣暗しという奴で時もあるうに極月(十二月)の廿八日というにお菊を縛り上げて散々に責めた揚句物置へ放り込み荒縄を以て芋虫の様に縛り上げて置いた。而して一日に一本宛お菊の手足の指を切り落して其切り口に塩をすり込み、或は唐がらしの粉を擦り込んでお菊が痛さに堪え兼ねて泣き叫ぶのを見て弄り物にして居た。翌年の春三ヶ月は流石に年の始めとあつて指を切らなかつたが四日目から切り始めて七草の日迄に手足の指を悉く切り落して了つた。

七日の朝から降り初めた雪は八日一杯降りつづけて夕方になつて

漸く止んだ。七草過ぎてから殺すといつておいた播摩は忠太夫と二人してお菊を庭へ引き出して車井戸へお菊を逆吊しにして忠太夫と播摩と交る交るにお菊を刺し一寸試しにして井戸の中へ切り込んでしまった。奥方は流石女で自分で手を下そうとはしなかつた。

「番町で目明き盲に道を聞き」とは塙保己一の事をいったものであろう。番丁の番町知らずといわれた通り屋敷町斗りの麴町の番丁にも折助や勤番者の為に居酒がある。もろ白片白有合酒肴めしと筆太にかいた腰障子編上げの装飾の少ない関東特有の三尺の縄のれんは雪に凍つてお嬢の松吹く風に呻られて棒の様に凍つて居るのをくぐって入つて来た一人の侍がある。物に襲われた様にフラフラと上り框を跨いで突然宮下ヘドッカと腰を下した。小女は居酒屋にお定まりの居らっしやいの「居ら」が省略されて「しやあい」後は(出来すものは)と来た。

出来すものはゴツタにけん先、雁もどきの煮附けに落の煮附け甲芋の煮ころがし、葱ぬたにのっぺい、卵の花ときらずの附合せ後はかけ醤油と葱鮓のようなもので御座いまアす……番町の番町刺身といつて其頃(或は維新前後)の番町に住む武士は俸録極めて薄く酒の肴といえはチサという草を茹で肴とした位のものであつたから下町から魚屋が魚を運んで売るなどという事はなかつたから止むを得ざる節除を余儀なくされて居る小旗本や御徒士の連中は、焼豆腐を切つて醤油に漬けたのを「番町刺身」といつて居た位であつた。一せんめしやに葱鮓やかかけ醤油があつたかどうかは頗る疑わしいのだが、まア其辺の処は大目に見て頂きたい。扱其侍が葱鮓か何かで独りでチビチビ飲んで居ると土間の方では一人の按摩を囲んで紙屑買や職人の手合いが四五人で賑やかに盃を巡らして居る。

「これは極内密のお話ですが」と按摩は声を一段と低くし乍ら、「殿様のお療治が終りましたので帰ろうといたしますとね御用人様

の御つしやるには兼の市や、これから日本橋へ帰るのは此大雪では大変だろうから何なら当家へ泊って行ったらどうだと、御親切に仰有って下さいます。雪はしんしん夜も其通りという喻もあるじや御座いせんか、皆さん、盲目の身で此雪の中を、成程それでは仰せに従って一晩泊めて頂き度く存じます、イエナニ物置で結構で御座いますと申し上げて、物置の中へ結構なお蒲団を布いて頂いて寝様としましたが寒くて中々寝つかれません。夜は更けて参りまして雪が笹の葉をたる音さえ手に取る様に聞えて参ります。これが目の不自由な私共の坎で御座いますよ。其内に微かに風に伝って聞えて来るヒイーヒイーという女の泣声……と茲で按摩は一寸思わせ振りに言葉を切つて手元にある空の徳利を振った。聞いて居た職人は自分の酒をついでやった。御亭主上酒一本、と屑屋は新らしい徳利を按摩に提供した。按摩は熱いやつを一息にグツと飲干して、隣屋敷は吉田御殿で有名な青山主膳様のお邸でハテ化物屋敷と評判の青山様の邸で女の泣声、風に交って聞えて来るのは弓の折れでもありませんようか、人を打つ様な音が続けさまに聞えて参ります。暫くするとドボンと云う水音、それから後は何の音もなく女の泣き声もそれっきり聞えなくなりましたのはあの名代の古井戸へ女を切り落したんでも御座いまいしょうかと思ひますよ。私は恐ろしさに蒲団を冠った儘ウトウト寝られませんか一夜を明かしましたが、松がとれたといえまだ正月早々から人殺しとは忌な思ひをいたしましたよ。という按摩の話しを傍の醤油樽へ腰をかけて聞いて居る職人は何を思ったかコソコソと勘定を済ませて立去ったのは姿こそ植木屋にやつして居るがスッキリした男前、此男こそお菊の夫舟瀬三平であつた。宮下にチビチビ酒を飲んで居た侍は顔を暗くしてソコソコに立去って行ったが此店を出るとまた其頃開けた、葎原の遊女屋近江屋四郎兵衛方へ駕を飛ばせた。此侍は別人ならぬお菊を責め殺した岩淵忠太夫であつた。

お菊の姉をお夏といつて甚内死刑後姿をくらまして父甚内の命乞いをする、今でいう処の運動費を作る為に其頃開け初めた葎原町の遊女となつて源氏名を大淀と呼ばれて居た。忠太夫はお菊に似た此お夏の大淀をお菊の姉とは知るよしもなく殺したとはいへ惚れ抜いたお菊に瓜二つの女に現をぬかして日毎夜毎に通いつづけたが虫の好かぬというのかそれとも亦お菊の靈魂の所為か大淀は此忠太夫を振って振って振り飛ばした。

或日客に化けて登樓した三平は番町の居酒屋で聞いた一件を大淀に語れば大淀は夢にお菊の最後を語り符節を合せる様な話しと奇蹟に驚きもし嘆きもしして密に敵打ちの覚悟をした。

其後何年、三平と大淀は忠太夫と共に此家に遊びに来た播摩を大門前で殺したというのが実説として伝えられる血屋敷である。実説としてより巷説とした方が正しいかと思われるが義太夫の播州血屋敷の方は安芝居に演ぜられるが此実説血屋敷の方は滅多に上演されない。明治四十二年頃赤坂の浜伎座で今の左団次の父市川女寅がお菊と大淀の二役、故尾上幸蔵が青山播摩で大阪で死んだ市川九団次が舟瀬三平で一番目狂言で七場通しに演じたのを見た事があつたがそれ以来一回も上演されて居ないから此狂言は滅多に見た人はあるまいと思われる。

血屋敷の狂言は鶴屋南北が書いた播州血屋敷が創めでお菊の代りに局の幸時が辻堂の中で縛られて殺される所があり、蛇責の件などもあるが脚本で見ると責め場が辻堂の中になつて居るから見物からは見えないので残酷味は少ない。幽霊の方に重点を置いてある様に思われるので責めに興味を持つ見物には、物足らぬ様に思われるのではあるまいか。女の責め場は黙阿弥に多く南北に比較的少ないのは南北の時代相をよく現わして居てまだ世の中が陰しくなつて居なかつた頃で、黙阿弥時代の様に世の中が騒々しくなかつたのではあるまいか。

皿屋敷のお菊は元来、文金高嶋田に立やの字の美しい腰元であったのを弘化年間に名人と云われた市川小団次が演じた時、小団次は名人とはいえ美男でなかったので年増の女に直したのが現在諸方で演って居る中年増のお菊であるという事である。私の見たお菊でいいと思ったのは、故人尾上梅幸がまだ栄三郎といった頃（明治卅年頃）歌舞伎座で団十郎の鉄山で出した頃の水の垂れる様な美しいお菊であった。此お菊をやった最初は栄三郎の廿代、本所松野町五丁目の寿座（座主三浦小太郎）で此時は廿五日の興行日数であったが毎日毎日養父に当る五代目菊五郎が見物に来て居て「まづいまづい」と云い続け芝居がハネてから家へ帰ると、又稽古を仕返し仕返し、芝居が千秋楽になってもまだ稽古を仕続けて廿五日の芝居を三十日稽古をしたという有名な話が残って居る。名人と云われた五代目菊五郎に厳しい稽古を受けた丈けあって、梅幸になつてからのお菊の演技は誠に素晴らしいものがあつて井戸へ吊されてから鉄山に刀をつき突けつけれ「そんならどうでも殺すのじやね」と云い乍ら鉄山の突き出す刀を口にくわえてキツト睨む物凄さには相手役の鉄山に扮する故人市川中車が毎夜呻されたときえ云われている。芝居道の宣伝で多少は大袈裟に吹聴されたのかも知れないが、私が横浜の薦座で見た同僚のお菊のスケッチにある如く刀を脚えた顔色の凄さは全く凄かった。此凄味は他の何人にも無い凄さで全く鬼氣人を襲うというより外に形容詞のない程の凄さで、女の責物も数多く見たが此れ位凄味のある皿屋敷を見た事がなかった。

明治廿四年頃の金蘭社から発行した、百花園という講談と人情噺しを連記した大衆文学の月刊雑誌に皿屋敷実記というのが載っている。挿画は小林永濯の嗣子小林永興でお菊が雪中の車井戸に吊され播摩に髪をむしられ乍ら刀を顔に当てられて居る播摩は当時少年の私を驚かしたもので恐らく当時としては珍らしいものであったに違いない。お菊は近來の芝居では車井戸に直に吊されて切り落さ

れる事に極つて居るが、昔は真ッ逆さに吊されて其儘切り落される事に極つて居たというから井戸側の内部に滑り込みという仕掛けがあるにしても逆に吊されて居る間が相当にあるから役者の痛さと苦しさは相当なものであったに違いないと思われる。昔の役者は舞台は戦場という言葉で文字通り実行したものであったと斯界の故老市川荒次郎氏は語った。

お菊の芝居で美しかったのは前記尾上梅幸と故人市川松蔦のお菊及吾妻市之亟のお菊であった。市之亟のお菊は井戸へ吊し上げられると殺されまいとして身をもがく度毎に散し髪が蛇の如くゆらゆらと飛んで車井戸の車に引つ掛り其髪が乱れる美しさは格別でこれ丈には他の役者に嘗て無かった演出で此人独得のものであった事を覚えて居る。此市之亟という役者の門弟から過日死んだ阪東妻三郎が出て居るが生きて居たらば歌舞伎座の中村歌衛門の後をつぐであつたに晩年不遇で旅で死んだのは惜しい人であつた。

女でお菊をやつてよかったのは故人市川九女八で、これは本所緑町の寿床であつた、花道から縛られ出て来て土壇に据えられ打たれて片はづしの髪が乱れて散し髪になつて苦いむこなが、迫真力があつて女丈けに形ちに無理がなかったし美しかった事無類であつた。

大阪の青年歌舞伎で片岡愛之助という新派の英太郎に似た役者が居た。三十年程前の浅草公園劇場で高嶋田に矢がすりの着附けでやつた時は目のさめる様な美しさで、鉄山は坂東彦三郎であつた。

豊原国周えがく梅幸百種の内のお菊にはあしまの宗巨雪中庵金羅が句「恨みても数へ尽せぬ皿の数」

次号の

「責物美人伝」は八腰元、竹尾

（此項終）

美容病院

久留木 栄



◇木村愛子の経験 その五

木村愛子の
見た夢の巻

真紅な空だった。家も紅い。道も赤い。自分の身も、衣裳も、爪の色も、肌の色も、血の色だ。無色透明のはずの空気も朱かった。空気の色があたかも朱墨流しの模様のように、アカい世界の雰囲気をかきまわして体中にまきついた。ねばい粘液質の液体のように体にまきついた。体は赤い世界の中で、独薬のように回っている。次第次第に狭められていく赤い空気の渦の底に、沈潜しながら、回っていることが、さながら、此の世の中で享受できる。自由であるような感覚におちいる。それでいて、悲鳴が口からつきつきに洩れる。沈潜して行く深さの、深くなればなる程、悲鳴が鋭く、口をつく。渦の底の底には美しい、豊醇な、紅い酒があるのだろうか。奇妙な芳香がたちのぼって、回っている心を、からだをそそのかす。だけど、そのそそのかしの、強烈な割に、実体の掴めない。いらだちが気をもませる。その心配が何と身をいらだてることだろう……。

愛子はその紅い地獄にのたうちながら、ふと意識する。人間の心はどうして、こんなに弱いものかと。それと同時に、苦痛に洗われなければ美しくない人間心の弱さは、やはりキリスト教の原罪にあるのだろうか。もしそうとするなら……自分は……まだ汚れていないのだから……不動の心をもちうる筈なのに……それすら否定

するのかしら。生まれてきてすみません。そういつたらいいのだろうか。どういつたら、……どういつても、だめなのかしら。とにかく愛子の躰は紅い渦の底に沈み、不動の心の自信はくずれ、更により一層の深みへ、沈みながらもだえ、泣き、叫んで、狂いつつ……、のたうちつつ……更に一層、生きていく間隙を狭められ、圧縮されていく。……悲鳴。悲鳴。悲鳴の断続……。

その時愛子はふと目が醒めた。夢、夢だったのだ。何という奇天烈な夢だろう。フロイドの唱える夢判断で、この夢を判断したとするなら、医師はなんとこの夢を解釈するだろうか。血は宿命というから、紅い空気の渦は、愛子の胸奥に秘んでいる情欲だろうか。とにかく愛子は夢とわかった時、きゆうに恥しさがこみあげてきた。自分の心が自分の躰に、自分の心が自分の血汐に恥を覚えた。愛子は本能的に両腕で乳房を抱いた。すると弾力のある二つのかたまりが、愛子の胸の、やわらかい皮膚を圧迫した。愛子はハッとした。

ハ、ハ、裸で、裸で寝ている。自分は裸なのだ！ 一体、自分はどうしたのだらう。愛子は自分の家では決して素裸で寝るような身だしなみの悪いことはしない。だが、それにもかかわらず裸で……愛子是不審に思った。そして思わず、無意識的に寝返りをうとうとした。すると、首のつけ根と足の先が、何かで急に強くひっぱられた。愛子の首と足首は間接的に強い紐で、ベッドに止められていたのである。

そうだ。私は捕えられていた。

愛子は思い出した。……愛子は、まるでカフカ作の「変身」のグレコールみたいな、虫にはならなかったが、ナイロンの袋に入れられて、ベッドの上に止められていたのである。愛子はやっと、完全に昨日の出来事を思い出したのである。一見人の良さそうな好男子にみえて冷酷そのものの河野副院長。好漢ではあるが思慮の浅そうな体育教官の小野茂。いかにも世話好きで、本当に同性をいじめて

喜びそうな池田フジ。そういつた人たちの顔が、目の前に急に浮きあがり、押しかけてきた。きつと家にいる叔母の幸子は、愛子がこんなことになっていようとは、夢にも思わず、旅窓でしやわせな夢を結んでいるとばかり思っているだろう。それにひきかえ、現在の自分の境遇は！ あの無残な、愛子のこれまでの生活を、生存理由を、一日にしてひっくりかえしてしまうような、愛子の腕から、躰から、自由を完全に抹殺するようなできごととは、全く真実。ありうべからざることでなく現実に実現されていることであつたのだ。しかも、それを不幸にも愛子が希望したという形で……愛子は深いため息をついた。愛子は完全に牙をむいた狂人たちに捕われた美人であつたのだ。しかも先は長い。これからその捕われの二日目が始まるうとしていいる。言い換えるなら、美容病院入院二日目の行事が、待ちかまえているのだ。愛子は思った。自分は一体どうしたらこの苦痛を少しでも楽に切り抜けられるだろうか。招かずして招き、求めずして求めた……そんなパラドキシカルな結果となつた出来事を。……とにかく愛子はまず身を守り、躰を大切にしなければいけないと考へた。しかし、それは実に空しい決心だつた。愛子の発言がプラスチックの鉗口具で完全に封鎖されているように、その決心も、限られた範囲内だけで許される決心であつた。愛子にはすでに人間性は許されていなかった。愛子が求めた、より美しくなるための実験に供された家畜、いやそれ以下の道具、物質（物体）にされたのである。だが、入院第一日目の経験だけでは愛子はまだそれを信ずることはできなかった。愛子が否応なく、それを知り、信じなければならなくなったのは、二日目から本格的に開始された美容訓練の結果である。とにかく二日目から一週間、数々の調査、測定、試験、基礎訓練が行われた。それだけで、愛子に人間が時には物体になれることを信じさせるに充分であつた。

これからそれを紹介しよう。一見にして図表にかけば、最初の一

週間の調査、測定、試験、基礎訓練は次表のようなものである。そして、この効果を強めるために、二日目から組まれた、七時起床のスケジュールが愛子の意志を無視して、完全に履行されたことは当然である。

◇基礎的な美容訓練

①河野副院長指導、桑野ミチ担当の基礎美容法

- a、皮膚の性質の調査とスペクトル分析図表作成
- b、色彩感覚の調査と心電図脳波を使った分析図表作成
- c、皮膚、爪の基本的な化粧法。

②河野副院長指導、デザイナー山形光蔵担当の基礎美容訓練衣の装脱。

- a、羞恥反応曲線の作成と、露出効果の測定。
- b、評準体曲線の作成と収縮コルセットの作成。
- c、衣裳哲学の解説と、スカートヨロメキズムへの導入。

③河野副院長指導、小野教官担当の基礎的美容体操。

- a、身体柔軟度の測定と基本的な柔軟体操。
- b、アクロバット及び器具を利用した基礎的美容体操。
- c、ロボットパートナによる美容ダンス。

◇基礎的な心理的美容訓練

①河野副院長指導、桑野ミチ担当のクスグリ訓練法。

- a、皮膚感覚機敏化装置の施用とその効果の測定。
- b、クスグリ曲線の作成と機敏化度の限界測定。

②河野副院長指導、山形光蔵担当のカユミ訓練法。

- a、皮膚感覚増進用毛管注射の実施とその効果の測定。
- b、カユミ曲線の作成と増進次元の限界測定。

③河野副院長指導、小野教官担当の苦痛訓練法。

- a、単純な苦痛、すなわち鞭撻切開等の苦痛の効果及び実験

結果の展開。

- b、電気鞭の効果と苦痛限界の測定。
- c、電流交感装置と苦痛限界の測定。

◇木村愛子の経験 その六

(河野副院長指導、美容師桑野ミチ担当の基礎美容法およびクスグリ訓練法の一例)

「どうです、覚悟は決まりましたか。」

二日目、素裸の上に例の白い研究衣一枚を着たきりの木村愛子が、河野の研究室に連れて行かれたとき、開口一番、河野副院長から、愛子に浴びせられた言葉は、これだった。河野はさらに語をついだ。

「おや！ 木村さん、貴女は、きのうとくらべ、たった丸一日で、すっかり、カドがとれましたね。もうほんとに立派な、美しい研究協力者です。すっかり見直しました。ふっくらとした頬、しとやかな目、それに、やさしそうな表情、なんという素晴らしさでしょう。ほんとに私に家内がいなかったら……と思うのはいけませんかね。ま、そこにおすわりなさい。いよいよこれから、二日目の研究開始ですね。どうです、うれしいでしょう。おやおや、まだ余り気が進まない。そんなことはないでしょう。こんなに元気な顔をしていらつしやるもの。私は、第一日目のショックが余り強過ぎて、すっかりしよげていらつしやるのじやないかと思って貴女を見るが見るまで心配していたのですよ。もう安心しました。とにかく貴女は昨日より一段と美しく、一段と元気で、勇気がおありのように見えます。うれしいですねえ。いまから、余分の汗や脂を流してうんときれいになりますよ。涙を流せばさらにきれいになりますよ。御安心下さい。」

これが舌刃というのであろうか。河野は例のにくらしい口調で木

村愛子が部屋に入って来るそうそうからみついていた。ここに来るとき、愛子はもうすでにその位のことはいわれると思っていたので、「この野郎」と胸元まで、怒りがこみあげたもののさすがに我慢した。ここで腹を立てるのは禁物と昨日の経験は教えている。そういう態度がより愛子の若さをひきたて、外貌をいきいきとさせたのだろう。愛子の内心打ちひしがれた気持とは反対に、キビキビした外貌に、河野は目を細くして、喜んだ。

「木村さん、今日は美容法ですよ。素敵でしょう。池田さん、先生の桑野ミチさんを案内して下さい。」

河野はてきばきといった。

「とにかく第一目と違って、美容法ですから、やはり序曲はしとやかに始りますよ。あとは成行き次第です。…フ、フ、フ、……。それから、木村さん今日はモデルを使います。そうしないと貴女だけが美しくしてもらっても、どうしてそうなるか、美しくなる方法がわからないでしょう。だからいわば、モデルを使った実習です」

河野がそこまでいったとき桑野ミチが部屋に入ってきた。しかし木村愛子はどうせ河野たちの同類とにらんで、ふりむいても見なかった。河野は委細かまわず

「紹介しましょう。木村さん、担当教師の桑野ミチさんです。本院の美容部長をしています」

といった。木村愛子はそう紹介されると相手を見ないわけにはいかなかった。愛子はうつむいていた顔をあげ、自分の斜め前にやってきた桑野ミチをみて、あっと声をあげるところであった。というのは、紹介された人は、全く彼女の想像になかった人である。顔のツヤから少くとも五十歳は越していないと思われるにもかかわらず、髪は全部銀髪で、しかも手入れが行きとどき、よくカールされた豊かなウェーブが、上品に輝いていた。その上、河野たちとちが

って、顔の容貌はあくまで、温和でふっくりしたまぶたが銀ぶち眼鏡の下にもりあがり、目が小さくて象のようにやさしく見えた。

「こんな人が……わたしを……いじめる」

愛子は、そんなことは全然、想像もできないと思った。しかし、そう思われる人は現に敵側のしかも主任担当者として目の前に立っている。木村愛子は全然何もかも、信ぜられないように思えた。

紹介された、桑野ミチがはじめて口を開いた。

「木村さんですね。私、桑野ミチです。もう五十二になるオバアチヤンです。どうです、ホ、ホ、ホ、驚いたでしょ。こんなオバアチヤンが貴女をいじめるために出てくるなんて、でも、私は決して縛ったり、いじめたりなんかしませんから御安心。御安心。」

桑野ミチはゆっくりとそういって、河野を見て、つつましくやかに笑った。その声を聞くと愛子は緊張が一気にほぐれる思いがした。愛子は心の中で有難うと叫んだ。だが安心はまだ早かったのだ。なるほど彼女は愛子をいじめないかもしれないが、傍には河野がいる。池田フジがいる。しかし愛子はそういった人たちには関心がなかったのだ、ついうっかり忘れていた。愛子は桑野ミチの言葉をきくと、すっかり安心して、すがりつきたいような思慕にかられ、思わず体が前に出かかった。その機をのがさず河野が言った。

「おや木村さん、そんなに早く化粧法を教えてもらいたいの。じや、お希望によってさっそくやりましょう……。池田さん、例のモデルを」

「はい、さっそく……」

池田フジは右手の戸をあけると小さな箱を押してきた。モデル。そういった河野の言葉から愛子ははてなんだろうと不審に思った。多分マネキン人形だろうとひとり合点した。しかしマネキン人形だとすると箱からとり出して組立てねばならない。箱はちやうと人間が腰をかがめて入れるくらいの大きさだった。するとこの箱は

日、貴女が流した汗や、尿などから分析して出した数字で、夫々の性質を示したものです。とくに汗の中の脂肪分の流出度は大切で、これの大小で俗にいうオイグイスキンとか、ドライスキンなどの程度の差が知られるわけですよ。これによると、とにかく貴女は程度

三度のオイグイスキンで、色は色黒二度の部に属します。したがって色黒の程度は軽微で、もし貴女が女優になるとしたらかなり上の部の肌の持主といえます。さて以上の結果を利用して貴女とはほぼ同じ条件を具えているモデルをこれまでの研究協力者の中

から探したところ、山桜さんが見つかりました。

それできてもらったわけです。山桜さんはちょうど、統野性の女の撮影にかかる前でいそがしいのですが、都合良く撮影の暇が二、三日とれたので、このさい自分の美しさにさらに磨きをかけようと、二の返事で来てくれたわけです。どうです、驚きましたか。そう驚かんでもいいんですよ。昨夜おそくこられたので、安眠できるようにと、さっきの箱詰にして、睡眠音楽で安息してもらっていたのですよ。だから心配いりません。なに、縛られているのが不思議だって、そう驚かんでもいいですよ、あれは山桜さんの好みですよ。頼まれたからしただけです。いまに貴女も、あのようになりますよ……フ、フ、フ、フ、そうでしょう。山桜さん」

河野はいうだけのことをいうと、いかにも楽しそうな表情で、話を山桜の方にもっていった。愛子は全く放心といたっていたらしくであった。しかし河野のいったスペクトル分析と汗の話は良く内容が理解できた。やはり美容センターだけのことはあると思った。しかし、それとこの現実との大きなへだたりは……。とにかく愛子は出来事について行くだけがい一杯だった。それだけに河野から話しかけられた山桜が、どんなに笑えるか、愛



M.K.

子はそのことに大きな魅力をおぼえた。山桜美智代はすぐ答えた。「そうですとも、木村さん、私、縛られるの大好きですよ、縛られるのだったら、どんなにきつくても平気。だけど叩かれるのはいいね。ね、河野さん、この人きつと素晴らしい協力者になってよ。いい目しているわね。私がうっとりするくらいだから、小野さんがいたら、目を細めるでしょう」

と、この答えは木村愛子には、これまた予想もつかないもので、彼女の完全敗北を意味するものだった。これを機会にまた悪魔どもにさいなまれるのかと思った。そういう愛子の気持ちに追打ちをかけるように河野の声がきこえてきた。

「それじゃ木村さん、最初に肌の手入れ、洗い方から教えてもらいましようね。なにしろ、山桜さんには二日しか暇がありませんからこのうちに、すっかり基礎的なことは、お教えしなくっちゃなりません。……じやさっそく、桑野先生どうぞ……」

河野はそういつて桑野ミチに愛子を渡した。しかし愛子の恐れに反し美容法はいじめられるのではなかった。愛子たちは皆バス付きの化粧室に案内された。そこで愛子は山桜美智代をモデルに入浴の仕方、マッサージ、石鹸を使った肌の洗い方、漂白パックの方法、さらに肌の手入れなどを習った。桑野ミチは専ら池田フジを使つて、いろいろ説明実施させ、説明したが、愛子には感心させられることばかりだった。しかも昨日とちがって愛子はこの時間中ほとんど自由だったので桑野ミチの説明が良く判ったし、彼女は全く夢中だった。桑野ミチはこう説明した。

「簡単な手入れ用クリームとしては、アストリンゼントクリームかホワイトニングクリームがいいでしょう。洗顔用としてはクレンジング・クリームかオイデルミンまたはオールドルックス。透明化粧水としては、過酸化キユーカンパー、乳液はスキンローションスベツシヤルかレモンジュース。化粧下地としてはフオンデタンかレ-

デボーテがいいでしょう。この美容院独得の方法として、長崎大学薬学教授樋笠氏にたのんで作ってもらった化粧水があります。これはヘチマ水か果汁百CCにアルコール十CC、グリセリン十CC、防腐剤として硼酸二瓦か安息香酸ソーゾー〇・五瓦、ニパギン〇・一瓦を入れたものに、適当な香料をまぜて……香料は貴女の好みに合せましょう……それにアストリンゼントの作用をもたせるためにミヨウバンを三瓦位と酒石酸〇・三瓦を混ぜます。陽やけ防止にはサルチン酸メンチルを二・三%入れます。こうすると夏でも充分使え、汗の分泌に卓効があります」

と。桑野ミチは化粧の話をするとき目を輝かしていかにも楽しそうだった。愛子も楽しかった。とにかく美しくなることは女の喜びなのだ。愛子はそう思う。愛子のこの喜びは美容病院に入院して味わった最初の喜びだった。最初の喜びは幸か不幸か被虐の喜びとはかけはなれたものであったが……やがて愛子が被虐の喜びに身をまかせようになるとは神ならぬ身の全然知らないことであった。

とにかく、ここまでは上出来だったのだ。きょうの美容講習は愛子にとっては完全に女の本能を満足させ、しかも彼女の感情をくすぐり、喜ばすのだった。木村愛子は今は自分が昨日あんなにひどい目にあったということを完全に忘れていた。河野たちは忘れさせようとしたのだ。それは成功した。いまや河野たちは愛子が充分計算されたワナにかかるのを待っていれば良かった。彼等は愛子の目の輝きから、彼等のワナに愛子が充分乗ってきたことを知った。彼等のワナとはなんであったか。その一つは、山桜美智代であり、その次の一つは皮膚感覚機械化粧装置の施用であった。

河野たちはモデル山桜美智代のクサリを決してとらなかつた。ということは強制的に山桜美智子を愛子に取扱わせ、愛子に縛られた女に対する関心を深めさせ、山桜美智代は、縛り全身入浴させられる必要もあって、手足のいましめは、細目のクロームメッキの手

錠、足錠にかわり、同じクロームメッキのクサリでつながれた手足間の間隔も箱詰めの時よりはかなり楽にのばされていた。しかし、依然として、自分の体が自分でどうにもならないことにはかわりはなかった。河野は池田フジと木村愛子の二人に、そんな山桜の体を洗わせ、桑野ミチの指導で手入れをさせた。木村愛子は最初仕方なしにその仕事に従事した。しかし、化粧法に熱中してくると次第に動きは活発となり、しかも磨かれる山桜の肌が次第に美しくなるのが目に見えてわかると、木村愛子は、感にたえないという顔でその肌に魅入った。山桜美智代は満足そうな微笑を浮べていた。多勢の人からオモチャのように体をとられながら彼女は安心してきついている。木村愛子の顔にちらりとシツトのかげが走った。河野たちはその心境の変化を見のがさなかった。木村愛子はたしかに不思議な精神状態にあった。

もし私が山桜さんのようにされたら……彼女はそう思ってみた。そう思ってみるだけでも恐ろしいことだった。だがもしそうされたなら果して自分は喜びうるだろうか。彼女はそう考えて、そしてあれこれ思いまどっているうち、ふと山桜美智代のポーズの中に、きのう愛子が受けた「生活に必要な基礎訓練」のさい感じたアキラメの感じと、似たような点があるのを見出した。この発見は愛子にとっては大きな驚きだったが、河野たちにとっては大成功といって良かった。「私もいじめられるとあんな手放しの態度になるのかしら」という愛子の考えは、そのままいじめられる喜びを知る入門手形になるのだ。とにかく、河野たちはこういう愛子の態度をみて、木村愛子の美容訓練に再び苦痛を導入して良いということを知った。そこで彼等はちよつと休憩してその間、そのことについて話があった。そして、すでに愛子が入浴している体であるので山桜のように縛って入浴させることはやめそれより、全く相手に意識させずに苦痛を導入する方法を、とることを決めた。したがって木村愛子

はここで彼女の全く知らないうちに心理的美容法の一であるクスグリ訓練法を併用されることになったのである。

一時間ばかりの休憩が終ると、桑野ミチは、「肌の手入れが終ったので、手足のツメの化粧法にかかりましょうね」とやさしく誘った。愛子の肌の手入れと同じようににげない気持でこれを受けた。すると河野は、

「じゃ、山桜さんは当分邪魔にならないようにその柱でみてくれません、あとで貴女にも……ね、わかっているでしょう」と山桜に目くばせした。山桜が柱の傍にいざっていくと、池田フジが心得たようにクサリをパイプの柱に止めた。木村愛子はそんな美智代の目の前で、足の爪化粧法を受けることになったのだ。

桑野ミチが口を開いた。

『手足の爪と口紅の色は皆、同じのが欧米では常識なんです。だが現在の日本では、デタラメですね。それでも調和がとれていればいいんですけど……でんでバラバラで……それはそれとしてサンダルからのぞいた爪には、くつきりとした色をつけた方が美しく見えますよ。木村さん、貴女なら、ナチュラルの桜貝の色か、カラーレスで爪の色をそのまま生かすかのどちらかがいいでしょう。足の爪は、まず爪の型を整え、それからバケツかタライにうすい石鹼液を作って、その中に足先きを入れて洗います。その水分をきれいにふいて指の股の間に脱脂綿を入れます。さ、木村さん、足をその台の上にのせてごらんさい。きようはもう入浴してありますから、ここまでは省略しましょう。』

桑野ミチは愛子をうながした。愛子はなにげなしに目の前におかれた白い陶器の台の上に足をのせた。つるつるしたきれいで美しい陶器の台の上に足がのりよいように金属のペロがついており、愛子はいながされるままそのペロの上に足をのせた。桑野ミチはその足の上に上体をかがみこむようにしながら説明しつつ、手を動かした。

「脱脂綿を入れて指と指とがつかないようにしたら、ネイルブッシュヤーで甘皮を押して、キューティクルニッパーかシザーで甘皮を切ります。爪がいびつなのは、この時に直します。デコボコの表面は……」

桑野ミチがそう言ったとき、思わず木村愛子は足でけあげた。それは全くあつという間もない出来事だった。その足が桑野ミチの出していた手先をしたたかかった。

「アッ」声にならない声をこもらせてけあげた当人の木村愛子が驚いた。彼女は足の裏に急に落雷したようなショックを受けたのだ。その反応でけあげたのだ。

「まあ、なんてことを」

桑野ミチが腹を立てた。「まあまあ」と河野たちがおさえた。その河野も立腹しているらしかった。木村愛子は全く呆然としていた。彼女にはどうしてそうなったか全然理由がつかめなかったのだ。「もしや」と思っぺ口をみてみたがそこに理由となるなんの変化もなかった。おかしい、とは思いつながら、激しい周囲の視線に射すくめられると、愛子は頭をさげて「すみません」と口の中



でもごもご音を出しながら謝った。愛子は「こんな時に口がきけたらなア」と思う、その愛子の耳に「早く足をのせるんだ」という河野の叱責がとんだ。愛子は恐る恐るのせた。変化はなんにもおこらなかった。なめらかな金属の気持よい肌ざわりが、好感をもって愛子の足をとらえた。講義はまたはじました。

『デコボコの表面はエメリーボールトの細い目の方を爪に平にあて削って下さい。平な爪になります。両方とも爪がきれいになったらブラッシュをかけ……ぬる間湯で洗い……ユースホワイトかスーミングクリームをつけて軽いマッサージをします。この時』

ああこの時、またしても愛子は足の下に電撃を感じ、無意識に桑野ミチの顔をけあげた。愛子はハツとして顔を両手で押えた。愛子はこんどこそハッキリとなにか原因が、何か意図があったのを知った。だがそうとわかったとどうなるものではない。愛子が顔を伏せた途端、河野副院長のはつきり怒気をふくんだ声が背にふりかかってきた。

「どうしたんだ一体！ 教えてくれ

る人の手を一度ならず、顔まで蹴って！　そういう奴はこうしてやる」

河野がめくばせすると、池田フジがとんできて、愛子の足首に金属性の足カセをはめ、白い陶器の上のペロの下から、丈夫な紐をひきだして、それで脚を台に固定した。

「こうしたら二度と蹴られないだろう」

河野はさも増々しげにいった。それから桑野ミチの方を向いてさもすまなさそうにあやまった。その詫言は巧妙な河野の演出に外ならなかった。愛子は一生懸命抗議しようとした。しかし抗議はできない体であった。愛子は河野の声をききながら、心では悪魔め！　悪魔めと叫んでいた。足のシヨックも河野の演出なんだ。と思ったがそれを証明することは許されてない。たとえ証明できたとしても皆グルなのだ……愛子の胸は再び怒りと絶望ににくりかえった。しかし桑野ミチの講義はそれとは別に続けられて行き、前方一面に張られたガラスの鏡にはたしかに刻一刻美しくなっていく自分自身の姿が、あわれなとらわれものの姿が写っているのを愛子は見ないわけにはいかなかった。

『この時……爪の表面にクリームがつかないように良く注意をして下さい。爪の恰好とおりというより、自分で爪を創作する気持で……』

そこまで話しが進んだとき、第三回目のシヨックがやってきた。愛子は、そのシヨックで、こんどは足をけあげることができなかった。ので、思わず身をそらした。するとシヨックは軽い電撃のように一度に身体をつきあけて通りすぎると、そのあとから不思議とむずがゆいようなこそばいさとなって足のひらからつきあげてきた。

K F、F、K、K、K、F K F K……彼女のプラスチックをはめた口とのどが思わずなった。そらした体をちぢめると思わず両手で桑野ミチの体をおしのけ、足にしがみついた。そして少しでも楽

になるようにと、無意識的にひもをはずそうとした。するとそれを待っていたとでもいうように河野と池田フジがとびかかり愛子の両腕を後にねじまげた。そして山桜美智代がされているのと同じ手錠をピンとかけクサリで足首につなごうとしたがそれをやめ、ダラリとしりの上にたらしめた。すると不思議にこそばゆさが止った。

「なんどいっても聞きわけがない。そんなさまでどうして美しくなれるものか」

河野の罵声がとんできた。しかし愛子は電撃シヨックとそのあとに続く、くすぐったさが非常に強烈であったので……ほとんどその罵声を罵声と感じないくらいだった。

木村愛子はこうして再び手も足も束縛されたのだった。こうなった今となってはどうしてこの奇妙な刺戟を避けることができよう。甘んじてこの奇妙な美容法を受けなければならぬのだ。なるほど愛子にとって桑野ミチの講義は素晴しかった。素直に彼女の心にはいっていった。しかし足の刺戟はそれとは全く別のものだった。それは虐めるために作られたもので、美容法とはなんの関係もないように思われた。したがって木村愛子にはそのつながりが理解がいかなかった。いくはすはない。その足の刺戟は河野が考案した虐めるだけの目的をもった道具だったのだ。だから、虐められれば虐められるほど、卓越した効能を示すもので、もともと美容法と関係がある筈はなかった。それがまた河野のねらいだったのだ。考え疲らして混乱におちいらすだけでなく、そこから女のあわれさを引きだそうとするために……とにかく河野たちはそのくすぐったさに耐えさせることによって心理的美容法への導入を行おうとしていた。苦痛学入門第一課である。別の表現をかりるなら、金属をミガいてつやを出すとき、磨がかれる金属が生き物であるとするなら、当然感じらるう苦痛を愛子が受けている……と理解すればよからう。

桑野ミチの講義がまた始った。

『自分で爪を創作するつもりでエナメルをつけます。足もとが引緊って見えるのに六号クリームソン、七号カルミン等の色があります』

桑野ミチは講議が終ると右足から左足の爪の順でいいいに六号クリームソンのエナメルを塗っていった。そして全部塗り終ると突然また例のショックとこそばゆさが起った。愛子は左足を台に両手を後に固定されていたので、頭を前後左右にふってこそばゆさになえた。そのためうつむいていた桑野ミチの体に愛子の頭がふれ、桑野ミチの体はよろめいた。あついに木村愛子は完全に河野副院長のワナにかかったのだ。木村愛子は引き据えられると四つの手足首が一緒になるように二人のためにクサリで緊縛された。そして、台の上からとりはずされたベロのような道具が両足のひらに。さらにかめの子型のものが両脇の下にとりつけられた。河野は勝ちほこったようにいった。

「木村さん、貴女はともこの機械がお気に召しのようですね。この機械の名はなんといましようか……世界で一番たのしい刺戟用バイブレーションですかね。それとも、そう、ここでは女性感覚機敏化装置、または皮膚感覚機敏化装置となくしますかね、存分たのしむんですね」

そういつて電気のスイッチを入れると例の気狂いになりたいほどのくすぐったさが体中にわきおこってきた。木村愛子は折角きれいになった体をくねらせ、悲鳴をもらしてもだえたが許してもらえなかった。それのみか河野らはそういう愛子を大きな台の上に固定して、手の十本の指にもエナメルをゆっくりと塗るのであった。

一方小桜美智代の方はどうだったか。河野たちは愛子への仕事が一とおきおわると、のたうつ愛子の虫のような体を床にころがしたまま小桜美智代の体にその機械をはめた。美智代は待っていましたというような表情であった。

ここで皮膚感覚機敏化装置について説明するとこれには二種あった。一つはバイブレーションを利用したもので、この方は使用によって習慣性となりクスグッタさを通減させる恐れがあった。今一つは一種の電波を利用したもので、それにより人間のこそばゆさを感じる細胞だけを刺戟する方法で、この方法は人間の体中にながれる神経作用を電波の形でとらえ、それにより自動調整できるように考察されていた。それでクスグッタさを通減させる恐れはなかったが機械が複雑で故障が多かった。河野たちはこれらの機械を俗にクスグリマシンまたはクスグリウオッチと呼んでいた。蓋し、機械の性質を存分表現した呼び名といえよう。とにかく心理的な基礎的美容訓練の第一課といわれるこのクスグリ機によるクスグリ責めは、河野副院長の巧みな演出に存分効果をあげていた。しかもクスグッタさの程度も一から十までの段階があり、木村愛子のは一、小桜美智代のは五で愛子の五倍の強さだった。いいかえればそこまで訓練が積んでいるわけである。とにかく、こうして完全に薬籠中のものとなった犠牲者の悦虚姿態を例のとおり別室から小野教官が懸命にカメラの中に収めていた。

そのころ責められる愛子は再び夢の世界にいた。愛子はやはり夕べの夢は正夢だと思った。足のうらと脇の下から正確につきあげてくる刺戟は間断なく血をふきだすような強さだった。次第に目の前が真紅になって行く道程が良くわかった。物理的にいえば、うっすらとつぶったマブタの裏の血管が愛子の心にそんな幻想を起す誘因となったことは充分察しがつく、だが心理的にいえば自分の虚栄心にかかられた、わずかの油断から、浸入した敗血症菌によって、全身の毛穴から血が吹き出しているものと理解された。だから彼女は時には目をあけ、時には目をつむってワラでもつかみたい気持で紅い無限の空間を飛翔した。そしてその空間を流転するうちにふとくすぐったい気持が、コソバユイ苦痛が突然消えて、一つの甘美なリズム

ムにかわるのを知った。思えばこれが木村愛子の再生の一步となるものだった。もと言葉をかえていえば彼女の心にねむっていた女性特有のマゾ心理が、マゾ感覚がはつきりと目をさましたのである。彼女はそれ故、昨日のように決心はできなかった。はつきりと苦しみを意識し、その苦しみの中にひそむ甘美なリズムをとらえたのであった。愛子はそのリズムをとらえたとき愛子は自分の横にころけ回ってこの皮膚感覚機敏化装置にさいなまされている小桜美智代の姿を見出すことができた。小桜美智代の髪はみだれ、口は大きくひらかれ、肩でひゆうひゆう息をつきながら、彼女は動物じみた声をあげていた。そしてたえず、まるで毛虫が足でふみつけられたときのようにうごきまわり、はいまわって片時もじっとしていなかった。愛子はどクサリでしめつけられていなかった美智代は十分それだけの自由がきいたのだ。美智代の見事に発達した肉体は、とくにそのポリウム豊かな尻はたえず一定のリズムにのって運動するよう電波が送られていた。木村愛子はその姿を見ているうちに、小桜美智代が本当に苦しんでいるのか、楽しんでいるのかわからないように思えた。そして愛子の感覚で判断するなら楽しみの方が勝っているように思えた。……というのは愛子の性質はもともと楽天的な性格をもっていたので、そんな美智代の姿を見て、楽観的な判断が起ったのだ。そしてとっさにそんな判断ができるようになったのは、たしかに木村愛子が生長した。すなわち身にうけた苦痛によって一種の耐性を作られたからであろう。それにしても木村愛子には有名で地位も、身分もある女優が、求めてこの悦虐を味わいにやってくるまでの心理をどうしても理解できなかった。しかし河野に脅迫されればそうならざるを得ないというていどの理解は愛子にはついていた。しかし河野副院長は、別にそうする必要もないことを知っていたのだ。ここを卒業した人は必ずといっていいほどマゾヒストになるという自信があった。小桜美智代はそのいい例だった。そして

いまや第二、第三のマゾヒストが作られている。愛子は、自分も悦虐の底に沈みながら、小桜美智代の責められる姿を一瞬美しいと思ったことは真実だった。

そうこうするうちに彼女の気持は次第に落着きをとりもどした。木村愛子はいつしか、全く彼女の知らない間に例の装置をとりのぞかれていた。しかもそれだけでなく、手足のいましめもとかれ床にころがされていた。床は真紅なじゆうたんであった。美しくてやわらかい毛織物の感覚が肌に気持よかった。小桜美智代の姿もすでなく、木村愛子は広い部屋に一人とりのこされていた。しかも素裸で……しかし体の上には美しい白の大きな布がかけてあり彼女はこのシートとジュウタンの間にはさまれてねむっていたのだ。そうと知ると木村愛子にはわかに羞恥心を覚えた。自分が、のたうったとき、どんな姿をしたかと思うと、全く消え入りたい気がした。だがすべてそんな感情を押殺して時は流れていったのだ。木村愛子はいつしか白いシートの一端を口にくわえ孤独な思いに耐えていた。

(この項終り)

訂正 十月号百五十五頁下段二十行上から十八字目「尖がり」は「孔」の誤りにつき訂正します。

△お断り▽○代理部分譲品目録は都合により中途から更に新しい作品の追加を企りましたので、まだ印刷が出来上っておりません。お申込下さった方には出来次第お届けいたしますから、それまでお待ち願います。○如何なる用件でも発行所に対する直接訪問並に電話を掛けられることは固くお断りします。御用件はすべて書面にて御願います。編集者に対する面会は、事前に書面にて打合せの上にして下さい。それ以外は応じられません。



△告白▽

募情のあり方

桂 弥 生

私が今から書きますこと等は、世間にありふれたことかもしれません。とりたてて殊更告白等とぎようぎよろしく、書き送るほどのことではないかもしれませんが、でも、私にとっては自分の身を切られるような切ない思い出なのです。それで御誌だったら、よし載せて頂けなくとも読むだけぐらいはして頂けるだろうと思って書いてみました。甚だ申しかねますが、若し御掲載にならない場合は御手数ながら御返却下さるようお願いします。郵便切手十円のを二枚同封しておきます。住所と本名は封筒に書いてあるとおりです。誌上発表の際の仮名は、かつら、やよいとお願いいたします。年令は二十四才です。

私は中学校を卒業したときから、都会へ強

いあこがれを持っていました。

学校の成績は先生からもほめられるくらい非常によかったのですが、勿論家の都合で上の学校へゆくことは出来ませんでした。家は農地解放で小作農からやと自作農になったという五反百姓で一番上の兄が稲作や野菜作りをしていました。両親は健在でしたが、夫婦仲が悪く、母は二番目の姉の嫁ぎ先へ厄介になつて百姓の手伝をしていましたし、父は自分で掘立小屋を山の中腹に建てて蜜柑作りをしていました。

私は学校を卒業すると、兄の子供の守をしたり野良へ出て百姓仕事の手伝をしていました。そんなわけで中学を卒業した時から都会へ出てみたいアといつも思っていたわけ

です。三人の姉は皆嫁いでいましたし、自分一人がいつまでも兄夫婦の厄介になっていたのが耐えられなかったのと、新聞や雑誌で見る都会の華やかさが、たまらなく私を誘うのでした。ネオン輝く都会の雑沓、一生のうち一度はそういったところで暮りたいものだと思わずにはいられませんでした。殊に、村から大阪へ出ている友達から手紙を買ったとき等、もういても立ってもいられないような気持ちにかられるのでした。

夕方、もう薄暗くなった山沿いの沼で鍬を洗っているときなど、目の下を汽車が窓から明るい灯をひらめかしながらい汽笛の尾を引いて走ってゆきます。あの汽車に乗りさえすれば大阪へ出られる。そう思うと、明日にでも家をとび出したい気持ちに胸がしめつけられます。しかし両親や兄姉に相談しても反対されるにきまつていきます。そうとは分つていても、私の都会へ行きたいという気持はたかまつてくるばかりでした。

都会へさえ出れば、もっといいものが食べられる。それから、もっといいものを着ることが出来る。第一、今のうちに泥まみれになつて汚かなくともいい。映画も見れる。それにもまして、私の心を駆り立てたものは、大阪へ出ていったきり便りもくれない彼に逢えるかもしれないというはかない望みでした。お互いに許し合った仲なのに、消息さえ知ら

せてくれない彼、一体どうしているのでしょうか。大阪へ出て何んとかになったら、きっと呼び寄せるからとあの様に固く約束してくれた彼なのに、行ったきり手紙一本くれないとは、どうしたことでしょう。大阪へさえ出れば、なつかしい彼に逢うことが出来るかもしれない。いや、大阪へさえ出れば、きっと彼に逢うことが出来る。そう思い込むようになりました。

そう思い込むと、私はもう矢も楯もたまず、両親や兄姉に書き置きして大阪行きの汽車に乗ってしまいました。大阪での目当ては、友人のところでした。朝大阪駅へ着いて、やつのこととてその家を探しあてた時は、もうお昼すぎでしたが、運のよいことに彼女は、アパートだというその部屋にいてくれました。所書きには奥田方としてありましたが、そこは板張りのバラックを小部屋に割った貸室で、四帖半の陰気な薄暗い室に友達と向かい合って坐ったとき、友達からの便りと現実との喰い違いを先ず味ねばなりませんでした。彼女は村にいた頃とは、すっかり変り派手な化粧をしていました。とにかく、その日は一晩泊めて貰いました。そして、あくる日、夕刊に出ていた募集に応じて、三ヶ所程あたってみました。アルサロ、スタンドなどでしたが、皆、着物や服装がないので駄目だと云われ、仕方なくすく／＼と帰ってきました。

彼女の借りている四帖半の部屋でさえ、権利金は一万円に家賃が二千円とのことでした。それくらい貯金は持っていました。蒲団や炊事道具と、とても手は廻りませんし、第一着の着のまゝで出て来たことですから、これからの服装にも困ります。都会の恐ろしいことは友人からも、くどくど聞きましたので、固いところをと思って住込の女中に行こうと決めました。昼はまだよかったです、夜は彼女が勤め先から男のお客を連れてくるので、私のいることが大変邪魔になるので、私は三日目の朝、意を決して、夕刊の広告で見た〇〇金融という所を訪ねました。そこで大原という人に色々事情を尋ねられ、結局住込月三千五百円で雇って貰うことになりました。

表は店になっていて、大原さんを含めて五人の事務員が机に向って仕事をしていました。二人か三人は殆ど外へ出ているようでした。私の仕事は奥の各部屋の掃除と、五十六のでっぴりとした旦那様の身のまわりを世話をするのでした。旦那様は昼はちよっとお店へ顔を出されますが、殆ど大原さんに仕事の方は任して、御自分は新聞や雑誌を読んだり、小鳥の世話をしたり庭を眺めたりするだけで過ぎました。時折外出されることがありましたが、家におられる間は、まことに單調な生活でした。旦那様は無口な方でした

が、特に気むづかしいという風でもなく、私にとっても気楽な勤め口でした。

私は、そのうち着物や洋服を作ってから、ゆつくり好きな勤め口を探そうと思ひ、それまでの我慢だと思ひついでいました。

三ヵ月ばかりはわけなく過ぎました。ところが或る夜のことです。昼間の疲れに私は三帖の与えられた部屋でぐっすり眠っていました。旦那様は午後から外出していられたので夕食の準備だけして、十時すぎまで待っていました。ふと目をさしますと、お酒くさい生暖い息が顔にかかっているではありませんか、はっとした私は咄嗟にはね起きようとしたが、毛むくじやらの太い腕がしつかりと肩先を押え起き上ることも出来ません。私は思わず「誰かアー」と叫びました。しかし言葉が半ばも出ないうちに、大きな掌で口をがっちり蓋されてしまいました。

相手の男は、日頃無口で親切でおとなしい筈の旦那様でした。彼は本宅に妻子を置いてこの金融会社に別居しているのだということがあとでわかりました。それからの私は、もう旦那様の云いなりになる弱い女になってしまいました。田舎の何にも知らない私は、いつの間にか旦那様の好みに馴らされていったのです。然し、こうした変則的な生活も長続きはしませんでした。やがて奥様にこのこ

とが知れ、私は旦那様のいない間に、奥様から僅かの手切金を頂いて暇を出されました、憎くて憎くてたまらない旦那様、しかし、どうしたのでしょうか。心では憎んでも憎んでもあき足りない旦那様でありながら、独りでいるとき慕しい気持ちが起ってくるのはなんとしたことでしょう。

然し私の慕しい気持は旦那様に対してでしょうか、いや、そうではありません。私の慕情は、あの旦那様の変った御趣味なのです。

九雅節夫氏に寄す

「三浦右衛門の最後」

佐々木ツトム

十一月号の奇クで、九雅節夫氏が「特異な角度から③」の中で菊地寛の短篇集について本誌上で紹介して下さるのではないかと云われて居りますが、それは「三浦右衛門の最後」という小説のことではありませんか？

右衛門は十七才の美少年、前髪を二つ分けた下から涼しい眼が輝いて居ります。男らしさの中に女らしさがあり、凛々しさの中にしおらしさがあるという容貌風采の国持大名の小姓です。時は戦国の天正年間、処は駿河の府中から遠からぬ田舎です。炎天の下を太股

私は御誌をはじめて見るまでは、そのことについては何も知りませんでしたし、旦那様お一人の変った御趣味だと思っていました。

あの頃は嫌だ嫌だと思っていた旦那様の御趣味が、今ごろになって、お暇を頂いてから慕わしくてならないというのは、一体どうしたことなのでしょう。縄で縛られるというところが、何故、このように切ないまでに私の身体や心をかきたてるのでしょうか。

私は、せめて、この手紙を書くことによつ

から血を流しながら歩いて来る一人の美少年がありました。これが今川義元の寵臣、右衛門です。

右衛門の最初の受難は、先ずその近辺に遊んでいた腕白小僧達に道を聞いたことから始まります。高天神への道を聞くと、子供達が「天神さんのことけえ」と云ったものだから傲慢な右衛門の勘に障り、「たわけめが！」と子供達に浴せながら通り過ぎようとししました。処が右衛門がまごまごしている子供の一人を足蹴にしまったのです。その子供は

て自分の気持をしずめたいと思って書き出しましたが、旦那様に御厄介になっていたときのことを、これ以上、詳しく書く勇気がありません。私に、もっと才能があったら、今の自分の気持を云いあらわせるのですが、これだけ書くのもやつのことです。

落着きましたら、只今の私の生活についても書いて送りたいと思います。申しおくれましたが、一度国へ帰りました私も、最近、再び大阪へ出てきて、或る家へ住込で働いています。

よろよろとよろめいて溝の中に落ち、ワツと泣き出しました。そのために他の子供達の怒りを買ひ、子供達は右衛門に襲いかかって来ました。武芸の心得のない右衛門は、殆んど抵抗らしい抵抗もせず、手もなく引き据えられてしまいました。子供達は専制者を倒した革命者のように得意でした。「奴に獲物を喰わしてやるけ」子供達はニヤリと悪意のある笑顔を交します。そこへ一人の老人が来ました。そして、この美少年が今川の落人であることを知ります。当代の今川家には多少の恨みはあったが、何といても先代の仁政に対する感謝の気持が、どこに残っています。その上に美少年の落人です。老人は子供達に手ごめになつて居るこの少年に同情して、子供達を叱り飛ばします。しかし右衛門が「館の三浦右衛門をよくも手ごめに逢わしおった

な！」と云ったことから、丁度そこを通りかかった村の若者達が子供達に代って右衛門を取り囲みました。「おのれが右衛門か！」一同ハッとしました。それ程、彼の名はこの辺りまで知れ渡っていたのです。今川義元の子、氏元が日夜、遊蕩に耽けて国政を顧みないのも、この右衛門が煽動したからだとの噂です。又、義元恩顧の忠臣が続々と退身したのも、彼の讒訴のためだといわれ、今川家の心ある人々は彼を呪って居り、彼の悪評は駿河一國の隅々にまで響いていました。「右衛門奴なら何故館のお供をせぬのじや」とののしられた右衛門は、顔色蒼白に変じました。彼は府中を落ち延びる主君の供をして二、三里も行った時四、五町後の街道で織田勢の甲冑が光るのを見て、今にも背中に敵の槍先が突きささるような気がして生きた心持がせず、主君を捨てて逃げて来たのです。「見せしめに剝いでしまえ」三、四人の若者達が飛びかかり忽ちの中に裸にしてしまいました。

『彼の美しい肉体は六月の太陽の下に忽ち色が変わって行く程も白かった』と菊池寛は述べています。

「百姓を苦しめたのはこいつだ、右衛門めを殺してしまえ」更に酷い叫びが聞えます。若者の一人が大地に倒れている右衛門の首を締めてつけました。右衛門は手足をバタつかせて苦悶します。その時、先程の老人が憐れに思

って「命を取るまでもない。放してやれ」と云います。若者の一人弥惣次は土足を右衛門の肩に上げ「命が惜しいか、命が惜しいければ土下座して謝まれ」と蹴りました。若者達は如何に柔弱でも武士である以上、自分達には頭を下げて謝るまいと思っていました。右衛門は「命が惜しい、命ばかりは助けてくれ」と、くやし涙をぼろぼろこぼして地面に手をついて謝りました。「頭の下げようが足りない」と若者に頭をこづかれ地面に顔をつけた右衛門の泥だらけの顔を見て、周りを取り囲んでいた人達はドツと噁し立てました。「さあ早く立ち去れ！」二、三人に突き飛ばされて、右衛門はよろよろと立ち上り美しい顔を泣き腫らし、褌一つの裸体でトボトボと西の方へ歩いて行くのです。

しかし第三の受難はもっと酷たらしいものなのです。高天神の城主、天野刑部のため右衛門が殺されるのです。捕えられて刑部の前に引据えられ「命が惜しいか」と聞かれ「命は惜しうござる。命ばかりは助けて下され」と云うのです。これは戦国時代の武士として稀有の言葉です。その当時の武士は如何にして潔く死ぬかということにのみ念頭にあったので、彼の哀訴は刑部の家臣達にとっても奇蹟のことです。彼等は一齊に笑いました。刑部は右衛門の哀訴を聞いて、心の中で残酷な心理が起りました。「それ程、命が惜しけれ

ば助けて遣わそう。しかし、ただでは助けられぬ。命のかわりに腕一本所望じや。それが承知とあらば助けてとらす」家来の一人が右衛門のそばに寄って「殿の御言葉を聞いたか返答せよ」と云うと、右衛門は返事のかわりに左の手を動かします。「ならば左の手を切れ」と刑部。太刀が閃いて右衛門の片手が飛びます。「片手でも命が惜しいか」右衛門は苦悶しながらうなづきます。「片手では安いぞ、両手を切るなら助けてやろう」右衛門は又うなづきました。太刀取りの気合と共に右衛門の右の腕も血糊を引いて三間ばかり向うに飛びました。刑部は又、叫びました。「両手でもまだ安いわ、右の足も所望じや。右の足を切ったならば命は助けて遣わそう」生きた埴輪のようになった右衛門は、生きも絶え絶えになりながら、途切れ途切れに「命ばかりは助けて下され」と云うのです。太刀取は左手で右衛門の体を上に持ち上げるようにして、右足を薙ぎました。太刀は余って左足に半分斬り込みました。「右衛門、それでも命が惜しいか」しかし、右衛門は口をもぐもぐさせるだけです。其の時、刑部は「それ」と目くばせしました。太刀取は太刀を振りかぶって「えい」と首をはね上げます。首は砂の上を二、三尺ころころと転がって、止つた処で口をもぐもぐさせました。

まあ、筋書はこんなような小説です。九雅様がお氣に召されたら幸いです。

姫ひめ鏡かがみ

雪影の章

剣持八重、これが私の本名である。私は美徳女子高校の二年生の時、始めて私の出生秘密を知った。お常小母が何の目的で今更それを私にあかしたのか理解に苦しむ。しかしそれはどうでもいい事だ。私は驚きも泣きもしなかった。却ってお常小母の方があきれていた位のものだ。先ず、私の歴史から語ろう。それはのろわれたいまわしい歴史である。

四国の屋根といわれる剣山々脈の麓に抱かれた谷間の中に、凡そ三十六の部落が点在する。東西I村に分割されて、それらはI県のチベットといわれているが、寿永の昔、安德帝を奉じて平国盛が壇の浦から落ちのび給うた地と伝えられ、九州五箇庄と共に名高い平家落人伝説につつまれた山岳畳々たる秘境である。そうした一つ剣持部落の剣持家が私の家である。代々の庄屋も兼ね文字通りの旧家

桂

牧次郎

であつたが私には全て興味の無いことだ。死んだ祖父が蔵の虫干のとき何やら古文書をひろげては老眼鏡の間からためつすかめつして、大切そうに見入っていたのだけは妙に覚えている。

祖母はきびしい人であつた。私の母はこの祖母に間接的に殺されたのだつた。母は純日本の美しい人で柔和な人だつたらしい。母は所謂地下(他国者)ではあつたが、父が陸軍士官学校時代に知り合ひ強引に家に入れて妻としたものだという。よくこんな山奥に嫁いできたものだと思うが、これも戦争という異常な空気がそうさせたものだろうと考えていた。父はすぐ戦争にいった。翌年私が出生した。だから、父は全然知らなかった。私が女であつたので祖父をはじめ家族は不愉快だつたという。どうやら、私は招かれざる客だつたらしい。「生れてすみません」というのは全く私のことである。数え四つの時終戦になつた。間もなく戦死が確認された。夕日の美しい日だつた。母は祖母の部屋によばれた。出て来た時は目をまっ

赤に泣きはらしひどく沈んでいた。その夜、母は仏壇の前で菊一文の短刀で自害した。

その短刀は父からかねて渡されていたものとも、祖母から渡されたものともいうが、真偽は知らない。父の弟が跡継ぎになった。私は母の遠縁であるというT市のお常小母の所へ引取られ、そこで生長した。お常小母には子もなく、夫は何年前に亡くなっていた。死んだ母が私にのこしてくれたのは愛用していた姫鏡台一つだった。だから天涯孤独の私もこの姫鏡と共に養なわれたのだ。——以上が私の知っている私の過去の全てである。

それなのにどうしたというのか、お常小母はいうのである。

『八重ちゃん、びっくりするでないえ。今までお前に隠してたんだけど、もう、お前も年頃だし、ものの判断もできない年令でもないからね。言っておくんだけど……』

『ナニ、小母さま』

『お前ね、実は、お前の母様の秘密のことなんだけどね、お前は剣持家の子ではないのよ』

『エ、何とおっしゃったの、小母さま』

『恥かしい事なんだけど、やはり本当の事は本当なんだから、気を沈めて聞いておくれね』

と、お常小母の語った秘密の話というのは、次のような奇怪なものであった。

十八年前、東京のさる陸軍の高官のお邸で起った話である。

暗い陰気な晩であった。生憎、父は出張中で、書生も帰省中だったので、邸の留守をしていたのは女学校を卒業したばかりの美しい娘とばあやの二人きりであった。

『ばあや、今夜は早く休みましょうね』

風呂から上ったばかりのうっとりとした桜色に上気した体を今しも着物に包みながら、娘はやさしくふりむいた。だが、ばあやの返

事はない。急いで身づくろいをして部屋の外に出た時であった。ぬっと一人の怪漢が立ちふさがった。

『シッ、声を立てるな』

娘は棒立ちになってすくんだ。男の手にはピストルが鈍く光っていた。反射的におずおずと手をあげた娘は肩先を小突かれながら寝室へ案内させられた。そこで邪慳に突とばされてヘナヘナとくずれ伏した。それでもキッと男をその黒い瞳で見返しながら

『お金なら差上げます。後生ですから、手荒な真似だけはなさらないで——』

『フン、五升も六升もあるか、手荒な真似が出来んように強盗がつとまるか』

『お願いです。かんにんして——』

『まだ、何もしようと言ってはおらん。オヤ、ふるえてるのか。オイ、お嬢さん。命をとるとはいわぬ。暫時、俺のいう通りにして貰おう』

『ナ、ナニを私にしるとおっしゃるの？』

『先ず、これだ』

男はポケットから一束の真新しい麻縄を取りだすと、シユツとさばいてみせた。鮮かな手付だった。

『まあ、おくりになるの、私を』

『おくりになるダト。成程、ちがいねえ。強盗様がおくり遊びすのだ。手を廻せ』

『お許しになって、ああ、ばあや……』

『ババアは勝手にねむって貰っとる。下手にバタバタすると一発見舞うぞ』

『どうか、お助け下さいまし』

娘は哀願した。しかし、男が更に受付けないのを見ると、きちんと正座すると、観念したようにキュッと唇をかね、自ら白い両方

の腕かいたを後にまわしながら男の方へ背を向けて

『どうぞ、お手柔かに——』

と強盗に会釈した。一寸たじろいだのは男である。が、すぐに言い返した。

『ウン、流石は陸軍少将閣下の御令嬢だ。シヤレた小笠原流よ。では、一つ、お言葉に甘えて、方円流といこう』

慣れたものだ。娘が高手小手の本繩に痛々しく縛められるまで二分とかからぬ早業だ。その間、娘は二度程前にのめりそうになったが声は立てなかった。

『どうだね。縛られた心持は？ 身体がしまって味なモンだろう。』

『……………』娘の肩がふるえている。胸がぎゅっとしめられてそのまま息がつまりそうになっていたのだ。『コラッ何とかいわないか？』

足でけりとばされたので斜めによるめいた。

膝がくずれてなまめかしい長襦袢がのぞいた。裾も乱れて白い足が見えた。取りかえたばかりの白足袋が男の眼についた。残忍な笑をもらした男は片足の足袋をぬがすと、それを娘の小さくて品のよい口の中へ丸めて押しこもうとした。娘は烈しく首を横にふった。

『およしになつて。私、声など立てませんから——』

かまわず男は娘の形のよい鼻を力まかせにつまみ上げた。全て空しい娘の抵抗であった。息苦しくなつて口を小さく開けたとたんにグイグイと押しこめられ、手前でしつかりと猿轡をされてしまった。黒い瞳、愛くしい二重瞼から涙があふれた。そして娘は恨めしうに男を見上げた。

『何デ、かわいらしい顔だ。たまらネエ』



そして長い時が流れた。明方、強盗は金を奪って逃走した。ばあやが気がついたのはそれからである。娘は下半身をムキ玉子のようにむかれて、縛られたまま転がされていたという。其後、強盗は殺人罪で別の所で逮捕されたが、死刑になった。

—— お常小母の語った話は以上だが、もう、私には何もかも分っている。つまり、その陸軍の高官の令嬢が私の母で、私の父はその凶悪

な強盗だということだ。ばあやの子が即ちお常小母で、剣持家の戦死した父は、お邸に出入りしていた所から、何らかの因果を含められて母を娶ったにちがいない。或は本当に前から母を愛してたのかも知れぬ。今、その邸は没落して人手にわたっているらしい。

私は妙に驚かなかった。凶悪犯の血が流れている為であろうか。流石にその夜は眠れなかった。母の形身の姫鏡を前にしてじっと自分の顔をうつしてみた。思いきり泣きたくなったので、すすり泣きをした。泣いてどうなるものでもない。

夜半から南国に珍らしい雪になった。お常小母は隣室でフカのよなイビキをかいてねている。私は誰をも憎む気になれなかった。明方になっても雪はやまなかつた。私はそっと着物を引かけて庭に下りた。そして積った雪の上に素足のまま坐った。理由はない。ただそうしていると、救われるような気がした。

ヒシヒシと寒さが身をつき破るように襲ってきた。冷たかった。雪は更にふりかかった。だが快よかった。不思議な快感だった。このまま雪に埋もれてもいいと思った。その方がむしろ望ましいように思った。私は自分で手を後にまわした。うなだれた首を前にさしのべた。誰か、このまま首をはねてはくれないか。私は死刑囚の子。若き母の姿を思いうかべた。目先に浮かんだ母もやはり後手にくくられていた。何か私に向って叫んでいると思うと私の身体から知覚が全てしびれていった。

花影の章

私は一週間高熱で苦しんだ。学校も休んだ。お常小母は心から介抱してくれた。みな自分のせいだと思っている。病床にあって私はいろんな妄想をした。楽しい思い出の幻想曲にしばれるような陶醉があった。私は始めて精神の危機を感じていた。マゾヒスト。私の身体に逆流しているマゾヒストの血を意識させられた。改めて今更

のように、遠く近く蘇がえってくる印象の復活。その一つ一つに意味がないとは言えないのだ。

T市S小学校五年生のこと、級で一番背が高く色白の私は学芸会の劇で「安寿と厨子王」のお母様の役に出演させられ、生れて始めてくぐられたつけ。相手は武ちゃんという一番のワンパクターだったが、彼が人買の船頭であった。

「八重ちゃん、かんにんしてや。みんな、芝居じや、辛抱してや。わし、勉強でけへん、一生懸命やったらんと、先生にオコラレルよって」

妙ちくりんな弁解をしながらも武ちゃんは

『ウヌまで死なしてなるものか』

と、名文句を吐きながらお母さんの役の私を太綱でグルグル巻にして突き倒したものだ。勿論、形だけのもので、痛くも何ともなかったが、それから武ちゃんが私にだけは変に親切になったのは事実である。

六年生の時、お掃除を怠けてお友だちと一緒に廊下に坐らされた。武ちゃんも一緒だったが、女の子は私一人だった。しきりとその時尿意をもよおした記憶がある。

日本舞踏を習わされたのも此の年からで、お常小母の師匠筋になる花勇という芸者上りの女がお師匠さんであった。お師匠さんにはよくお尻をぶたれた。月謝を納めないで習っていたのが私だけだったからかも知れない。

中学一年。修学旅行で奈良にいった。宿屋でまちがって男子の部屋に入ったら、あつというまに、ふとんむしにされて今にも窒息しそうになった。幸い先生が早く来て下さったからよかったものである。

中学二年。女の子数名で海にいった。両手を前に組んで手拭で縛っておいてその間から両足ぬけるかというので出来るかも知れぬと

苦心してウンウンいつてやった事がある。結局成功しなかった罰として後手に改めてくくられた。そして、砂の穴に投げこまれ、首だけ出して埋められてしまった。この時は本当に苦しかった。潮が満ちてくるまで放置されたままだった。遠浅なので一度に波をかぶることはないが、ひたひたと音もなくみちてくる潮に恐怖を感じ、必死にもがいたがビクともせぬ砂の重量感に圧迫されて、思わず放尿した。生あたたかい液体が下半身を伝わった。ゾクゾクする快感がそこにあつたのを私は忘れていない。ロングヘアーにしていた髪が端が波に洗われ、凄艶なサラシ首のようであつたと、後でカメラにうつした一枚を見せられた。女のいたずらにしては程度を越している、その時は少々すねてみせた。その写真は今でも秘蔵している。

一方、この頃から文学に興味を持ち、猛烈に本を読んだ。貸本屋、図書館、大ていの本は読破した。別に人に教わつたのではない。

興味につれて旺盛な知識欲を満たしたただけだ。自然に学校の勉強は疎んじた。シエンケビッチエの「クオ・ヴァデイス」など何度も耽読した。谷崎潤一郎初期の悪魔派の作品、どんな本でもお常小母は婦人雑誌と漫画でなければ勉強しているものと思ってくれたので幸いだった。言葉に対するデリケートな感受性もひとり身に付けた。残酷な地獄絵にうっとりと思入る事もあつた。私の妄想は自分でも分らない。何の関連もないものが突然結びついたりする。源氏物語を一大賣絵々巻の小説にかきかえてみたら、紫上を吊し責、浮舟は逆さ張付、といった工合だ。枕草子をサディスト随筆三百一段に仕上げたら——女は後手、いとをかし。ようよう紫だちたる肌の鞭のあと、三つ四つ二つなどみゆるもをかし。テナ風になるかな——。

私は私のこの空想と秘密を誰にも知られたくなかった。知られることを極度に恥かしく思った。つとめて上品に、優等生ぶってロマンチックな文学少女で、おセンチねえさんのように純情可憐型にみ

せかけた。そしてそれらは大体に於いて成功したのであつた。しかし私には一つの不安があつた。私の正体をみぬかれているかも知れぬ不安だ。小出先生のことだ。この先生に一年の時、文法を習った。文法など誰にならつても、興味は凡そ湧かないものであるが、この先生には人間的な魅力があつた。それに私たち美德女子高校生はひかれていた。何でも学生の頃はすごい文学青年であつたと洩れ承っているが、御自身では決してそれを匂わさない。所謂キザな所がないのである。一度、級で質問したことがあつた。

『先生は小説もおかきになつたということですか、何故、文学を教えてくれないのですか』

先生の顔が一瞬くもつた。が、すぐ子供らしい微笑を浮かべて、『君たち、林悟堂という中国の批評家をしていただきます。彼は恐るべき男で、こんなことを言っています。』

国語教師が文学ニツイテ語ルノハ、大工ガ美術ニツイテ語ルニ等シイ

恐るべきは小出先生ではなからうか。あのキラリと光る眼でじつとみつめると心の底までみすかされているように錯覚する。この先生の試験問題は凝って難しいので私たちから敬遠されていた。ラストがいつも応用出題になるからであるが、実はこの応用出題についてフト思ひあたる事がある。

いつかの試験に十訓抄の一節『絵仏師良秀といふ僧ありけり。隣より火出で来ておしおほひければ、大路へ出でにけり。云々』の部分がでて、文法的な設問の後に本文の内容に関する感想を求められた。要旨は良秀が自分の家の焼けるのをみつめて少しもさわがず、後に「よじり不動」の像をえがくという芸術家の精進鍛錬の道を伝えた説話である。私はこの本文から何のためらいもなしに芥川竜之介「地獄変」に発展させ自分の娘の火刑になるのをみて絵にうつすという鬼気迫る芸術至上主義のおしやべりをしてしまった。

又、次の文をよんで作文を書かされたこともある。

「又、さもあらば吉三郎殿に逢ひ見る事の種ともなりなむと、よしなき出来心にして悪事を思ひ立つこそ因果なれ。すこしの烟立ち騒ぎて人々不思議と心掛け見しに、お七が面影を現はしける。これを尋ねしにつつまずありし通りを語りけるに世の哀れとぞなりにける。今日は神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝の浅草、日本橋に人こぞりて見るに惜しまぬはなし。是を思ふに、仮にも人は悪しき事をせまじき物なり」

西鶴の「好色五人女」巻四「恋草からげし八百屋物語」の一節である。てっとり早く云えば八百屋お七の放火召捕吟味廻しの場面を西鶴一流の簡潔な表現で圧縮した所である。だからこの本文だけだと常識の助けをかりなければ何のことか分りにくい。友人たちは大部分手をやいたらしいが、私はここでもおしやべりをしてしまった。相当リアルな表現をとったあげく、舟橋聖一の「お七と吉三」からヒントとイメージを借用さえして怪しげな文章をでっちあげたのである。その時はさほど気にもとめなかったが、今から思うと不安になる。私だけが奇天烈なこと書いたのではあるまいか。エキセントリックな神経の露出を見事よみとられているのではないだろうか。あの小出先生の出題意図が奈辺にあったのかうかがうべくもないが、私はたしかに私の秘密の一端を解答にのぞかせてしまったようだ。

ある土曜の午下りである。文芸部員でリレー小説を行った。題は「死者亡者」最初は花田妙子、次が安東早苗、三番手が山西良子、そして私で、ラストが小出先生の順である。山西さんの時だ。「少々いたずらしますワネ」と言っていて意味ありげに私をふりかえった。糸切歯がみえて可憐な笑いだ。山西さんは美しい少女で、何か云うと微笑する。所が彼女の書いた原稿をよんでいるうちに私は頬のはてってくるのを感じた。そこにあったのは愛慾図絵だった。し

かも、女は裸のまま縛られ今しも男の毒牙にかからんとする所で終っているのだ。この次を私に書かせようするのだ。私は持ったペンが小さきみにフルエるのをどうもできなかった。

『どう、中々傑作でしよ、あとしつかりたのむわネ』

山岸良子は愛用のソーセイジ型の大きな万年筆をヒネクリまわしながら、意地悪く皮肉をいった。

『何でもいいのよ。三枚位すぐだわ。あとは先生が引受けて下さるわよ』

『だめですわ。とてもかけません』

私は口ごもりながらいった。

『ソウ、じや小出先生と代っていただいたら。それがいいわ』良子がいっぱい。皆も同意してくれた。

『先生、お願い、助けて下さる？』

私はしおらしく両手を合せた。

『ホウ、そんなに難しくなったのかね。ドレ、一つ拝見しよう』

小出先生は実にむっつりした表情でよんでいた。そして、

『これは、乙なことを君たち書くんだね。剣持君。この次かけないの。そうか。じや僕の思いがかな、ま、いいよ。僕がつづけてみよう』

私は胸のキュッとしまるのを感じた。先生はどんな責場をお書きになるかしら、ワクワクする気持だった。サラサラとペンを動かした時々、ちよつと手を休めて、空間を凝視なさっては又何か——一心にペンを運ぶ、そんな先生の姿をみてるとたまらなく待ちどおしく思った。しかし、私はその出来上った原稿をみてアッと驚いた半面、可なりの失望を感じた。見事に肩すかしをくわしておられるのだった。

『そこで彼ははっと眼をさました。夢だったのだ。全て空しい白日夢であつた。そこは奇妙な幻影を恋する悲しみがみちていた……』

と巧みに新しいプロットに転換して引きもどしてあるのだった。私は改めて小出先生の恐ろしさを知らされた。そして何げなく一人ごとのようにおっしゃった『君にかけないの、そうか、僕の思いちがひかな』この言葉の意味を考えてヒヤリとさせられた。よし、私は小出先生にぶつかってみようと心にちかった。何かチロチロとまだ燃えのこっているものが胸内にたぎるのを覚えた。

この日から先生に対する綿密な作戦計画をたてようと決意をしたのである。

月影の章

私の小出先生に対する計画は思わぬ障害に頓座してしまった。私は全く得体の知れぬ泥沼に足をとられたのである。そして禁断の木の実を食べたイヴのように原罪の淵に身を沈めた。思えばいまわしい事件だった。

二三日後の事、私は山西良子をリーダーにする不良グループに呼び出された。体育館の地下室倉庫に連行され、屈辱的な取扱いを受けたのである。この倉庫は運動会用の木材だとかムシロ、テント、文化祭用の諸道具がゴタゴタとしまわれ、平生鍵がかりっぱなしの忘れられた学校の盲点の地域である。年に二三度あけられるかそこらのしめっぽい陰気な場所である。その鍵をどうしてあけたのか私は知らないが、彼女らはよくここを秘密のアジトにしていたと思われる。地下室といっても土手下に面しているので鉄格子の小窓が三つほどあり、明かるかった。ただここは美徳ヶ丘の一番端でグラウンドより下になっているので全く学校世界よりはなれた絶好の秘密場所である。私をここにつれこんだのはバスケット部の南ユキという大そう骨組のガッチリした醜い生徒と、ソフトボール部の木村サチというよく太った口の大きい生徒と、山西良子という他の二人とはどう考えても釣合のとれぬ位の気品のよい目鼻立ちの整った友人

である。妙なコントラストだった。

『まあ、山西さんたら、私をどうなさるおつもりなの？』

『八重が憎らしいからよ』

『まあ、私が——』

『あなた、生意気だわ』

『何故かしら、私にはわかりませんわ』

途端に良子の眉がキリリとしまったと思うと、思い切り私の頬に平手打をくわせた。

『お黙り。つべこべ言わないで頂戴。ここは地獄の一丁目よ。サチ、ユキ、二人で八重を荷作りしておしまい』

サチが後から足をひっぱってタックルした。私はわけなく前にのめった。すごい力で押えつけられると両手を背中にねじまわされていた。ユキが壁にかけてある荒縄の玉から手頃に切り取ると、ポンと投げた。

『サア荒縄で可哀相だけど、まけときな』

二人がかりで嚴重に縛り上げられてしまった。荒縄なので手首が痛くその余りで首にもかけられたので本当に後手首を一寸も動かすことができず、更に胸の上から力まかせに三回荒縄を以てしめつけられた時は、苦しさで恥かしさで一ぱいだった。良子は立ったまま口元にうすら笑いをうかべて、自ら手を下そうとはしなかった。哀れな囚われの美少女、私は次第に自分の空想癖がよみがえるのを恐れた。

『ね、乱暴はよして、解いて下さい』

私は彼女たちに哀れみを乞うた。

『なにいつてんのさ、八重、裸にされないだけお慈悲と思わないのかい』

勝ちほこった女王のような良子の態度だ。

『先日ほうまくやられました。あんたにあの小説のつづきをぜひ書

いてほしいのよ。今度は、あんたの身体でかいて貰うのさ。仲々着想の妙があるでしょう。どう。お嫌？」

今は午休みである。まもなく五時限の小出先生の国語も始まる。

急に私は私の立たされている場を忘れて強がってしまった。

『あなたたち、後で後悔なさらないこと？ 私先生に言いつけますわよ』

激しいショックを腰にうけた。サチがベルトで打ちすえたのだ。

良子は私の先生に云いつけるという一言を待っていたのだ。それを口実にして拷問にかけようとする心算なのだ。先ずハンカチを丸めて口に押し込められ、荒縄の片でその上を二まきされた。頬が引つたようにゆがみ、アゴまではずれるような気がした。

『よく、いったものね。いいつけるならいいつけてもいいのよ。その代り痛い目をみるのよ。お分り。降参するつもりなら、コックリなさいよ』

目に一ぱい涙をためて私はコックリした。

『無条件降参なのよ。それでもいいの』

私はうなづいてコックリするより術はなかった。良子は嬉しげに声を立てて笑った。そしてユキとサチに耳うちした。二人が出ていった。遠くで始業のベルがなった。私は良子のそばににじりよって自由にしてほしいと目で哀願した。すると彼女は私を足でけとばし胸の上に皮靴の一方をかけて私をふみつけ、

『ダメ、ダメ、八重の言ったこと、本当かどうか怪しいものね。だからこうして頂くわよ。よくお聞き。つまり、あなたは今日の午から頭痛で早退ということになるの。今、サチが、あなたの鞆と私の鞆を取りにいったの。お家に私が送っていったと今ユキが教室室に報告にいった。私は三十分程おくれて授業に出るのよ。すんだら、あなたをお迎えにくるから、それまでここで待っていたくださいことになるわけね。ああ、小出先生には私からよろしく申しあげておくわ。』

でも、フフ、先生、きつと八重が欠席なんでつまらない授業になるわよ』

何という底知れぬ奸智にたけた女だろう。私は口惜しくてもう涙も出なかった。サチが来て鞆を渡すと良子と何か早口に話した。そして私に一べつを投げかけるとあたふたと走り去った。

『これから、私と八重と二人だけのお時間なのよ』

もう何をされても、うめき声一つ立てられない私だ。良子の眼は血走してギラギラと光っていた。彼女は自分の鞆の中から脱脂綿の袋と、愛用の太い万年筆を取出した。耳の穴に綿をつめこんだ。鼻の穴には、やっと呼吸ができる位に綿が詰められた。妙な薬品の匂が私の頭を混乱させはじめた。袋は私の頭からかぶせるためのものであった。これは今日の家事実習のお米の袋の大きいのだと思つた。

そして、あの太い万年筆は何のために——その意味がやっとわかると、私はもう必死で本気で抵抗を試みた。だがそれはいたずらに両足をバタバタさせたにすぎなかった。

何時間たったのか、夜なの昼なのか、それすら私には分らない。身体全体が綿のようにつかれている。放心したように私はじつとして倒れていた。

それから——

私はとうとう良子のとりこになった。私は彼女とあう時は剣持八重でない。女囚一号と呼ばれ、その待遇に甘んじなければならなかった。彼女の家の二階で人知れぬ快樂にふけた。そして女囚一号は三年に進級した。

小出先生も東京に転勤していった。

無明の章

秋、高校生活最後の運動会の日が近づいた。

私たちのグループ三年ろ組で呼物の仮装行列に何か出す事にきま
った。良子の発案で八百屋お七になった。お七引廻しをやるうとい
うのである。無論、お七は私に廻ってきた。非人頭には南ユキ、良



ムシロなどせず、毛布をかけ、安定のよい罪人をくりつけておく
台を用意しておくこと。麻縄は太目の新しいのを使用して、必ず菱
形本縄に喰いこむ位にキツチリかけること。あまった縄は胴にまわ

子は役人の頭、其他非人六人、役人二人、
夫々きまいった。極秘の中に着々と準備はす
ゝめられた。衣装、かつら、其他小道具に
至る細目の打合せも行った。問題は馬であ
るが、これはユキがお百姓なので自宅の馬
に乗って登校することになった。私たちは
このシヨウには真実のところ生き甲斐を感
じた。毎日がたのしかった。お常小母にも
無理ねがって黄八丈の着物を手に入れた。
緋ぢりめんの長褌絆、腰巻、高島田、これ
は私のロングヘアでも少々つけ毛すれば充
分であったが、やはりかつらを使用するこ
とにした。そのため私の髪は短かく切った
が別に惜しいとも思わなかった。積極的に
好意と助力を借しまなかつたのは踊の師匠
花勇であった。

すゝんで帯をかしてくれ、細かな注意も
してくれた。お化粧の仕方も大いに参考に
なったが、驚いたことには後手にくぐられ
た時の手の指の開き工合や握り方の指導を
してくれたことだ。それから、着物の場合
はパンティをはかずに直接腰巻をつけるこ
と。馬には足を開いてまたぐと女としての
色気は激減するから、きちんと膝をそろえ
て右むきになゝめにのること。馬の背には

すこと。お七は痛々しくうつむいていても決して目は閉じないこと。島田のはつれは前に作っておいてそれを唇でかんでいること。少々苦しくても姿勢はかえぬこと。白足袋着用のこと、履物は一切使用せぬこと。着物には黒シユスのエリをつけ、首にかける珠数はあまり大きくない方がよい。帯は矢立結び。等々が、花勇の注意ならびに指導要領である。

学校への届出は「五人女」よりということにしてあったが、前日に八百屋お七と正式に申込んだ。

当日は大成功だった。二十何組の仮装の中で一等一位になった。とんだ失態も演じたが今、当時の実況放送を行ったマイク係安東早苗さんの口をかりて再録する。

『サテ、次ハ何ガ飛出シマスヤラ……オヤ、馬ノイナナキ、ハテ何デシヨウ。アア、出テマイリマシタ。皆サマゴラン下サイ。三年ろ組ノ演出ニナル八百屋お七ノ一行デゴザイマス。非人ドモガコチラ本部席ニ向ッテキマス。ノボリヨゴラン下サイ。高札ニモ何ヤラシタメテアリマス。お七ノ罪状デシヨウ。中央馬ノ背ニユラレテ引カレテクルノガお七デス。』

カワイソウニ、ガンシガラメニシバラレテイマス。アア、引廻シデゴザイマス。サテハ、只今、伝馬町ノ牢屋ヲ出テ鈴ガ森刑場ニ向ウトコロデス。皆サマ、近ヨラナイデゴラン下サイ。……アッ、近ヨッテ邪魔シナイデ下サイ。

ヤット本部席前ニカカリマシタ。皆様、お七ノ悲壮ナ美シサヲ御カンシヨウ下サイマセ。……エ、スグソチラニマイリマスカラ、遠方ノ方モオ席ヲハナレナイデオ待チ下サイ。グランドロ一周致シマスカラ、皆様拍手ヲオ願イ申シマス。(盛んな拍手起る) ア、通リ道ヲフサガナイヨウニ、オ静カニネガイマス。

ア、ソレカラ、オ近クデノカメラ撮影ハ御エンリヨ下サイ。馬ガアバレルト危険デス。……アッ、坊ヤガ走り出マシタ。お七ニ何カ

イッテイマス。泣キダシマシタ。手ヲアゲテ非人ドモニクツテカカツテイマス。サア、何デスカ、ア、坊ヤノオ母サンラシイ人ガカケツケマシタ。坊ヤヲナダメテ、抱キアゲテツレテイキマス。……エエ、只今ノ飛入り坊ヤノ言分ガワカリマシタ。お七ガカワイソウダカラ助ケテヤレトイウノデス。コレハ、恐レイリマシタ。スグ、お七ノ命乞ヲオ役人ニ申シアゲテミマシヨウ。……ア、大ヘンデス。馬ガ走りダシマシタ。アブナイ。非人ガオッカケテイマス。アブナイ、お七ガフリオトサレタラ一大事デス。誰カ、早く馬ヲシズメテ下サイ。誰カ、アア、お七サンモ必死デ助ケヲ求メテ叫ンデイマス。アブナイ、アッ、落ちマシタ。イヤ、半分ズリ落ちマシタ。お七宙吊リノヨウニナツテイマス。苦シソウデス。イケナイ。……アッ、青年ノ方ガ立チフサガリマシタ。ウマクイキマスヨウニ——ストライク。ドウモ有難ウゴザイマシタ。……アレ、非人頭ガ礼ヲ申シテイマス。お七ノ身体ヲ調べテイマス。……別ニ怪我ハナカッタヨウデス。お七ヲ台上ニオシアゲテ、ツナギナオシテイマス。ソノ時、役人ノ登場デス。待ツタ。物イイデス。何カサシズヨシテイマス。お七ガ馬カラ下ロサレマシタ。縄ヲトイテヤツテイマス。……中々ホドケナイヨウデス。……お七ガシキリト手ヲモンデイマス。ヒドクククラレテイタノデシヨウ。お七ガ立上リ小走リニ走ツテ、ヨロ／＼シテイマス。誰カ、アアサツキノ馬ヲシズメテクレタ恩人デス。何カ話テイマス。ア、手ヲトツテコチラニマイリマス。本部席ニ参リマシタ。エエ、皆様、皆様ノ御協力ニヨリお七ノアブナイ命ハ無事助ケラレマシタ。只今ヨリ、お七サンガ皆様ニオ礼ノ御挨拶ヲ致スソウデゴザイマス。シバラク、御静聴ノホドヨ……ハイ、お七サン。ドウゾ。(拍手の嵐)

馬が走り出したのは偶然ではなかった。良子がムチで見物に分らぬよう叩いたからである。それに驚いた口取りのユキが手綱をはなしたからだ。ユキはわざとよるめいたのだ。私はもうどうなるかと

必死だった。「助けて」と叫ぼうにも甘く声が出なかった。それでも二言位は叫んだ。良子も後のシメククリは即興にしては上出来だった。とも角、これは大へんな好評であった。或は幕切れがうまくいかなかったらもっと出し物自体は批判されたかも知らない。

とも角、私のペットネームはお七として一躍有名になった。私にとって一番残念だったのは小出先生にお見せできなかったことだがこれはあとで手紙に写真をそえてお送りすることにした。

その夜、私は良子の家に招かれた。ユキもいた。私は昼間のお仕置は続行されねばならぬ旨を申し渡され、再びお七のフン装をさせられ、火刑こそはまぬがれたが、それにも劣らぬお仕置に長時間かけられ、はりつけ柱から降ろされた時は半死半生であった。

翌日の地方紙には「名物美德女子高校の仮装行列、圧巻は八百屋お七」と写真入りで報道されていた。明朗な女子高校生の年に一度のお色気とユーモアとして別に批判的意見がましいことはかいてなかった。馬をしづめた青年の武勇伝も一席加わって花をそえた。馬があばれたのは見物人のカメラの放列に驚いたということになっていた。

未知の人から手紙が来るようになった。

男性が多かったが、女性のもあった。

『貴女のお七は実に美しかった。あの日から貴女の姿が忘れられない。貴女は罪人である。僕はこんなに苦しんでいるのに——』と、いったのが多いが、

『貴女のお七をみて不思議な快感をおぼえた。何という美しさだったろう。どうか友だちになってほしい』という少々積極的なものもある。中には、

『あなたの眼には陶酔があった。あれは演技ではない。あなたの趣味だと思いが如何?』

流石に悪趣味とは書いてはいないが、こんな具眼の士のもあって、ヒヤリとさせられたことである。

『あなたのお七。悪どい嫌悪を感じます。あれは女性を侮辱するものです』こんなのは大てい女からのものであった。

とまれ、私には少しばかりファンができたようである。

手紙は全部、姫鏡台の抽斗にしまった。しまいながら、今にこの姫鏡もろとも何もかも失うような予感が頭からはなれなかった。

—— おわり ——

同封のリポート、九月三日付朝日新聞の朝刊で報ぜられたものです。或いは他の方からも連絡があったかと思いますが、私は私なりにこの事件を観察してみたいと思い、敢て御連絡申し上げます。

新聞の記事によれば母親が四十四才であるのに対し、父親は二十六才であり、A子は三女で十三才、姉Bが十四才とのこと。私

がこの事件に特に惹かれた理由は、まずこの夫婦の関係から、A子虐待という事態の必然性のようなものが感じられたことにあるのです。

まず母親の立場を考えてみましょう。この夫婦の関係は、女が男より十八才も年長なもので、普通ならば母と子ほどの隔りであるこの年令の差が、女の心理に無意識のうちにも絶

えざる恐怖を与えます。單に教養の缺如ばかりでなく経済的逆境も、女にとって性の誘惑を助長されるものでしょうし、それだけに息子ほど年令の若い男との必然的とも思える破綻が恐ろしいに違いありません。この危機を救うものは、男のため、という共通の目的のもとに、共同の作業をすることが一番有効な筈です。実際にA子が盗癖を持っていたとし

でも、そのことは大した問題ではなく、それよりも、そのことに正当性を理由づけて、A子を共同の犠牲にすることが必要だった筈です。多分その折には、A子の盗癖が母や姉達はともかく、男の名譽を傷つけたという意味のことが云われたことでしょう。女はその作業に、不自然な年令差を持つて構成された、おそらく最後のチャンスと思われる夫婦関係における傷い紐帯を保とうとしたのではないでしようか。女の立場から観れば「実子であるのに虐待した」のではなくて「実子であるから虐待することができた」という想定もあり得ましよう。事の善悪は判然たるものながら、こういう觀察は何かしら人間らしさのある救いがあった、私はこういう立場の女に対して些か同情の念を禁じ得ません。次に男の立場を考えてみましょう。前述のように女の立場に同情すべきものがあるとすれば、男は悩むべき存在ということになりそうですが、決してそうではありません。男

“わが娘を 鎖で監禁”

の記事に寄せて

近藤 一



の生活の先々に、いつもこの家族との年令差が障害になって来ます。三女との差が十三、二女との差が十二ですから、計算上、女との差の十八と比較すれば、これ等の娘達と父と子の関係に立つことは、男と女の関係に立つよりも大きな無理を伴います。まして長女ともなれば二十才前後でしようから尚更のことです。加えて、娘達は母親の哀れな心理を識り得る程の経験を持ちませんから、母親の酷い仕打への反撥が若い父親——母の心情を荒立てた男——への憎悪となることも充分、首肯できることです。好みもしない父親の座に坐って、男は今更ながら母親程も年令の違う

もまた、A子が女の実子であつたから、自分のためにという女の言葉に支えられて虐待を続けた哀れな男に過ぎなかった、と考えることはできないでしようか。

A子の行動にも不可解な点があります。中学二年生ともなれば一応の道理も判らうものを、しかも学校の休暇にもならぬ六月十日頃から五十日間も、このような生活を甘受したことが納得できるでしようか。母親も継父も朝食を済ませると仕事に出かけるのですから五十日の間には、逃亡の機会も何回かあった筈です。しかも逃亡後、救いを求めながら再び失踪、学校の倉庫に寝ているところを発見

女との関係を後悔したことでしょう。あくどい女の情慾に苛まれた精神のはけ口は、A子の上に開いていたと云えるのではないでしようか。この場合、犠牲が少しでも女に縁の濃いたことが、男にとってこの不自然な反撥についての心の安らぎを覚える筈です。ですから男

されたというのですから、正常な知能とすれば余程両親に恐怖感を抱いている、哀れな小犬の如き心根ではありませんか。

B子が果した役割も見落すことができません。單に食事の世話をするばかりでなく、逃亡を防ぐ見張りの役目もしていたと思われまふ。実の妹のこういう目に遭わせる片棒をかついだのですから、余程、強い脅迫を受けたのでしよう。或は今日の妹の身の上が、明日は我身にとでも思ったのかも知れません。が、とにかく歩行の自由も充分ではなかったA子は、用便の際にも姉の手助けを受けなければ用が足せなかったということは容易に考えられます。

事件の特異性からこのような想定をしたのですが、こうなると誰が悪いのでもなく、人間の本能がむき出しでぶつかり合った時の必然的結果ということになりそうに思います。或いはまた見方を変えるならば、この男が私と同好の士であつて、四十過ぎの女の哀れな心情を利用して、A子を対象に娛しんだということなら、また何をか云わんや、羨やましくもまた不届な男という以外に言葉がありません。

この事件の新聞記事を見て真先に思い出したのが、昭和二十六年の本誌十月号所載「織姫の悲哀」でした。文章は懐しい金子しのぶさんのもので須磨としゆき氏の画ですが、註

〱九月三日付朝日新聞朝刊〱

娘の足に犬の鎖

両親送検 五十日近く監禁

〔福岡発〕福岡署は実の娘の足を鎖でつなぎ、五十日ちかくも監禁していた疑いで母の福岡県粕屋郡粕屋町仲原失対人夫宮園ヨシエ（四四）と継父の大工平井富雄（二六）の二人を調べていたが、二日不法監禁の疑いで書類送検した。調べによると、この夫婦は三女の中学二年生A子さん（二三）が家の金を持出したり、手クセが悪いといつて、六月十日ごろ犬の鎖でA子さんの右足をしばり、錠をかけ二階四畳半に監禁していた。

夫婦は毎朝食事をすますと、A子さんに鎖をつけて仕事に出かけ、夕方帰ってきて鎖をはずすまでは姉のB子さん（一四）が

釈を加えるより文章の一部を書き抜かせて頂きますよう。

「かまわないから裸におし」「へい」私は必死に藻掻きました。叫び抵抗しましたが、岩松は平気なものです。まるで私を小鳥のように掴んで、脱げなければ服をびりびりと裂いてしまふのです。「生意気だよ、この娘は。」

昼食を食べさせていた。鎖はさらにロープで天井からつるされ、ほとんど歩くことが出来なかったという。

七月二十五日姉が裁縫をして置かれたハサミでロープを切り、鎖を足につけたまま逃げ出し、知人の同市長浜新町樋口正博さん（四五）のところにかけ込んだ。驚いた樋口さんはヤスリで鎖をはずして福岡署に届出た。A子さんはその間にいなくなつたが、八月十七日夜福岡署員が市内警固小学校倉庫で寝ていたのをみつけ、事情を聞いて取調べに乗り出したもの。

まるで犬扱いだ

林福岡署防犯課長の話 児童を鎖で監禁するなどということは、とても常識では考えられなかった。まるで犬扱いだ。児童をこんなにてたらめに扱った例ははじめてだ。

ズロースなんかはいてさ。うちの女工はそんなもの一人もはかないことになってるんだよ。岩、そいつもかまわないから」「へえ」岩松は容赦ないのです。ごつい毛むじやらかな膝で私の背骨を踏みつけ、へへ、へへと、私の尻や股を撫ぜるのです。「豚みたいに肥えている娘だよ。岩松、こんな豚は叩いたって面白くないね」「へえ面白くねえがす」「

お前にこの豚をくれたらどうする?」「わっしや、へえ、思い切りたのしみやしてへへへ、売り飛ばしまさあ、そいでちったあ飲めるって言うもんでさあねへへ」「ふん、つまらない趣味だね。私だったら檻に入れて大切に飼っておいて、色々芸を仕込むよ。言うことを聞かぬけりや餌をやらないで、折檻して言うことを聞くようにしてやるのさ。面白いだろう。」「へえ、面白いでがす。早速そうしますか」「檻がないよ」「へえ、此の間ゲルが死んで犬小屋が空いてますで、あれや大きうござえます」「ふん、それもいいね」お姉様は庭下駄をつつかけて犬小屋の方へ行つたが、しばらくすると犬の首輪を持ってきて私の首にはめてしまった。私は庭の隅の犬小屋に鎖でつながれて、そこで動物のような岩松に弄されてしまいました。夜になりました。私は寒くて仕方がないので犬小屋に入りました。犬の食器に冷えた残飯が盛られてありました。犬小屋は工場からも屋敷からも遠く離れた築山の蔭なので泣いても喚いても聞こえません。私は犬臭い藁の中にもぐって泣いて泣いて泣き寝入ってしまいました。

その翌日、岩松は昼間来て、照りつける太陽の下で、私を辱しめました。そして残飯を少しづつ持って来しました。何でも私は工場を逃げ出したことになっているらしい岩松の口ぶりで、服を持って来てくれと頼んでも、彼

はお姉様が恐いからと、受付けてくれません。私がいくら小屋の中から出まいと力んでも、彼はぐいぐい首輪についている鎖を引っばって抱き寄せるのです。私の身体は泥と汚物ですっかり汚れてしまいました。或日、お姉様が岩松と一緒に来しました。私はその頃もう立って歩く氣力がなくなっていました。たのです。

「岩松、お前の豚はずい分汚くなったね」「へえ汚ねえでがす」「うんこはどこにしているんだろう」「夜中にどっかそこら穴でも掘ってしてゐるんでがしよう」「少し洗ってやたらどうだね」「へえ洗ってやりましょう」私はお姉様に手を合しました。「お姉様、許して」「おや?何を許すんだね。これが私の楽しみなのさ。照夫が私の言うことを聞くまではね。そのうちに照夫をここへ連れてくるよ。その時照夫にお頼みよ」岩松が私を池まで引っばって行くと言うのをお姉様は止めて、食器に水を汲んで来させただけにしました。それだけの水では私はどうしようもなかったのです。

(後略)

こうして、私は四、五日後に「お姉様」(工場主の後妻)の勝利を見せつけられるのです。その時は藁を腰に巻き、首輪につけた鎖を岩松にとられて四つ這いになっていたのです。もの云う犬に過ぎなかった訳です。

同様な事件が静岡県であったということ

週刊朝日で読みました。現在、手許に資料がありませんが、商店の少女を誘い出して監禁し、しかも手足を縛り猿轡まで噛ませておいで、時折引き出しては妹になってくれと懇願したという話です。少女は二、三日後に脱出したのですが、穴倉の中で縛られたまま過した暗黒の時間は、さぞかし長く淋しいものであったでしょう。しかし、食事や用便の自由はどのようなものであったのか興味を惹かれた処です。

〔註〕静岡県の少女誘拐事件

八月十六日榛原郡相良町、波津、相良中二年秋野春殺さん(一三)を言葉巧みに誘かい自宅の床下に三日間監禁していた静岡市本通り九丁目、無職川口精一(二五)は緊急逮捕されたが、計画的な犯行であるため、静岡南署では特異事犯として慎重な調査に乗出した

△「静岡中日」32年8月20日付▽

川口精一は十六日たまたま通りかかった青木町一丁目菓子小売店で春枝さんを認め、キヤンデー十本を届けてくれと自宅へ連れ帰ったうえ、後から口をおさえ、騒ぐと殺すぞと脅し後手にしほりあげ床下の穴に押込めたまま十七日は一日中、外へ出さず二度のめしと紅しようが卵などを与えただけだった。という。

(創作) 鞭 と ナ イ フ

青 葉 楨 一

訪 問 者

焼夷弾爆撃を受けて、その殆どが焼野原と化したH市の、辛くも戦災を免れた山手の一劃に、昔ながらの汚れた木造モルタルの姿を見せている交番の前に立って、いかにも懐しげに、暫くジッと眺めていた、復員軍人らしい身なりの青年は、やがて思いきったように入口の戸を開けた。

ボンヤリと椅子にもたれていた若い巡査が顔を上げると、青年は一寸躊躇してから、「アノ、この交番に、もう五年程前なんです、島田巡査って方が勤務しておられた筈なんです。今どちらにおられるか、おわかりにはならないでしょうか——?」

「アア、島田さんなら知ってます。あの人は今本署勤めですよ」

「そうですか。それは助かりました。もしかして、わからないようなことがあったら、どうしようと思って、少々心配していたんです——」

青年は、嬉しそうにそう云うと、丁寧に礼をのべて表に出た。

交番の横の空地をぬけて行くと、枯草が風に吹かれていて、もう秋もかなりに深い。

青年の脚は、気が急くように自然と速くなった。

青年は、ときめく胸を抑えて、警察署の石段を上っていったが、生憎なことに、島田巡

査は、その日非番であった。住所を訊くと、少し遠いが、バスなら三十分位でいける海岸に近い村の、農家の離れを借りていることがわかった。

青年は一旦駅前へ出ると、闇市で昼食をすませ、Y海岸ゆきのバスに乗った。

国道の両側には、稲を刈取られた田圃が寒々と続き、やがて左手に遠く砂丘が見えかくれしだした。

午後の陽射を一杯に吸っている縁の障子を開けた島田は、そこに立っている復員服の青年を見ると、怪訝そうに眉を寄せた。

「貴方ですか。私を訪ねておいでになったのは——?」



「ハイ。もうお忘れかも知れません。と云うより、僕のことなど、御存知ないかも知れま

せん。随分昔になります。僕が、暁星中学の生徒だった頃、K町の交番の前を、毎日通学

の往き帰りに通って、何時もお見かけしていました……」

青年は、薄く頬を染めると、眼を伏せた。

島田巡査は、浅黒い顔に、親しげな微笑を浮べると、

「そうでしたか。イヤ、そう云われてみれば、僕もだんだんと思

い出して来ましたよ。あの交番の前は、朝夕に暁中の生徒が大勢通ったが、成程それで君も

——」

「エエ、——僕、アノ、中本牧夫って云うんです——」

「中本君ですか。さア、まア上って下さい。とりちらかしてま

すが——」

部屋へ上ると、牧夫には、柱に掛かった警官の制服がすぐ眼

についた。それは、昔見馴れた制服とは大分違っていたが、

島田にはやはりよく似合うだろ

うと思われた。

「実は、今日お訪ねしたのは、是非ともお話したいことがあつたんです——」

牧夫は、坐るなりすぐに、そうきりだしたがおそろしく真剣な表情になっている。

「ホウ、何んな事でしようナ？」

「今から五年前、K町で起った殺人事件を、覚えておいででしょうね。」

「覚えていますとも。それが——？」

島田巡査は、さりげなく、そう訊き返したが、内心の驚きは隠しきれず、思わず牧夫を凝視した。

「あの事件は、未だ犯人があがらない筈でしたね。」

「そう、残念ながら、迷宮のままです——」

島田は、何故か苦しげに顔を歪め、ホッと太い吐息を漏らした。

× × ×

五年前の殺人事件とは当時K町に住んでいた宇野という中学校教師の殺害事件である。

その朝、転がるように交番へ駆け込んで来た老婆は、しかしすぐには口がきけない。

「お婆さん。落着きなさい。落着いて、落着いて。どうしたんだ。何かあったのか？」

島田巡査は、そう云いながら、老婆の肩に手をかけたが、静脈の浮いた大きな掌は、ブルブルと小刻みに顫えていた。

「君は、宇野さんとこの婆やさんだったね。」

「ハ、はい。タ、大変——。ヒ、人殺し、人殺し！」

「人殺しッ？誰か、殺されたのか？」

島田巡査は、噛みつくように怒鳴ると、
「ダ、旦那様が、旦那様が、殺されて——」
と云う老婆の言葉は、半分しか聞かず、佩
剣の柄を握ると表に飛び出した。

まもなく、市の警察署からは、ドヤドヤと
係官等の一行が到着し、島田巡査を案内に、
奥へ這入る。

兇行現場は二階の寝室で、被害者の宇野は
血でズクズクになった絨氈の上に、一糸も纏
わぬ全裸体で転がっていた。死体は、身体中
いたる処に、数十ヶ所にも及ぶ切創や刺創を
受けており、出血もかなりの量だが、致命傷
となつたのは、明らかに心臓部を貫いた一突
きである。

又死体には薄くなつてはいるが、大小の蚯
蚓脹れの痕が幾条も見られ、被害者は生前、
或いは、変態性欲者だったのではないかと、と
いった疑問を、係官達に抱かせた。しかし、
それを裏付けるようなものは、何一つ発見さ
れなかった。

殺人の行われたと推定される時刻は昨夜の
十二時前後である。兇器は大型のナイフで、
柄には精巧なアラビヤ風の彫刻がどこされ
てあり、死体のかたわらに落ちていた。が、
じきに、それは被害者自身の持物である事が
判り、指紋も、被害者のものが一色しか残っ
ていない。しかし、創傷の位置等からして、

自殺であるなどとは考えられなかった。

まだ独身の宇野は、係累も無く、洋風二階
建の家は親の代に建てたもので、遺産も相当
にあつたが、母校の暁星中学で図画教師をし
ていた。身の回りの世話は、近所の老婆が通
いで一日おきに來ていたので、此の際彼女は
一応重要人物であるわけだが、結局のところ
は、何も訊き出せずに終つてしまった。

当局の必死の捜査も効を奏さず、一ヶ月、
二ヶ月と日は経ち、事件は何時が迷宮に入っ
た形となつていた。

遺言

「——あの事件について、僕が真相を知つて
いると云つたら、驚かれるでしょうね。」
そう云つた牧夫の言葉は、晴天の霹靂のよ
うに、島田巡査をうつつた。

「真相!……真相を君が?」

「そうです。僕は、真犯人を知っているん
です。」

「キ、君は、まさか、僕をからかっているン
じゃアあるまいね——」

島田は、落着こうと焦つて、新しい煙草に
火を点けたが、顔色は蒼白であつた。

「暁中で僕のクラス・メイトだった、星川直
也——。御存知だと思いますが……」

牧夫は、冷い調子で云うと、ジツと島田を
睥めた。

島田巡査は、狼狽したように、視線をそら

すと、

「——星川って云うと……」

「そう。暁星中学の校長の令息です。」

「しかし、その人が——?」

「彼こそ、あの事件の真犯人だったのです。」

島田の指先からポトリと吸差しが落ちた。

「いきなり此んな云いかたをしたンでは、御
納得もいかないでしょう。詳しくお話しす
から、お聞き下さい。」

徴兵検査が終ると、まもなく、星川直也は
地元の歩兵聯隊へ入隊したが、半年余りで急
性結核を起し、陸軍病院に入れられた。

中本牧夫が見舞にいつた時、星川は、既に
死期の近いことを覺つていたのか、苦しいな
呼吸の下から、意外な告白をしたのである。

「——中本君。君は、僕と宇野先生との関係
を知つていた筈だったね。僕は、真実、先生
を愛していた。だから、先生の要求には、ど
んなことでも逆うなんて出来なかつたんだ。
先生の家へ遊びにいくだろう。そんな時、よ
く先生は、鞭で自分を打つてと云われるんだ。

初めのうちは、僕も怖かつたヨ。でも、全裸
でのたうち回る先生を見ると、不思議な昂奮
が僕を駆立てて、夢中で鞭を振るつてしま
うんだ。そうして、とうとう、あの恐ろしい夜
が來てしまった……!あの夜、先生は何時も
の通り、全裸で僕を迎えたが、その手には、

鞭の代りに大きなナイフが握られていたんだ。驚く僕に、先生は『僕はネ。もう鞭ではあきたらなくなったんだ。今夜は、このナイフで、僕の身体を傷つけてくれたまえ。僕の肉体から、薔薇のように紅い血が滴るのを、君は見たくはないかね』と、熱い息と共に云われるんだ。僕は、もう、魔力にかかったように、肯いてしまった。僕は何時のまにか残忍なサディストに仕立上げられていたんだね。云われるままに、薄い手套をはめると、僕は、冷いナイフの柄を強く握った……。鋭い悲鳴と共に、先生の蒼白い太股が真紅の血を噴くと、僕はクラクラと眩暈を感じながらも、ゾクゾクとした快感が身体中を駆回るのに、我を忘れてナイフを躍らせた。——どのくらい時間が経ったか、フト気がつくと、その場の恐ろしい事態に、僕は殆ど動揺して、追われるように逃げ帰ってしまったんだ。勿論、その夜は一睡だつて出来やしなかった。翌日の新聞で、先生の死を知ったときの僕の気持は、到底口では云い表わせない……。僕は、苦しむだけ苦しんだが、結局、自首は出来なかった。——中本君。僕は忌むらしい殺人犯人なのだ！宇野先生を殺した真犯人なのだ君、僕はもう永いことはない。死ぬ前に、これだけは云っておきたかった。それでなくては、死んでも死にきれない。——ああ、今も僕には聞える……血まみれになった先生が、

『痛い……直也君……直也……愛している……愛している……痛い、苦しい、助けてくれ……ああ、いっそ、殺してくれ……直也、直也……』と、とぎれとぎれに叫んだ声が……。先生は、僕に殺されたいと望んでおられたかも知れない。しかし、僕は、やっぱり殺人犯人だ！恐ろしい殺人犯人なのだ！——」

星川は、牧夫の手をしっかりと握り、囁言のように云い続けるのであった。

「——それから二日ばかりして、星川は死にました。そして、まもなく、僕にも召集令状が来たのです。僕は、彼の告白を胸に秘めたまま出征しました。今度復員して来て、すぐに警察へいこうと思いましたが、それが彼の意志でもあることは判っていたながら、何か躊躇されて果せませんでした。島田さん。僕は貴方なら話せそうな気がしたんです。それに貴方には、是非もう一度お逢いしたいと思つたものですから……」

暫くの間、重苦しい沈黙が部屋を領していた。既に陽はかげつて、障子は白々と静まっている。

やがて、島田巡査は、何事か決心したように顔を上げると、

「中本君。外へ出しましょう。浜がいい。誰もいない処で、君に聞いて貰いたいことがあるんだ——」

と云つて、立上った。

波

島田巡査と牧夫は、無言のまま、砂丘を登った。足許には、肌寒い風が吹き、冬近い海は黒々と広がって、荒々しく波が砂浜に打寄せている。

「此処に坐ろう——」

「ええ……」

二人は並んで、砂丘に腰を下した。

西の空には、雲の切れめから、浅照があかあかと浸みだしていた。

「中本君。これから僕の云うことを、よく聞いてくれたまえよ。」

「はい……」

「僕は、君に告白しなければならぬ——」

「え？……」

「僕が犯人だ！僕こそ宇野さんを殺した、真犯人なんだよ。」

搾りだすようにそう叫ぶと、島田は両手で頭を抱えた。

「何を云いだすんです。島田さん、貴方は気でも狂われたんですか。あの事件は、星川が——」

「いや、違う！ そうじゃないんだ。星川君は何ンにも知らないんだ。可哀そうに、自分が犯人だと思ひ込んで……！ああ、それも、みんな俺が悪いんだ……俺は、俺は、何ンて男なんだろう……」

島田、今は恥も忘れ、身を揉んで号泣し

た。

牧夫は、凝然とその姿を見守っている。

「すまない——。取乱してしまつて……。では話そう——」

島田巡査は、涙に濡れた顔を上げると、暮れていく水平線を睥睨しながら、語り始めた。

「——僕はネ、星川直也を心から愛していたのだ。彼の家は学校の中にあつたから、他の生徒のように、朝夕交番の前を通りはしなかつたが、ある日、彼が拾得物を届けに来たときから、僕には、彼が忘れられなくなつてしまつたんだ。そして、それが同性愛だと気付いた頃は、もう彼なしには一日もいられない程、深く恋するようになっていた。しかし、僕は、彼にそれを打明けることが出来なかつた。僕はどんなに苦しんだことだろう……！そのうちに、彼と宇野との関係を知つたときは、嫉妬の余り、気が狂うかと思つた。僕の苦しみは二重になつたのだ。そうした矢先、あの事件が起つた。——最初の発見者は、手伝の老婆だということになっているが、本当は僕だつたのだ。パトロール中に、宇野家の二階から明りの漏れているのを見たとき、すぐに浮んだ妖しい妄想を、僕は何度か打消そうとした。しかし駄目だつた。僕は、とうとうあさましくも、猫のように足音を忍ばせて、忍び込んでしまつたのだ。そうして、そこに見たものは、全身血まみれとなつて呻吟

している、宇野の姿だつた。かなりの出血はあつたが創は、わりに浅く、生命に別状はないらしかつた。——ああ、その時、僕は、警察官である自分を忘れてしまつた！（宇野さえ此の世になければ——）と思うと、僕は情痴の鬼となつて、落ちていたナイフを拾うと、彼の心臓深く突立てたのだ。——勿論ナイフの柄は、ハンカチを巻いて握つたし、その他、指紋の残つた箇所は、拭きとることを忘れなかつた。——僕は良心の呵責に苦しめられながらも、表面は何喰わぬ顔をし通した。星川君が戦病死したと聞いたときは、それまで張りつめていた気が一時に崩れて、僕は死のうかとさえ思つた。しかし、それさえ出来なかつた俺だ……！卑怯者——人非人！俺はそんな男だ……！君、中本君。俺を軽蔑してくれ。罵ってくれ……！」

島田は、次第に激してくると、頭髪を掻撈り、血走つた眼で、縋るように牧夫を見た。牧夫は、沸騰してくる昂奮を抑えることが出来なかつた。

「島田さん。貴方は、僕に赦しを乞うんですか。僕が赦したつて、どうなるんです。卑怯な真似はおよしなさい。」

「ああ……！俺は、どうすればいいのだ！」
島田巡査は、悲痛な声を上げると、再び号泣した。

立上つた牧夫は、もう完全なサディストになつていた。

なつていた。

「島田さん。裸になりなさい！」

「え？——」

「着ているものを全部脱つて、真ッ裸になるんです。」

「ナ、何ンだつて、ソ、そんなことが——」

「出来ないと言ふんですか。」

「イ、いや。しかし、こんな寒い海岸で——」

島田は、怯えたように、牧夫を見上げる。しかし、いまや理性を失い、激情に巻かれてゐる島田は、自分を苛めぬきたいような、不思議な誘惑を感じていた。

「早く脱ぎなさい！」

そう命令するように云う牧夫の声には、抗しきれない力があつた。

島田巡査は、催眠術にかかつたように、次々と衣服を脱捨するとパンツ一枚になつた。

「それも脱りなさい。全裸になれと云つたでしょう。」

島田は、もう何も抗わなかつた。易々としてパンツを脱ぐ。四辺は既に暗くなりかけていたが、筋肉の発達した彼の裸身は、鮮やかな白さで、クッキリと浮上つた。

（寒い……）

潮風の冷さに、思わず身を縮めた彼は、次の瞬間、

「あッ！」

と叫んでよろめいた。

牧夫の手には、何時のまにか、ベルトの鞭が握られていたのだ。

背にうけた鋭い衝撃が、島田の恐怖をそそった。彼は反射的に逃げ腰になり、バタバタと駆けだした。牧夫が後を追う。とうとう波打際に追いつめられた。

「タ、助けてくれ——」

半泣きになって、背を丸めたが、裸では防禦のしようもない。

「ビシリ！」と鞭が鳴り、悲鳴を上げて倒れる島田の身体を、ザンブと波が呑む。

牧夫は、靴が海水に濡れるのもかまわず、ベルトを振り続けた。

何度となく波をかぶりながら砂の上をのたうち回る島田は、痛さと、寒さと、冷さにとともに、気を失いそうであった。

（ああ、俺は何という惨めな姿だ！しかし、俺には相応しいかも知れない。俺はどうなるんだ。もうどうなったって、かまやしない。どうせ、俺はおしまいなんだ！……おしまいなんだ……おしまいなんだ……）

もう、寒さや冷さは感じなかった。鞭の痕に塩水がしみて全身が焼かれるように熱い。波の音が高くなり、海はすっかり暮れきった。

縄

歩いているすぐ横で、急にハイヤーが停車したので、島田巡査は、思わず立止った。勤

務をおえて、帰宅の途中である。

自動車の窓から顔を出したのは、中本牧夫であった。此の間の兵隊服ではなく、空色のジャンパを着ていた。

「今、お帰りですか——？」

「ええ……」

「お乗りになりませんか？」

「ええ、でも——」

「お話したいことがあるんです。付合って下さいよ」

「そうですか……」

牧夫が扉を開けると、島田は、誘われるように乗込んでしまった。

「少し、お憔悴になりましたね」

車が動き出すと、牧夫が云った。

島田巡査は、力無く笑ったが、その顔



は病人のように憔悴し、薄く髭さえのびている。厳めしい制服を着けているだけに、それは一層目立って見えた。

「何処へ行くんです——？」

ややあって、島田が訊いた。

「親戚の家です。そこは伯父夫婦の二人暮らしなんですが、婚礼があつて出かけたんで、今夜は留守番を頼まれたんですよ」

郊外にあるその家に着くと、牧夫は、島田を奥の一間に招き入れた。

他には誰もいないという家の中は、不気味な程、シインと静まりかえっている。

「島田さん。あの海でのこと……怒っては、おられないでしょうね——」

「いや……」

島田巡査は、てれかくしのように、急いで煙草を取り出した。

「島田さん。僕は、もう何もかも云ってしまします。僕はね。中学へ通っている頃から、貴方のことが、好きで好きでならなかったんです。通学の行き帰りに交番の前を通って、貴方の姿を見るのが、何にも増して楽しかったです。自分の切ない胸のうちを、どうにかして貴方に伝えたいと思つても、厳めしい制服姿の貴方を見ては、心が臆するばかりです。考えてみれば、僕は星川のように美しくはないし……貴方に好かれる筈もなかったんです

が——」

「中本君……」

「いや、聞いて下さい。僕はね。貴方の裸体が見たくてたまらず、とうとう或るとき、貴方のいく銭湯をつきとめると、まちぶせして、窃かにぬすみみたこともありました。それは後姿だけでしたが、パンツを脱いで裸になった、貴方の肉体を見た瞬間、僕は昂奮の余り、佇んでいるのが苦しい程でした。その当座はそれで満足していましたが、欲望には限りがなく、制服姿の貴方をムリヤリ裸にし、縄で縛って責めてみたいと考え始め、そのことばかり思い続けて来ました。貴方を愛すれば愛する程、その思いは強まるばかりです。もうお判りでしょう。僕は今でも、昔に変わらず、貴方を愛しているのです！……」

島田は、さっきからしきりに火鉢の灰を掻き回していたが、フト何か固い物が触れ、それは、夏の黒い昆虫の死骸であつた。

「——中本君。僕は、どうしていいか、判らないんだ。自分で自分が判らなくなつて……あの海のこと以来、僕は変つてしまった！僕はね。この二週間、君を忘れることが出来なかった——いや、君の仕打が忘れられなかったんだ。僕は、マゾヒストだったんだらうか——？判らない……判らないんだ！君、中本君。教えてくれたまえ」

「教えて上げましょう」

牧夫はすつくと立上つた。その眼は、獲物を狙う獣のように光っている。

「ああ、僕はもうどうなつてもいい。中本君。僕を、好きなようにしてくれ！この制服を剥ぎとつて、縛るなり、鞭うつなり、気のすむまで責めてくれ……僕は、もう駄目だ。駄目になつてしまつた……！」

牧夫は、わざと一枚一枚ゆっくりと、制服を脱がせていった。紺色の上衣やズボンが、乱雑に飛び、警棒が無残に転つた。

やがて、島田巡査の逞しい身体は、グルグル巻きに縄で緊縛された。

（これが、この芋虫のようにたわいなく俺の足許に屈伏している男が、あの、シエバードのように精悍だった警官なのだ……）

そう思うと、あの海岸での激情が、再び牧夫を駆つた。

背に、尻に、腹に、続く鞭打を受けて、呻き、のたうちながら、島田は、男泣きに泣いていた。

「なんだ。又泣いているのか。意気地のない奴だ！警官なら警官らしく、もっと怯えてみる。ハハ、泣け、泣け。うんと泣け！大声を上げて泣き喚け——」

そう叫ぶ自分の言葉に昂奮して、牧夫の鞭は狂つたように激しくなる。

島田は、只痛さだけに泣いているのではなかった。

(ああ、俺はなんていう男だ！ あさましい——俺は警察官なのに！——俺は何処かで間違ってしまった。破滅だ。破滅だ！) しかし、俺には、それが相応しいんじゃないのか。そうだ。そうなんだ！ まったく、俺には相応しい……！)

悲愴さが彼を感動させ、不思議な喜悦がそれを揺するのだ。島田は、遂に声を放って泣き出した。

牧夫は突然鞭を投げすてると、ハアハアと喘ぎながら、荒々しく衣服を脱ぎ始めた。

鉄 路

十二月も終りに近い或る朝、島田巡査から中本牧夫に宛てた。最初にして最後の書翰が配達された。

それには、次のように記されていたのである。

「此の手紙を見て、さぞ愕くことと思います。が、必ず最後まで読んで下さるよう、冒頭にお願ひしておきます。私の辞表は既に受理され、私はもはや警察官ではなくなりました。

これで私は死ぬ資格を得たのです。そうです。私は自殺する決心をしました。勿論、責任は貴君にはありません。また私を止めようとしても全く無駄です。この封書が届く時刻から数時間前に、私は完全に此の世から消えてなくなっているのですから。本当を云えば五年前に身の処置をつけるべきだったので

す。それを今迄便々と生きのびて来たのは私の弱さからですが、考えてみれば、それも貴君に邂逅う為であつたかも知れません。忘れもしない。あの海の事以来、私は急速にマゾヒズムに目覚めていきました。私の中には、生れたときから、マゾの血が沈潜していたのに違いありません。しかし私は恐ろしいのです。死ぬときが来たと思ひました。色々と自殺の方法を考えているうちに、少し前に目撃した轢死体が脳を掠めると、あの酷たらしさ、あさましさ、そして美しさが、すっかり私を捉えてしまいました。これを書きおえたら、私は一糸纏わぬ全裸となり、素肌へじかにレイン・コートを着て自転車に乗ります。そして途中でポストに投函し、鉄道線路へ向います。線路のやや手前で自転車を降りて、コートも脱ぎすてて、刺すような寒風の中を全裸で歩いていきます。振返れば、遠く市中の灯が瞬いて、孤独感が胸を締めつけるかも知れません。やがて行きつくレールの巨大さが、私を脅やかすことがあつても、冷い枕木は、もう私を抱えて離しはしないでしよう。待つまもなく、正確に驚進して来る夜行列車の轟音に、私の悲鳴は吸込まれ、熱した車輪が、生きた腹を轢断するのです。はじけた脂肪層の裂目から、血の飛沫を撥返しつつ、鉛色にマルマルと光り輝く腸管が、後から後からと踊りだしてくるでしょう。実際に

は、もうそのときは私の意識は絶え、生命は失われているのですが、ひよつとして、肉体を離れた私の靈魂が、その場の光景をマザマザと見るのではないか……普段靈魂の存在など信じなかつた私が、こんなことを想像したりするのは、既に私の脳が、轢殺の陶醉に侵され始めているのです。私は先を急がねばなりません。貴君の私に対する愛情は充分に判ります。それだけに貴君には済まないと思うのですが、私はこうなる運命なのです。赦して下さい。星川君を知る前に貴君を知っていたら、或いは二人共幸福になれたかも知れません。が、それも今となつては愚痴になるばかりです。貴君はまだ若いのですから、これから幸福になつて下さい。警官がお好きなようですが、私以外にもキット貴君の気に入る警官はいます。いい人が見つかるよう祈ります。夜も大分更けて来ました。私が三十五才の生涯を閉じる最期の時が近付いています。鐵路が呼んでいるようです。私は行かねばなりません。これでペンをおきます。さようなら、さようなら」

中本牧夫は、その手紙を握ったまま暫くは呆然と喪心状態にあつたが、あわてて外出の支度を整えると駈けるようにして表へ飛び出していった。

お伊勢参り

「女 賊 変 化」

海 野 築 朗

(一)

軒並みの掛け行燈に灯が入ると、旅籠屋の油障子に、上り下りの旅人の群が黒い影を縫れさせた。

「さあ、寄らしやんせ寄らしやんせ、お湯もドンドン湧いてます」

伊勢国松坂の宿場通りでは、旅人の袖を引く、旅籠女中の黄色い声が交って、大変な混雑だった。

菅笠に、手甲脚絆。御伊勢参りの善男善女が、いつ絶えるとなく続いている。

中には牛や、犬を連れた者迄いる。

漸く、その混乱が納まり、宿場通りに湯気の香が漂い、食後の膳仕末のてん手古舞も済んで、帳場の番頭達が一服し乍ら、今夜の算

盤を弾いていると、物々しい宿場役人の宿改めが始まった。

山田町奉行所の与力、須川大之進に同心二人と岡ッ引、手先が数人、手分けして宿帳を調べ廻っているのだ。

松坂でも古い旅籠宿、山城屋に、ぬつと姿を現わしたのは、山田町奉行所の岡ッ引の中でも、蛇蝎まづの様に忌み嫌われているお相撲の伝次だった。

元録という、文化の爛熟期が過ぎた宝永の此頃、徳川の政道は三百余州に行き渡り、世には秩序があった。人を縛るにも、夫だけの理由が必要であった。

だが伝次という岡ッ引は、人を縛るにはそれだけの力があれば良いと思っている男だ。

「いつも繁昌で、結構だな」と十手を弄び乍ら、上り縁へドンと腰を降ろした。

「これは親分様、毎晩御苦勞様で……」

番頭が如才なく手を揉み乍ら、宿帳を差し出す。無造作に受取って、ペラペラとまぐると、ふと、眼を光らした。

「江戸縁河岸廻船問屋娘鹿乃。庚子生れ。同行なし……」

と読んで、

「庚子といえは今年十九だナ。若え女の一人旅、いくらお伊勢参りとはいいい、はたでも気が揉めらあ……」

乱杭齒をむいて、ニクリとする。

「おい番頭、この娘の部屋へ案内しな」

「お、親分？」

番頭は眉をしかめた。

「何を……やい番頭、手前つまらねエ感繰りをすると、只じやア置かねエぞ。この女は追手の掛かっている抜詣りだ」

「えッ！追手が？」

「そうよ、御伊勢参りの狂信者で、問屋の娘などとは真赤な偽り、町内の無尽講の金を抜出した長屋の娘よ……こちらの御奉行所迄手配が廻っているんだ」

と睨みつけければ、番頭の奴、一遍に震え上ってペコペコ頭を下げる仕末。

長い廊下を渡って、その部屋の前、

「若し、お客様、お宿改めて御座います」

番頭が声をかけると、障子の中から鈴を振る声が、

「どうぞ」

ガラリと開けて、無遠慮に中に踏み込んだ伝次、行燈の光を受けて端座している鮮かな色彩を見て、思わず目を瞠った。

衣服は、黄色の格子縞、帯は紅地の菊散らし、顔は色白の瓜実、髪は島田に裂のかかった結い綿で、くす玉の簪、前髪を緋縮緬の小裂で縛ってあるのも可愛らしく、伝次を斜めに見上げた姿は、限らない娘十九の魅力に包まれている。

「おい、鹿乃とかいったな……」

「はい」

「お前、追手が掛かっているのを承知だろうな」

「えッ？」

娘の美しい顔が、驚愕に引釣った。伝次はギラギラ両眼を輝かせて、娘の体をシゲシゲとねめ廻した。

「そ、そんな事はありません。何かの御間違いで？」

娘は昏迷の声を震わせた。

「間違いだ……」

「は、はい。私が御伊勢様へ行くのを、家の者も親戚縁者も、日本橋迄見送ってくれました。追手などとは……」

「不戯氣るねエ、そんな手に乗る俺様じやねエんだ。つべこべいわずに番所へ来い」

と、いきなり娘の手首を掴んだ。

「無、無態な、何をなさいます」

恐怖の余り、娘は必死に、その手を振りほどこうとした。

だが、相撲上りの伝次はビクともしない。

いたずらに、伝次の肘の下で身もだえるだけだ。そのたびに、甘酸っぱい香りをまき散らし、伝次は顔を歪めながら、鼻腔をふくらましている。

「往生際の悪い、あばずれだ」

せせら笑い乍ら、伝次は、腰の捕縄をとるとあッという間に娘を後手に括し上げた。

商売柄とはいいい乍ら実に手馴れたもんだ。

娘は、もう泣声になって、その非を訴える様に口走るのを、邪怪に伝次の掌が、その口をガバツと塞いで、

「番頭、猿轡にする布がないか」

ハラハラしていた番頭が見兼ねた様に、

「そ、そんな手荒な事を……」

と、つい口を出す。

「野郎、御用の仕事に口を入れる気か……つべこべいわずに手拭を二本持って来い」

目を剝いて怒鳴りつけると、慌てふためいた番頭が、廊下を宙を飛ぶ様に、手拭を持ってきた。その間に、どこをどうされたのか、もう娘の裾が割れて、緋縮緬に白い脛が艶冶とこぼれ、はだけた襟から象牙のように白く豊かな胸のふくらみも僅かに、見えている。伝次の掌は、頬骨も砕けよと喰い入って、そのむごい猿轡の下で、哀れな娘は苦悩の呻き声を洩らしているのだった。

(二)

春めくや人様々の伊勢参り――。

当時、伊勢参りは伊勢講と呼ばれ、人一代に一度は必ず詣ずべしとの風習があった。

「嬉遊笑覧」という古書に依れば、

『今人多く鹿島詣わせて、まず京大阪大和廻りすめり。神仏にまいるは傍らにて、遊樂を旨とす。伊勢は順路なればかならず参宮す』とあり。

「むこうを通るは清十郎じやないか、笠がよ

う似た菅笠が。笠が似たとて清十郎なれば御伊勢参りはみな清十郎」

と、西鶴取材のお夏清十郎の小歌にも、菅笠で続くお伊勢参りの流行が囃されている。

すれば、伊勢参宮は、徳川の世も漸くうち続く太平、隆昌を見たのであって、参詣者の首途に際し、親戚知己がこれを村境に見送り迎えるのであった。

だが宝永の頃より、一度ではあきたらず二度三度とお参りする様になり、道々物を乞うて参詣する、お蔭詣りの狂信的参宮の風も生じたのであった。

「玉かつま」

によると、宝永二年（一七〇五）の四月九日から五月二十九日までの五十日間に、この種参詣者三百六十二万人を数えたのである。

如何に当時、伊勢神宮に対する崇敬が、津々浦々の庶民に迄滲潤していたか偲ばれるし、また参宮の傍らの遊樂を熱望していたか判るのである。

だが之が甚だしくなつて、抜け詣りといって、家来は主人に暇を乞わず、子は親に断りなく、妻は夫に夜密かに金銭路用を持出して追手の掛かる場合もあった。

抜け詣り追手の者に逢坂も栗津も同じ伊勢の同行



と、当時の百人一首換歌、狂歌等も頗る多いのである。この様に伊勢参り、抜け詣りは狂信的熱情の進みであり、と同時に遊樂熱であり、又平生束縛されていた家庭生活、下僕生活などからの無意識の解放運動であつたら

しい。従つて宿場宿場の泊りなども男女間の風儀も、可なり乱れて美濃近江寝物語にもものせんと、宿場のやどり狙う曲者ともあり、途中宿場の混雑、喧嘩刃傷、

ごまの蠅の横行も甚だしく、料亭などでは公然と賭場が立ち、悪漢も輩出して混乱を極めたものである。従って娘の一人旅などは、中途で悪漢に弄れ、遊女に売られる者も限りなくあった。

○ ○

まるで悪者の手籠め同様、後手の猿轡で、鹿乃という娘を、山城屋から引立てた伝次は、与力の須川大之進に近寄ると、意味ありげにニヤリとした。

「人目がうるさい。駕籠で行け」

大之進は、あたりをはばかりる様に小声でいった。

いくら役人とはいえ、まだ宵の口。大通りを後手猿轡の娘を連れて歩いては、怪しまれるに決っている。

「う、うっ……」

と娘は、与力姿を見ると訴える様に身をよじった、白い喉がいたずらに上下する。

「早くせい！」

大之進は、娘の素振りには目もくれず、伝次に、けわしい眼付でせかした。

「阿魔、くるんだ」

伝次は頷いて、娘の縄尻りをしぼって、猫の子を突き飛ばす様に引き立てたが、前後に眼をくばって、直ぐ通りすがりの駕籠を呼び止めた。

「御用の筋だ、番所迄やれ」

と十手を見せて、娘を駕籠に押込んだ。垂れの間から、匂う様な袖をこぼして駕籠がトンと上った。

「えんはい」「えんはい」

と駕籠は見る見る、闇に消えて行く――

(三)

ひたひたと寄せる伊勢海の波が、夜風に縮緬の小波を立てる浜辺。

その上は松阪と伊勢山田の間にある松並木月が雲に隠れてはのそいて、青白い光が、その度に並木に明暗の縞を醸し出していた。

「えんはい」「えんはい」

と一挺の駕籠が松阪の方からやって来た。駕籠にびったりとついて走っているのは伝次だ。

「おっと、此处で降ろせ」

「親分、ここは？」

「いいから降ろせ！」

「そうですか、へへへへ、余計な事を申しまして相済みません」

猿轡の娘を乗せて来た事を、猜疑深く推量して、駕かきは駄賃を貰うと振り返り振返り、引返して行った。

伝次は、まだ腕いている娘を軽々と昇ぎ上げると、道から浜へ下った。浜には、網小屋らしいのが所々にあり、漁船がズラリと並んでいる。

その一つへ、娘の体を苦もなく抛り込むと

その上からすぐ苦をかぶせた。そして後は舟べりへ腰をかけて、煙草をくゆらしたりして饒てくる人を待つ様子――。暫くして（おや？）

近寄ってくる人影に、伝次は首を抬げた。

どうも待人ではない様子。

「お月見ですか？」

と近寄った影は、襟のかかった黄八丈の派手な半纏を羽織って、黒縹子の帯、根の緩んだ島田、片手を懐にした自堕落な格好の女。「放っといてくんねエ」

伝次は蒼蠅そうに、にべもなくいう。

（此の阿魔、苦の下娘に気付かなきや良いが……）

がらにもなく何か内に咎める気が湧いて来た伝次が、女を上目使いで見ると、月の光が雲からサツと出て、女の顔をありありと照らした。

月の光では、どんな女も美しくなるといふが、小褌を下ろしたこの女の婀娜つぽさ。

と、女も伝次を見て、ニッコリした。

その妖艶な魅惑に、思わずブルツと身震いした伝次は、ふと

（おや、この女？）

確かに見た事があると、悪い記憶をあこれと巡らした。

「う、う、うッ」

と、微かに押しつぶされた呻きが、顔なく

ように流れた。

苦の下だ——

女も、それを聞くと、何か不審を抱いたらしいが、と同時に形相を変えて警戒する様な伝次の身構えに、無言でスーと舟を離れた。「とんだ不粋をするところだったね、御免なさい」

と艶然と笑った。後は馥郁たる香を残して又蹣跚とした足どりで去って行く。

(判った、変化のお銀だ！)

一瞬、安堵して一瞬、記憶がよみ返った。お伊勢参りの旅人を相手に、荒稼ぎの女掏摸時には剃刀の折を指に挟んで坊主というが、伝法でぞんざいな口調も艶かしい、国貞うっしという肌合のお銀だ。

東海道の要衝、三河岡崎の生れというがそこを根城にして、名古屋、桑名、四日市、亀山と荒らして、津、松阪にも出没する七変化の女賊だ。

(一度はシヨツ引いて、うんと痛めつけてやりてエもんだ)

と岡ッ引仲間が鵜の目、鷹の目で狙っている星でもある。

だが、今はこちらにも弱身がある。

(よし、明日にでも探し出して……)

と伝次はニツタリして、その姿を見送ってから苦を引ッ剥がした。蒼白い顔に、無残な猿轡の娘をのぞき込んで

「おい娘、この伝次様の手に懸かったらもう逃げられっ子ねえんだ、悪いくちを引いたと思つて、いい加減に観念した方が利口だぜ、そのうちにゆっくり弄んで、三河の唐人屋敷へ売り飛ばす手筈になっているんだ」

凄みを利かして、陰險な罫を教えると、娘は、身も世になくもだえて呻きを上げる。

「おとなしくしねえか」

と、伝次は猿轡を念入りに締め直す。

「地獄へ落ちて、気の持ち様一つで結構楽しく生きていけるんだぜ。地獄が極楽になる女の味を、たっぷりと思ひ知らしてやる迄、少しの我慢だ、しん棒しろい」

淫らな口調で、勝手な事を喋った伝次は、ふと松並木に目をやって

「遅いな、須川様は」

と呟いた。

四

一方お銀は、どこでどうしたのか、髪も衣裳も直して、厚化粧に脂を点じ、すっかり品の良い御寮人風になって、それから一刻後には、松阪の「浮舟」という料亭で開かれた賭場へ姿を現わしていた。

お伊勢参りの済んだ遊楽客などが、流石にお膝元の伊勢山田町では手戯みも出来ず、一つ離れた此の宿場集って、素人玄人とりまぜて、旅の憂さの捨て所とばかり、蠟燭を継ぎ継いで鶏鳴を知らずに、何処へ行っても捨

てきらぬ欲心の修羅場を現出する所だ。

小判や小粒の燦めく賭場に、フワリと風を薫らせて坐ったお銀は

「妾にも一勝負、お仲間さして下さいな」

と、大の男共に怯みもなく艶然と笑った。

血走った眼で、骸子の目を追っていた男達や、見物の客人達は、一瞬、この一輪の馥郁さに思わず瞳を凝らした。

「姐さん、どこのお方が知れませんが、これは男同志の勝負ごと、とてもとても端た金では済みませんぜ」

盆ごさを握る、浮舟の主人清兵衛が、流石に貫録を見せていうと

「これっぽっちじゃ駄目かしら……」

帯の間から、手の切れそうな五十両の封金を平然と二ツ出したお銀だ

「これは御見せしました。姐さん、いい御縁で……」

と他愛なく、額を叩いて狡猾な欲に眼を細めた清兵衛は、壺振りに眼で合図した。

壺振りの奴、殊更に張切って壺を振り出した。

「勝負」

——今夜はどうした事か賽が片寄って、半へ半へと金が流れ込だ、その半を一人占めにして、顔色一つ変えず澄まして勝負をつづけているのはお銀だ——

縦から見ても横から見ても、掏摸とは思え

ない。芸者にしては品が好く、御寮人様にし
ては粹すぎる。

(たかが女に！)

と、忌々しがって張り合う玄人までが軽
いなされて、不思議な賽の起きようには貸元
の清兵衛でさえ手の下しようもなかった。

「勝負は、もうお仕舞で御座いますか？」

と、お銀は含み笑いをし乍ら一座を見廻し
た。艶めかしくくずした膝前には、盆から寄
せ集めた山吹色が、六百両もあるうか……

「妾が勝ち過ぎたといっても五百両余り……
たった賽の一転びで御座んすよ」

大の男達を前にして、女一人のいい分とし
ては少し癪にさわるけど、この調子に乗れば
みすみす負け込む事が判っているので、誰も
二の足を踏んでいる。

その時、その座へぬっと入って来た男があ
った、客人のうしろに立って暫く凝っとお銀
の様子を見ていたが

「じゃあ、一つあつしがお相手いたしまし
よう」

と、いつてゆったりと盆の前へ坐った。

「姐さん、あつしも丁度六百両ばかり持ち合
せがある。どうです一番勝負で行こうじや御
座んせんか」

と挑戦した。

小肥りの四十五六の男だが、柔和な小さい
眼の中に、何処か鋭い光があり、これも只者

でない。

「結構で御座います」

どつと、どよめきが起った――

静なのは当人同士丈――

「あつしは丁へ」

と男は何のためらいもなく百両の封金を六
ッ前へゾロリと投げ出した。

壺振りには、我が事の様に興奮して夢中で壺
をふって、バタリと伏せた。

「勝負！」

一座は息をのんだ。

壺が開いた。

「丁だ！丁目だ！」

一座の視線が一齊にお銀にそそがれた。
だがお銀は顔色一ツ変えぬ。

ただ、切長の眼に、負けず嫌いの氣象が、
サツと流れた。

「きれいさっぱりやられましたね。だが、重
ねてもう一勝負御願いしましょうか」

「賭け代によつては、否やは御座んせんがね
……」

黙々と千二百両の小判を集めていた男は、
お銀の顔をゾロリと見上げた。

お銀は、キツと唇を噛んで

「この体を張って千二百両、妾が負けたら、
煮るなり焼くなり刺身をつくるなり、勝手に
しておくれ」

一座の者は、あつと口をあけた。

「……………」

「おや、旦那、黙っている所を見ると、この
体じや不服だつていふのですかい！」

「……………」

氣圧されたのか、お銀の口調の凄艶さに魅
せられたのか男は相変らず無言。

「姐さん、体を張るなんて滅法な了見違いだ
ぜ、勝負は時の運だ、向うで一杯やって出直
したら……多少の地銭は相談に乗ろうじやね
えーか」

と、やつと引き止める清兵衛を

「よしして下さいよ、貸元。妾は金が欲しくて
勝負をしようというんじやないんですよ。た
だこの氣が済まないんでね……それに妾の体
を、妾がどう使おうと勝手じや御座んせんか
どうせ一度は散る体ですよ」

鼻先で突つ刎ねるお銀だ。

「旦那、妾はこう見えたつて、野郎知らずの
生娘だよ、三河の唐人御殿へ売り込んで、
千や二千になる体なんですからね」
一瞬、男の眼がキラッと光った。

(三河の唐人屋敷！)

だが、それも直ぐ消えて

「あんまり吃驚して口も利けなかったが、姐
さんのその体を賭けられて、みすみす引ッ込
んじや男の恥だ。もう一勝負参りましょう」
男は、下ぶくれの顔をほころばせた。

その翌日――

志摩国志摩半島の北端にある鳥羽港に、又夕闇が迫って来た。

伊勢海の入口にある答志島が墨絵の様に、かすみ、夕風、港内に懶い三味の音が水面を渡る。

港に出入する諸国の水夫、楫主を相手に立並ぶ、お伊勢茶屋が数十軒。浜河岸に寄する小波に影を映して、行燈の灯が一齊にともった。軒並の水引暖簾の陰で、玉の諸肌を押し抜いで、抱え女が牡丹刷毛に白粉の香を競わせる中に、奥行きのある門構えの海老料理の門構えの家がある。

松阪の「浮舟」が経営する同名の料理屋だ。その風通しの良い表二階で、数寄を凝らした酒器料理を前にして、主人の清兵衛と密談をしている二人の武士は……

三河岡崎藩の御船手門井喬馬と、今一人は山田奉行所与力、須川大之進だ。

「三河丸の出港は明朝子の刻過ぎ、八刻半（今の午前三時頃）と決まり申した」

喬馬は油断なく、あたりを窺い乍ら大之進に囁いた。

「三河守様にはすでに楼船の屋形へお褥ねを移されて居られる……で、獲物の女達を積み込む手筈は……」

「それに抜かりは御座らぬ。ただ、此度着任いたした、新奉行は案外の利け者で、浜河岸

の廻船支配所（一種の税関）で荷物改めが厳しくなり申した。依って長櫃に女共を入れて浜河岸より積み込む事は控えて、網船に乗せて、一足先に港外に漕出して沖から、三河丸に積み込ませては如何で御座る」

と、大之進も声をひそめる。

「うむ。いずれにしても万事遺漏のない様に頼む」

「若し三上様、其処はこの清兵衛にお任しになつて下さいまし、あつしが、お天道様は西から出るんだといえ、此の辺の漁師共は、へい左様で御座えますとこたえる程で御座んすからね……」

と、傲然と胸を叩いたが

「ところで、お取引の値段は如何程で御座いますようか……何しろお伊勢参りに集る、全国の子から選んだ上玉揃いで御座いますしてへへ……」

と、今度は強欲に卑屈な笑いを浮べる清兵衛だ。

「金に糸目はつけぬと申したいが……近頃唐人より多額の品物を購入いたしての……まあ女を見てからの相談としよう。女は何処にいるのだ」

「へい、では御案内致しましょう」

奥座敷に通じる廊下の行き詰りで、清兵衛が、座敷の柱をトンと叩くと、行き詰りの壁はクルリと一転した。

籠燈返し――

三人の姿が、その壁をくぐって中に消えた時、其処にしのび足でやって来た女があった。眩しいばかりの厚帯に振袖姿のお嬢様だが玉虫色の朱唇から呟いた言葉はあられもない。「ちよッ、こんな仕掛けがあつたのかい」

四日市の豪商の一人娘で、癆咳という病にかかり、癆咳には海老が良く利くとかいう医者者のすすめで、お伊勢様に病氣平癒の祈願のあと、ワザワザ「浮舟」に立寄って海老料理を食べていたお客だが、供の者も連れずに只一人だ。

「すっかり気に入りました」

などといっているが、膳脂色の灯や、音締の撥や、白粉女の嬌声がひっきりなしで、あまり褒めた場所でもない。

「癆咳にかかると、あんなに標緻が良くなるのかねえ、憎い程の美しさじゃないか、うちの人が見たらトタンにポーとなるから、あのお客のいる間は、お前達も気を付けておくれよ」

などと清兵衛の女房が、勝手な凜気を起して女中達に口止めた位の美しさ。然し良く見ると、その美しさも娘の楚々たる美しさでなく、女盛りの燃える炎を包んだ濃艶さがある。

それに今の伝法な口調といい……？
それもその筈、この娘は、お銀だった。

(内)

ではお銀が、何故こんな恰好で、此処に何の目的で来ていたのか？

あの松阪での男との勝負はどうなったのか？

それは一先ず置いて、次に筆を進めよう。

ふと、背後に人の気配がした…。お銀が思わずギョッと振向くと、岡ッ引の伝次がいつ来たのか、ヌッと立っている。

「お銀、矢張り手前だったんだな」「あっ……」

追に、お銀は動悸を感じたが、すぐ気を取直すと、怯みを見せずに艶然と微笑して

「驚くじやありませんか親分、人のうしろに突っ立っているなんて……」

「ふん、驚くのはこっちの方よ。昨夜は浜辺の夜鷹になって、今夜は四日市のお嬢様とは……流石七変化のお銀だな」

と、伝次は殊更に十手をみせびらかして、

「どんな風の吹き廻しで、そんな素とん狂な真似をするのか知れねえが……お銀、お前え、その籠燈返して仕掛けを見たな！」

がらりと変る鋭い語調で、真向からお銀を睨み据えた。

「知らないね。籠燈返しとは何だい？」
咄嗟の間にも、空囀けるお銀だ。

「ふざけるねえ、女賊の手前が知らぬ筈はねえ。免も角このままじや帰させねえぞ！」
威嚇する様に眼をギロつかせて、ジリジリと摺寄って来る伝次だ。



「な、なにをするッてんだよ！」

思わず帯際の懐剣へ上げようとした右手を伝次は職業柄、素早い身のこなしで、グイッと掴むと、力まかせに捻じ上げた。

「お離しッ、妾の手を！」

「何を寝言言やがる、ちよいと痛え目に逢わせてやるから覚悟しろよ」

お銀は唇を噛んで無念そうに、伝次の馬鹿力に身をもがいた。

「じたばたするねえ」

と、伝次はそのまま、捻じ倒す様に、お銀を膝の下に組み敷いて、白い手首に、もう捕縄を絡みはじめた。

「ち、畜生！」

高島田の根が揉み壊されて、簪が廊下に金属音をたてて落ちた。

左手も捻じ上げて、胸に一卷き二巻き、それをグイグイとしぼって忽ち、後手に縛り上げて仕舞うのだ。

「ち、畜生、何をするんだ。解け、解かないか……あれ、誰か！」

お銀は、とうとう金切声を上げて助けを呼んだ。

「娘ッ子じやあるまいし、ぎやあぎやあいうな」

伝次は腰の手拭を、ピリりと裂いてその一つをクルクルと丸めた。

「く、くっ！」

無理矢理にお銀の唇をこじあけて、丸めたのを突っ込むと、苦しきまぎれに首を振るお銀を膝頭ではきんで、帯の扱帯を解き、唇と鼻孔まで蔽ってむごたらしい猿轡を嵌めた。

その間にも、お銀の足掻き悶える姿を楽しんでる伝次だ。

「立て！」

伝次は縄尻を掴んで引あげた「う、うっ」

逆さに捻じ上げられている腕に縄が喰い込んで、猿轡の下から苦痛の呻きをあげてお銀は立上った。

「歩け！」

と邪怪に小突く。

二枚重ねの振袖の裾が乱れて、もつれた足が、それに躓ずいて、すぐによりりとお銀は仆れた。

「五十三次を荒らし廻った女掏摸のお銀も、こうなると他愛がねえな……」

憎々しく伝次は嘲ると

「あの金籠燈返しの中にはな、日本中から集る美しい女を選んで閉じ込めてあるのさ。それを探りに来たお前は、一体誰の指金で此処へ来たのか……まあ、どうせ素直に口を割る女じやねえだろう、兎も角こっちへ入ってる」

と、荒々しく奥座敷へ連れ込むと、床の間の柱にお銀をつないで、金籠燈返しの中に姿を消した。

(七)

その中は、窓一つない闇のジメジメした部屋であった。

手に裸蠟燭を持って、捕われの女を一人一人喬馬に見せているのは清兵衛だ。

その女達の中には、あの鹿乃もいた。

舟で此処まで運ばれて来たのだ。

「へへへ、如何で御座います。この娘は」

と清兵衛は鹿乃の頸に手を掛けて、グイと上向かした。髪も乱れて、サンバラ髪、裸火に、襟も裾も乱れぬいて、妖しい迄の艶かしさ。

「猿轡を、といて見てくれ」

喬馬は大之進にいった。

まる一日振りで猿轡は解かれた。だが鹿乃は、叫び声を上げる気力もなくなっていた。

長い睫毛を伏せて、すじの通った鼻、花唇豊頬には猿轡の痕も痛々しい。

「うむ、美形じやて」

「江戸の女で御座います」

他の女達は、衣服、形、色とりどりであったが、いずれも後手猿轡の緊縛に喘いでいる。ムツとする女の甘酸っぱい膚の匂いが、蒙々と籠めて、此の世のものと思えぬ艶かしさ。

「これで拙者も役目の甲斐があった様な気がいたす。殿も御喜びじやろうし、一段と唐人共も相好を崩す事で御座ろう」

喬馬が満足げに頷いた。其処へサッと光が指して、金籠燈返しが一転して伝次が入って来

た。喬馬に、うやうやしく一礼すると大之進の耳に何事か囁いた。

「何？」

大之進の顔色が変わった。

(四)

今、奥座敷では柱につないだお銀をとり巻いて凄艶な、絵巻が展開されていた。

振袖の裾から、袖から燃える様な緋鹿の子の長襦袢を見せて、お嬢様姿のお銀は黙々と顔を伏せている。その顔には、猿轡の扱帯が巻かれたまま、だが、額にはベツトリ脂汗が滲み出ている。

今迄にどれだけ、ひどい目に遭っていたか想像がつく。

「うーむ。しぶとい女め」

大之進は、手にした荒縄の束を又振り上げた。

ブスー、ブスー。

と肉をうつにぶい音がして、その度にお銀は体をくねらせ、のたうつ様に悶えるのだ。

派手な衣裳が、のたうつ度に、くずれて乱れて、襟から肩が抜け、苦悶にはげしく隆起する白桃の乳房が、男心を更に煽情する。

伝次は舌なめずりをする様に、下司な目附で淫らな笑みを浮かべている。お銀の裸身でも想像しているのだろう。少しづつ現われてくる白い膚を餓狼の様に、凝視しているのだ。喬馬は、平然と片手で顔をなで廻してい

るが、心の中では意馬心猿を燃やしている。

「これでもいわぬか、これでもか！」

狂鬼の様に、束を振う大之進だ。

柱に、つながれ、後手にくくり上げられた腕を、今にも折れそうに身をのぞけらしたお銀は苦悶の悲鳴を、猿轡の下で挙げた。

「うー、うー、うーッ」

裾がもう、二つに割れて、白い脛にからんで緋鹿の子と、より真紅の腰布が花模様を宙に描く。

「これでもいわぬか、よーし、その強情な口で、憐みを乞うなよ、女の羞しさを思い知らして狂い死にさしてくれろぞ……」

大之進の顔に残忍な色が浮き上って来た。

「裸にして、さかさに吊して、その白い肉の一つ一つをえぐりとってくれようぞ……いいかお銀、その前に今一度訊いてやる、貴様、誰に頼まれて、この家に探ぐりに入った。いえ、領けば猿轡をとってやる……」

だが、お銀は頑として眉一つ動かさないのだ。

(死んだっていうものか……) そんな悲痛な決意が見える。この上、女として、忍ぶべからざる汚辱を受け様とも……。

一体、七変化の女賊お銀を、かくも生身を犠牲にして、守ろうとするものは何だろう。たった一夜で、あの松阪の賭打で、お銀は斯くも変わったのだろうか、不思議な思いで、さ

つきから考え込んでいたのは清兵衛だ。

最初は、お銀の姿を、べら棒な色模様だとばかり、涎を垂らさんばかりだったが、叩いても叩いても、口を割らないお銀に、一体何処にこんな強靱な精神がひそんでいるのだろうと、密かに舌を巻くと、色事ではなくなつて仕舞った。眼の前で、白や赤や青の色彩が乱れて、美女が苦悶する姿に血管が燃えてたのが、一遍に水をかけられた様に冷えているのだった。

ふと

(あつ！)

と清兵衛は口の中で叫んだ。

昨夜お銀と賭をして、二度迄お銀を打負かしたあの小肥りの男が、誰かに似ている似ていると思っていたが、判然としたからだ。

(こんど新しく江戸書院番より赴任した、山田町奉行大岡忠相様だ！)

その時、大之進は伝次に顔をしやくった。

「お銀を裸にしろ」

待ってましたとばかり伝次の奴、武者振りつく様に、お銀にのしかかった。

「待て」

喬馬が頃から手を離れた。

不審そうに大之進と伝次は喬馬を見た。

「拙者にやらせろ！」

喬馬は始めて、顔をグニヤリと崩した。その頃――

奉行所の門が大きく左右に開かれ、新奉行大岡忠相は、馬上姿も勇ましく数十人の捕方を従えて、ドツと繰り出していった。

目的地は、鳥羽港・浮舟。

あの夜、大岡忠相はお銀の口から、三河の唐人屋敷^{てんじんおく}という言葉を聞いて、眼を光らしたのであるが、お伊勢参りの女達の中から、松阪附近で行方不明になる美しい女があると聞いて密かに内偵を進めていたのだが、陸上から女を運んだ形跡がない……すれば海である。漠然とそんな事を考えていた時、三河の唐人屋敷と聞いて暗霧が一掃した様に思った。

(女を海から運ぶとしても、熊野灘は越えられまい、すると、どうしても伊勢海か、三河湾か遠く遠州灘を越えて駿河か、相模?)

それが、はつきり三河と目星がついた。

三河国岡崎の城主、水野監物は評判の唐国通である。ワザワザ長崎出島迄出向いて唐人を礼を尽くして呼びよせ、領内に唐人屋敷を立てて住ませ、異国の物産を本国より、取寄せさせて、それを手当り次第に購入する。所が唐人は、小判を好まない、代償に日本の美女を要求する。

そんな噂を、江戸城の詰間で聞いた事がある。然し、日本の女は、唐人と枕を交す事はどんな芸者、遊女でも嫌悪するものである。とすれば手段は一つ、誘拐である。

それに、三河藩の持船、高砂丸は年に三三度海路、伊勢参りに鳥羽港へ来る。

(読めた!)

忠相は、そう思うとこんな女と勝負所ではなかった、然し、折角ヒントを与えてくれたのだからと思い、又、丁に張った。ところが目が立って、最初の一寸した悪戯が、女一人の身を背負い込む羽目になった。忠相は可笑しい程狼狽して、金丈取ると逃げる様に賭場を出た。

一座の呆然たる中を――

「お待ちよ……」

だが、お銀は追って来た。

「何処へでも好きな所へ行くが良い……」

「冗談じゃないよ。勝負は勝負さ、煮るなり焼くなり刺身にするなり……」

「どうしたって喰える女か、帰れ――」

「このお銀は、どこ迄もついて来た。」

「妾はお銀というんだよ。お前さんは……」

「聞いてどうする?」

「どうするって、女房が、亭主の名を聞くのは当り前じゃないか……」

「これは驚いた。まあ、いい、とり敢ず御前様とでも呼んで置け……」

お銀はブーッと吹き出した。

「賭博打の御前様もないもんだ」

お銀は忠相と並んで歩き出した。

「何処へ行くのさ、いい加減に宿をとろうよ」

……

「山田町迄行くのだ」

「妾も行くよ」

忠相はふと、立止った。

「どうしてもついてくるのだな」

「当り前さ、夫婦は二世というじゃないか」

「逃げるなよ」

「お前さんこそ、妾の正体を知って逃げなさんな」

「ハッハッハ」

と忠相は磊落に笑って

「其方の正体は知っている。それで一つ頼み度い事があるといったら……」

「勿論喜んで引受けますわ……」

「左様か、然らばついて参れ」

忠相は又、歩き出した。

「いやだよ此の人は、急に侍口調になったりしてさ……」

と冷かし乍ら、いそいそと忠相の後を追った。

お銀は山田町へ入ってから、男が、大きな門の中へすたすた入るのを見て思わず立止った。門番もいる。然も高張り提灯を掲げて、門には大きく

伊勢山田町奉行所――

「あッ――」

お銀は蒼白になって、ガタガタ脚が震えて

来た。中から男が声を掛けた。「どうした、決して離れぬといっていたではないか」

決して離れぬといっていたではないか

「は、はい」
息をのんで

「今のお方は？」

と恐る恐る門番に訊くと。

「たわけー御奉行様じやー」

此の瞬間、お銀の生きて来た基盤が百八十度転廻する様になったのである。

伊勢山田奉行所は幕府の遠国奉行所の一つであった。(伊勢山田は当時ヤウダと訓じた)その管する所は、神宮の警衛より造営、修繕を始め、伊勢志摩、両国に於ける幕府直領地の支配、志摩鳥羽港出入の船舶点検等であった。老中の支配に属し、奉行の役料は千五百俵であり、与力六騎(人)同心二十人を従えていたのである。

だが、その中で、誰か職分を汚している者が居る。でなければ、出舟入舟の度に検査する役人の眼を逃がれる事は出来ない筈だ。

(まして、荷物が生き者……)

其処で——かねて怪しいと睨んでいた料亭「浮舟」へお銀の登場となったのである。

帯が、振袖が、細紐が、そして緋鹿の子の長襦袢が、喬馬の手でむしりとられて、目も綾に座敷一ぱいに散った。

喬馬は血走った眼で喘いでいた。

淫らな虫のように掌が、ぬめぬめとお銀の膚を這って、なだらかな腰に下りた。

「うー」

最後の気力を振り絞ってもだえるお銀。

露わな二の腕を後ろに、ねじって押えているのは伝次だ。その眼は僅かに白い肉体に残る、真紅の腰のものに焼き付く様にそそがれている。

喬馬の手が、やがて、むずとそれをつかんだ。やわらかい感触が、掌から全身に伝わり、激情がせきを切った様に、パツと剥ぎとった。

白い花が、満開になった。

お銀の雪をあざむく裸身が、行燈の灯に輝くばかり眩しく浮き上っている。

「足を縛れ、吊るんだ」

大之進が熱病の様な声を出す。

伝次が、お銀をねじり倒した。

喬馬が散っている細紐を二三本、とって羽二重の様な足首にギリギリと巻きつけた時、座敷の外が急にさわがしくなった。

あつ、という間に、十手、六尺棒を振りかざして捕手が、躍り込んで来たのである。

お銀は、体に肌着を感じて、フツと我に返った。眼を開けると小肥りの柔和な顔が、微笑んでいる。

「ご、御前様」

お銀は猿轡を、かなぐり捨ててるのも、もどかし、忠相にしがみ着いた。

翌日——からりと晴れた日本晴の中を五十

鈴の清流に、身も心も清めて、新しく更生の立出をするお銀のつましい姿がある。お伊勢参りの菅笠が続く中に、お銀は又、振り返った。

見送る忠相も、それに答えて手を振る。

菅笠の中には、暗黒の部屋から救け出された美女達が、喜び勇んで故郷へ帰る姿もあった。三河守は、公儀の命で所領払いとなり、唐人屋敷は焼き払われたという。

お銀の消息は——誰も知らない。

(おわり)

〔映画速報〕

大映 「冥土の顔役」

阿部 秀

ストリップバー、ジッピー(毛利郁子)は殺人現場に遺棄された洋傘から、その事件の渦中に巻き込まれ、白昼アパートでギャング団に襲われる。必死に抵抗するのをベッドの上を押さえつけられ、ワンピースを引きちぎられブラジャーとパンティの半裸にされ、ちぎれたワンピースで手足を縛られタオルで猿ぐつわをされてしまうが京子(川上康子)に救われる。その後、ギャング団の一人をキヤパレーで見つけ尾行するが発見されハンカチで猿ぐつわをされ自動車の後部に押し込められる。

(「冥土の顔役」の一場面の写真は次号口絵に発表の予定です。)



〈手記〉

私のいたづら

南 時 夫

これからつれづれなるままに私のいたづらをお話いたしました。それはノーマルな人からみれば全く馬鹿々々しい、いや全く異常な遊び事でしょうけれども、私―サディストとしての私にとっては、この上のない慰めであり無上の楽しみでもあるのです。これからお話しようとするような事は私程度のサディストの方ならば秘かに楽しみとされていることだと思いますし別に珍らしいことでもないのでしょうが、それ等の方々を代表して書き出した次第です。

（一）写真の切り抜き

初めにお話するのは、いろいろな写真類を切り抜いてそれに細工をすることなのです。私達サディストにとっては現実には殆んどその満足を得ることは出来ません。電車の中で素敵な美女に出逢って、ああ縛ってみたい、と思っても実現する可能性は零に等しいことは当然です。自分の恋人ですらなかなか実行出来ないのですから。従ってその夢をなんとか満足させようとすれば縛られている女の人の写真を見るか、映画のスクリーンでそのシ

ーンを期待する他ないのです。その点、奇クの存在は全く貴重で奇クがなかったら私達の夢は殆んどかなえられないことがないでしょう。さて女性の縛られている姿態を写真で見ることとも以上の二つの手段しかないとするれば矢張りそこには限界があることは止むを得ません。奇ク誌上にのっているモデルの方々の緊縛美の姿は本当に素晴らしいものですが、それも一ヶ月にやっと二三ポーズを見せて下さるだけで量において不足します。又、映画の場合も上映時間二時間位の中で僅か一、二カットの緊縛場面しかないのが普通ですので、

後手にして胴体にくっつける様にするので、片方の手を上に挙げている様な写真は仲々むづかしいのですが、その向きをよく考えて殆んど後手にすることが出来ます。ただ手を前にしている場合とか、片方の手をそっと胸のあたりにあてている場合には、その部分に鉄を入れるには胴体まで切り込むことにならるので不可能です。どうしても材料にしたかったら仕方がないのでそのまま両手首に輪を書き込みそれを鎖で連結して手錠の様にみせるとかする他ないでしょう。両手を上に挙げている場合は、そのまま手首に縄を書き込み上に吊り上げてもよいのです。足は余り細工しません。時々左右に開いているのを切り取ってから又一本にはりつけぐるぐる縄を巻きつけることもあります。

以上の様にして今日まではただニューモードの洋服を着て写っていた一人の女性がまたたくまに猿ぐつわを噛まれ後手に縛られた女として眼の前に出現するということになるのです。我ながら随分と惨酷ないたづらと思ひ御本人がそれを見たらさぞ御立腹のことと思ひますが、どうも仕方がありません。伊東絹子さんをはじめフアッションモデル諸嬢を殆んどこの材料にして縛り上げてしまった私は次に映画雑誌に眼をつけました。この方は親しくスクリーンの上でお眼に掛っている人々なので尚更実感が湧きます。古本屋に行くと

映画フアンとか近代映画又は平凡、明星等の雑誌が二、三十円で売っています。それを買って求め今迄に殆んど女優さんを縛りました。実際にスクリーンでその縛られシーンを映してくれただけのことのあるスターにこの方法で猿ぐつわ、緊縛の細工をしようとそれ等の緊縛美が再現しますし、今まで一度もその様な姿態を見せてくれたことのないスターの場合はたくましい想像力とマッチして私の夢を多分に満足させて呉れます。

以上の様にして仕上った写真を、スクラップブックに張りつけて楽しみに眺めています。私はそれを令嬢編、ストリップ編、フアッションモデル編、女優編等に分けて観賞しています。まさに美女緊縛美のオンパレードと云ったところで中にはハツとする程実感のこもった作品もあります。次に御参考までに私の作品集の女優編を開けて二、三頁説明してみよう。これ以外に沢山あるのですが、その一部だけを――。現れるスターの順序は別になく、出来上ったものからはりつけています。

第一頁に香川京子がいます。これは、猫と庄造の時の水着姿の写真を切り抜いて猿ぐつわと紐を書き込んだものですが、横座りに多少上を向いている彼女が黒い布で猿ぐつわを噛まれ後手に胸を四巻き縛られています。表情に多少笑いがみられるのが唯一の難点。

その隣に左幸子。彼女が縛られた映画はまだ見たことはありませんが、私の写真では水着姿の彼女がアグラをかき水着と同色の猿ぐつわ、首から腕、胸、さらに両ひざから足首と縄がかかりエビ責めにされています。猿轡からのぞいている大きな眼が悲しそう。その次に和服姿の嵯峨三智子。首から胸にと亀甲型にきびしく縛られていてスクリーンで見る彼女そのままだ。第二頁になると有馬稲子が登場します。彼女こそまだスクリーンでは縛られたことがないでしょう。私の手もとの彼女は横向きの顔を多少しかめ（本当はゴルフ場でのスナップ写真）口には猿ぐつわを巻かれた上、荒縄で後手に縛られています。スラックスをはいた両足も膝と足首を縛り合わされて。その隣が近頃ますます色気を増した美空ひばりの緊縛姿態。ひばりは以前に縛られた映画が数本ありますが、余り緊縛感がなかったとか。監督さんも遠慮したのでしよう。でも私の眼の前にいるひばりは可愛想に露わな両腕に縄が喰い込んでいてそれが乳の上下から首へと掛り腰に結び目があって殆んど身動き出来ない程です。鼻口には真白い手ぬぐいで猿轡がはめられて頬がぐっと凹み、きつと「うーうー」とうめいていることでしょう。ひばりのフアッションの女の子でもこれを見たら私の方が塩酸をひっかけられそうです。その次に杉田弘子のぐるぐる巻き姿。第二頁には野

添ひとみ、高峰秀子、北原三枝。次の頁には前田通子がビキニスタイルのまま両手を高く吊られて口にはブラジャーと同色の猿ぐつわ。その他哀れにも猿ぐつわの顔に更に眼かくしまでされた岸恵子。一度は本当にスクリーン上で見たいと思われる山本富士子の猿轡、後手姿。高千穂ひづる、田代百合子の作品は彼女達の東映時代の活躍をそのまま再現しています。以上、全体の何分の一かの部分を説明してみました。ある女優の縛られ姿を一応は見てみたいと思っている読者も多いこととでしょう。でもそう簡単に実現しないこと

は、それが大スターであればある程多いと云えます。例えその企画がなされても、きびしい縛目は期待できません。少し前の「地獄花」の京マチ子にしても縛られて馬の背に乗せられ追放されるところがありますが緊縛感には全然ありません（前手縛りのせいもありますが）従って幾分でも夢を実現させるには私のこの遊びの様にして緊縛感のある写真を作り上げなければならぬでしょう。以上の方法の他に雑誌の縛り絵の首から上に有名スターの顔をはりつけてもみましたが、これは余りよい結果ではありませんでした。又、女友

達をその対象にしたいと思う場合（勿論実際に縛ることが出来ればこれにこしたことはないのですが）には、写真をとる時に手を後ろに組んだポーズをさせるとか、木に後手に寄りかかって顔を多少しかめさせるとかして写し、出来上った写真に細工をほどこすことも出来ます。

作品の一部でも誌上にのせられるとよいのですが複写がむづかしいと思われまうので、それはあきらめました。夜長のつれづれなるままにささやかな秘め事的一端を御紹介してみました。次回には又別の楽しみをお知らせすることを約束致します（以上）

時評

麻生保氏の生活と意見【四】

麻生保

「蝶」「お嬢さん」「日本人クラブ」吉屋信子撰集、昭和十四年発行（新潮社）沼正三氏が、手帖第六十九項で、原作者の「双鏡」その他をとり上げて居られたが、これ等も、大体似たような吉屋調のもの。一寸いける場面も時々ある。

「お嬢さん」では、規矩子が、軽井沢の高原で、フィアンセの青年、藤波邦雄から接吻されそうになった時、彼の頬に平手打を喰わせるところがある。最後はメダシメダシではあるが、その他、彼女の言動は、時々、アレレと思う事あり。

これに比べると、「蝶」は、もう少し手がこんでいて、吉屋女史の作としては、ごく出来のいい方だろう。藤川鮎子は、十五才の少女。病を養い乍ら、一人海岸のホテルにいる。ここで、女流画家三津木真珠をみそめる。真珠は、同性の恋人、声楽家関千枝子と

一緒に来ているのだったが、この二人は、翌日出帆し、フランスへ向った。三年後、鮎子は、帰朝したての関千枝子に声楽を習い、そんな事から三津木真珠とも親しくなり、望まれてモデルになったりしてうちに、ベットのにされてしまう。鮎子は、父から、佐々恒雄との結婚を強いられるが、真珠のとりこになつて、レスピアンの愛に溺れ切っている鮎子には、男がうとましくてならない。夏、軽井沢で（やれやれ、また軽井沢だ）鮎子と恒雄は乗馬をする。林の中で馬から下りる。

『陽をさえぎった、冷たくほの暗い程の夏の森の中に立つ彼女の白い乗馬服の姿は、男装の麗人という言葉をも十分に連想させた。その大きな黒い瞳も、唇も、はつきりとした処女の顔の輪郭も、濃く長く張り渡された眉毛も、心もち蒼ざめた頬のすっきりしたプロファイルも、美しいお小姓の美少年のようだった。』

鮎子の心をつかまない恒雄は、いきなり鮎子を抱きかかえて接吻する。

『あの、真珠夫人の水のように冷たい、赤い、はなびらのくちづけにひきかえ、それは何と生々しい、現実的なくちづけだったろう。鮎子の片手に持っていた、細い、しなやかな、支那竹の乗馬用の鞭が、高く振り上げられて、ひゅつと鳴ったと見るや、眼の前の青年の頬をめがけて打ちおろされた。』

関千枝子は結婚する。ひとりにされた真珠は、麻薬中毒におちいり、そして鮎子をはなさない。鮎子は、真珠が恐ろしい魔女のように思えてきて、思い切つて恒雄と結婚するが、真珠は、鮎子がどこにいても、しつこく追いまわす。その後、いろいろな事件のち最後に、鮎子と真珠は、同性心中を遂げる。

この中で、一寸面白いのは、美青年恒雄が、うぬぼれの強い、バカな、最悪の意味の男性で、女性のデリカシーを何も解さないといい伏線である。最後、同性心中がなされる前の晩、真珠が、ボルネオでした猛獣狩の、残忍な喜びを語るあたりは一寸いい。そのあと、真珠は、自分に惚れて、麻薬をばこんで来る男を、ピストルでうち殺し、「人間の壮の方が豹の牡より醜いわね」とつぶやき、然る後、鮎子と服毒するのである。

「日本人クラブ」には、ドミナ型女性が出てくる。パリで、日本人の若い青年が、同じ、日本人の、いやにつんとした、美しい女性をみかける。悪戯気をおこして、彼女に、「帰国の旅費がなくて困っているから、同国人のよしみ、少しいいから恵んで下さい。」という。彼女は「ただちやいやよ。一つぶたせてよ。」——と言うかと思うと、電光石火、あつという間もなく、女の右腕は絹手袋のままさつとあげられて、彼のひげのそりあとの青い

頬の上、ピシリと打つてのけた。その痛いのが痛くないのつて、しなやかな細い支那竹でびしりと打ちのめされたように、彼は骨身にこたえた。「ホ……いくら差し上げましょう。」女は微笑んで、手提げの口をあけた。

然し、何といつても、これ等の作品には時代のズレというものを感ずる。そして、彼女達は、多かれ少なかれ、皆、岸田国士先生の「鞭を鳴らす女」型なのである。同じようでも、三島由紀夫の作品などに見られる戦後派お嬢さん達は、何と潑刺颯爽としていて、利口で、我ままで、しかも、シツクな事だらう。彼女等については、またいつか、ゆつくり書かせて貰うとしよう。

「十六才」

フランス、ノリ作

大久保和郎訳・新潮社発行

これは、全く、最近の白眉である。訳文はやや生硬だが、読みにくいという程ではない。そして、パリの、戦後派ブルジョワ家庭の様子が、極めてよく写されて居り、サガンの「悲しみよ、こんにちわ」に充分匹敵しよう。

十六才の美少女・ベルは、大金持・ラヴアル氏の一人娘で、極めてエレガントな、太陽族である。

彼女は、あの、少女特有のわがままと、残

忍さを充分に持っている。彼女は、自分の馬術教師の、退役騎兵大尉テュイリエ氏が、自分を好んでいるのを知って進んで身を委せ、かたがた彼女のボーイフレンドの一人、ルイゾンとぐるになって、大尉をゆする。「百姓、あたしの奴隷頭、あたしの忠実な動物」とベルが言ったこの大尉は、ベルの美しく新鮮な肉体に溺れ切っている。それにつけこんで、ベルとルイゾンは、面白がつて、ますます大尉を困らせ、苦しめ、法外な要求をする。遂に一文なしになった彼は、悪事を働き、それが発覚し、どうにも動きがとれなくなる。ベルの居る田舎の山荘へ来て、「君だけが、僕を救い出せるんだ」と、この中年男は、十六才の少女に哀願する。ベルは冷やかであり、大尉を軽蔑し、嘲笑し、更に、激しい平手打を喰わせる。絶望した大尉はベルの車・ジャグアールを引出し、全速力で去る。翌朝、この車が、そこから遠くないところで、立木にぶつかって火を噴き、車も、大尉も「脱脂綿のように」黒こげになっていた。ベルは、フィアンセのセヴランと現場へ向うが、憲兵に向って、平然として、「車は、私の父、ラヴァル氏のもので、昨夜盗まれたものです。泥棒はどうなりましたか？」と言う。蛙の死骸を見た程にも感じないベルは、調べがすむと、セヴランに「ドーヴイルへ行こう」という。彼等二人は、その場

から、海水浴場であり、遊び場である。ドーヴイルへ、百二十マイルの速度で向う。以上が梗概であるが、全く、この「気づまりという事を知らない」美少女、ベルは素晴らしい。彼女が、乗馬クラブの、馬丁の老人を、馬上から鞭でひっぱたく事を想像するところがある。ナアンだ。想像だけですかなどと言うな。かれ。かえって恐ろしいような迫力がある。また、馬場で仲間の青年にベッティングと、接吻を許して置きながら、その最中にいきなり、彼を、乗馬鞭でビシリとやるところがある。

まあ、こういった。マゾヒスト諸兄を唸らせるようなシーンは、まだ、いくらでもある。まず買って損はしない事を断言する。なお、レスピアン諸姉におすすぬ出来る、相当にコッテリした一場面がある事を附言しておく。

沼正三氏が手帖第三十項「外国語のむち」の中で、仏語の、CRAVACHEという語が見当らなかった。これは、乗馬鞭の意で。籐や竹のでも、鯨のヒゲや、ピアノ線を芯にして、革で包んだのも、常にこの言葉で表現される。FOUETなる語は、「柄と革紐の、二つの部分から成るむち」と、ラルース辞典に一応規定されている。前記、GRAVACHEは、「二つの部分から成る」とされている。なおVERGEなる語も、使われる

が、沼氏のお説のとおり、FOUET、BATON、CANNE、VERGE等の言葉は、日本語同様、最近大分乱れているように、これ等の語は、コン棒、オーケストラの指揮棒、老人が体を支える杖、ゴルフのクラブ、はては、卵の泡立器まで意味する。またFOUETは、どうも、荷馬車の馬方などが持っている。粗末な、よごれた、「二つの部分から成る」の思い出される。

これに反し、CRAVACHEは、意味が限定されているので、すぐに、あの、あまり長くない、細い、撓やかな美しい乗馬鞭の形状を思い浮べる事が出来る。美しく驕慢な女性たちの持物は、これにきまっている。彼女たちに、馬車屋のオヤチと同じものは持たせられない。フランスの鞭打小説の、女性達は多く、CRAVACHEを手にして登場する。(ジードの「一粒の麦若し死なずば」のなかに、この語を動詞にして、單に「ひっぱたく」という意味に使われていたが、これは浅学な私が見出した唯一の例外的使用である。) なお、日本語の「むち」なる語は、「ぶつ」から転じたと言われるが、「馬打ち——まぶち」から来たとも言われている。沼氏が手帖二十九項で取上げて居られる、川口松太郎の「月夜鴉」が、どこから発行されているか、御存知の方は、お知らせ頂ければ幸甚です。



(マゾヒストの告白)

犬の生態

杉 本 眞 三

(一)

精神的不具者、卑しい犬、と自分で自分の変った性癖を呪い乍らも、毎日灯ともし頃ともなれば、憑かれた様に街をうろつき廻り、かりそめの虚しい慰めを、忌しい汚濁の中に求める私なのです。

そして朝ともなれば、健康な、まぶしい太陽の光の中で、私は劇しい悔恨と自己嫌悪に陥って、身も世もあらぬ劣等感に、唯々暗闇を恋い、夜を求めて、世すぎの仕事もうわの空、夕方やっとながしかの金を握ると、又灯を求めて、夜の街を這い廻るといのが、私の毎日の生活であります。

マゾヒスト。私の様な性癖の者を、こう呼ぶのだと云う事を御誌で始めて知りました。

そして、世の中には、私と同じ様な性癖の人達が、多勢居る事を知って、わずかに慰められて居ります。

マゾヒストなるが故に、何処へ遊びに行っても相手にされず。当時、私は満たされぬ悩みに毎夜いらいらしながら、乏しい稼ぎの全部を、安焼酎と、遊廊、淫売屋、街娼等の遊里に費やして居りましたが、何処へ行っても、満足した事はありません。

相手の女に、マゾヒストとしての慾望の、最低の希望を、おすおすと言ひ出すや否や、『変態！』と一言ではねつけられ、それから、もう相手にされません。

私は毎日毎日、満たされない、そして、自分でもはっきりと解らない、もやもやとした慾望を抱いて、野良犬のように街をうろつき廻って居たのです。



と誘うので、私は心の中では、又どうせ相手にされないで、淋しく帰えるんだ、と思い乍らも、其の女について行きまし



た。

女の家は、普通の素人の家と全く同じ様な門構えの割合大きな家で外から見ただけでは、之が淫売屋だとはどう見ても思われません。女はその家のマダムらしく、家へ上ると、先ず私に金を請求し、乱暴しないと云う事を、再びくどく念を押してから、二階の六畳の間へ案内しました。

部屋もなかなか立派で、調度品もしっかりして居ます。

マダムは、直ぐ相手の女の子が来るからと云って出て行きました、なかなかやって来ません。

凡そ、三十分もした頃でしょうか。後で名前を知ったのですが、光枝と云う二十一、二才の大柄の女がやっと私の部屋へ入って来ました。しかし彼女は部屋へ入っても坐ろうともせず、立った儘、警戒する様な目つきで私の顔をじろじろ見ながら、

「あんた、変態なんだってね。一体どんな事をするの？ 妾しや変態なんて大嫌いだ。マダムが無理に頼むから来たんだけど、一体どうするの？」

と、予想通り、始めからまるで喧嘩ごしです。

私は口ごもり乍ら、

「別にどうもしないけど……。三十分位、黙って俺の話聞いて居て呉れればいいよ。我慢して、俺の話を三十分聞いて呉れたら、俺、きつと直ぐ帰えるから……」

と私はおずおず答えました。

光枝は、怪訝そうに、私を見つめて居ましたが、

「話だけ？ 話だけ黙って聞いてりやいいの？ それならいいわ。それだけでいいなら、別に三十分でなくても、一時間でも二時間でもいいわよ。どんな話だって、話だけなら驚きやしない。あんた、泊りを払ったんでしよう。話だけなら泊

ってたつていいわよ。眠くなったら、私は勝手に寝ちやうから」

そう云い乍ら、私の前へベタリと坐って、

「さー、お話しなさいよ」

あらたまつて、此う云われると、さて、何を話したらいいか第一、照れてしまつて、とても話せるものではありません。

「お酒ある？」

と聞くと、

「有るけど、高いわよ。いい？ それじゃ今、持ってくるわ」

と云つて、光枝は階下へ降りて行きました。

私は、彼女が行つてしまつと話だけ聞いて呉れと咄嗟に云つたものの、さて、何を話そうかと、あれこれ考えました。でも、そう考へて居るだけで胸がワクワクして来ます。

自分が、いかに浅ましいみじめな男であるかと云う事を、相手の女に話すだけでも、私にとっては胸のおどる様な大きな魅力だったので。

やがて光枝が酒を持って上つて来ました。

私は、酒で勢を付け乍ら、小さな声で、おずおずと自分の醜い性癖を話し出しました。

「女に馬鹿にされたいって、一体どうされたいの？」

と彼女は不思議そうに聞きます。

「どうでもいい。とにかく女から馬鹿にされ、犬の様にひどく扱われたいんだ」

「たとえば、どうするの？」

「たとえば……たとえば、女の足を舐めたり……」



「えッ、足を？ まあ汚い。ホホホホホ……。あなた、本当に女の足を舐めるの？」

「自分で舐めるっていうより、女の方から命令されて、無理に舐めさせられ度いんだ」

「まあ……。随分変ってるわね。そんな事がどうして面白いの？」

何うじて面白いのかと聞かれても、自分でも解らない悲しい性癖なのです。

「其んな事を命令する女なんて、居ないでしょう？」

「居ないから、……。いないから、だから、俺は、何時も淋しいんだ」

「ふーん。解らないわね。……。それから何うするの？」

「なんでもいいんだ。とにかく、どんなにひどい事でも、どんなに浅ましいことでも、女が命令して、俺に、馬鹿な事をさせて呉れば嬉しいんだ。女から奴隷扱いにして貰い度いんだ。犬の真似でも、何んでもする。人間でなく、犬扱いにして貰いたいんだ。俺は、どうせ汚い犬なんだ」

私は、自分の忌しい性癖を、涙ぐんで訴えました。

「ふーん。因果ね。あなたの様な変った人、亦、始めて見たわ。……。でも、一寸可哀そうね」

彼女は同情した様に、私の顔をまじまじと見ながら、尚も話を促します。

私は、今迄の断片的な、貧しい経験に、若干の希望と想像を交えて、ポツリポツリと話しました。

光枝は私の話に、時々顔をしかめ乍らも、『ふーん』とか『へー』とか相づちを打って聞いて呉れました。

時には『まあー汚い。それから何うしたの？』などと、案

外の興味を示して質問したりします。

私は、話をして居るだけですっかり昂ってしまいました。

一通り話し終ると、彼女は

「今の話、みんな本当のことなの？ 冗談なんでしょう？」と云います。

『本当だ』と、私が答えると、光枝は、男の様に大きな口を開けてアハハハハと笑い乍ら

「いやになっちやうわね、本当に。いやらしいわ。人間じゃないわね、全く。……。それがほんとなら、妾、軽蔑するわ」

「軽蔑してもいいから、どうか犬の様に扱って呉れ。足でもなんでも舐めさせて呉れ」

と、上づつた声で私が哀願すると

「うん。舐めさせてやってもいいわ。さあ、舐めて頂戴！」と、足を私の前へ出しましたが、足のウラが薄黒く汚れて居るのに自分で気が付くと、

「アラ、随分汚れて居るわね。今、下へ行ってふいて来るわ」と立上りかけました。

私は慌て、

「いいんだ。汚れて居る方がいいんだ」

と止めますと、光枝は乱暴にどざりと坐り直して、

「ふん、汚れて居る方がいいの？ ホホホ変っているわね、私は、どっちだっていいのよ。さあ舐めてごらん」と再び足をつき出しました。

私は歓喜に震え乍ら、彼女の足に顔を近づけましたが、折角の喜びを尚、倍加すべく、私にとっては更に贅沢な注文をつけました。

「ね。舐めてごらん、なんて云わないで、舐めろと命令して呉れない？……遠慮しないで」



「遠慮？。妾、別に遠慮なんかしてないわよ。変態なんかに……でも直ぐに犬扱いには出来ないなあ。アハハハハ、じやね、今から三三九度をやりましょう。三三九度の盃をやったら、あんたはもう犬よ。いい？」

光枝は、そう云い乍ら盃に酒をついで、たて続けに自分で二、三杯呑んでから、私に盃をよこしてついで呉れました。

私は、期待に夢の様な気持で呑みほしますと、光枝は「もう一杯、どう？」

と又盃に酒を満たして呉れました。

私が、手を出して盃を持とうとすると、彼女は先に、つと手を延して盃をとり、灰皿に酒を半分以上も、こぼしてしまいました。

何をするのかと、私は、幾分あきれて見て居ますと、光枝は私の顔をのぞきこんで

「あんた、本当に変態なのね？」

と、又念を押します。

私が「うん」と返事をする、

「本当かどうか、試してみようわ」

と云いながら、半分になった盃を、自分の口の下へ持つていつて、ベッベッと盃の中へ唾を吐きました。

彼女は、しばらく自分の吐いた唾を見て居りましたが、チラと私の方を見てニヤリと笑うと、もう一度、念入りに、たっぷりと唾を吐きました。

盃は、こぼれそうに溢れ、彼女の口から唾が線を引き、盃にたれて居りましたが、それをいかにも汚ならしそうに、ベッと、吐き出すと、その盃を私の前に置きました。

「私の唾よ。それを呑んだら、もうあんたは犬よ。呑んでしまったら、存分に犬扱いをしてやるわ。どう？ 呑む？」

盃は、光枝の唾の小さな泡であふれて居ました。彼女の口紅が、端の泡の上に赤く浮いて居ります。そして小さな泡の一つ一つに電気が美しくキラキラと輝いて居りました。

私は、黙って盃をとり上げ、一気に口の中へ明けました。酒の味と、女の口臭が、私の口の中に拡がってゆきます。目をつぶって、ぐっと呑みほすと、生ぬるいものが喉を通って下ってゆきます。

此の女の唾を呑んだのだ。此の目の前の女に、もう完全に征服されてしまったのだと云う被征服感、奴隷感が、私の心を、そして、全身をゾクゾクさせます。

「ふふふふふ。飲んだ飲んだ。やっぱし変態ね。ホムム」

光枝は、手を打って笑い興じました。

彼女は、最早や私の変態性を確信して疑いません。

其の顔は、奴隷を扱う女主人の様に自信に満ち、その日は、気のせいかに急に妖しく光って、残忍そうに見えます。

「さあ、もうあんたは犬よ。アラ、あんた、なんておかしいわね、犬に。畜生だから、お前でもいいわね。さー 犬！ 妾の足を舐めさせてやるわ。……お舐め！」

再び私の前に彼女の足が突き出されました。

光枝は、身体が大柄なせいか、女にしては、かなり大きな足です。私は喜びに震えながら、前に両手をついて、彼女の足首に顔を近づけました。

「ふふふ。大分汚れて居るわよ。犬にはその方が、いいんだらう。」

私は彼女の足首を両手でそっと押えて、足のウラにおずおずと口を触れました。

その瞬間、光枝はピクッと足をふるわせました。



私は汚れを舌でふき取る様に舐め始めますと、彼女は

「あー、くすぐったい。アハハ……」

と家中聞える様な大きな声を出して、私の顔をボンと蹴り足をひっこめました、又直ぐに「ふふふ……」とふくみ笑いをしながら出して呉れました。

私は足のウラから足指と足指の間まで丁寧に舐め廻しました。彼女は足をひっこめ、私の舐めたあとを眺めて、

「まー、すっかりきれいになっちゃったわ。ホムムム。さあ、今度は此方を、きれいにしなさい」

そう云いながら、もう片方の足も差し出しました。私が舐め廻して居ますと、彼女は煙草に火をつけて、煙をフーと私の顔に吐きかけながら、

「ちよっと、犬さん、此方を向いてごらん。舐めながら、私の方を見るんだよ。まあ浅ましい恰好なのね。よく似合うわほんとに犬よ。私の足の指が、お前の口に何本入るかやってみてごらん。そうそう、アラ、四本ね。今度は其の儘、吸ってごらん。もっとチュウ、チュウ吸うんだよ。そうそう、あら、くすぐったい。ホホ……。お前は、ほんとに畜生だね。」

と云いながら足指で、私の唇を強くはさみます。足舐めの間中、彼女は凡ゆる悪口を私にあげかけました。

『馬鹿』『四足』『犬奴』『変態』。私はそんな言葉を云われながら、彼女の足を舐めたのです。金さえ出せば、どんな男にでも身体をまかせ淫売婦の足の指を舐めたのです。

然し、が因果なことに、私にとっては、正に法悦とは此の事でありましょう。

足舐めが一応終ると、光枝は下へ降りて行きました。私は二階へ上る時、下の廊下のつき当りに便所があることを見て

居ましたので、便所へ行こうと部屋を出て、梯子段を降りかかると、光枝とマダムが笑い聞えます。

私はハッとして、階段の降り口で立止まってしまいました。

「まあー。本当に？ ウソだろう？」これはマダムの声です。

「ほんとよ。ほんとよ。ほんと。ペロペロ舐めるの。見てごらんない。妾の足、こんなにきれいになってしまったわ」

「まー汚いことをするのね。妾は又、自分で変態だって云うから、あんたに乱暴でもしやしないかと心配して居ただけだ、本当にそんな汚い事をする男が居るのかねえ」

「そこが変態なのよ。ホホムムムム。面白いわ。ねーマダムも一緒に来て足を舐めさせてみない？」

「ふムムムム。いやだよ、妾しや。気味の悪い……もつとも、——つて、云うんなら別だがね。ふムムムム……」

「ホムムムム。それも舐めるわ、きつと。犬みたいな変態なんだから。妾、今からやらしてみよう」

「ホムムムム。まあ、たんと、弄ってやんなさいよ。本当だったら、妾も行くからね。ホホムムムム」

「ホムムムムム」
そして、光枝の立上る気配がします。私は慌てて元の部屋に戻りました。

光枝は、酒と、自分の盃を持って入って来て、私の前へ坐ると二つの盃に酒をつぎながら、私に云いました。

「あんた、ほんとにどんな事でもする？ アラ、間違った。

これじゃ人間に言う言葉ね。云い直し。こら犬。お前は妾が命令すれば、何んでも云う事を聞くかい？」

私は感極わまって思わず両手をつき、彼女の前に平伏して「ハイ。どんな事でも致します」

と答えました。彼女は、私の態度に、一寸驚いたらしく、



目を丸くして居ましたが、やがてブーと吹出して

「ホム、畜生のくせに行儀がいいのね。エーと、何をさしてやるうかしら。そうそう、犬だから、これがいいわ」

光枝は立上って障子を開け廊下に置いてあるスリッパを、指先でさも汚たならしそうにつまんで持って来ました。

そして、私の目の前に、其の汚れたスリッパをつき出して「いいかい。これはね。多勢のお客さんや妾達が、毎日、足に履いて廊下を歩いたり、便所へ行ったりする一番、不潔な、汚いものなんだよ。これをお前がこれから舐めるんだ。さあ、お舐め」

私は躊躇なくペロペロと舐め始めました。

彼女は面白がって、スリッパの裏や爪先、踵などを満遍なく、舐めさせます。

私の唾で、スリッパの裏、表が全部ぬれてしまったのが解る程になりますと、やっと此の遊戯は終わりました。

「ふムムム。よくなめたわ。さあ、下の洗面所へ行つて口をゆすいでおいで。きれいにゆすいで来るんだよ、今度は妾の身体を舐めさしてやるんだから」

私が洗面所へ行つて、口をゆすいで来ると、光枝は

「よく洗って来たかい？ よし、今度は、スリッパを持った私の手を、お前の口で吸い取って、きれいにし」と云います。

私は、彼女の、右手の拇指と人差指を何度も何度もスパスパと吸って、きれいにすると、再び洗面所へ行つて口を洗いました。部屋へ戻つて来ると、光枝は机の上に腰かけて煙草を吸って居りましたが「しっかり洗って来たかい？ 汚い口で私の肌に触れるんじゃないよ。さあそこへ、お坐り」

私は彼女の腰かけて居る前へ跪ぎました。そして、彼女

の命令通り、口の奉仕を行ったのです。奉仕の最中に、彼女は何回も平手で私の頬を打ちました。私の頬を、と云つても、頬よりは少し上の所謂、横ビンタと云われる個所なのですが、まるで馬鹿にするように、ビシヤビシヤと叩きました。あたりが静かなだけに、その音が、他の部屋へ聞えはしないかと私が心配するくらいでした。

ああ、何ということでしょうか。大の男がお金まで払って淫売婦の汚れた足の指や足の裏を舐めさせて貰っているのです。それなのに私の肩から、背中へ廻わされた彼女の両足のズッシリとした重みが、私のマゾの感情を心よく刺戟致します。その上に又、私に奉仕させながら、自分の感情の儘に、行動する彼女の無礼極まるる不作法さが、いかにも「お前は人間じゃない、犬だ」「お前は妾の快楽の為の道具だ」と云つて居る様で、更に刺戟的でした。

私は無視される喜びと、汚辱される快感を存分に味わいました。此うして夢にまで描いた天国を、私は生れて始めて、光枝によって体験することが出来たのでした。

(二)

一週間ほどしてから、私は再びその家を訪れました。

家へ入ると、例の太ったマダムが出て来て、

「あら、いつらっしやい。どうぞ」

と普通の客に対する態度と同じ様に愛想よく私を迎えて呉れました。

光枝も直ぐに出て来ましたが、私を見ると

「アラ、あんたなの。……犬、あはムムムム」

と大声で笑い出しましたので、私は目のやり場に困って、黙って居ると、傍からマダムが



「まあ、そういう話は、お部屋へ行ってからにさいよ」と助舟を出して呉れましたが、光枝は尚も笑いこけながら、「だって、だって、ホムムムム。私、おかしくっておかしくって、たまらないわ、ホムムムム」

と尚も笑います。

「さあ、早く二階へ御案内しなさいよ」

「ええ、でも、ホムムムムムじや、行きましょう。でも、マダム。マダムも後で二階へ来る？」

「まあ、何を云って居るのよ、あんたは？。お客様の前で」

「だってマダムは此の間……って云ってたじやないの」

「いいの、いいの、さ、早く二階へ上って上って」

「ふムムムム、じや又後でね」

光枝は笑いながら一人でずんずん二階へ上ります。私もあわてて後からついて部屋へ入りました。

それから前の晩と同じ様なことがあつて後、光枝は私に、四這いになる様に命じました。

私が両手をつく、彼女は私の背中にどっかりと跨がつて「さあ、馬よ。ハイシ、ドー、ドー」と部屋の中をぐるぐる廻らせたのち、背中の上から

「御不浄へ行くのよ。私、さんざん、お前の言う通りにしてやったもんだから、つかれちゃったわ、此の儘、乗せておゆき」と云います。

私は仕方なく、彼女を乗せた儘、廊下を四這いになって歩きましたが、階段まで来ると、光枝を乗せた儘では、とても危なくて降りられません。

光枝の案で後ろ向きに足の方から降りることにしました。彼女は丁度私におぶさって居る様な恰好で私の背中につきま

まで行きました。手洗を終ると彼女は又私の背へ跨って、今度は下の表口にあるマダムの部屋まで歩かせます。部屋の前まで来ると、光枝は、

「マダム、マダム、お馬に乗ってお迎えに来たわ」とマダムを呼びました。

マダムは一人で酒を飲んで居たらしく、盃を置く音がして障子が開きました。

マダムは奇妙な人馬の姿を見ると、まあ、と驚き、大仰に目を丸くして光枝と私の姿をじろじろ眺めて居りましたが、やがて、ブーと吹出してしまいました。

私は思わず目を伏せます。

目の前にマダムのふつくらと太った足の指が、白く光って居たのを、今でもはつきりと覚えて居ります。

「ね、マダム、面白いでしょ。人間と犬じやなくて、今度は人と馬よ。ホムムムム。さ、お乗りなさいな。お部屋まで御案内申上げます。」

「まあ、でも、私まで乗ったりしちやあ、悪いじやないの、私、あんた達から比べたら、ちよいと重たいのよ」

「平気よ、さ交代」
光枝は私の背中から降りました。急に背中がすうとした気持です。

「さあ、早く、遠慮なんか、いらないのよ」

光枝は急がせます。

「だって……悪いわね、お客さんにさ。ホムムムム」
マダムは笑いながら私の傍へ寄って来ましたが、かなり酒に酔って居るらしく、足どりがちよつと、よろよろして居ります。

「じや乗るわよ、ヨイシヨ」

マダムは掛声をかけて、よろめきながら、私の背にどっかりと跨りました。

(以下次号へ続く)

女体切腹秘話

愁^{しゆう}

風^{ふう}

連^{れん}

青 山 芳 樹

——ばさッ／ と四辺^{よつた}の静寂を突き破るような羽音とともに雉子が飛んだ。

紺青の秋空を一文字に截^きって、見る見るその小さな姿が沈み去った叢の上に、凝然としている金峰山の威容。

ここは肥後の国熊本の郊外。時、明治九年秋十月二十五日の、暮れ早い夕刻のことである。

雉子の羽風に小さく舞い上った色鮮やかな落葉の——その木立の中に、ひっそりと身を寄せ合っている三人の人影が見える。

いずれもグツタリと疲れ切った女たちだ。それにしてもその姿は、白絹の鉢巻できり

りと押えた緑の黒髪も乱れに乱れ、全身血と泥にまみれた凄惨ないでたち、女ながらも、男まさりの、激しい苦戦のあとを物語っているようだ。

歴史は記す、その年、この秋——

即ち、神風連の乱、熊本に起る。

神風連はこれを一名敬神党といい、維新の頃、この地に生れた反政府思想団体である。

神道を中心とする守旧派であって、士族大田黒伴雄らを首領として同志二〇〇余名。この年十月二十四日、廃刀令の発布を機として兵を挙げ、熊本鎮台を襲撃して司令官種田政

明、県令安岡良亮らを殺傷したが、鎮台兵の出動によって一敗地にまみれた。

ここに惨ましい非運の身を秋風にさらす。年嵩の一人は神風連隊士河野猪一郎の妻、良子。三十三才の女ざかりの身を、雄々しくも夫とともに躍起した女丈夫。死を決した白の着附に義経袴を穿ち、身を守る小刀一腰に薙刀を杖ついた姿の気品は、まるで芳年の錦絵から抜け出したよう。つき従ううら若い女性の一人はその妹深雪、二十三才。やがては同志室園桂之進の妻となるべき許婚の仲であった。姉にも優る上背の豊麗な柔肌に堅く鉄

のくさり帷子を着込み、具足の胴丸の凛々しさがかおるばかりに冴え返る。鎧通しとろ鞆の大刀が、黒腫勝ちの美貌によく似合う華やかな女武者ぶりである。今一人の少女は、良子の一人娘、百合香して、これは蕾の十六才。年少ながら広町小町と、うたわれた天稟の女剣士、かねて練磨の白の刺子の稽古着も袖短かに、朱色の胴を当て、紫滝縞の若衆袴を着けた人形のような可憐さであった。しかも腰間の両刀がその纖手に閃く所、昨夜来、数十の官兵がその刃に仆されていたという。ピツタリと肌に喰い入った稽古着の半袖を、こぼれる二の腕の白さには、早や咲きそめる女の血の色が、仄かな紅をたたえていた。

義挙は一夜の嵐にはかなくも破れ去った。

乱軍の中に三人は手を取り合い、重囲を切り抜けて一度は市内の菩提所で、河野家累代の墓前に刺しちがえようと志したが、それも果さず、かくは、はるばる金峰山のふもとまで逃れ来ったのである。落人の身に秋の陽はあまりにも明るく、空はあくまでも青く澄んでいた。昨夜の騒擾を思えば、うそのような静寂があたりの山野を包んでいる。

今は父も夫も恋人も、その生死さえ定かならず、行く末の望みも虚しい三人の心は、ひたすらに死を思う一念のみに燃えている。身を切られるばかりの寂寥であった。

良子は唯黙々と息をついた。妊娠四ヶ月の

身重の体は鉛のように気だるかった。一粒の米も口にせぬ奮戦数刻の疲労には、もう物言う力さえ失われていた。しかし血に染んだ妹の、わが娘の訴えるような眼ざしを見ると、彼女は最後の力をふり絞って薙刀にすがると起ち上った。

「雉子の声にさえ驚くようになってはもうおしまいですね。深雪、百合香、私たちの仕事も終わったように思います。お墓所で三人一しよに死のうと思いたけれど、それもダメでした。あと二町ほど行くと金峰山神社があります。ご神職の竜造寺平馬さまはお父様とも前にお親しかった方ですから、かくまって戴けると思っています。ここまでやって来ました。お座敷を拝借して今夜のうちに潔く……ネ。私たちも武士の家のもの、こんな山の中で自害はしますまい。」

キツパリと云い聞かせる姉の、母の言葉に若い二人は深くうなづいた。と同時に、いよいよ自刃して死ぬのだという覚悟が、又新しい感傷の涙を誘った。若い心の——それはむしろ激しく燃えるいのちの反応であった。思ひ出したようにお互の汗の体臭が匂った。百合香は深雪の肩を、叔母は姪の稽古着の腕を、強く抱き合って涙をこらえている。母にうながされて二人は重い腰を上げた。

金峰山神社の社務所の玄関に、崩折れるように辿りついた時には、もうほの青い秋の夕

闇があたりを包んでいた。一陣の松籟が日暮方のおぞましい淋しさを伝えて境内に鳴り渡った。

訪う声に手燭の影が社家の方から動いて来た。

「どなたじやな、今頃……や……これは！」

玄関の式台に仆れ伏す三人の姿に、竜造寺平馬は一瞬にして事態を悟った。

「さ！早く……早く奥へ……マ、とにかく早く……」

あわてて挨拶を返そうとする良子をあわただしく遮って、その左手を肩に背負い、あとの二人を眼で促して奥の六畳に招き入れた。気配を感じて駆け出して来た妻の志野に急いで三人のわらしを解かせ、玄関の杉戸にピツタリと戸じまりをさせた。機敏な処置はこの人の武家の出らしいいたしなみのあらわれであった。

「——残念でござった。」

座が改まると平馬は言葉少く三人の前に頭を垂れた。

「エ！最早昨夜の首尾がお耳に……」

「人のうわさは早いものでござる。如何なされたかと実は愚妻ともおうわさ申上げておりました所です。所で——猪一郎どの？」

その人の生死さえ分らぬと知ると、平馬は黙って又頭を下げた。更に良子が、ご迷惑ながらこの一部屋を借りて、今は生きる道とて

ない三名、心静かに死に就きたい願いを申し出ると、その白髪を深く深く下げてしまった。老いの眼には早くも溢れるような涙が満ちた。いつのまにかその後、ひっそりと坐っていた妻の志野もソツと袖口を眼頭にあてた。

「心得申した。お立派なお覚悟でござる。久しぶりに平馬も武士の世をこの目のあたり見る心持が致す。老い先短き身に何よりの土産……それにしてもこのようなお若い娘御まで……のう。」

百合香の初々しい稽古着姿をかえりみて、又新しい涙に暮れながら、

「あたし花も薔を……これも時世か……イヤ最早云うまい……では、心ゆくまでお勇ましく自決なされい。平馬、キツト見届けて進ぜる程に。」

と今は自らを励ますようにキツパリと胸を張って云い切った。老いの血がサツとその両頬に紅潮した。謀反人をかくまいながら、流石に些かも動ずる色はなかった。時は刻々と移る。

「では、隣りへ支度仕るによつて、暫時。」

腰をのぼして立ち上る平馬に、良子が静かに膝を進めて、われら三名、事破れたる暁には、女ながらも武士の作法に従い、打揃って見事に切腹をする覚悟を定め居ること故、願わくば古式通りの切腹の座のご用意をと願出

ると、平馬はいよいよ感歎の膝を打ち、

「これよ、志野、聞いたか——ああわしもよくぞここまで生き永られた。この女性方のお覚悟のほどを官兵どもに聞かせたいもの。神国滅びず、武士道は朽ちず。」

と言葉を尽した上、匆忽として蔵の方へ走った。

切腹の座のとのう間、三人はふるまいの白湯にのどをうるほし、今は思い定めた死の安らかさに、静かな微笑みを交わし合った。

湯の温かさが腹にしみ渡ると、やがて一ときの後には見事に切り開くべき腹部の位置を確めて、流石に年若い百合香の胸は切なくとどろくのであった。「痛いだろう」とも思い、

「我慢して立派に切らなければ——」とも思い返して、そつと稽古着の両肩を抱きしめて見るのだった。そのさまを、良子と深雪がいとほしく眼を見交わして眺めていたが、やがて良子が、

「百合香、お腹の切り方は知っていますね。」と、やさしい中にも厳しい励ましの声音で云った。

「はい。」

と居ずまいを正してキラキラと輝く瞳を母に向けた百合香の面からは、もう十六才の乙女のおびえはあとかたもなく消えていた。それはもう落着いて腹を切る時刻を待つ少年武士の表情であった。母は満足げにうなづいた。

隣の八畳の間にはしばらく小声で下男や下婢を指図する平馬の声や、布をしきつめるざわめきなどが聞えていたが、やがてそれも静まると間の襖がサツと開かれた。型通り二枚の畳を裏返し、白布をおほった切腹の座が三つしつらえられ、各々の後ろには逆さ屏風をめぐらし、白木の三宝まで用意されて、燭台の光に照らし出された小机の上の香炉には、心を静める名香の煙が一筋立ち上っている。

「支度が調いました。いざ、これへ……。」と平馬が良子を招いた。良子は二人を促して座を立つと、しきい際に両手を支えて行儀正しく万端の礼を述べ、ためらう様子もなく正面の座の真中に正坐した。深雪と百合香とは、その両側の座に向い合って坐った。

「唯今、食膳を。」平馬の言葉に大急ぎでととのえたものであらう、白粥に干物、梅干を副えた最期の食事に、神酒の瓶子、盃が運び込まれた。

「では、ご一同。」と、平馬は志野と共に三人に深く頭を下げながら、

「日の本の女子の鑑ともなり申そう。お見事にお腹を召されい。拙者これより御割腹の終るまで、本殿にて祝詞を奏上いたす。」と、今は淡々と云い切って下って行った。

人影が絶えると、急に四辺の静かさが増し

た。その静かさの中に、庭を隔てた木戸のあたりがかすかにざわめいている。下男や下婢の口伝てが早くも拡がって、近隣の百姓の女たちが馳せ集って来たのだった。

「神風連で戦いなすった若奥様方がお三人、今ここでご生害なさるとよう。」

「それもよう、おなご衆の身で男みたいに腹を切んなさるッて。」

「十六になるお嬢さまも一緒にさうだに。」

「そのお嬢さまも切腹をしなさるんかえ。」

「お勇ましいことよのう。」

「十六で、ご自分でおなかを切るッて……さぞ痛えことだろうになア。」

「おえれえもんだ。――ああ、あたかもサムレエならお供して死にてえ。」

それは、百合香と同じ年頃の娘たちであった。みんな昂奮して涙を流し合っていた。

そのざわめきも聞えぬげに、良子は二人に自刃の支度を促した。

「時刻が移ります。いつ官兵が踏み込まぬとも限りません。すぐに腹が切れるように支度をして置いて食事しましょう。少しは食べて置かないとこの空腹では充分にやり終せられないから……。」

義経袴の上締めをほどき、袴の紐をゆるめて腰の辺りへ押下げ再び堅く締めた。白の上衣の双肌を脱ぎ白木綿の袖襦袢一つになると、その上を幾重にも巻きしめていた晒の腹

帯を解く、身重の腹が急にゆるんで胎動が起るように感じた。

襟を開くと堅く張った二つの丸い乳房の下に、臍から下腹が大きくふくらんで

見えた。左手でいとほしげにその下腹を撫でて

見て、良子はふと百合香にほほえみかける。

「百合香。この子も一しよにつれて行きましようね。」

百合香はグツと熱いものが胸にこみ上げて来た。手早く朱胴の肩紐をといて胴をはずし側に置く。袴をゆるめ、稽古着の上から胸の辺りま



で巻き上げた晒を解き、再び袴を低く着けて稽古着の前を掻き開け、腹巻の布をグッと抑下げて小さな腹を露わにした。紅潮した皮膚がかすかに息づいている。乳房が二つ、盃を伏せたように形よく胸についている。急に冷たい晩秋の夜気がヒヤリと臍の辺りをかすめる。

「ここを切るのだ。」

百合香は右手の指に思いをこめて、下腹に一本の線を引いて見た。

深雪も重い具足を脱いだ。小袖を腰の辺りまではね、素肌に喰い込んだくさり帷子を脱ぎ捨てると、悪びれた様子もなく上半身裸体となった。上背のある大柄な体は豊かに肉付いてたくましい。百合香ははじめて見る叔母の肉体をまぶしく限りなく美しいと思った。その肥り肉の真白い膚一ぱいに、菱形の目のくさり帷子のあとが、鮮やかな刺青のようについている。盛り上った二つの乳房の下から腹を巻きしめたさらしの白さが眼にみるようだ。その裸の右の二の腕には、昨夜受けた銃創のあとがむごたらしく割れている。

「叔母様、お痛みにならない？」

「そうね。お腹を切りそこなうといけなから……手当をして置きましょうか。」

深雪は落着いて用意の白布で傷ついた腕の肉を堅く巻いた。百合香が手伝った。体と体の素肌がふとふれ合って、二人は微かに笑を

交わす。男を知らぬ女同志の、肌の感覚のみが知る言葉であった。

玉垣をめぐるした境内の鳥居のあたりに、黒々とかたまっていた百姓たちの影が、急にふらふらと崩れ立った。早くも噂を伝え知った鎮台兵の一隊が、三人を追って到着したのであった。

「おぬしら、何事じやッ。」

隊長と覚しき一人が、百姓をつかまえて訊ねた。

「は、はい……神風連に、お加わりなされた女子衆が三人、さきほどここへお出でなされて、今……この中のお座敷で切腹をなさる所だそうで……。」

「何、ここで自害すると？ ウム、流石に天晴れじやが……女子が腹切るとは一期の見もの……それッ。」

美しい女性たちが肌を脱ぎ、鮮血にまみれてそれぞれに腹切る苦痛のさまを思い浮べ、隊長の顔には惨忍な好奇の色が動いた。

一隊を指揮してあわや社務所になだれ込むうとした時、

「待たれいッ。」

竜造寺平馬の姿が玄関の式台に巖のように坐っていた。

「事破れて今は潔よく、心静かに自刃いたされるお三人のお心の程が分らぬかッ。それも

……女子の身でありながら玉の双肌脱ぎ下して、健気にもお切腹なさるというに……そのお姿をうかがい寄るとは——何たる痴れ者ッ。たつてとあらば腕に覚えのこの竜造寺平馬、お相手仕るぞッ。」

長押には手練の槍一筋、ちり一つなく無言の威圧を与えている。

さすがに隊長もたじろいだ。式台にふみかけた土足をバツ悪げに下におろして、

「い、いや……別に強つてとは申しぬ。それにしても男の如く割腹して最期を遂げるとは……流石に火の国のおなごども、ハテ勇ましいこととごさるのう。ワハハハ……や、感服仕った。だが、われら役目もあること故、自害のすみ次第第一応検死仕る。この儀はよろしいな。」

「それは……承知仕った。」

「では、それまで。」

隊長は残り惜しげに兵を指揮して鳥居の外に去った。

奥の間では三人が既に死の用意を終え、肌も露わな姿のまま、それぞれ定め場所正坐して、平馬の心づくしの白粥をすすっていた。なみなみとついで神酒の盃が、母から叔母、そして娘へとめぐらされた。百合香が最後にそれを飲みほして、土器を床柱に向け、発止とばかり打ち砕いた。それが合図だった。

三人は目礼を交して一齊に三宝の刀を取り上げた。

良子がまず定紋入りの守り刀の鞘を払う。

鉢巻の白絹で刃を包むと逆手に取った。

「では私から参ります。考えがあつて少し深く切りますから見て下さい。あまり苦しむようでしたら深雪さん、介錯を……百合香もおくれるではありませんぞ。」

最後のいましめの言葉を残して、良子は静かに眼を閉じ、左掌で大きな腹をつかんだ。

流石に乱れ立つ呼吸を押えて、切尖をムツチりとした左の下腹に当て、力が腹と全身に張り切った時、

「うむッ。」

肌が波うつ。乳房があえぐ。早鐘のような脈動。

深く肉に喰い入った刃を、良子は氣丈に右へ——文字に大きく腹を割った。神酒の酔いに勢よく流れ出る血潮の中から、ゾロリとはらわたがはみ出して来た。息をつめていた百合香は、むごたらしい母の切腹を眼の前に見て、思わず顔をそむける。

良子は刃を置いて右手で切り口の奥の臓腑をさぐった。何かをつかんで引き出そうとする。

「あゝ……抽けない。」

ガクッと左手をついて呼吸をはずませ、力まかせにグギッと抽きとる——血みどろの子袋

だった。抱くように膝に置いて再び短刀をそれにあてがい、

「許して！」

と一言、その真ん中を刺し貫くと、返す刃で右の咽喉を刎ねた。

血に染まった白襦袢の上体が前に崩れて伏した。

姉の最期を見届けて今度は深雪が、腹巻の白いさらしを乳房の下まで引き上げた。緊張の石のように凝った双の乳房を両手で揉みほぐし、その谷間から臍のあたりへも撫で下した。覚悟がきまった。大刀の鞘を払う。

「百合香さん、先へ行きます。」

これも鉢巻の白絹で包み残した長い切尖を円やかに張った左の下腹に当て、左手の指先でその皮膚を二三度押しこころみて、そのまま氣合をはかると、

「ウーム——ブスリ！」

力一ぱい突き立てた。一呼吸——キリキリと臍の下を右へ切り廻す。グイッと挟んで引抜くと、一気に鳩尾へ刺した。

「アッ……アッ。」

白い裸身の胴一面、あふれ出る鮮血にまみれた深雪は、嘔吐するように身をよじって苦痛に耐える。

「叔母様ッ、息を抜かないでッ。」

百合香が思わず励ます。

深雪はうなづくと刀身を持ちかえ、中腰に

立ち上りながら、胃を浅く、腸を深く、心得も充分にグ——と切り下げた。見事な十文字の立ち腹である。

さきほどの鋭い氣合や呻き声に、庭先でおろおろと手を取り合っていた村の娘たちは、立ち上って大刀を腹に突き刺した深雪の黒髪も乱れた裸身の影が大きく障子にうつり同時に血しぶきがサツと夜眼にも赤く散りかかるのを見てアッとお互の肩に顔を伏せた。泣き声が破れるように起った。

深雪は再びよろよろと膝をつき、大刀の切尖を畳に突立てておいて、切り開いた腹から長く垂れ下った腸管の塊りをつかみ出し、三宝の上に乘せた。

引き上げた腹巻のさらしを下ろして、ぼっかりり空洞になった傷口をおほった。白いさらしに見る見る血がしみ透ってゆく。

再びとり上げた大刀の切尖を、豊かな左の乳房の下へ当てがい、柄を畳に立てて、

「百合香さん……さよなら。」

声も細く、最期の氣力をふりしぼって刀の上に大きくのしかかる。

「あ、ウッ。」

悲痛な呻きと共に、刀身は胸を貫いて、白い背中にキラリと光った切尖を四寸あまりも突き出した。そこに又緋牡丹のような血がにじみ、なめらかな皮膚の上を真紅のしづくが糸を引いた。深雪の裸身はそのままドサリと

そこに突伏し、腰の辺りまで脱いだ小袖や、崩れた膝の、たつつけ袴に引きしまったふくらみのけいれんが、脛から素足のゆび先へと伝わって消えた。

百合香は一人残った。ワーンと叫び出したような寂寥にとじこめられた。今の今まで元気に言葉を交わしていた母や叔母は、一瞬の中に自刃屠腹して眼の前に横たわっている。座敷は一面の血の海であった。だが一障子の外の庭先の闇には、細々としたさわめきが聞えている。百合香は追いつめられたように坐を正した。

「死！」

いよいよ、今、腹を切る時が来たのだ。

肌を引き開けた稽古着の襟を両手に握りしめて、百合香はじっと眼を閉じる。―そのわずかなためらいをふり切るように、
「もう、これまで。」

二尺一寸の脇差を取り上げた。

かねて教えられた通り、切尖をしらべて刀身に布を巻く。鉢巻は汗止めに額にしめなおした。あらぬ叫び声を立てぬように、一折の懐紙を口にくわえた。左の掌で柔らかな腹を押し揉むように撫でさする。逆手に持った刀の切尖を近づける。ピタリとその手が止った時―十六才の短い生涯の記憶と、それを断ち切る感傷が稲妻のように閃いた。秋の日にさきがけて散る、亡びゆくものの凛々しい感傷

〔通信〕

奇ク十二月号雜感

楓 月 太 郎

奇ク十二月号！只今拝受、胸騒かせながら包装を切る、この一瞬はたまらない気持ちだ。今月号は一体どんなのが載ってるだろうかと嬉しさと楽しさの混同である。

表紙のカットは今迄にない大胆なカットの入れ方で一寸乙でいい。さて頁をめくると、最近号の主要目次の紹介欄であるが、今月号より詳しく内容と作者を披露した点大いに好感を持つ。これぐらい詳しく出せば、執筆した作者も張合があると言ふもの。新人の諸君も満足と思う。文献研究誌にふさわしい作品ばかりなのであるから、作者を全員掲載する事は喜ばしい次第である。

四馬孝氏淹れい子氏の絵は文句なしに楽しめる。杉原虹児氏の再登場も光を放っているし、阿部氏の「縛られた女優たち」の写真はいいところを捉えて秀逸。中々素人では撮れない優れた場面を狙っている。私は此処に力説しておきたい事は、緊縛映画場面は貴重な資料の提供であるから、毎月

一頁は掲載してほしいのである。これから何年か先になつて緊縛映画を顧つてみた時この資料は実に尊いものがある。否、現実に映画界、興行界で広範囲の人達にも奇ク映画欄は多大の感銘を与え、よき参考資料として珍重されているという事を読者諸君にお伝えしておこう。

さて、「縛った女体」本誌写真部のカメラ技術を最高に發揮した女体ポーズは、いずれも復刊前に劣らぬ素晴らしき出来栄である。見よ、「くさり」の伊吹真佐子嬢の乳房の上に強く締め括りつけられた鎖と押しつぶされた乳房の痛々しさ。まるで目の前に縛られた彼女を見ているようだ。ライトが顔から乳房まで水々しく光り輝いている点、照明の効果は満点で、お腰がわりのサロンの前結びといい、細いところまで気を配っている。南国風で一寸エキゾチックな感じはよいではありませんか。これで猿ぐつわがされていたら、と空想は更に広がっ

だった。

「今！」

一思いにグッと押す。下腹に熱鉄の棒を突き通したような感じが、忽ち焼けつくような激痛に変わって。そのまま夢中で掻き切るように肉を裂いた。眼を開けて見ると、いつの間にか血が、押し下げた腹巻の白木綿に重くジュットリにじみ、臍の下が長く上下にえみ割れて白い肉が出ている。痛みは腹を引き絞るようになって。稽古着の短い袖で汗を拭う。耳が遠くなってきた。血はなおも止めどもなく流れ出ている。

「これでいいのかしら——切腹は。」

燭台の灯が二重にかすんで見える。

「これでいいのかしら——切腹は。」

百合香は呟くように又、口の中で云って、教えられた通り、右の耳の下に切尖を当て、力をこめて刺し込み、両手で咽喉の方へ切り廻した。新しい鮮血が白い稽古着の丸い肩の辺りにパツと飛び散った。

「これでいいの。これでいいの。これで……」

百合香の意識は、白い花のような顔のほほえみをこの世に残したまま、限りなく深い闇の中に落ち込んでゆくのだった。

三人の女の体から流れ出す血の河は、やがて入り交り畳の上を這い、縁側に延びて階段の降り口に、数条の血の滴りを垂らした。

(終)

てゆく。二条のクサリが実に堂に入っている、点は甘いかも知れないが九十八点とつけよう。

「光沢」の中富綾子嬢の久々の登場で、何んとも言えない水のしたたるような清純なお嬢さん姿は、とてもモデルさんとは思えない近代的な美しさと気品がある。この写真では薄いナイロンから透した美しい女体美を捉らえていて縄目を通してふっくらとした若々しい張り切った乳房は形容し難いばかりだ。女体美とは、こういう写真をいうのではないだろうか。縄の掛け方も面白し、ヒモで乳房の上を斜めに活かしている線も見事である。

読者諸君らは、唯バクセンと縛っているように見えるかもしれないが身体の線とヒモを巧みに生かしている点は流石である。眼を閉じていかにも観念しきったという風貌も捨て難い。こうした点には演出も苦心した事と思う。ナイロンと照明の効果でこの「光沢」は生きている。私は奇クの写真技術陣に頭が下った。百点満点として然るべきであろう。

「凝視」の佐賀美智子嬢の猿轡縛りは平凡ではあるが映画界、興行界で参考にされているのが案外こういった写真である。緊縛映画場面は乳房の上下を縛っているのが多

いのである。畳の上に転がされて豆しぼりとお腰が純日本風にそえて和服マニアにとって最大の贈物となっている。それに乳房の線をこわさぬ様に胸と腕を別々に縛っている点が変わったアイデアである。普通だと胸と腕を一体に縛ってしまうのであるが、こういった細い所まで神経の行き届いている点が奇ク以外他誌には見られない所で、カメラ技術陣の苦心の現れといって然るべきではなからうか。

私はこれらの写真を眺めて、見れば見る程、縛りの美を満喫し如何に縛りに芸術美があるかと教わる点が多いのである。此の「縛った女体」写真をみつめているだけで一時間も学びとったのである。奇クグラビヤ頁だけで十分の価値があるが、次の頁から愈々本格的な研究論が重厚な執筆陣で我々の目の前に現れてくるのであるからたまらない。

緊縛映画一覽、十四頁に亘る一覽表を見て驚きの目をみはり、これは大したものを発表してくれたと嬉しさと感激で一杯だ。奇クにして始めてなし遂げられる業績である。映画誌、興行誌に於ても見られない貴重な緊縛映画史である。執筆された諸氏に改めて御礼を申し上げます。



夜^{よる}

光^{ひか}

る

辻 村 隆

仁川有三氏との

奇妙な出逢い

近鉄沿線、あやめ池の菊人形開幕の日は、生憎と終日雨に明け暮れた日曜日であった。

それでも、招待された人々は、十一時過ぎから三々伍々、雨中をついて続き、私も主催のM新聞社への義理もあるので、知人のK氏とつれだって、レインコートに身を包んで、呼び物の菊人形館を寒々と覗き廻った。九月の末と云うのに、台風之余波か、十一月なみの冷え込みで、私達は匂々に会場を辞し、折角ここ迄来たのだからと奨めるK氏の熱心な勧誘に断り難くなって、この近くにある民俗博物館へと立寄ることにした。

六十を過ぎたとはどうしても見えぬ、青年の様に若々しい頬をした館長の津熊氏に招じられて、私達は博物館を素通りして、『あかすの門』と茶目氣たっぷりにしるされた垣戸を潜ったのである。

「面識者は一応玄関にかかっている、あの鐘を叩くんですよ——」

成程K氏の指さす、雅趣たっぷりな玄関脇に、珍奇な形のすり鉢が一個、人待顔にぶら下っている。

全国の斯道に友人を持ち、伊藤晴雨氏とも懇意なと云う津熊氏の、生活と意見に興味を魅かれて、私は招じられる儘に庭先より座敷

に上ると、初対面の挨拶をかわした。

そこには既に先客が一人、私達を見るでもなしに流し目をくると、これから開陳されるコレクションへの気恥かしさもあってか、一対二のひけ目を感じて、ぎこちなく、思い出した様にピースをとり出して紫煙をスパスパとふかし出した。

津熊氏は、何十年かに亘って蒐集した自己のコレクションを開陳する前に、おもむろに私に名刺を求めた。K氏は既に会員であるので、一応先輩ぶって、私を新会員として招いたのでこの場合悠然と構えている。多少気迷い乍ら、私は辻村隆の名刺を机上に置く。

津熊氏は一瞥してから自己の名刺の裏に、さら／＼と流暢な達筆の走り書で、会員たるの証を英字で書いて私に手渡してくれた。

その時、先客の眼が探る様に、机上の私の名刺に視線を走らせると、ハッと似た様に鋭い眼でそれを凝視し、改めて私の顔をまじまじと見入ったのを、私は何故ともなく逸早く感じて、これはひよっとすると、私の素性を知っている、或いは奇巧の読者ではないかと、その時感知したのである。(この予想は矢張り当たっていた事を、私は逐次述べる)

ビジネスを終えると、津熊氏は丁寧に一枚／＼画用紙に貼りつけた、貴重な文献的価値のある絵画や写真を、次から次へと、先客からK氏、そして私へと廻し出した。

骨とう的価値のあるもの、自己満足に過ぎないもの、唯一無二のもの、実にくだらぬもの、そうした一枚／＼には丹念に説明がつけられ、保存番号を記入して、氏が如何にこれらを大切に取扱っているかが、それらの写真、絵画類からありありと察しられた。

迂かついて見ていると、氏はこまめに私達に注意を喚起しては、ナンバーがバラ／＼にならぬ様しば／＼言葉をかけた。

次から次へのめまぐるしい一時間――。

私は余りにもぼう大な、氏の性の蒐集に飽和状態になって、いつしか投げやりに眺めていた。私の態度に津熊氏が稍、不気嫌になり、熱心に見入り、数々の質問を發すれば發する程氏が喜ぶものであるとの、K氏からの予備知識も、今は半ば呆然と、こうなると、一刻も早く、氏のコレクションの終末を祈りたい気になっていたのである。

私のその不満――と云うと一寸語弊があるが――は、津熊氏のこのおびただしい性のコレクションの中に、私達同好者の求める、緊縛とか、責めに類したものは皆無と云ってよかったですからである。性への探求がむしろノーマルな人間自然の探求であるならば、私が期待する責めや緊縛への要求は或いは不自然であるかも知れない。

しかし、私は噂に聞いた津熊氏であれば、必ずやそこに、私の求める緊縛を用いた、素

晴らしいものが存在するであろうと、大いなる期待を抱いたのであったが――。

盃や、人形や、水牛角製の張形などが出始めた頃、妙な事をお訊ねしますが、責めと云った式のものがない様ですが――。先生は縛りや折檻等に対して、余り興味をお持ちじゃありませんね――

突然として、先客が津熊氏に声をかけた。我が意を得たりと、私も心裏彼に共鳴して、先生の言葉を待つ――。

「ハハ、いやそうしたものを御所望なら、あるにはありますが、貴方は大分進んでおられる方ですな――」

先客は黙笑した。

「じゃ、これなど如何ですか――」

私も胸を躍らせて、津熊氏のおもむろに差し出すものをまいった。

K氏は私をここへ誘いな乍ら、所要を思い出したと、半時間許り前に去って、今はこの先客氏と二人切りである。

曰く、バルカン戦争図絵

曰く、初期の伊藤晴雨面集

曰く、サド侯爵嗜虐図鑑

それらのすべては、一二を除いて、殆んどが奇巧で発表済のもの許りである。

私の失望にもまして、先客の失望も私に劣らぬ様子だった。まだ津熊氏はもぞ／＼と氏の後ろに山と積んだ、整理箱をあれやこれや

と物色していたが――

「いや、もう結構です……どうも」

先客は私を一顧すると立上った。釣られて私も腰をあげた。ここらが退き時であろう。

津熊氏が宝物の様に大切に一枚／＼貼ってあったヌード写真の彼女、A B C D E F……

(モデルの名前を氏はアルファベットで呼称している)の中にあの娘とあの娘が、かつて私が構成した緊縛モデルと同一人物である事を、氏は恐らく知らないであろうと、私は皮肉な苦笑を浮べて、秋草の茂みの小道をかきわけて、先客とあかすの門へ向った。

人を小馬鹿にした様に、入口の正面には『あかすの門』とペンキで書いてあるのが、出しなにヒョイと見上げると、こちら側からはローマ字で SAYONARA としてある。

何とも人を喰った爺さん(と云うには余りにも若々しく精力旺盛な津熊氏ではあるが)だと、私は先客と顔を見合して思わずニヤリとした。

「よかったですらお乗りになりませんか――」

先客は私に、自家用の五七年型オースチンデラックスの助手席を開いて奨めてくれた。

うね／＼した生駒山系の山道を越えて、車は一路、大阪への道を辿った。

「奇クの辻村さんでしょう。きつと――。誌上で古くから識っておりますよ。お逢いするのは始めてですが、ええ、一度読者室へ、貴

方宛に御手紙を差上げて、御交際を願った事があるのですが――、そう、もう二三年も前の事でしような、私はこう云うものです」
器用にハンドルを握り乍ら、先客は片手で背広の内ポケットから名刺をとり出して、私に差出した。

浪速樹脂化学株式会社

代表取締役 仁 川 有 三

大阪市東淀川区〇〇町〇〇番地
電話 代表 〇六三一四番

こうして私は、先客の彼、即ち肥満の紳士仁川有三氏と奇妙な場所で識り合ったのである。

仁川有三氏の奇妙な

生活と意見六ヶ条

事実それまで私は、仁川氏の人格態度は何一つ判らない、單なる行きずりの博物館の先客に過ぎなかった。

二度、三度、私はいつも仁川氏に、彼の行きつけであるという北の料亭で饗応をうけ、急速に親しくなるにつれて、徐々に氏の半面がさながら廻り舞台の様に知るに到ったのである。

氏はおのずから云う様に、中等教育も碌々

受けていないが、事業的手腕は抜群らしかった。世に謂う、らつ腕でもないが、人を外らさぬ外交手腕と粘りとが、今日の氏の事業の大を築いたのである。

酉年と云うから、数えて五十才に一才を余すのみ。上品に着こなした肥満体のダブルからは、苦斗時代の彼を知らぬ私には、堂々の社長タイプを思わせる。

そして、こうした私との会合に、右近と云う妙麗の秘書が蔭の様に必ずや臨席した。

世にこれを八頭身と謂うのか――。垂らせば可成りの長髪を想像させる黒髪を、襟足も蒼々とアップにたたみ上げ、洋装の上からエストが細いだけに尚、盛り上って見えるヒップを、何ラインと云うのかびったり身についた黒ビロードの形よいデザインでつつみ、酒席のとりもちもすれば、私達二人のアップの話にも婉然とにこ笑んで、人をそらさず、非の打ちどころがない。秘書ぶりである。

私が唯奇妙に感じるのは、そこはかとなく句う美女の発する言葉の節々にあるのだ。

二十三才の彼女は仁川氏を呼ぶのに、『おとう』と云う。何とも品のない言葉だが、それが一度右近嬢の口より発すると、妙になまめかしく、必然的で、その『おとう』なる呼び方がこの際最もピッタリとするから奇妙である。

こうした雰囲気ではパパでは軽蔑的存在になるし、社長では堅苦しい。あなたと云うには狂々し過ぎる。お父ちゃんでは女房の言辭であるとするれば、言外にのんきなとうさん——をほうふつさせる、『おとう』なる呼名が親しみると、愛着と馴々しさをこめて、何とも云えぬ諧謔的な響きを残し得て仁川氏の呼称に最適と云わざるを得ない。

私もそれに習ってか、いつしか心易げに、

『おとう』と仁川氏を呼ぶ様になった。

たとえ、右近嬢が仁川氏の思い者であるにせよ、晩秋のひととき、共に連れ立って、心おきなく、美女の前で虚飾を捨てて、アブ談を語り得る事は愉快この上もない。

「辻村君のお説通り、私は功なつて、しかも人生のありきたりの生活に飽いた。奇巧を知るに及んで、こんな世界のある事に私は飄然と目覚めさせられ、興味を覚えたって、いうわけだよ——。緊縛と云い、責めと云つても私は初心者だ。大いに伝授して貰いたいと思つてね——」

おとうは、私を握え、酒席の空気に陶然となればこういう冗談ともつかぬ述懐を語る。

「私は考えているね。専門家の君に対して甚だおこがましいが、謂うなれば私自身の責めと緊縛の意見六ヶ条だ。聞いてくれるかね。

第一に、緊縛も責めも美しくなければいけない。グロは愚の骨頂であり、美観を損ね、

柔肌を傷つけてはいけない。身体ハップこれを神に受く。敢えて毀傷せざるは責めの始めなりかな——。

第二条は、責むるも責めらるるも共感を呼ばねばならん。君の云う緊縛のプレイと云う奴だ。無理無体の強引な、相手の嫌がるのもお構いなしの責めや縛りは、罪惡以外の何ものでもないかね。責むるも守るも……軍艦マ——チで行かんけりやいかんよ——。

第三は、責める相手は絶対に美しくなければいかん。右近嬢の様にネ……。？そりや無理だつて……。？だから焦らず、一生かかっても探すんだよ、いいのを——。お多福を責めて何の得るところあらんや。ましてや、南京虫の刺され跡、灸の跡、盲腸の傷跡——色黒の骨太——お話にならないだろう。

第四条——。同じ緊縛、同じ責めを二度やつては不可ん。常に新鮮味を持たせ、これを美と芸能に昇華せしめる事だ。夢に幻想に、素晴らしいアイデアを浮べば行ろ。それでいいのだ、ガツ／＼してはいかんよ。何？衣食足って礼節を知るだつて——。いやわしは緊縛を知つたんだよ——。

第五には、緊縛の相手はセツタイ女でなければ不可ない。だつてねえ、君。当然の様な、ゲイバーのシスターボーイで、盛んにわしに縛ってくれと頼む奴がおつてね。虫唾が走るね。いやわしは好んでは行かんよ。しか

しこれもアブの探求と云う奴さ——。

第六条は、君のお手のもの、カメラさ——緊縛のプレイと云い、責めの様子は撮つておかんけりや意味ないよ。変格的『鍵』だね。おとうの意見は誠に立派である。そして、いう迄もなく、おとうの被虐対象は右近嬢とは云わずと知れた事。

その彼女は、酒気満面、談論風発の私達を切れ長の黒い瞳に、妖しい笑みを溢えて照れるでもなく、羞恥に赤面するでもなく笑を静かに朱唇にこぼし乍ら、聞き入っているかと思えば、時折は含槌を打つように自分の考えをも適当に述べる睦まじさである。

私はおとう等と別れた夜、酒気に濁った脳裡に、絶えず右近嬢の妖しい魅力を彷彿させ乍ら、今宵許りは、申し分のない優しい妻が、殊更世話女房ぶりを発揮して何かと寄り添ってくるのも、うとましくてならなかった。

美への憧憬は、彼女が既におとうのものであることを知りつつも、尚求めてやまなかったのである。

おとうの奇妙な

緊縛の試みへの誘い

そろ／＼退社時刻で、帰る支度をしている処へ電話。おとうからだつた。

七時迄に、阪急千里山のこれ／＼のところ

へ是非お出で願ひ度い。緊縛の新しい試みをしたからお招きし度いと、云うだけ云ってプツンと電話はきれた。

私が仁川氏を「おとう」と呼ぶ様になつて以来、氏も又、社長的地位からいつてか、從屬的に私を見る様になり、言葉も下僚に對するものであり、やがて高圧的にと變化していったが、酒席の場で、ついぞ一回として、身銭のきつた事のない、いつもよばれて許りの私としては、それも又やむを得ない成行と、私自身も多少卑屈めいた態度になつて來つた。

既におとうから披露された、彼の第六條のカメラの手腕は、写真を見るに及んで、それが未だ初歩の域を出ないものであり、同じものであつてはならないと云う、氏の緊縛への意見も、同巧異曲の縛りが多く、責めと云つても、おとうの美への要求と、損傷を懼れてのせいか、甚だ物足りぬ甘いもの許りであつた。事業の多忙さから、おとう



は、フィルム of 現象、焼付をすべて右近嬢に一任しているようであつた。その為、彼女を三ヶ月の短期写真養成学校へ通わせた程だから、仲々もって周到な準備のもとに、氏の計画は一步／＼堅実な歩みを続けている様である。

私は、彼女がすべて現象、焼付をやるんだと聞かされた時、急にカツと胸が熱くなったのを今もありありと憶えている。
暗室に独り閉じ籠って、妖しく瞳をきらめかせ乍ら、己が全裸の緊縛図を浮び上らせる、その時の、彼女の精神状態はどうである

か。自分自身の姿に恍惚として、肢態の現出を昂奮と激情にゆさぶられて期待する彼女の暗室での姿を、私は醜に浮べて、我知らずほてるのをどうしようもなかった。

それは彼女にとっては苦痛であるかも知れない。或いはナルチズムにも似た、人知れぬ喜悦を憶えているかも知れない。

おとうの緊縛の様相が、一歩／＼前進するにつれて、彼女の暗室での激情は、ひたすらにゆらめいて行くかも知れない。

始めて訪れた千里山の洒落た和洋折衷の住宅は、道々私が予感した通り、矢張り右近ちか子嬢が、社長から与えられた。別宅兼プレイ用の隠れ家であった。

『仁川寓』と書かれた小さな表札横のベルを押すと、セーター姿のおとうが、待ち兼ねた様にここに私を迎え入れる。

「二階がアトリエだよ。まあ、ぐっと一杯ゆき給え——」

右近嬢の姿はなく、おとう手ずから、ハイボールを器用につくって私にすすめてくれた。

「御存知の様にわしの商売はプラスチックやナイロン製品の販売だ。フト商売物にヒントを得てね。ナイロンの柔いロープが、犇々と肌に喰い込むのも乙じやないか——。いや、それだけじゃ面白味がない。細工は粒々、今夜はゆっくり、ちか子の裸を拝ましてやるかな。ハハ、眼の色が変わったぞ——」

おとうはすっかり上気嫌で、自分のアイデアに酔っている。それより一時も早く、私は右近嬢を見たかった。彼女が中々現われないのも気にかかる。

気を持たせるだけ持たせ、私がやや、無口になって、グイとハイボールの残りを流し込んだのを、おとうはニヤニヤ眺めて、おもむろに腰をあげた。

応接室兼スタンドの左傍の扉を排して、廊下に出るとすぐ左折れに、ラセン階段が二階へつながっている。

肥軀をミシ／＼きしませ乍ら、おとうと私は昇りきる。踊り場の扉の鍵穴から、おとうはヒョイと中を覗く。——鍵穴の中——。どっかでこんな題名の曝露小説があった事を、フト私は思い出して、自分の家の鍵穴を覗くおとうの後姿に、押えても押えきれない奇妙な含み笑いが起る。

「どうだ辻村君、覗いて見ないか——」

いわれて初めて私は自分にかえり、おとうのいうがままに鍵穴に眼をあてる。

私は思わず息をのんだ。

夢にまで見た右近嬢の、キングサイズの全裸が、いきなり鍵穴一杯に私の視線に飛び込んで来たからだ。なんと美しいヌードだろうか。

これがおとうのいうグッド・アイデアなのか、お手のものの、ナイロンロープで、実に

美しく入念に縛ってある。しかもロープは七色に輝く、赤、緑、黄、青、紫、橙、ピンク——。

首からかけた赤いロープは、お腕を伏せた様な上向きにつき上げたような形のオツパイを丸くしめ上げて後ろに廻っている。

私は生唾をゴクリと飲み込む。既にそういう打合せがしてあるのか、おとうがコツコツと扉を二ツノックすると、彼女はスローモーションに写し出された美女の様に、ゆるやかに半転する。

手首から首にかけて締め上げたロープは鮮やかな緑色を呈していて、赤いロープに繋がっている。

手首から偉大な両臀の割れ目にかけて、橙色のロープが、皮肉に喰い込んで股縛りにして前へ廻ってある。

背からくびれた胴にかけて、ぐるぐると五重六重に、紫のロープが、一層のくびれを強調して、あたかも蜘蛛のそれを想像させる。彼女は再び徐々に半転する。

青と黄のロープが乳房の下から脚線にかけて、交互に交叉してびっちり脚首で結んである。この姿勢でどれ程立っていたのか、彼女の顔面に多少の愁いのかげりが見える——。

先刻ハイボールをのむ間から、今ここにこうして眺めている間にも、既に十分以上の経過はある。

重心を失いかけては、彼女はふと、よろめきかけ、辛うじて正立を保っている有様だ。そして最後のピンクの一本は、彼女の倒れるのを防ぐかの様に、手首に廻したロープの端が、天井の銀色のパイプにピンと張ってつながっていた。

目も緩な、これはさながらカラーフィルムを見る様な眺めだ。カーテンの真紅、絨氈の群青——。そして、汚れなき壁面のブルー。陶器細工の様に、しみのかけら一つない、小麦色の肌に、七色のロープが色よくマッチして、私はいつ迄も、眼のふちに鍵穴の跡がつく程、忘我の境地で見入っていた。

「電気を消すよ。いいね——」

「えっ?……」

瞬間、アトリエは暗黒となった。

一分——二分、眼をこらす私に、ぽーっと

八頭身の輪廓が微かに浮び上る。

「眼が馴れたろう——。よく見給え」

云われる迄もなく、私は眼を据えて、彼女の在所の辺りをじっと凝視し続けていた。ホーッと彼女の吐く溜息すら、手にとる様に聞える静けさだ。私は思わず唖った。

何と云う素晴らしさだろう。これは正に七彩の女王といっても間違いない。七色のロープの夜光塗料が、七彩にくっきりと、闇に浮んで、うごめく彼女の肢態が、全裸の輪廓にそって肌にじかに塗りつけた夜光塗料の効

果と相俟って、妖しく、なまめかしく、ゆれている。

「ここに居給え、いいね——」

おとうは低い声でそう云うと私の肩を押えて駄目を押し、やがて、つと扉を排して部屋の中へ侵入した。

闇に吞まれたおとうの姿は私の眼には見えない。唯ビーンと天井へつないであつたピンクのロープがゆるんで垂れて、ひととき大きく、彼女のシルエットが横にゆらめくと、ゆるると横倒しに床に転がっていった。

廻る廻る——。床を右に左に、おとうは闇にかくれて彼女を転がしているのだろう。

螢の光の色の青がチラチラゆらめいたかと思うと、狐火の燈色が伸縮する。股縛りのロープを引っ張るのか、狐火が縮むと、彼女のこの世のものとも思えぬ哀歎の悲鳴が声を殺して闇をはいずり廻る。

スーッと彼女の体が横倒しのまま宙に浮いて半身が消え、再び半身が現われる。斜めに逆さに、彼女のポーズはおどろくに千変万化して、アトリエ狭しと宙間を舞い踊る。どういう仕掛になつてゐるのか、闇の中でおとうの姿は見えない。

おとうの肥軀に隠れていた彼女が漆黒の闇の中から、フワリと突如眼前に現われたりして、鍵穴から覗く私の眼には、まるで夢幻の花園に遊んでいるような錯覚を起させる。

ホウホウト、おとうは奇妙な掛声で七彩の女王を宙にゆする。波間に漂う美女さながらに、高く低く、彼女は空間に浮かび上ったかと思うと、そのまま宙に止りその都度、身も世もあらぬ悦びとも、苦しみともつかぬ嬌声が流れる。

その奇妙なブレイは、どの位の時間つづいたのであろうか、我に返った私の、闇に馴れた眼に、既に妖しい彼女の七彩の姿は影の如く消え果てて、吐く息も激しいおとうが扉を後手にしめて、じっと私の傍らに佇立していたのだった。

「帰ってくれ給え——」

ブツリと一言いうと、おとうはアトリエに身を入れ、うちら側よりガチャリとノックを廻したかと思うと、鍵穴に、ピタリと鍵を挿し込んでしまった。

すべては終わった。

七彩の妖しい天女の舞がチラ／＼臉にチラ／＼のを押え、私は激しい侮辱を全身に感じながら、一言も応えずこの家を立去った。

おとうと彼女との、これから行われるであろう、より強烈な二人っきりのブレイの世界に、物悲しい諦観の念と、云い様もない羨望と幻想を逞くし乍ら、私はふっきれない思いで、阪急に揺られていた。

おとうとの奇妙な結末

あの夜の、おとうの高圧的な態度に、私も流石に我慢ならず、悶々のうちにも、おとうから其の後二三度かかって来た電話に、何かと用件にかこつけ、逢う事をしなくなった。

金に飽かせた遊閑族の狂痴を眼前に見せつけられては、私如き一介のサラリーマンでは、只羨望の念をかき立てさせられるだけで、尻尾を振る犬にも似て浅間しくも思われ、私は私なりの分野を守り、漸くよくなった斗病生活のぶり返しを恐れる気持もあって、その後いつしか途絶え勝ちとはなった。

唯、心残りには、せめて一度、あの右近ちか子嬢を私の構成のもとに、自由に緊縛し、心ゆく迄フイルムに印したかったのであるが、所詮は高嶺の花、考えても術ない事と、努めて私は右近嬢のことは忘れ様と心掛けた。

晩秋のうすら寒い黄昏——。

梅田で買った夕刊の社会面の下段に、小さく出ている数行の記事に、私は危うくカバンを取り落としそうになった。

新聞記事の全文は次の通りである。

『千里山に強盗二人組』

十九日午前一時ごろ、千里山〇〇、〇〇地、無職右近ちか子さん（二三）方へ、二十五才の男と、二十一、二才ジャンパー姿の二人組強盗が忍び込み、就寝中のちか子さんに刺身庖丁を突きつけて、三万六千余円を奪

ったのち、サルぐつわをはめ、同家の抽出しにあったナイロン紐で同女の手足をがんじがらめに縛り上げ、暴行を加えた後、奥の間の衣類、靴、オーバなど盗んで逃げた。」

私はこの短文の中の、手足をナイロン紐で縛られ、暴行を受けたという個所を数回、震える手で繰り返し繰り返し読んだ。

ブレイの緊縛と、暴行の緊縛——。遙かなる羨望の的であった彼女の、余りにも飽つけない冒瀆の結末であった。

私は慌てて会社に引返すと、受話器をとるのも、もどかしく電話をおとうに掛けた。

「もし／＼、ええ私です。唯今右近さんの事件を新聞で読んで、驚いたのですが……。」と

もあれ一度御伺いしましょうか——。無言の仁川氏の世にも淡い顔が、素早く脳裡を横切った。

「もしもし、もしもし——」

「ああ、あの事かね、あれは君の知った事じやないよ。はっきり云っておくが、あの女とは、今後一切関係のない事にした、判ったね——」

ガチャリと叩きつける様に断られた電話の前で、私は呆然となった。

余りにも冷たいおとうの仕打である。彼女の不測の事故をいたわるべきであるに、我が身に類を及ぼす事を恐れて、卑怯にも絶縁し

たおとうに、私は云い様の無い激しい憤りを感じた。同好者の風上にもおけぬ奴——。

しからば——

私自身、彼女をいたわっても、今は然るべきか——。

私は急拠、千里山の彼女を訪れる気になって阪急に乗り込んだ。

慰さめて、扱、どうしようと云うのか——。彼女の思いも掛けぬ身の不幸をいいチャンスと、これを機会に、彼女に自分の思惑を遂げ様とするならば、私自身、又卑しむべき男ではなからうか。

ハイド氏は行け／＼と囁く。ジエキル博士は反問する。

——お前の病気が出て、恐らくお前は慰さめるよりも、ブレイの緊縛と、暴行につらなる緊縛との、いわば遊びと真実の間の、緊縛の相違をくどく聞き訊し、彼女を怒らせるのがオチではないか——

——そうだと、俺は慰さめなどに行くものか、どうせはおとうに玩具にされた女ではないか。その事実がききたくてウズ／＼しているのだ——

私は満員の車中、グイと足を踏まれて、フト混乱から我にかえる。

止そう。幻想的な七彩の夢を、いつ迄も心に持ち続けて、彼女のイメージを、この上もなく美しく、妖しくしておけばいいのだ。

夜光る女——。右近ちか子嬢はその後どうなったか——。ついそ音沙汰はきかない。



生 首 礼 讃

南 方

純

元治元年、鏡倉で英士官を殺害した清水清次や、明治七年、時の政府に叛旗をひるがえし佐賀に乱をおこした江藤新平は、いずれも斬罪の上臈首されたのであるが、その写真が今でも残っている。凄惨正視にたえないものがある。南米のヒバロ族の間では敵を殺した場合、その首を切って、頭蓋骨や肉の部分をすっかり取り去り髪の毛と皮膚だけにし、それを熱い砂で縮小させテニスのボール位の大きさにする風習が現在も行われており（週刊読売十月十三日号に記事がのっている）その実物が上野の科学博物館に陳列されているがこれ又余り見て気持のよい代物ではない。

ところどころが浄瑠璃、歌舞伎においては、この生首が極めて頻繁に使用され、奇妙な官能美を發揮していることは注目すべきことだと思ふ。近松門左衛門の作にはサジスチックな描写が多く、「女殺油地獄」、「長町女腹切」など精細な表現は驚嘆すべきものがある。「平家女護島」で俊寛の妻あづまやが清盛の意に従わず自害し、教経がその首を打落して清盛に見せる場面があるが、女の生首を活用している作は余りない。それが彼の後継者の時代になると殆ど毎作品といってよい位生首が出てくる。それは必ずしも女とばかりは限らないが、所謂身替りと称する趣好で、筋にマンネリズムを招いたのも事実である。「弁慶上使」や「道春館」など女の首を使った例である。又それに似ているのに「源平魁躰圖」（所謂扇屋熊谷）があり、敦盛の身替り

に彼に思いを寄せている娘桂子の首を切るといったもので、作はかなりふざけたものであるが、敦盛が桂子の首を抱えて未来の妻の証しとして、墨で歯を染めるといふ箇所があり印象的である。しかし、全浄瑠璃を通じて、生首の取扱いが特に優れているのは近松半二の「妹背山婦庭訓」の山の段だ。舞台の設定、人物の配合等全く申分ない。難人形の首がぼろりと落ちて終末を暗示する手法、参内のおすべらかしに結び直すと称して成敗のかき上げ髪に結び、首を切る準備をする手順等感歎の外はない。雛鳥は手を合せ首をさしおる。母は刀を振り上げるが、どうしても切りおろすことが出来ない。その間の呼吸正に芸の見せ所である。入相の鐘にはっとして、

気を取り直し、思い切つて振りおろす刀の下、首はころりと落ちるのである。一方上手では久我之助が腹に刀をつき立て、いろいろあつて、とど父の大判事が介錯する。雛鳥の首は琴にのせ川を渡つて大判事の許にくる。二つの首を抱えて愁歎の幕切となるのである。曾てある文士が妹背山を見て、首を切るのは蛮風の名残で感心出来ないと批評していたが、これは美を解しないものの云うことである。

本来の歌舞伎劇について見ても、文化、文政以後の爛熟期には極めてサジスチックな作品が残されている。所謂濡れ場と並んで、責め場、殺し場が写實的に舞台上で演ぜられた。南北の「浮世柄比翼稲妻」。「東海道四谷怪談」等かなりどぎつい趣味が見られる。黙阿弥の縮屋新助の殺し場では美代吉の首を切り唾をかけるといった仕草までするが、現在上演される時はカットされるのが常だ。「三人吉三」で和尚が身替りに男女を墓場で殺し首を切るといった陰惨な場面もある。大體今の歌舞伎の演出は検閲に対する考慮もあるが上品すぎて、初演当時の官能美を發揮出来ず、かすをかむ思いのすることが多い。「お祭り佐七」の殺し場などでは小糸に扮する女形が血糊で毎日夜裳をよごし、又それを芸者が争つてはしがったという昔話もあるが

今では「お祭り佐七」も「佐野治郎左衛門」も殺しがあつさりすぎて、恨を込めてなぶり殺しにし、最後にとどめを刺すといった演出は行われない。

歌舞伎劇の殺し場で最も優れているのは少し時代は古いが並木五瓶の「五大力恋藏」だと思ふ。極めて合理性に富んだ作で筋立に無理がなく殺しにもつて行く段取りが自然で良い。戦前前進座が長十郎、国太郎で比較的原本に忠実に上演し多大の感銘を与えたものである。小万の義理立て故の愛想づかしに立腹した源五兵衛が彼女の殺害を決意する。小万が遺書を書いて後からぬつと現れ、とりすがるのを振り切つて一太刀あびせる。小万の右手が遺書を持つて源五兵衛の胸をつかんだまま切落される。今度は刀を胸元につきさし、小万苦しむ仕草あつて、うつぶせになつて息絶える。この段階は比較的あつさりして髪もくずれない。白い首筋を見せて死骸はしばらく舞台上に残される。源五兵衛いろいろあつて、又小万の死骸の処に戻り、屏風の後に蹴込み、えいと声をかけて首を打落す。布で首を包んで腰に結びつけ悠然として花道を入つて行く。舞台廻ると源五兵衛内の場で源五兵衛は戻つて包をほどき、台の上に小万の首をのせるのである。この場合、原本には本首とト書きがあり、前進座の演出もそうし

たが、小道具ではなく、女形が下から首だけ出すのである。髪はほどけて長くたれ下がり眼の閉じた首が青いスポットライトの中に浮び上つた光景は誠に見事という外はない。源五兵衛はにくにくしげに首に煙草の煙を吹きかけるのである。これは單なる憎しみばかりではなく、自分の意志に従わなかつた肉体が完全に意志のままになつたという満足感に陶醉した境地であらう。

前進座が今度明治座に出演あることになつた時、候補台本としてこの「五大力」がとり上げられたと聞き、これあるかなと大いに楽しみにしていたが、明治座の火災で実現出来ず何とも遺憾なことである。

文芸の方でも読本などでは相当サジスチックなものがあり、精細な挿画と共に光彩をはなっている。山東京伝の「昔話稲妻表紙」では山三郎の葛城殺しの件に豊国の画で片手で首をさし上げたところと、家に帰つて仏壇に供えた処が実に見事にかかれてゐる。

「難波土産」という書物で、近松巢林子の意見として、実物ありのままでは美しくない、作り物なればこそ美しいといつてゐるが、演劇文芸ともに虚構なればこそ美しいのである。その虚構も真に近い如く表現された虚構であつてはじめて美しいのである。舞台上に誌上にこの虚構の美が更に一段の精彩をもつて發揮されることを渴望してやまない。(終り)

未来幻想マゾ小説

家畜人ヤブー

(第十三回)

沼 正 三

第二十章 ソーマ・パーティー迄

一 私室のドリス

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース、女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤブーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた——劣等人を家畜化し家具化し切つた白人達の女権的貴族政治の世界その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ボーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たボーリーンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやつて來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤブーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細

ドリスは従者の手で畜人皮の水の中服を脱ぎ捨て、部屋着を持つて來させながら、別の召使を呼んで、蛇繩に縛られたビュウを河童槽の上に倒懸にする様に命じた。前室の隅、奥の寢室へ続く扉を左右で守つて、右の犬舎に対し、左に河童槽がある。床に五尺四方深さ四尺の凹所を切つて水を入れたもの、ビュウはそこを定位置にしている。両棲畜人といつても、水辺から完全には離れ得ない生理組織なので、空气中で二十四時間位はもつが、それ以上経つと肌が乾いてしまい、乾けば皮膚呼吸が出来なくなつて斃死する。水への欲求は人間に数倍する動物なのである。胸をうんと反らせておいて両腕を背中の中甲羅の両側に付けさせ、

かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

全裸強制の皮膚強化処置に逆上した麟一郎は、無理心中を試みて失敗し、去勢されて予備檻に入れられ、朝から家畜適性検査をされている。その頃クララ達は水晶宮の階上で漸く床を離れた。検査の時悪戯をした河童を縛つてドリスは私室に引き上げた。さて……

ぐるぐる足首迄巻いて逆吊した。胸を反らせているので真下になるのは頭頂でなく自転車の鞍に似た顔面だ。観念して黙って目を瞑っている。

「もっと下げて、もう少し、よし」

口吻が水面すれすれになった。もう一寸で水に触れる所で、水を見せびらかしながら水に触れさせず、タンタロスの苦しみを味わせつつ、渴死させようというのだ。

「我ながら妙案だわ。こら、ビュー、お前、こうやって乾干になっちまうんだよ」

と嘲り罵り、初めて自分の運命を悟って、

「どうぞ、お赦しを……」

と叫ぶビューの口許を

「うるさいわね。お黙り！」

と蹴り上げた。懸垂の最下面になっている鞍顔の尖った口吻にスリッパが強く当たって、拳斗練習用砂嚢を撲った様に、向うに大きく揺れつつ

「クアッ」

と悲鳴をあげる口吻から血が滴って、水槽に消えた。蹴られて片頬が裂けたのだ。

戻る所をもう一発、と振った足のタイミングを誤り、スリッパが

反対側の壁に飛んで、棚の上の金魚鉢を引繰り返した。

間髪を入れず、背後から二匹の畜人犬が走った。

大きい方は読者諸君にもお馴染みのネアンデルタール・ハウンド（第三章二）種で、犬舎の住人、名はニューマと云い、ポトリーン（第三章二）種で、犬舎の友人兼好敵手だ。ピンと張った八字髭の下にスリッパを啣えて戻り、女主人の足許に置き、金魚鉢の水を浴びて濡れた部分をペロペロと舐めた。

もう一匹はスピッツ程の体格で、黒い毛が全身に密生し八寸程の尻尾も備えている姿は旧犬そっくりであるが、正面に廻って顔面を見ると、毛も生えず、口吻も左程尖らず、ニューマより人間に近い容貌をしている。これは愛玩犬のヤブテリヤ種の犬で、ナメルと云う名前、夜も女主人の寝台で寝ることを許されてる寵愛物である。この方は金魚を見てふざけに行つたのだが、啣えた途端、

「ナメル、持って来い！」

と厳しく命令されて、悄悄と啣えた儘女主人の足許に帰って来た。

「ふざけてばかり、馬鹿！」

不機嫌な女主人の足が犬の額を蹴った。

犬の口から床の上に下された金魚がバタバタする。いやまで、身体は赤い鱗に被われているが、海亀の足の様に鰭状になった四肢を動かしているではないか？ これは金魚ではないぞ……八極に余る黒髪を生やした頭部には人間の顔が附いている。何と、これは畸形の極小ヤブー（第十章三末尾註）なのだ。相撲取の様な太鼓腹、バセドウ氏病者の様な突出した眼球……異常で病的だ。然し、金魚の原種たる鮎から見たら、ランチュウや出目金は異常で病的ではないだろうか。人間はその眼を喜ばす為に他の動物を異常な病的状態に追い込んだのではないか、水棲畜人を畸形化し縮小化し皮膚を角質化し色を与えて人型金魚が登場させられた以上、ランチュウ的、

出目金的な畸形種の珍重と作出に迄発展したのも当然の成行であつた。……「金魚までヤブーはしなくても良いだろうに」と、読者諸君は作者の行き過ぎを難ぜられるかも知れぬ。然し、有翼四足人を除いて、人間に劣らぬ知性を備えた動物と云えば、ヤブーしかない。一旦知性ある家畜使用の味を覚えた人類が、従来のあらゆる家畜のヤブーによる代置を目指す様になったのも無理はないのだ。

人型金魚は四肢をバタつかせながら床を這い進んで、ドリスの足の近くにあつた河童槽の縁迄来た。周縁の高くなつたタイルが越えられぬのをドリスの爪先で援助され、遂に水槽の中に入ると、身の丈より長い黒髪をなびかせながら泳ぎ出した。

天井から倒懸した河童はまだ小さく振れている。裂けた頬から血が滴らせつつ……。

「あーア」と欠伸して戻りながら、召使に「あとで金魚は鉢にお戻し」「畏りました」

「ナメルもニューマも、悪戯したら、こうやって逆さに吊つちまうよ、いいかい」

言い聞かせながら、椅子に戻って、

「じゃ、朝食にしよう」

例の果物食である。早朝から大部運動した後だから、もりもり食べる。粒が蜜柑程ある種なし葡萄の房から一粒取って食べると、残りを従者に示し、

「足に塗って」

美容法としての葡萄液塗布もよく行われる。部屋着の裾を捲り上げて、太腿の附根迄露出させた両脚に、足先から上へ葡萄の粒を潰じ漿液を塗らせる。液が伝って足先足裏へと滴るのを指して、

「ナメル、ニューマ、お砥め。お前はこっち、お前こっち」

二匹の犬の舌は液を求めて足の甲から脛にまで及んで行く。

便意を催おす。途端にその余波に感応し、優美に彩色された僞優型肉便器が出て来る。腰を代えた。食事時の排泄なんて昔の人には考えられないことだが、匂が洩れるでなし（第十一章二註）、手を使うでなし、何の不潔感もないので、イースでは普通のことだ。ドリスがその時手に取っていた一口瓜の色と形は、我々なら糞塊を連想する様なものだったが、肉便器と肉便器しか使ったことのないイース人の一人として、彼女は自分の尻から出てゆくものを一度も見たことがない。だから何の連想もなしに気持よく食べている。……

馬蹄肉瘤に囲まれた凹みの底では、肉便器の口が、下賜された食物を、これまた気持よく食べている。その色と形が偶然女主人の食物と似てるとは知る由もなかったが。味は……勿論客観的には珍果一口瓜の美味と比較するさえおこがましい。然し主観的には、美食に飽いた女主人が一口瓜から味う以上の美味が彼の口腔内を満たしているのだった。——イース人の便は、匂のみでなく（前掲註）、味においても現代白人のとは異なる。食物が異なるからだ。イース人には嘔吐的でも、現代日本人には、この味は特殊な風味ある味噌としか思えないだろう。（何故日本に味噌味噌というものがあのか、それは後章で説明される。）

ナメルはこの辺を舐めるのは嫌いなのか不得手なのか、愚図愚図しているが、ニューマはいつものこの特典にあずからぬためか、ひどく熱心に舐め進んでいる。

ビユーが又悲しそうに啼いた。

二 携帯諮問器

さて、クララの部屋に戻れば——

起床以後の一刻を夢心地に送った彼女である。香・薬・浴・後の健康液全身マッサージも、その後の見たことも聞いたこともない不

思議な果物^{くだもの}尽めの朝食も、……クララには素晴らしいものばかり。それに、生体家具を使う時、殆んど無意識の様に、口から言葉が吐かれて、適切な命令が出せる様になっているのに気附く。不思議だ。母音が多いし、家具が理解する所を見ると、日本語に違いないが、一晩で知らぬ間に、習ったこともない日本語が喋れる様になるとはどうしたことだろう。家畜^{ヤブー}語音盤で下意識に家畜^{ヤブー}語を仕込んだとは知らぬクララには見当もつかぬ。

新しい下着を着せられ、キモノ風の化粧^{ドレッシング・ガウン} 着に寛いだ彼女は、自動椅子に深々と身を埋め、思に耽った。

——昨日この部屋で麟一郎に殺され(※) かってからのこと、全然記憶にないけど……

(※註。クララは麟一郎の心中しよう、という言葉を理解しなかつたから、彼が自分を殺そうとしたとばかり考えてるのだ。その時ノックする音が聞えて、

「若奥様でございます」と案内の声。

「お入り」

入って来るなり、手真似で黒奴達を追い出したボーリーンは

「お早う。クララ。どう？ 四十世紀球面での第一夜はよく眠れたこと？」

「ええ、ぐっすり寝たわ。お蔭様……」

「足を見た？」

腰を下しながら、声を潜めて問うた。

「え？」と自分の足を見たクララ、ハッと気が附いて、跳び上った。

「あッ、小趾が……」 「あッはッは」愉快そうに「やっぱり気が附

いてなかったわね。昨夜、誰にも知らせず手術させたのよ。貴女を

イースの人にする為……」

「まあ、……御親切にして戴いたのね」



「ところで、クララ、昨日貴女がヤブーを連れて円盤に入ってきた時、鞭ウィップを持っていたのは貴女丈ね？」

「ええ。鱗は素裸だったから、でも何故？」

「ううん。何でもないの。それより貴女に話しくことが沢山あるわ」

「妾も、昨夜どうしたのか好奇心満々よ」

これを皮切りにして、ポーリーンは昨夜起ったことの詳細を話して、クララの好奇心を満足させた。兄セシルが彼女の命令を誤解して、ヤブーを特別檻に入れ、去勢カスト・セシル鞍に去勢させてしまったことも……

「セシルはひどく恐縮してたわ。お詫したいって云ってたけど……」

「で……鱗は今何処に？」

「あとで予備檻に移したわ。今日は午前中に畜籍簿に登録できる様に、係員を呼んであるから、朝のソーマを飲んだら、皆で生畜舎へ行って見ましょう。」

「畜籍簿に登録って？」

「あのヤブーが貴女の所有物だということの登録よ。登録してないと盗まれても文句が言えないしするから、早く登録する方が良いでしょう」

「分りましたわ」驚きを抑えて答えた。

「午後は良い所へ案内するわ」言い終ると席を立ち掛けたが、思い出して、「そうそう、登録の時の貴女の姓名ね。クララ・コトウィック Clara Cotwick」としたらどうかしら？ 記憶喪失の儘じや登録係が困るし、フォン・コトウィツジや今のイース貴族らしくないから……」

「ええ、分りました。そうしますわ」

「何か、その外に打ち合しときたいことはない？」

「妾、初めての物事が多くて困るから、どんなものか自分で調べられる様に、百科辞典をお借りできないかと思うんだけど」

「成程ね。でも辞書の頁を自分で繰るなんてことはイースじやしないのよ……これをあげるわ」

ポケットからシガレットケース見たいなものを取り出して、クララに手交しつつ、

「携帯 諮問器ポータブル・レファランサーといってね。分らないことがあったら、何でも訊けばすぐ教えて呉れてよ」

「まあ。中に物識りの矮人が入ってて？」

「いいえ。図書館の諮問係に電波連絡してるの。地球図書館は五千万冊位しか蔵書がないそうだから、その範囲内だけど、貴女の知識慾を満すには先ず充分の筈よ。……じや失礼する。ソーマ・パーティーの用意をしくちやならないの……もうじき鐘が鳴ったら、ソーマの間という広間に来て頂戴」

ポーリーンはそそくさと出て行った。クララは今聞いた話を反芻した。

——鱗を妾の所有するヤブーとして登録するんだって……去勢しちやったって……去勢鞍が……去勢鞍カスト・レイチング・サドルって一体何かしら？」

早速諮問器を取り出し、受話器を右耳孔に挿入して、諮問器の蓋をパチンと開き、送話器に問い掛けた。

「去勢鞍とはどんな物？」

澄んだ女の声で回答が聞えて来た。

「……人工合成動物の一種で、生ヤブーの去勢を本能とします。アライバイシャル・アニマル」

外見は椅子に似て四脚を有し、背部は鞍状、鑑解スチラック・デタントルズ手が二本……説明は明快だった。これに力を得て、続いて、根本的な第二の問

「ヤブーとは？」

「知性猿猴の家畜」化されたものです。前史時代には、日本人と称して、人間の仲間入りをしていましたが、生物学者ヒトラーがその正体を発見しました……」

円盤の中でボーリンから聞いた時（第五章二・三・四）と違って、今は一点の疑を容れる余地もないと思えた。麟一郎に対する考え方が、今やはっきり「ヤブーの一匹」として確定した。

——リン（※）、お前やっぱりヤブーだったのね。妾は何も知らずに、お前を人間と思って恋愛したり、婚約したりしてたんだけ。何も知らずに……

（※註。以後はクララの麟一郎への呼び掛けを「麟」とせず「リン」と書く。人間の名でなく、飼ヤブーの名として呼んでいるのだから。

クララは更に、肉便器とは、矮人とは、皮膚反応とは、ポンプ虫とは、と初見の事物、初耳の名辞について、次々に諮問、その限り（作者が今迄読者諸君に丈説明して来たことの）大体の知識を得た。麟一郎の身体に生じた変化も今は彼自身より正確に理解し得た。

——もうリンを二十世紀球面に返すことはできないんだわ。大きな寄生虫が腸に取り附いた衣服の着られない身体（※）だなんて……あんなひどいことを彼からされたけど……憎らしいと思うけど、そう聞くと可哀想な気もする。妾が面倒見てやるしかない訳だわ……

（※註。実際はデルマトコン被服以外は皮膚反応は起らぬから、二十世紀世界の被服なら着られるのだが、クララはこの点を誤解しているのだ。

麟一郎がクララを救主として待望しつつ、つまりは彼女を飼主として迎える心的状態に近づいて行った頃（第十八章四）、こうして彼女自身も麟一郎にやがて飼主として君臨する為の心の準備を知らず知らず整えていたのだ。

——ところでヤブーという名称はどこから来たのかしら？

諮問器に訊ねようとした時、ノックが聞え、スザン・ドレイパア夫君（セシルをこう表現するわけは第九章二註）の名を黒奴が告げた。

「お入り」

三 鞭を惜めばヤブーを害う

「嬢クララ、全くお詫の言葉ありません」

セシル・ドレイパアは深く低頭した。昨日のキモノ風のドレスと違って、フレヤスカートのツーピースを着ているが、髪を捲き上げて結った上に、一輪の花を挿し、耳飾も大きく、二十世紀人の目からは女性的服飾である感じは昨日と少しも変わらない。

美しい顔を真赤にしながら、早合点による失態を詫びるセシルに對して、クララも今更責める気にはなれない。要するに災難なのだ。リンには可哀想だが……いや、あんなひどいことをした罰かも知れない。去勢は酷に過ぎたとしても……

「夫君ドレイパア。もう過ぎたことだわ。宜しいのよ。たかがヤブーのこと、そんなに仰言らなくとも……」

「お赦しの言葉を得て、安心しました」

セシルは本当にホットした風を見せて、従者に持たせていた包を差し出した。

「クララ、これが私の早合点の記念品です」

包装を解くと、函の中には、細長い物が入っている。内側から赤味の透ける白色の物質でできた太軸の万年筆様の握柄の先に、長さ一尺のぐにやぐにやした細い紐が附いているのだ。

「この鞭索はもと貴女の所有ですけど、この握柄をプレゼントさせて戴きますから、その関係で、先刻特別檻迄人をやって、取っ

て来させ、私の手からお渡しすることにしたのです。」

「じゃ、これが」紐を指して、「リンの……」と言い渡したが、セシルは平気で、

「この鞭索は奴のです。一晩でこの長さに仕上げたのです」

(第十五章五)

手に取って見る、握柄に銘があった。

『鞭を惜めば、ヤブーを害す』(※)

(※註。Spare the whip, spoil the yap. これは、勿論 Spare the vod, spoil the child. (笞を惜めば子を害す——甘やかしては教育はできぬの意。) から由来した類句である。

セシルは握り方を教えた。握柄の中の人工血液が鞭索の鞭海綿体に通じて、ピンと伸びて忽ち三尺の撓う棒になる。握りを変えると一瞬元の紐に戻る。まことに如意鞭の名に背かない代物である。

「これで一鞭ちしてごらんなさい。奴は悲鳴をあげて跳び上りますよ」とセシル。

「自分の物で鞭たれる訳ね」

「そうです。」

「立派な鞭と良い格言をありがとう」

「どういたしまして、私の握柄杖で……」

「ところで、セシル」クララはふと思いついて、先刻諸問器に訊ね掛けたことを、このヤブー史の専門家に問うた。「何故ヤブーという名ができたのです？」

「やア、それはね、未だに定説がないんです」夫君ドレイバアは知識を示す機会を逃すまじと、勢込んで説明した。「地球再占領当時からあった言葉じゃないんでね。色々に言われています。占領軍司令官マック大将——初代地球都督ですね——は類人猿と云ってた、そ

れがヤブーになり、ヤブーになったという説。大和民族或いは黄色民族の意味でY・Pと略したらヤブーと発音される様になったという説。昔ヤブーという名の家畜人類を描いた文士がいた。その作品から出て訛ったという説……」

——ああ、スイフトのガリヴァー旅行記のことに違いない(※)

(※註。ガリヴァー旅行記第四「馬の国」ではフーインム達がヤブー

— yahoo なる家畜人類を飼育している。yahoo < yaphoo > yapoo がお手帖第八十三項参照。

クララは内心そう註釈したが、続く言葉に思わずドキリとした。独乙人という単語があったからである。

「……然し皆穿ち過ぎています。私が信じてるのはマック將軍麾下にいた独乙人系の将校が当時『ヤブ』と綴られた略字をヤブと発音したのが真似られたという説です……」

——Japan, Japaner, Jap. ……成程。

と心に肯いたクララは、何喰わぬ顔で、

「妾の居た二十世紀地球面でも、独乙人はそう発音してたわ」

「そうでしょう」相槌を打たれて喜んで、「畜人論者の鼻祖ヒトラ——も独乙系です。畜人制度確立に当たっての独乙系テラノヴァ国民の寄与は無視できぬ、というのが、ヤブー文化史研究者としての私の持論です……」

この時、リン、ルン、ラン、と美しい鐘の音が響き渡って、セシルにソーマの時間を思い出させた。

「おや、もう、時間か。クララ、行きましょう、ソーマの間へ」

廊下を先に立って案内して行くセシルが片手をあげて、「あの扉が下の妹の部屋です。もう帰ってくるかどうか、一寸誘って見ましょう」

「何処か旅行なさったの、昨日あれから？」
 帰るといふ言葉を聞きとがめて、クララが訊ねた。
 「いや。彼女早起きでね。朝のソーマの時間には時々帰って来ない」

時がある……」
 ノックに応じて扉が開き、セーターとスラックス姿の凛々しい美少女が出迎えた。



「セッシー、今行こうとしてたの……まア、貴女も一緒！ クララ。昨夜はえらいことだったわね。『飼畜人に手を咬まれた』って訳ね。身体はもうすっかり良いの？ 姉さんの話じゃ、絞殺一步手前だったてじやないの。吃驚したわ……」
 ドリスは懐かしそうにクララに向って一気に喋り立てる。足許にはニューマが蹲っている。ナメルは見えない、奥の寝室で昼寝でも始めたのか……

四 恋人から家畜へ

暫らく返事がなかった。クララは扉の隙間からかいたままの光景に心を奪われて、話し掛けられたのに氣附かなかったのだ。我に返って、

「ええ、お蔭様で、もう何ともないわ」

答えたが、上の空。視線は室内へ釘附だ。セシルも内部の様子を見た。これは大して驚きもしない。大きな声で、

「やあ、ビユーのお仕置だね。どうした？」
 ずかずかと歩み入る。好奇心に駆られてクララも、つとドリスに会釈して続いた。

水槽上に倒懸された子供、肌も血色を失って緑色に変わってると見えた。一体何者？

後で諮問器に訊くのも、もどかしく、

「この子供は？」

「子供じやない、カッパです」とセシル。「名前はピユー」

「人間じやないの……？」

「畜人系動物の一種ですよ。思い出しませんか？」

「ええ、そう云えば姿は憶えがある様な気がするけど……」と例により苦しい返事だ。

「水中自動車と云って、海で遊ぶ時は必ず使うものですがね。これはドリス愛用の車で、彼女は毎朝乗り廻して……」急に妹の方も振り向いて、「ドリー、今朝も乗って来たの？」

「うん」

「どうして、こんなにして虐待するの？」

「悪戯したから」と事もなげに「どう、セッシー、水を見せびらしながら乾干にするってのは？」

この時、緑の小動物が、苦しそうな声で、

「お赦し下さい。お慈悲でございます」

と訴えた。クララは思わず一歩踏み出した。初め思った様な人間の子供ではないにせよ、立派に口のきける生物である。これは残酷過ぎる……

「嬢シヤンセン。余り可哀想だわ。どんな悪戯したのか知らないけど、許してやって頂戴」

「おやおや」先刻の鱗一郎の妨害を思い出したドリスは、皮肉な口調で、「今度はヤブーの飼主から邪魔が入ったわ」

「どんな悪戯したにせよ、こんな刑罰を加える理由にならないわ。罰殺しよ。これじや」とクララは真剣な顔だ。

「刑罰なんて、じや、これが人間だともおっしやるの？」
逆襲されてたじたとになったが、

「でも、ちやんと口も利けるし……」

「貴女が記憶喪失者だと知らなかったら」とドリスは呆れ返った。

「自分の耳を疑うわ……口の利ける畜人系動物は珍しくないのよ。」

第一生ヤブーは皆口を利くじやないの。貴女のヤブーだって先刻私に話し掛けた……だからって奴が人間だなんて云えて？」馬鹿々々しいと云った顔附で「これは刑罰なんてもものじやないの、このカッパが気に入らなくなったから、不要品として処分しちまう迄の話よ。この方法を選んだのは妾の思い附という文のことで、他には何も理由はないわ」

「じや、貴女の気まぐれな思い附だけで……」

「そうよ。妾の所有物を妾が処分するんだから、私の気まぐれ丈で、理由としては充分じやなくって？」（※）

（※註。このドリスの言葉については、手帖第二百二十四項を是非参照されたい。）

「クララ嬢」セシルが横から口を挿んだ。「ヤブーの処分は飼主の専権なんです。（第六章三）。思い出しませんか？ だから他人が指図しても無駄というものです……」

「そうでしたわね。確に」

円盤の中のボーリートの言葉を思い出して、クララは答えた——余り同情を示してはイース人らしくなくて疑われてしまうだろう。然し、何とか助けでやりたい。飼主としてのこの少女の自尊心を傷けぬ様にして……

「貴女が要らないのなら」と口を切った。「妾に譲って戴けないかしら？」

意外な申出に、ドリスは一寸当惑した様だったが、急に目を輝かせて、

「じや、交換条件を出すわ。予備檻のあのヤブーを譲って下さる？」

「えッ、リンを?」

「ええ、リンを。ビュウが悪戯したのは、リンの予備檻でなのよ。検査の邪魔したのよ。妾、腹が立って蹴壊してやろうとしたら、貴女のヤブー、リンにうまいこと妨害されちゃったわ」

「まあ」この時クララが麟一郎に対して懐しさを感じたのは、どういう心の動きだったろう。

「だからって妾、別に、ビュウの代りにあのヤブーを貰って虐めようっていうんじゃないのよ」ドリスは誤解を恐れて、言葉を添えた。「妾に邪魔をした時の気合が見事で、気に入ったし、他の性能も悪くない様だったから、決斗士に仕込みたいと思ってるの、ま、惚れ込んだとでも云うのね。手許で可愛がって見たいのよ。いかが、譲って下さる?」

——どうしよう? リンは渡したくないけど、放っておけば目の前のこのカップは、ドリスの気まぐれの犠牲になって死んでしまうだろう……

クララは困ってしまった。麟一郎を渡せば自分の素性が知れるという絶対の理由を別にしても、彼を手放す気にはなれない。却って彼の能力が賞められ、ドリスが執着しているのを知るほど、彼女の気持も益々彼を手放すまいとする方へ動いてゆくのだ。

然し、嫉妬ではなかった。昨日までのクララだったら、他の女性が麟一郎を賞讃して、むき出しの執着を示すのに対して、嫉妬からの不快を感じずには居られなかっただろうが、同じく麟一郎の個体を独占しようという気持ではあっても、今彼女の懐いているのは、人が飼犬飼馬に対して持つ愛着と同性質の愛情だったから、ドリスの言葉は自分の所有物への賞讃と感じられ、悪い気はしなかった。だから、彼の手で絞殺されようとした瞬間の恐怖、彼への嫌厭と憎悪、その記憶はまだ生々しいのに、しかも彼が賞められれば、彼を

誇らしく思い、愛着が増すのだ。飼犬の勇猛を賞められて、自分の手を咬まれた傷の痛みを忘れて喜ぶ飼主の気持なのである。恋人瀬部麟一郎に対する彼女の評価の曲線は昨日から急速な下降カーヴを辿った。そしてあの暴行によって極小点に達し、終止符を打たれたのだ。然し、それは自分の恋人としての、つまり人間としての評価の平面におけることであつた。昨日以来の臆気な疑念が先程明瞭に答えられて彼をヤブーの一匹として確認した瞬間から、家畜としての、それも自分の飼ヤブーとしての全然別の平面における評価の曲線が描かれ始め、それは、人間麟一郎の評価曲線の成行とは無関係に、急激な上昇カーヴを示し始めたのである。その故にクララは麟一郎を手放す気にはなれないのだ。——昨日円盤の中で、麟一郎の麻痺を緩解する為その身体を暫らく預らせて呉れとポーリーンに申し出られた時(第六章二)と、今と、麟一郎を手放し難く思う結果は同じでも、クララの心理は全く異っているのだ。男の心中では、女が「恋人から女主人へ」と転身しつつある(第十八章四)のだが、一足先に女の心中で、男が「恋人から家畜へ」の転化を完了してしまった訳だ。

クララの沈黙をどう取ったか、ドリスは、「ビュウと取換じや貴女の方は引き合わないかも知れないわね。差額を支払っても良いけど、お金じや失礼だから、何か附けたらどうかしら? 馬は昨日もう贈る約束したから……そう、これはどう?」と、片足を足許の犬の身体に掛け、先刻彼の啣えて来たスリッパの底を彼の頭頂に載せて足で踏えながら「ニューマッって云う名なの。仲々優秀な狩猟犬よ。大事な犬だけど、これを付けても良いわ。あのヤブーが手に入るんだったら……」

仲々の御執心である。

「困ったわね」とクララは返事に苦しんだ。

麟一郎が予備檻の部屋で、家畜の肉體検査の酷烈に悩みつ、クララを救主として呼び求めていた頃、彼女自身は、彼の飼主としての立場で、彼を手放すかどうかの決断を迫られて悩むことになった。昨日円盤の中で、共に恋人として同じ悩みを持った二人は今、家畜と女主人に立場を交して、夫々に悩んでいる。家畜の肉體の苦痛は一見絶大で、女主人の心中のこんな困惑とは比較にならぬ様にも思えるが、後者は人間の悩みであるが故に、家畜の経験するどんな苦悩よりも重視されねばならない。それは、イース世界に限らず、人間有史以来の鉄則とも云うべきだろう。

返事に苦しむクララを救ったのは、セシルの発言である。

「ドリー、ビューはすぐにや死なないんだらう？」

「そうね……ま、丸一日は保つと思うわ」

「じゃ、クララ嬢、ここですぐ決めることはない、ゆっくり考えれば良いですよ。どうせ今日は畜簿登録をするんだし……」

「卿ジャンセンの話では、今日午前中に登録できる様に係員を呼ん

感 雜 報 と 雜 報

三 正 沼

一七〇 松浦幸雄「黒い菊」(オール読物十一月号) 大正時代皇太子殿下の巡幸の時、宿屋の便所では畏多しとて、白木の箱に白砂を敷きつめたものを以て受けることにし、御使用毎に取換える。大工が齊戒沐浴してこの箱を作り、優秀な公務員が御係即ち便器奴隷に任命されて、一晩中汲取口の傍に蹲踞して、不時の御用に備える……所が、ここに一人の菊栽培家があつて、彼は特殊肥料として、菊に關係ある皇室の方々の排泄物が効くと思ひ込み、御係に頼んで、「玉糞」を手に入れ、「御物を奉安」し、崇敬至らざるなし。

だとか……」

「そうですか。そんなら尚更だ。登録の時性能表なんかよく調べてから、交換するかどうか決めても遅くありませんよ」

「そうしますわ」

救われた様に、クララはすぐ言った。

「さあ、ソーマの間で、ボーリンが待ってるでしょう。行きましよう」とセシル。

部屋を出ようとしたクララの耳に

「どうぞお助け下さいまし」

と祈る様なカップの音が届いて、二人の白き神々と並んで廊下を急ぐ彼女の胸の中に、響き渡った。——どうしたらよからう？

「次章はバーティの場で新しい人物が登場します。クララは麟一郎をどう扱うのが良いかを学びます。哀れな麟一郎の畜籍登録とは？御期待下さい」

手帖第二百二十二項で触れた排泄否認空想のあらわれとしての、天皇の排泄物は常人のものと異なる、という思想の見事な一例が描かれている。

白紙の包をひらく、その手異様に戦く。お何たる光栄ぞ！

御物のほか雪の如き白砂まで添えられたり、御芳香すでに鼻孔を搏つ。恐懼極りなし。白木の三宝に移し奉りて、床に安置す。御灯を供え平伏す。

一七一 藤野登久子「花の奴隷」(中央公論十一月号) 明治時代の宮中の有様が比較的詳細に描かれ、「貴婦人」の形成——その中に乗馬や弓術の課程があるのは面白い。(手帖第七十四項参照)——や、奴隷——けらいという言葉が用いられる様である——の奉

仕ぶりなど面白く読める。陛下のお手がつくのを待つ「局」^{つばな}クラスの女官でも、便所にお伴がつき、下淫的感情から人間意識に目覚め始めた女主人公は、それをうるさく思いつつ、尚、用済み毎に便を検査される両陛下よりはましだと考えたりする。……但し、全体の印象としてはマゾ的なものではない。

一七二 芸能界こぼれ話（実話と秘録誌一月号一四六頁） 前二号がいずれも、貴人の排泄に関するもので、対照的な文章を一つ。

左幸子が無理をして引越したのも、近所に変態男がいて、彼女の洗濯物や芥箱を掻き回すというのが原因。中田康子が、無理をして水洗便所に改造したのも、汲み取りの男に変態性がいて、汲みながらニタニタしているのが気持ち悪くって、「家では用も足せません」というノイローゼが原因。

そりやそうですよ。自分の汚物に心配する様になったら、一日だって生きていかれるもんじやない。

貴婦人達であれば、下司の男が自分の汚物を見て、いくらニタニタしたって「御物として奉安」されたって、平気なものだろうが、生れ育ちが違ふと、こんなものだ。

左幸子も、洗濯物盗まれるのが嫌なら、高峰三枝子の故智を学んで、パンティ類は、穿き捨てることにしたら良いのだ。全盛時代の高峰は、ズロースは洗って乾せば盗まれるのが当り前で、盗まれたのが不思議という気持ちになっていたそうで、そこで、穿き捨てることにした。穿き捨てるとなるとドロドロに汚くなるまで穿くことになる。それを芥箱に夜中捜したフアンが居たそうである。（共楽誌通巻四号「貞操と女優のズロース」）。芥箱の中のものを取られることまで心配するのは、どうかしている。自分の不要品で男一人喜ばせることができるのは、自分の魅力だ、と自信持って居れば良いではないか。

一七三 篠達一郎「ナチ殺人工場淫婦」（同誌） 雑報一四四

号（三二年三月号）、原氏時評二四項（同年七月号）で扱われたブツヒエンワルト收容所長夫人イルゼ・コッホのことを詳しく紹介している。これは手帖の一項に取り上げる予定。尚、同誌には、外にもナチスの悪魔と呼ばれた「九七種類の拷問を發明した男」シユトロハイムの記事があり、彼の美女マリオン・チエース拷問ぶりなど、サド派の諸君の好読物であろう。

一七四 再び「毛皮を著たヴィーナス」について。本誌十二月号四二頁に、麻生保氏が治洲訳より佐藤訳が良いと断ぜられ、私の意見（本誌十月号一三二頁参照）に反対されている。翻訳の巧拙に対する主観的批評は各人の自由であるから、私は自分の意見を人に押し付けようとするものではないが、氏の論拠とされる所が納得できぬから、少し反駁しておく。

氏は治洲訳は下品であるに反し、佐藤訳は上品であると言い、例を示しておられる。傍点を附してある語の中、ワンダが一人称をあたしと言うのが野卑で、私というのが上品だというのは、氏独特の感じ方に過ぎず、反駁するに値しない。「あたしが解らないの？」と「私をおわかりにならないのね」とでは語勢に差あることは、氏の言われる通りであるが、これは夢の中に現れた「女神」^{グレイス}が人間に言うことばである。「毛皮を着るのを手つたうんだよ」という所は、その少し前に「さあ、早く、あたしに毛皮を着せて」と命令したのにセヴェリンがすぐしないから、せき立てたのであって、佐藤訳では（恐らく英訳では）これが出ていない。

麻生氏は「……だよ」という表現を野卑なもの、レディの使うべからざるものと信じ、これを前提として、両訳を比較しておられる様だが、これは、召使への用語と対等の人格たる紳士への用語との使い分けを無視した議論である。セヴェリンが奴隷たるか対等の恋人たるかに従って、ワンダは、Sie（あなた）とDu（お前）とを使い分けているのであって、日本語ではその訳し分けが出来るのである。

り、以前の青木訳に対する治洲訳の功績の第一はそこにある（手帖第六十一項参照）。ところが、英語では、この二つが、共に *you* となってしまうから、英訳から重訳した佐藤訳は、（青木訳よりは氣を配っているが）、「お前」とすべき所を「あなた」と訳した箇所が多い。そして、お前という呼び掛けに対しては、「遊ばせ」言葉は使えない。「だよ」「おし」調にならざるを得ない。金田一春彦氏は（岩波新書「日本語」）、「不如帰」で、同じ若い女性の浪子

（浪子）「あまり歌って何だか渴いて来たよ」

（女中）「お茶を持って参りませんで」

（武男）「くたびれはしないか」

（浪子）「いえ、ちっとも今日は疲れませんの。わたくしこんなに楽しいことははじめて！」

と、武男に対する時は極力辞を低くして喋っているのに反し、女中に対しては、男かと思われる様な横柄な言葉を使って、身分の高下を露呈している点を指摘し、その英訳ではこれが表わされていないことを示しているが、貴婦人の言葉とはそんなものである。

（手帖第七十八項参照）。鵬外、漱石等の明治文豪の作品で、家庭婦人と召使との対話に当たって見たつてすぐ分ることだ。

治洲訳はそういう配慮の行き届いた点がすぐれているのであつて

十二月号有難く拝見しました。充実した口絵の中、特に豆しほりの手拭で猿ぐつわされた佐賀さんの写真はよかったです。小生出張中映画以外に全然緊絵写真に接しなかったもので感慨は一入でした。

さて、今月の速報の件ですが、出張中で

誇張して言えば、この点を誤訳したとも言える佐藤訳より優っているのは、主としてここなのである。そこを却つて貶される麻生氏の説は、尊敬する氏の言だけに、残念であり、不可解な氣もする。（治洲訳）「お前は直ぐに、名前や住所や、その他伯爵の事をいろいろ調べておいで。解ったかい」

（佐藤訳）「あなたは、すぐあの王子の名前と、住いと、境遇とを調べてきて頂戴、分つて？」

どちらが、奴隷に対する言葉遣としてふさわしいか、氏の蔵される仏訳本で *voussoyez* が使つてあるかどうかを、わが、日本の麻生保氏に問いたたいのである。

沼正三便り

（山本節夫氏に）十一月号八一頁貴文中「アングルトムスケビン」からの引用で、原文にない、とありますが、略同様の文章が、次の様にあります。

「お父様、あの人を買つて。（略）」

「何にするんだい？ がらがら箱や木馬代りに使うつもりかい？ それとも何か？」

——新潮文庫本（吉田訳）上二四〇頁——

英原文には当っていませんが、木馬は恐らく *rocking-horse* とあるでしょう。底の反った揺れ木馬です。右氣附いたままお知らせ迄。

も速報をお送りすればよかったのですが、それをしなかった為、また十二月号の速報欄で嵯峨さんに「黄金の伏魔殿」「月下の若武者」「修羅八荒」「万五郎天狗」「女狐屋敷」の五つも先を越されてしまいました。

解説者の見解の相違があるから重複しても

構わないと仰言つて下さいます「黄金の伏魔殿」「月下の若武者」「修羅八荒」「万五郎天狗」「女狐屋敷」等、ワンカットの縛りしかない上にあれだけくわしく書いておられますので（無理にくわしく書くとしたためか、猿ぐつわのなかった「万五郎天狗」

にまで猿ぐつわが出てきたりしましたが、私の書く処がありませんが、たゞ「月下の若武者」で嵯峨さんが見落した点の補足と次に今月の私の速報をお知らせ致します。

新東宝 化物峠の秘宝

秘密の隠し場所を記した二枚の地図を廻って、その一枚を持つ山娘(三原葉子)

は、今一枚の地図を持つ悪人達(清川莊司、永田靖)のために後手に縛られた上に顔を半ば覆う猿ぐつわまでされて、古井戸、それに続く秘宝の洞窟へと引ずり廻される。その果、断崖の丸太に雁字搦めに縛りつけられ、傍の丸太にはりつけられた二枚の地図を見ようと猿ぐつわの顔を振り向ける。そして自分を助けに来て却って捕われ、断崖の溪流に逆さに吊らされた(嵐寛寿郎)を救わんと必死にもがく。呼吸する度に起伏する胸、猿ぐつわの下の大きな瞳。時間にして八分ばかりの長い間、数カットの縛りで、これは昭和二十七年封切した「風雲七化け峠」の改題新版である。

新東宝 幽霊沼の黄金

幽霊沼に秘めた由比正雪の軍用金の謎を解くため、江戸本邸にある古文書を取りに早駕籠を飛ばした藤尾(瀬戸麗子)は、その

緊縛映画速報欄

阿部

秀

帰途をやくざ達に襲われ後手に縛られ駕籠で運ばれるが、急を知って駆けつけた(若山富三郎)に救われる。しかし再び旅籠の二階で捕われて、細引で後手に縛り上げられ豆絞りの手拭で猿ぐつわをされた上、階段を引ずり降されるが、弛んだ猿ぐつわの下で絶叫する。以上は共に入社第一回の作品であるだけに演技が多少、固い点が惜しい。新人と云えば北沢典子嬢がワンカットではあるが、「金毘羅利生剣」でまた縛られる。

新東宝 金毘羅利生剣

徳川の天下を倒さんと、その時期を狙い瀬戸内海にひそむ豊家の残党は、仲間を裏切った(北沢典子)を後手に縛り洞窟へ監禁する。

最近、縛りの東映のかわりに、新東宝に毎回縛りシートのあるのが嬉しい。それから今まで殆んど縛りのなかった日活が「月下の若武者」で、やはりワンカットであるが、浅

丘ルリ子の猿ぐつわ姿を天然色で見せてくれた。

日活 月下の若武者

山峡の川で洗濯していた(浅丘ルリ子)は三人の人間買いのため、寄ってたかつて押えつけられ、鼠色の布で猿ぐつわをされ担ぎ上げられる。

この日活が、近日封切の「肉体の悪魔」では、筑波久子がシユミーズ一枚で荒縄が肌に喰い込む程の緊縛シーンを見せてくれるそうである。

また大映でも負けぬように、同じグラマ毛利郁子が「冥土の顔役」で縛られるらしい。

グラマー女優は薄着が多いので、緊縛されているのが明瞭に解るのが素敵である。

大映の縛り映画で珍らしいのは今一つある。それはデビュー以来十二年間、殆んど縛られなかった朝雲照代が「新月塔の妖鬼」で、赤胴鈴之助の母に扮して柱に縛りつけられ、焼縄で折檻をされる。姥桜だが、焼縄から逃れようと顔をそむける処は結構美しかった。なんにしても縛り映画が沢山作られることは楽しい限りである。



読 者 通 信

私は女装マニアです。中学生の頃、家人の留守にコッソリと姉の着物をとり出して、谷崎先生の小説「秘密」を真似て、赤い腰巻を素肌にしめて鏡台に向い、頸から顔へ、ベツトリと白粉を塗って厚化粧しました。一つ一つ鄭重に身体に合せながら、橋袴や着物を重ねて楽屋の女形のようにやりました。いつの間にか体全体が優しい恰好になり、腰の辺りを強く縛っている細紐だの伊達だのが、きつく身体をひきしめて、弱々しい女らしさを味わせてくれました。太鼓の帯はまだうまく結べませんでした。それ以来、女装することが楽しみでたまらず、女装出来ない時は雑誌、新聞を見てお化粧や着

付の仕方を研究し、多くの女装する男性の方の体験発表を楽しく拝見していました。塩原のおいらん清ちゃん、女装マダムの小林由利さん等のように、平常女装して暮せたら、どんなに楽しいだろうと羨ましくなりました。一年程前に奇巧を知って、私と同様な女装マニアの方が沢山居られることを知って、何とか早く近づきになりたいと願っています。女装通信を寄稿して居られる東京の森本様、大阪の森田二郎様、住田勝美様、名古屋の酒井二三夫様、その他の方々にお願ひします。全国を通じて相当沢山の同好の志が居られることと思います。しかし職業的な女形や男娼は問題になりません。何とかして女装してみたいと思っ

りの方はお知らせ下さい。私は体重五十斤、身長一五五、三十八才の会社勤務です。勿論、妻も子もありません。しかし私の女装は知りません。その方が私には楽しい秘密なのです。(香川県三木政美)

男性は益々女性に近いブリーフに落着いてゆくことは我々にとつては淋しい限りです。この時、内田氏が「一揮亭雑記」を寄せられたことは、近來にない偉大な福音書とも云うべきもので、大なる希望を与えてくれました。続いて柳沢氏の美しい文章は、お育ちの良さが文章ににじみ出て親近感を抱かせてくれました。何しろ「揮」の一字に眼が光る位、敏感な私がそれにも異常なまでに「揮マニア」のくせに、人一倍恥しがり屋なので、自分自身でも時々苦笑す

最新作

女体緊縛写真

花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。(略号はな1)

◎花坂道子嬢

股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。(略号はな2)

◎以上二集二十枚にて 千五百円

る位です。松原様、池田様、若柳様等、又、雪俊様が「終戦奴隷」の中に、若い中学生や女学生が禪をされているとの記事がありました。が、それがたった一つでも一冊分の本の価値があります。今年の夏千葉の御宿まで行きましたが、驚いたことには、土地の人で禪をしている人が何百人の中にたった一人という悲しさでした。それだけに大阪の中井様が美ましく感じます。禪に深い愛情と理解のある方は是非お便り下さい。但し白の六尺禪、越中禪は全然興味がありません。理由は奇巧の愛読者の方ならわかって下さると信じています。

(東京 赤伊輝真樹)

十一月号の口絵「拘束服」について。それは何というむごたらしい姿だろう。黒光りのする革の服——おそろく背中が割れていて、そこから先ず脚を入れさせ、その後で背中と脛をビッシリ締めあげるのである。女はその白大理石のように透き通った全裸の肌を呼吸も出来ないほどに押しあげられるのだ。しかも胸と腹、太腿に喰いこんでいる革バンド、その上に深い溝を作って噛み入っている残酷さ。その痛さはおそろく耐

えきれないものだろう。足首もギリギリとバンドで縛られ、もう身動き一つも出来ない。口に固く嵌め込まれている嵌口具は、金属球つきの革ベルトだろう。これにつけても思い出されるのは本誌三十二年二月、三月にわたって載せられた革製の拘束長靴、緊縛具の図であり、三十一年の夏に載った拘束衣と拘束ブーツの図である。このどれを見ても女は完全に一切の自由を奪われ、苦痛と絶望、凌辱に呻吟するだけだ。おそろくこれ等の女は、かなりの

◎写真特写引受◎
特別に変わった着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。
(返信料同封下さい)

高く、美貌の良家の令嬢だろう。理智的で淑やかな、しかも氣位の高いレディを思わせる。これを仮に私のかつての恋人の名として池田香子と名附ける。さて香子は、こうして人知れず誘拐されてきた。誰に捕えられて来たか密輸団の手である。彼女は香港に売られて行くのだ。香子は先ず「捕われの令嬢」の画のように後手に縛られ、スカートも乱されストッキングの太腿をむき出しにして四十八時間も地下の牢獄の中へ放置

された。そしてその後は全裸にむかれて拘束具に締めあげられるのだ。絶叫、悲鳴、号泣、哀願、苦悶、美しい若い婦人がのたうちまわる光景は、身の毛もよだつものに違いない。香子は結局、ぶちのめされ疲れきって完全にうちひしがれてしまう。(奈良浦田紀夫)

親愛なる牧高志様、御返事が遅れて申し訳ございません。十月号の私宛の御丁寧なる御言葉を戴きまして誠に痛み入ります。どうか牧様におかれましても、奇巧のために大いに御活躍されんことを切望します。和装の美しさは言葉では云い現わせませんね。読者通信欄の上で失礼ですが握手致しましょう。よろしく。我らのホープ南川和子様十一月号の通信欄、嬉しく拝読致しました。旧号より貴方様の名を存じております。どうぞしつかり頑張ってください。挿画に文章に敏感を發揮して下さい。挿画に文章に敏感にしています。(楓月太郎)

木村よし子様、十一月号に寄せられた貴女の記事を拝見させて頂き、悲運に屈せず生きて居られる御様子に感激致しました。人生に絶望は禁物です。世間には幸福な人生を送る人ばかりではないのです。人間皆それぞれに不幸を持っていると云っても過言ではないでしょう。相互に助け合つて幸福を求めて行く処に、人生の意義も存するのです。貴女がどのような方かは私にはわかりませんが、私ではよるしかつたら何かと御力になりたいと思います。私は現在、二十四才、社会に出てまだ一年半程しかありません。現在、丸ノ内の某社に勤務して居ります。性格は明朗、且、男性的な方ですが割に孤独です。容貌その他は特別に変つた処はありませんが、比較的人好きのする方でしょう。身長は百六十六釐、学生時代に運動をやつていた関係で体格はよい方です。貴女と交際を希望致しますが友達になつて頂けますか。貴女の秘密はどこまでも守ります。

(東京 Y・O生)

本誌に一つ提案があります。一頁か半頁位のスペースをあけて頂いて、読者の御好み頁として頂き

たいのです。これには今までの作品のアンコール、新人画、探訪、希望、その他、何でもよく読者の希望しているものを掲載するのです。以上のような案ですが皆様如何ですか。よければ支持してしどし便りを出して下さい。東京の木村よし子様、文通致したく思います。連絡下さい。東京の菅良太様、貴方の意見に賛成です。ぜひ実現させて下さい。東京の山里鉄次様、私はマニアではありませんが、貴方が行うのを眺めたり責めたりしたいのですが如何でしょう。芝原修様、ネガが大変あるようですが、アブのが多くあります。したらぜひ拝見させていただきます。いすね。香川の鈴木愛子様、貴女の意見に賛成の一人で、ぜひ文通御願ひしたいのですが如何でしょう。京都の益田愛子様、文通御願ひ致します。(東京 土屋)

十二月は久し振りに充実して読みごたえがありました。表紙裏表紙の面も共に佳作で文句なしです。口画も四馬氏、滝れい子さん杉原氏の作品、夫々魅力充分あるものでした。本文に入って藤三氏の「屠腹乙女桜」が中々に変化があり氏の作品としても近來にな

くよい物語でした。時代切腹物をどしどし書いて下さい。久留木栄氏の「美容病院」が、土路氏の「続、潰滅の前後」にかわって、サド小説としては完璧のものと思えます。あくどくなく、それでいて作りごとめいていず、とにかく息をつかせず読んでしまいました。山下真一氏の「雑誌通信」この地獄館事件は実に迫力もあり、縛り場面も豊富で、氏の書かれた労作に対して感謝します。この挿画もKKの画家の手で更に口絵として登場することを私も希望します。岩村美智子さんの「ナースと浣腸」は「糸姫の体験記」以来、余り浣腸物がなかった空白を埋めるに充分の記録物でした。又、この百三十八頁の挿画が何とも云えません。このポーズで写真を望みたいのですが無理でしょう。画なればこそそのポーズです。北原さんの御労作に敬意を表します。本欄での青森Y・T生氏の案は、私も同感です。成熟し切った女性の緊縛写真は私も余り好きではありません。「清涼な美」を有する女学生の痛々しいポーズこそ私の望むものなのです。(東京 東一郎)

次の写真等を載せたら如何かと

思います。(一)ボルネオ島のケラピット族、ダイヤック族の土人達は耳に穴を明けて種々の飾りをつけています。そして常々、引張っているのが耳が長くなっています。奇抜だろうと思います。(二)ニューギニアのパプア族は、鼻障子に穴をあけて棒を通したり、その他の飾りをしていきます。又、チベットの族の女達も、これは鼻翼に丸い大きな環を通していきます。(貴族の娘)(三)アフリカのネグロ族の女達は、両唇を貫通させて、木の棒、金属棒、石英等を飾りにつけています。特に奇抜なのは、サラスカ

バ、ムーグーの女達は、いつも引張っているの。大きな穴になり、木の皿をつけています。大きければ大きい程美人の由です。このように土人達は、耳環やら鼻環やら、或は唇にまで種々の飾り物をつけて飾っています。きつと面白いことと思います。以上は、世界画報とか文化画報等に紹介されています。ですから漫画に出てくる種々な土人の奇抜な画は決して架空のものではないと思われれます。種々調べればまだまだ面白いものがあると思われれます。右は飾りについてですが、この様なものでプレ

【新版】女体緊縛フォト

分譲

R組 六十組

(印画紙の大きさ 9 x 13 cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しばり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

イするのには、何と云ってもイヤリングいじめ（これは女の人達には実際に穴を貫通させても差支えはありません）それから鼻障子を貫通させて棒や牛の鼻環をはめていじめるのが一番よいでしょう。鼻翼やら唇は此処当分は（もつと世の中が開放的になってアメリカ式のような考え方に変わって来るまでは）一寸早いでしょう。しかしやがてはあらゆる奇抜な装飾が流行するようになって、堂々と大きな鼻環や太い鼻棒を通したり鼻翼を通して飾ったり、或は又、唇に皿をついたり耳を長くして飾りをつけたりする世の中になるかも知れません。特に女性達は奇巧を好みますので、そのようになるかも知れません。私が一昨年「鼻いじめ」を発表してから「鼻いじめ」のものが未だ奇巧には発表されていませんが、世の中には相当多いのではないかと思います。如何でしょう（T・H生）

○ 毎号拙稿御掲載の光栄に浴し難有お礼申し上げます。また挿画をお願いして誌上を飾られることに深謝致します。何分、多忙の寸閑を得て書く原稿ですが、実況をお伝えして誌友の御参考に致したいと

存じます。今後とも何分よろしくお願い申し上げます。（岸本青柳）

○ 巻頭口絵、「拘束服」は表情がよく出ていますね。哀しそうな気が持がゆがんだ口元によく出ています。近号に見られぬ傑作でした。この種の口絵に苦痛の表情がないのは写真のぶちこわした。「苦しみを求めて」——夫は私に自分への償いより先に……から母としてのS子の心を取り戻していく思いがするのです。——までの文章は魅力的です。挿入画も腕の抱き縛りは珍しいが、もう少しカパーのホックの部分等判るように描くべきだ。「美容病院」挿入画は先月号より一段落ちた。内容もダレ気味だ。次号への発展を祈るのみ。「終戦奴隷」は答打ちばかり多くて挿画もお粗末で、内容も非現実的だ。「LIT商会」「マリアンヌの手記」は共にどうなったのですか？「特異な角度から」「私の本箱」等は大変参考になります。（N・A生）

○ 三十二年一月号に、「大奥裸女決斗」を掲載して頂いた京洛生です。私は女斗美ファン、女性輝美ファンであると共に、無惨画マニ

R 36	R 35	R 34	R 33	R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12
和装責め	手足逆吊り	首縄股間縛	股間縦縛	薄羅の緊縛	くさり責め	松樹後手縛	変型しぼり	高小手	逆海老責め	股間縛後手	後手吊責め	逆さ吊り	椅子責め	強烈梯子責	帆立縛	いたぶり	足揚梯子責	緊縛横臥	立木しぼり	トイレ縛り	猿轡の魅力	開股しぼり	尻立縛り	女学生縛り
(藤田節子)	(伊吹真佐子)	(坂口利子)	(中富綾子)	(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(萩千恵子)	(加賀利江子)	(伊吹真佐子)	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	(萩千恵子)	(春日、伊吹)	(伊吹真佐子)	(厚狭春江)	(村田那美子)	(須川令子)	(伊吹真砂子)	(川辺砂登子)	(萩千恵子)	(須川令子)
R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	
トップモード	強烈しぼり	あきらめ	苦悶の表情	猿ぐつわ	後手しぼり	引き裂き	のぞき見	股間緊縛	雁字搦目	折檻の魅力	くさり責	御開帳	後手しぼり	手足緊縛	股間しぼり	松樹しぼり	肉体美誇示	お灸責め	後手猿轡	乳房下緊縛	後手首縄締	仰向悦虐責		
()	()	()	()	()	()	()	()	()	(津森静子)	(須川令子)	(川端多奈子)	(萩千恵子)	(加賀利江子)	(萩千恵子)	()	(中塚文子)	(村田那美子)	(春日、伊吹)	(萩千恵子)	(村田那美子)	(加賀利江子)	(川端多奈子)		

アでもありません。特に私は、水も滴るばかりに結い上げた日本髪的女性、或はそれが斗いの果てに崩れた女性、又は揮をきりつと締めた姿態に、異常なあこがれを持っています。この頃の本誌には女斗美の記事が非常に少なくて残念です。先月号には久し振りの土俵四股

平氏の記事が出ておりましたが、挿画の相争う二人の女の図がパンティではどうも興醒めです。やはり女斗美は禪を締めてこそ美しさが出てくるものと私は信じています。土俵氏は、黒い禪を締めているとき、アクセントもあって美しいと云っておられました。私はやはり、燃えるような緋縮緬の禪を締めている時が一番美しいと信じています。私の妻も同様の意見を持っております。且つ禪の愛好者です。私は只今、「真剣裸女仕合」なる構想の下に筆を進めていきます。筋書はさる大名（非常に残忍な西洋のネロに匹敵する性質を有しているとの設定）が慰みのため、美しい腰元や城下の乙女達を集めて色々な仕合いをさせ血の狂宴に酔うと云うことになっていきます。女斗美フアンの皆様、低調な女斗美関係の記事を充実させるため奮起をお願い致します。

（京洛生）

○ 復刊後は引続き愛読していただきますが、どうも記事が一方的に傾いている点が遺憾だと思えます。男性の責の記事や画が殆んどない最近のは、頁を開くたびに深い失望を感じるのが常です。あの「一禪亭雑

記」のような特異なものがあるように評判になったことでもわかると思えます。「一禪亭」の続篇を期待すると共に、あの種の記事や挿画を是非多く載せて頂きたいと思えます。禪について一言します。六尺禪フアンが圧倒的に多いのに驚きました。私も勿論その一人です。すが禪としては、むしろ越中禪の方が現在では一般性もあり魅力があります。六尺禪のよさは、あの緊縛趣味から若干くるものと思いますが、越中禪には、ゆつたりとした感じが又、捨て難いと思えます。殊に娘の場合には覆う部分が一重であることが何より魅力で六尺禪は二重になる点が欠点です。前下りは短か目の方がよく余り長いのは、だらしない感心しません。紐はなるべく細いのがよく、幅広のを見かけますが、全く感じはよくありません。越中禪は軍隊で用いられた、徴兵検査の時も必ず着用させたためか、現在でも多くの人が使用しています。若い人はこの経験がないためか着用している人は少く、中年の人に多いようです。男子の下穿きの中で最も清潔な感じで素朴さのある越中禪の愛好者でありフアンです。同好の方がいましたら賛成の言葉を頂きたいと思えます。（東京 菅良太）

○ 東京の木村よし子様、十一月号の貴女の一文を読んでも私は何かしら感動を受けました。私は貴女のような悩みを持つ人間ではありませんが、奇巧の底なしの愛読者として、何か通じるものがあると思っております。貴女の運命に単なる興味をのみ持つていたのでありません。ただ感動を受けた以上、何らかの意志表示をするのが当然だと思えました。—— 気障な云い方かも知れませんが、ノーマルな人たちに打ち明けられるものを持つている私たちは、お互いの閉ざされた欲求を少しでも満足させ合えない限り、空しく生き行く屍になり終るばかりです。沼正三氏に一言—— あなたの小説は私にとつて恐るべき爆薬です。小説の進行と共に、私も日々変貌を加えていくのではないかと、あやしくおののいています。又、あなたの奔放なイメージをがっちり支えている手帖の方は、甚だしい羨望と多少の畏敬を私に起させます。切に御自愛を祈ります。乗杉貴代子様と麻生保氏の奇巧に対する御意見には、私も全面的に賛成いたします。私がそうでないから、益々

洗練さを希望するのかも知れませんが。（朝日格一郎）

○ 笛地佐渡様、通信欄拝読、お病気とは残念ですね。その後如何ですか。御見舞申上げます。一日も早く回復して二月号のように「縛り美五原則に就いて」のような、ありのままの文章を寄稿されんことをお願い致します。時代劇小説が奇巧に少いことは、色々の方針もある事でしようから仕方ないと思えます。読者層にはそれぞれの好みと云うものを持つているので、反響がないからと云つて悲観することはありません。全国にどれ程、笛地様の名を知り期待している読者が多いか知れないと思えます。貴方の「縛り美」を拝読して余りにも私と共通しているので大変嬉しく思いました。和服に關しては着物全集、スタイルブック、色彩と配合、服飾デザイン、等は女性以上に私は注目し、婦人雑誌の中で着物を取扱った写真等を見て参考にしていゝるんです。よ。しかし決して女装マニアではありませんから念のため——。日本人形の鏡獅子、藤娘、腰元姿の着飾ったお人形は実にいいものです。子供の頃より大きなガラスケース

に入つた人形に魅せられて、女の子以上に人形を可愛がったので笑われたものです。これだけ書けば何を云わんとしてゐるかわかるでしょう。和装主義の方も多いのですから大いに頭張りましょう。十一月号で京都の一愛読者からの「花村道子嬢のオタイコ」の帯でのアイデアは、私も共鳴し、彼女の美しい着物スタイルを見たいものと思います。きつと人間的になるに違ひない。期待しましょう。

(東京 T・K生)

秋冷の候、御多祥の御事と存じます。このところ、やや「切腹」に関する限り創作がマンネリズムに陥入るかの感あり、研究、史料、記録の面が淋しく思います。何分、極めて特異なテーマ故、やむを得ぬかと存じます。一般に文芸演芸方面にて可成り広汎に切腹が素材に取り上げられ、例えば女流浪曲の芙蓉軒麗花、中山恵津子、両氏など民間放送で聞くことは出来ませんでした。台本が一見したいものだと思つてゐます。また雑誌では、先に「明星」がグラフィックで、南田洋子さんに装束のままで切腹の擬態をさせましたが「平凡」でも小説欄や近くは「落城の」

の絵物語で、切腹の記述を載せています。新聞小説に於ては先頃、五味康祐氏「二人の武蔵」(夕刊読売)に悲壮極まりない十文字の切腹を描写し、近くは「デイリースポーツ」も未遂の状態を挿画にしています。漫画に於ても娯楽読物の雑誌に散見するところです。勿論、五味氏のもの、調べも行届いていて申分ありませんが、漫画や軽演劇等では性質上、どうしても軽い扱いになり易く、嘆かわしいことです。尤も南田さんの写真には勿論ふざけ半分の扱いながら流石、女優さんだけあって「体が決る」と申しますか、隙のない姿態でした。こうして再度、認識され出すとなると、もう少し新しい角度からその悲愴美、厳肅さを表現してほしいものだと思います。先年の投書者が殆んど姿を消した中に須藤氏、長浜氏などなつかしい感じですが、女性陣は全く再現せぬのが残念ですね。(中康弘通)

奇ク十一月号の泉かよ子さんの「あらびやの奴隷市」は楽しく拝読させて頂きました。最近、エキゾチックな作がないのでいささか淋しく思つて居りましたが「あらびやの奴隷市」を拝読して何より

甲斐に参案
四馬孝画

『涙のダイヤモンド』 略号
大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

(二) 伸し責

目かくしを取られた娘は拷問台の上に仰向けに寝かされ、手錠のまゝ両腕を固定された。恐怖に指をひきつらせた足首にも分厚い革帯が巻かれ、合図と共に歯車が回転し足枷についた鎖はギリ／＼と巻き上げられていった。手足を引抜かれるような苦しさに娘はカッと目を見開き、真珠のような歯の間から玉切る悲鳴を絞り出した。

(六) 浣腸責

下剤による排泄の強要も彼女の必死の辛抱によつて急激にその効果を現す様子もなかった。痺れをきらしたマダムは、男たちに命じて女を拷問台に縛りつけさせ、イリガートルを用いて浣腸させることになった。女は懸命に拒むが身動き出来ず縛りつけられているので遂に多量の冷たい石鹼液が体内に奔流のように注ぎ込まれた。

(今回は以上の三枚分譲します)
(四) 胃の洗滌 (五) ヒマシ油責 (六) 二枚は(略号なみ) 大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円にて分譲中
八詳細解説は本誌七月号口絵並に本文161頁参照下さい。V

気に入ったことは、金色の美しい仮面があることや又、造花のリボンがバイオレットとカリリと花の名前であることもロマンティックです。次にスレーブの扮装ですが、腰に縫いとりのあるベルト、キラキラ光る乳当、首と二の腕に美しい金色の輪を嵌めるなど私を夢中にさせました。何故ならば、これが金色の輪をつけました……とか又は止めましたでなく、嵌めると云う動詞は緊縛感に似た強さを感じ、二の腕に喰入った感じが出ますし、私の自虐性をこの短い文章の末端から刺戟されました。次に鉄の環とか鎖などで足環を嵌められ、腰に太い鉄環を嵌められるなど、本当に描写一つ一つが宝玉のように感ぜられます。私は金環による被虐性がありますので、そのようなのでしようが、腕には金環を着用した時には、就寝時でもはずしません。そんな意味で泉かよ子さんの作品に絶大なる拍手を送り、今後エキゾチック風な新作を心より期待致して居ります。

(東京 E・S 生)

私は普通の人より身長が大きい方で、一米七十八厘あります。先ず女装するには、以前持っていた

支那服やドレスを皆、処分してしまい新たに揃えなければならませんでした。それで先ず支那服を作ることへ決定して予算を見て、デパートへ行き生地を買いに出かけました。私の好きなすべすべしたデシンにきめ、一ヤール二百円の品物を五ヤール半。又その下に着る下着にするために、一ヤール百二十円のを四ヤール買いました。そしてその帰り途、余り大きくない婦人服ばかり作っている店に行き「女装するんだけどチャイニーズを作ってくれませんか」と、はつきり云って見ました。先方はしばらくあつけにとられたようですが、間もなく「では寸法を取りますから、こちらへどうぞ」と云われ小さな室に案内され、そして胸を計る時、「イミテーション・ブラジャーをやるから」と云ったら又、びくつきしました。そして有り合せの物を持って来てそれをつけるように云うので、それをつけて計って貰い「では五日後、仮り縫いをしますから又、来て下さい」と云われて今度はこちらがびくつきして「仮り縫いなんていいのですよ」と云っても「支那服は体にぴったり合わない」と似合いませんから」と云われました。そして五日後、仮

甲斐仁参案
四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

略号 (なみ)

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌 彼等に手取り足取りされた娘は真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の棧に縛りつけられた……ゴム管の端についた漏斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、

梯子を逆さに立てて水を吐かされる苦しさ……
ヒマシ油責 マダムは娘の手足を奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のまままで坐らせられた娘は……
△詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。V

縫って貰い一週間後に出来上りました。私は近所の旅館へ行き早速女装の仕度にかかりました。先ずバッグからブラジャー、ナイロンパンティ、その他女装用の品一揃を出して並べ、箱から真白な下着を出し、しばし男とはお別れ。先ずブラジャーを当て、ナイロンパンティを穿き、下着を着てしばし鏡で自分の姿を写して楽しみ、そして入念にメーキャップにとりかかった。それが終わると頭を完全に作り、カモジでロングヘヤーに作り、そしてクリーム色の支那服を着る。イヤリングをして今一度、今度は完全に女装をした自分の姿を見てこの写真の様に満更でないで「カメラ」へ「フィルム」を入れてああでもないこうでもない

とポーズを取り、十二枚やつの事で写したので。女装マニアの皆様、こんな私ですが御気に召したら口から足の先まで同じ女装したマニアの方々の御縄を頂きたいと思ひます。

(東京 女装マニア生)

○ 浣腸と云う面からのみ本誌を眺めて来た一読者としてお手紙致します。一口に浣腸と云っても、その愛好の焦点が非常に違う多種の読者のある事に驚きますし、興味ある事です。総じて本誌を見てみると、浣腸愛好者は「しぼり」愛好者に比して著しく少い事がわかります。それが私には非常に不思議です。私が「しぼり」には興味が無いから、と云う事よりも、

一般の社会で、日常の生活の中で、病院で、又はその他の会話の中で、屢々多くの人々が、非常に多くの人々が、殊に女性が「浣腸」と云う単なる言葉にすら強い反応を示します。私の経験では、若い、否、そんなに若くなくとも、女性で浣腸を受けながら強い関心を多少とも伴わない人は少い様に見える。そこで私には何故浣腸に関する記事が本誌でこんなに揮わないのか不思議でなりません。しかし考えをみますと、本誌の浣腸に関する態度が余りに肉体的なサド・マゾヒズムにかたよって居つたり、コブラグニーに偏する為に、社会一般の浣腸愛好家の心理や審美感から逸脱してしうのが原因では無いでしょうか。先に何月号かの編集者の筆に「浣腸と云うのはとかく記載の上で差しつかえがあるの云々……」とありました。しかし私の様な、浣腸愛好者は必ずしも「差しつかえのある様な」記事のみを求めて居るわけではありません。例えば浣腸に関する「差しつかえのない」画でも、縛られた女性が迫害的に浣腸される画などより魅惑的です。美しい令嬢が、美しく魅惑的な盛装のままで病院の診察室で浣腸を受ける事になり

羞恥におののきながら、目の前で浣腸器の準備をする医者や看護婦を見て居る様な画は決して法規に触れる様なものではありませんが私にはどの様に魅惑的であろうと思われまふ。浣腸の光景でも、ベッドの上で猶、スカートのまま、着衣のままの婦人の盛上った美しい臀部の曲線と網沓下の腓と、液を既に吸上げた浣腸器が配された北原純子さんのタッチで仕上げられた画など、千金の価値あるものと思ひます。それなのに破裂するまで注入される空気や水の浣腸の話などになると、既に精神的サジスムス、羞恥の凌辱、女性臀部へのフェチシズム、アナルエロチズム等のコムプレックスであつて、浣腸愛好とは全くその正面を異にしてしまいます。本誌の読者で、私と思いを同じくする浣腸愛好者はどうか名乗り出て頂きたい。その様な人が多い事を表明して「奇ク」編集者にも、その様な読者の為の配慮を考慮して頂き、併せて発禁の恐れのないギャラント・マガジンとして堂々店頭に現れて頂きたい。何も浣腸だけの雑誌にして頂きたいのではありませんが、この様な性的アペレーションは、どの様なものであれ、正常人の様に発

禁に値するな直接的な表現を行わないでも充分その価値を認識します。私が、浣腸の記事である限りそれが医学的なものでも文学的なものでも、まして多少ともグラフィックのものであれば、ポルノグラフィでなくとも非常に価値をみとめるのと同じことです。如何に高価でも求めるでしょう。どうかその様な立場から、昔の様に堂々と

店頭に出来る雑誌に戻って頂きたいと思ひます。皆さん如何ですか。
(久利須照雄)

三年程以前からの読者の一人です。最近はこの通信欄も次第に活発になり女性の方達も見えて参りました。奇クの発展と共に誠に喜ばしき限りです。今日は私も少々仲間入りさせて頂き度くペンを取

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	一枚	五枚	十枚
一組	一三〇円	六〇〇円	一〇〇〇円
			(送共)

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)
G3	海老晒し (萩千恵子)
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)
G5	量感の帯 (伊吹真佐子)
G6	アイデア (萩千恵子)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し (村田那美子)
G9	優すがた (花坂道子)
G10	開股一番 (萩千恵子)
E組	(9×13cm印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)

ES2	三枚一組 二二〇円 全裸悦虐集 (須川)
ES3	四枚一組 二五〇円 腎 羞 (佐賀)
ES4	三枚一組 二〇〇円 酒宴の弄者 (佐賀)
ES5	二枚一組 一五〇円 脱がされる娘 (須川)
ES6	五枚一組 三〇〇円 あわやす前 (佐賀)
ES7	二枚一組 一五〇円 剥れたブローズ (佐賀)
ES8	五枚一組 三〇〇円 乙女のすべて (花坂)
ES9	七枚一組 四〇〇円 女学生の縛り (須川)
ES10	二枚一組 一五〇円 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
	六枚一組 三五〇円

りました。私もやはり若い女性の縛られた姿に興味を持って居るのですが、裸体や又それに近いものはあまり好きでなく大阪の森田二郎さんと良く似た洋装マニアです。あまり残酷な責め等も好まず太い縄でぐるぐる巻きに縛ったりするのも美しい女性に何かマツチしないように思われ好きではありません。細引か出来れば柔い絹の細紐などで簡単にしかも効果的に縛られた洋装の女性が逃れようとして身悶える姿や、縛り方によっては乱れた服装を整える術もない恥らしいポーズ等大好きです。代理部のもので北原さんの絵に一寸ありましたが、これが写真であればと残念に思った次第です。又近頃流行の落下傘スタイル等女性の服装としては特に素晴らしいと思います。只どんなに立派な洋服でも下着の不十分なのは興味半減で、ずり下って皺の出来たストッキングや膝をむき出したニーレングス靴下等を見ると全く興ざめしてしまいます。こんな一分の隙もない洋装の女性、それも外出姿のままを一度縛って見度く、出来れば写真の腕もふるって見度いと常々思っているのですが、殊に若い女性に對してこんな事を頼む勇氣の持ち

合せ等ある筈もなく中々希望通り参りません。どなたかパートナールを引受けて下さる勇敢な方はありませんか、小生廿二才、サラリーマンです (和歌山 山田英生)

十月十六日(水) O T V テレビの忍術真田城の続きものを一寸見る。大変人氣があるそう。さて妖婆に女エノケン武智豊子、娘役に津村悠子、ともかく中々良き場面であった。言うなれば映画の下手な賣場以上のものが繰り返えし繰り返えし悲鳴もよろしく出てくるのには驚くと共に映画そのものの楽しさだった。マニアたるもの亦忙しき哉である。世の中と世人が日一日と戯画化されつつある昨今——一寸した夏向風物趣味で熱帯魚でもトロピカル・フィッシュなんかとのたまわって、エンゼルフィッシュなんか一年子は二三十円の金魚以下の値段で全く田舎者かお上りさんか、さてはオツチヨコチヨイのサラリーマンの飼う程度であり、昨日今日ではシクリッド科のジュエルでも一四百円という相場で騰った者には全く楽しい世の中になったものである。その代りコルゲートの歯ブラシでもメデアムとなると一本二、三百

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

△―濃滅の前夜―より▽(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

円もするといふ変つた世の中でもある。(大阪 宝塚二三夫)

男性の賣のアイデアとして次の筋を考えました。原文は約三十枚程のものですが掲載不可能と思ひ筋だけを読者通信として紹介します。「蕃地の妖花群」という題です。飛行機で敵地偵察の命を受けたK大尉は濃霧のためビルマの深林地帯に不時着した。操縦していた部下が負傷したためにその手当てと山中の民家を探さすまよう中に濃霧のために足を踏みすべらした谷底に落ち人事不省となる。ようやく人心地ついた時は土人小屋の柱に真裸にされて大の字に縛りつけられていた。更に驚いたことは彼を捕えた土人は総て女であった。そこは土人の風習として未婚の女を教育する小屋で二十才に達した女は皆数カ月をこの小屋で過し数名の年上の女から性の教育を受け

るのである。日本人に敵意を持つている土人たちはよき獲物とばかりK大尉を捕えたのである。そこで彼は土人の女たちの性の教材とされたのである。女達は夫の字に縛りつけられた彼の周囲に陣をつくり、あらゆる玩弄を加える。翌朝この事を知った女たちの恋人や親達が怒って押しかけてきて女達を殴るといふ騒動が起り、結局女たちは他の小屋に移されてしまった。恋人や親達は女をまどわした男としてK大尉にきびしい責苦を加えた。そして最後にK大尉の胸から下腹にかけて巧妙な刺青を施し仕上げと称して熱湯の中に漬け、息もたえだえになった大尉を筏の上に縛りつけて溪流に流す。下流に漂うところを日本軍に救われるがK大尉は自分の身を恥じて割腹して死ぬ。

○ 私はこの欄を見るのが一番楽し

(菅良太)

新作切腹写真『女体自決悦虐図』

(略号
えつ)

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大中判印画紙 (タテ十八糎
ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千 円

みです。十二月号の本欄の岐阜のM子様へ、貴女の書いておられるセラシ(近代化サルマタ)を私は大阪の高島屋百貨店で買いました。特売場にあつたのです。ブリーフ式に前が明いていないので女物かと思つたのですが男物の売場です。し例の着用品に近代化サルマタと書いてあるので買って帰りました。着用してみますと大変具合が良いのです。生地は柔さ、ゴムの締り具合、裁断の具合等素敵なので、どうして三枚でも五枚でも買わなかつたかと悔まれました。其の後一ト月程して大阪へ行つた時、同店へ立寄りましたが売出しは勿論済んでいるし下着売場にも見当りません。他の百貨店にも有りません。ガッカリして其後そんな物を売っている店とか百貨店へ行く度にさがすのですが有りません。貴女の投書を見て嬉しく思いました。貴女が如何にせん、岐阜迄買に行けません。売っている店の名

(香川章二)

○ 長瀬昭子様、貴女は男を組みきたいと思つていられるそうです。が、小生も女性の方に馬乗りにされて大きなヒップで顔の上に跨つてもらいたいと思つています。私でよかつたら、いつでも貴女のヒップの下に組みしかれに参ります。住所が分りませんが近くにお住まいでしたら、いつでもお呼び出し下さい。そして息もたえだえになつたところを細引で厳重に縛られ、足詰め足蹴にされたり、女性の方の常用していただけるパンティを口

の中に入れられ、しつかりとサルグツワをされた上、くすぐり責、ローソク責等々にされたらどんなに楽しいかと思つています。しかしその様な女性の方はなかなか見つかりませんのでいつも夢にえがいて満足している次第です。長瀬昭子様、どうかこの夢をかなえて下さい。小生は二十九才のマゾヒスト、そしてヒップマニアです。

(名古屋市 酒井二三夫)

○ 長野県MH四様、御連絡乞う。その後お元気でございますか、私はあれ以来悶々として無味乾燥の毎日を送つております。今更の如く自分の不能力と不甲斐なきを感じると共にあなた様の力がどれほど偉大なものであるかを痛切に思つたことはございません。もう何を申し上げても手遅れと思うのでございしますが、今一度あなた様のお力におすがりいたしたく、あなた様の御慈悲をもちまして、私を許していただきたく思うのでございます。

(兵庫 ポット)

○ 秋冷日毎に身近に迫る思いですが、編集長様はじめ皆様には益々御活躍の程心からお慶び申し上げます。私の心の友である奇タは

寂しい時も辛い時も常にそばに寄りそつて慰め語らい、もうこれなくしては生きてゆけない位です。今後とも尙一層の誌面の拡充などを確信しております。なお私は本年二月号から愛読させて貰つておりますが、最初は皆様の素晴らしい御活躍の前に到底出る幕ではないと、生来の恥しがり屋も手伝つて読者交歓室への便りを書いては捨て書いては捨てして未だにあいさつもしていません。自然、空想面は極度に芽生え、最近では頭でっかち、いささかノイローゼ気味です。皆様の伸び伸びとした文通、

北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕 (略号女学生)

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

〔ハートの的 女体洗滌室〕 (略号はあと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕 (略号ぬうと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

◎次号の本誌は十二月中旬発売です

本誌は今後毎月中旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、上旬頃までに誌代のお送りを願います。

交際羨ましき限りです。編集長様にまげてお聞き届け頂きたいのですが、十月号に投稿の森シズ子様十二月号に同じく投稿の真奈美弓子様、長瀬昭子様の住所お知らせ頂きたく懇願します。奇巧を盛り上げる健全な精神を守り、ゆめ編集長様の御顔に泥を塗るようなおさましいことは致しませんから御引受下さい。私は当年二十九才、会社員、健康、独身、男性の者です。では初対面ながら誠に厚かましいことを申し上げましたが、何卒御容赦の程を、皆様の健勝をお祈りして擲筆致します。

(大阪 高口照雄)

△編集部より▽こういった投稿者の住所を知らせという通信が毎月相当参りますが、別掲のように只今投稿者の住所本名の公開は致しておりませんから左様御承知下さるようお願いいたします。

○東京の木村よし子様、貴女の記

事を十一月号で拝見しましたので思いきってお便りします。貴女が女性であつて、しかも男性を真に愛することの出来ない悲しい性の所有者であることを知りましたが誌上に発表された貴女の勇気に敬意を表します。私も貴女と同じ様な悲しい性を持っています。それは男性の性こそありますが、殆どその能力を持たない事を医師から宣告されてしまいました。私は東京の某事務所に勤める二十五才の青年で勤めて五年位になります。その間、貴女が述べられたと同じ様な悲しさを味ってききました。同病相あわれむと申しますが、あまり身近にびつたりするのにおどろいて居ります。私は旅が好きです。でも、もうそれは一人旅です。たまには会社の連中と旅行にも参りますが、一緒にお風呂に入る事も出来ません。生きるという事の中には青春があるのに私にはそれが見出せないんです。ですから多少

W的で女装その他のマニアでもあり、絵をかきシャンソンを聞いてなぐさめています。木村よし子さん。ぜひ貴女と精神的なよき友として御交際したいと思います。御承諾下されば連絡方法など考えます。その他の方でも木村さんと同じ様な運命にある女性の方がKKの愛読者に居りましたらお便り下さい。

(東京 阪本明)

益々充実した貴誌に接して月に十度の楽しさを味わい乍ら再びペンをとりまします。十二月号は私のようなM的傾向の強いものを満足させて下さいました。毎号、この程度のMの記事がほしいと思います。先ず滝れい子様の「夜の脱衣場」の画が珍しくてジーンと致しました。これからもずうと続けて下さるようお願いいたします。女性S男性Mの場合、このような画の方がより強く訴えるものがありますし又空想を刺戟するように思われます。又、扉の「下着を見せる娘」の写真も楽しいものの一つでしたこれに似たポーズでSの女性が誇らしげに見下ろしている風のものもほしいと思います。十月号の矢部かず子様もおつしやっていますように大抵の男にもM的傾向は秘

んでいて、これをうまく摘出して仕込んで下されば楽しい女性S男性Mの交歓ができると思われまします。この方が実際に所謂「傷害」ということも起らず甘い甘い夫婦の組合わせになると思います。又、沼先生や天野先生のように「徹底したM」とか「生活としてのM」という意味も全然わからないではないのですが、多くは私のようにM的傾向が強いという程度の人が多いと思われましますし、又誰しもその最初の時期はその程度だと思われましますから、両先生にも幼い初心者のための記事を時には送稿下さつて慰めて下さるようお願いいたします。乗杉様の「ダイアナ夫人」が終りましたのが悲しくなりました。社会的に将来ある若い独身の男と人からも認められる身が、この五尺六寸の肉体の底に秘かなMの欲望を抑えてただKクラブのSの女性の記事に慰めを見出しているのですから、どうぞこれからもいろいろと発表して頂きたいと思ひます。若しよければ秘密を厳守していただけるなら乗杉様や慶子様にお会いしたいと思ひます。そのうちいい馬に仕込まれて汗のしみたパンティにくちづけするようになりましよう。矢部様、長瀬昭子様

お便り下さい。どうも、とりとめもなく、くどくどと書いてしまいました。何にしろまだ未熟の者故お許し下さい。編集者の皆様の御苦勞を感謝します。

(東京 K・Y生)

数多くの女装マニヤの方々のお手紙ありがとう御座居ました。あらためてお礼申し上げます。もつともつとお手紙下さいませ。又私同様の女装して責められる事が好きな方もどしどし下さい。

(東京 山里鉄次)

毎々貴誌(奇誌)というべきでしょうが、我々マニヤにとつては全く貴誌という語が名実共にピッタリです。敢て一言、御惠送に預り感謝にたえません。何か原稿を書いてお送りしようと思ひ筆を持つてみましたが、まだ体力の恢復が充分でなく、大作?は書けそうにないので、その中で使おうと思つていたアイデアと主題の一部を提供することにしました。何卒御諒恕下さい。先ず口絵又は写真のアイデアとして、縛絵や責写真の姿態や趣向はほとんど常態化してしまつた感があり今までに出っくしているので新したアイデアの余

地がないようですが、次に述べる各案はまだ各誌にも貴誌にも出たことがないようですから、よかつたら御採用の上実現して下さい。一、針の山妙齡の美女(服装及姿態は和装でも洋装でも半裸でも全裸でも可)が足を伸ばせば地面に着く位の高度で吊し責にされている下に、太い針又は鋭利な刃物の密植した板が置いてある。だから必然的に足をちぎめていなければならぬ。疲れたり鞭打されたりして足を伸ばせば足の裏に針がズブリと刺つて血がしたたる。というのが基本です。つまり足をちぎめている図と伸して刺されている図の二つの構図が基本的に出来るわけです。これは吊し責めの緊縛用具や環境や服装等は自由に变化できます。それから撮影や描写の仕方によつては、いろいろ変つたものが何枚でも出来ます。二、むごい三面鏡(又は三面鏡の部屋)巨大な三面鏡の置いてある前で美女がいろいろな姿態と服装で各種の緊縛と責めを受ける。正面には前向、左面には右向き、右面には左向きの悶える姿態がうつされ、更に手前には後向きの実体が手首にくい込む後手縄をハッキリ見せて坐っている。一枚の写真又は絵で四

態のポーズが同時に見られるという欲張った経済的な形ですから、販売価値もあるのではないでしようか。これも勿論姿態や服装や器具や責め方は自由ですから千変万化のものが出来るわけです。画家の視点及びカメラの位置を工夫すれば面白いものが出来ましよう。シリーズの一組何枚かにしたり、続き物にしたりしてもよいと思われまふ。三、縛られてお年始廻りいよいよ新年が来ます。お正月の晴着に目もさめるようなあでやかな振袖を着たお嬢さん。又は日本髪 of 可憐な娘が胸高にしめた広巾帯の上方の胸を更にキツチリと緊縛された惱ましい後ろ手の振袖姿で縛りマニヤの家を一軒一軒お年始廻りに歩かされる、というわけで正にマニヤの見果てぬ夢ではないでしようかこれの口絵化は何卒是非共実現して頂きたいものです。構図は立姿と坐つてお辞儀をしている所、正面と側面の四枚は

ゼヒ必要ですがそんなに欲ばつても駄目かな?とにかく一枚だけでも絵か写真がほしいものです。(これは特に新年号でなくとも二月でも三月でもよいと思ひます)二、本誌保存用特製版作成、貴誌は一回で読み捨てられる雑誌類とはちがひ資料及びコレクションです。から、永久保存に耐えねばなりません。いつも思う事ですが、口絵は上質紙だからともかくとして、内容がザラ紙なので長時日には変色したり破けたりしますので、折角貴重な文献や絵を台なしになるうれいあり、殊に絵の中には口絵より好ましいものがあるので口絵同様の紙で待遇して欲しいと思ふことが切です。そこで印刷の序でに百部でも二百部でもよい紙で刷つて特製版を作り特別に希望者に頒布されたらよいと思ひます。一々に別に印刷するのでなければ、紙代だけの差額で頒布できる筈です。から、どうか実現して下さい。必ず

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙(タテ十八糎) 焼付 八枚一組 八百円

申込者が殺到すると思ひますが如何？（一度誌上で誌友の意見を聞いてからでもよいが、社告をすればスグ売れますよ、キット！）以上のアイデアはうぬぼれではありませんが、貴誌のため貴重な発展資料であると確信して居ります。何卒御高配のほど賜りたし。

（東京 笛地佐渡）

編集長様、口絵写真については是非お願い致したいことがあり筆をとりました。十二月号読者通信で京都の方が提案していらした花坂嬢の振袖姿の縛り写真のようなものを、毎号一枚で結構ですから必ず載せて頂けないでしょうか。腰巻、腰紐、伊達締、伊達巻、帯締、帯揚げ、抱え帯と、か弱いからだにこれでもかこれでもかと巻きつけ締め固められた盛装の嬢が、更に上から縄を受けて恥しい恰好をさせられているところなど想うだけで胸が高鳴ります。和服姿にもいろいろありますが私が一番好きなのは次のようなものです。一、モデルは若い嬢さんであること。二、帯は必ず腰から胸までかかるあの巾の広い分厚い丸帯で、女体を責めている緊縛感が充分出ていること。それから、和

装嬢の責め写真のアイデアなのですが、次のようなのは如何でしょうか。一、恋人をとられた勝気なブルジョア令嬢が花嫁になる嬢を自宅に閉じこめ、腹いせに花嫁衣裳を着せていじめている場面。わざと意地悪な締付をしたり、盛装の嬢に吊り責めやエビ責めをするところを組写真にして載せる。ストリーは大体出来て居るのですが是非写真にしたい、花嫁には花坂嬢責め手の令嬢には佐賀嬢を等と空想して居ります。二、金閣寺の雪姫が、松永大膳にけこころがされ、大膳の足が姫の腹のあたりを力一杯踏みつけている場面。三道成寺でその美しさに俗念を起しかけた坊主たちが雑念を払うために経をとえながら清姫を折檻している場面。四、鎌倉三代記の時姫が、あのゴテゴテの衣裳で雑巾がけをさせられている場面。五、三と同じになりますが、同様の理由で鳴神上人が絶間姫を拷問にかけ責めさいなんでいる場面。等々これが本当に「奇巧」の口絵写真に登場したら天にも上る心地です。編集長様、特に新年号には和装嬢の責め写真をぜひぜひ載せて下さるよう切望致します。

（東京 一愛読者）

編集後記

○昭和33年の新年号をお届けするに当たって先ず予定していましたが原稿の中で相当量のものが収容しきれなかった事をお断りしておきます。口絵では阿部秀氏提供の「冥土の顔役」は製版が間に合いませんでしたので次号誌上へ譲ります。

○映画名場面集がありませんので、その代り特写フォトの頁を三頁に増しました。が、それでも、今秋撮影の多数の写真はとも毎号これ位の頁数でしたら載りきりませんので、傑作写真はグラビヤにまわして、別途にお眼にかけることにしましょう。

○緊縛映画に関しては次々と貴重な研究資料を頂いておりますが、河村操氏の映画女優緊縛に関する一考察という新しい角度から見た総合的な一覽表と、黒河徹也氏のカメラと映画雑誌の映画館に於ける撮影苦心談と読者の共感を得て頂ける原稿が揃いました。黒河氏からは、数々のフィルムを提供を受けましたので、次号で御紹介出来ると思います。

○伊藤晴雨翁の「責物美人伝」は丁度新年号より連載を開始する恰好となりました。今月は、腰元お菊ですが、今後毎月、その流麗な挿絵と共にファンの方の期待に誌上で応えて下さる筈です。

○本誌の臨時増刊号としまして「責小説

特集」と沼正三氏の労作「手帖」の二点を企画予定しております。発刊の晩は何卒御愛読の程をお願いいたします。

○「ボクの責め方」で馴染深い宝塚二三夫氏から続稿「マニア通信」が参りました。到着順にそのまま掲載しましたが、本文締切後の分は読者通信の方へ廻しました。今後も編集部へ到着した分は、締切一杯までのものを一括して本文に掲載するようにします。これは宝塚氏へ。

○本誌27年10月号で「マリヤ・マゲダレナ」という珠玉の作品を発表された桂牧次郎氏が五年ぶりで「姫鏡」なる一作を寄せられました。責小説を単なるサド小説に終らせず芸術的香気を加えたいというこの筆者の悲願は果して成功しているでしょうか。

○次号に予定しました主な題名は、映画に取材した「薬刑と女優」、吉田慈一「被虐の一日」「禁色と清色と輝」扇要、今月載らなかった小坂多美枝「大阪屋花鳥」（女牢名主）それに連載中の「美容病院」「手帖」「家畜人ヤプー」「責物美人伝」「マゾヒズムへのいざない」等の外、黒の魅惑（須藤律夫）犬の生態（杉本真三）少年の渾美に関する或る構想（杉本真三）縛りの研究、一九五七年の時代劇映画から（南方佳男）街で見つけたフェチズム（とよま・かつひこ）姉妹先生の惨虐な責め（岸本青柳）嵐の中の花（浦田紀夫）等々であります。

（十一・六）